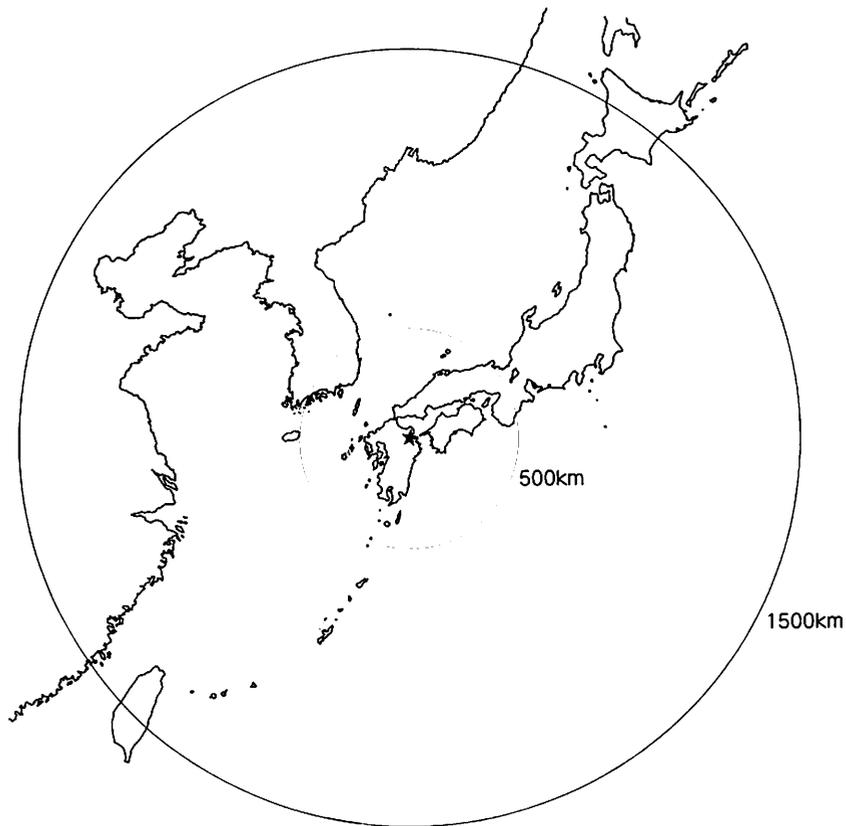


大友府内 5

中世大友府内町跡第3次調査報告

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 1



2003

大分市教育委員会



中世大友府内町跡 全景空中写真

序 文

本書は、平成9年度に大分駅周辺総合整備事業に係る代替地事業に伴って実施した中世大友府内町跡第3次発掘調査の正式調査報告書であります。

大友氏は、鎌倉時代に豊後に来て以来、一貫して豊後守護をつとめ、戦国時代の終わるところまで、およそ320年余にわたって、豊後を中心に九州北部に大きな勢力を築きました。その大友氏の政治・経済・文化の中心地は豊後「府内」と呼ばれ、22代宗麟のとき最盛期を迎え、西洋と南蛮文化の香りをたたえる国際貿易都市として栄えました。また、宣教師フランシスコ・ザビエルが山口から来訪し、キリスト教布教の始まりとなったのもここ府内とされています。

絵図によると府内のまちは、碁盤目状に区画されるなかに43ほどの町名が確認できますが、今回の発掘調査地点は、そのうち「横小路町」跡の一角に推定されるところにあたります。調査では町屋の建物、甕倉、井戸、ゴミ穴、道路跡等の遺構とともに、衣食住、商業・手工業遺物等注目される遺構・遺物が検出され、府内町の実態や空間構造、府内都市民の生活の様子等を解き明かす膨大な情報を得ることができました。なかでも、備前焼大甕が埋め込まれた遺構からは、中国、朝鮮をはじめ、遠くベトナムやタイ、ミャンマーなどの東南アジア地域からもたらされた数多くの陶磁器などが出土しており、ここ府内が南蛮貿易の拠点となっていたことを考古学的に明らかにするものとなりました。これらは、宣教師ルイス・フロイスの『日本史』に記された豊後「府内」の繁栄ぶりを如実に物語る成果と言えます。

本書が、学術研究はもとより、文化財の保護、さらには内外の文化交流の一助となることを希望するとともに、発掘調査の実施から報告書の上梓にいたるまで、ご協力とご指導いただきました関係各位、ならびに諸先生方に対しまして厚くお礼申し上げます。

平成15年3月31日

大分市教育委員会

教育長 秦 政博

例 言

- 1 本書は、大分市教育委員会が大分駅周辺総合整備事業に伴って実施した中世大友府内町跡第3次調査の正式報告書である。
- 2 調査は、平成9年8月19日から平成9年12月5日にかけて大分市教育委員会が実施した。
- 3 発掘調査における遺構図作成、遺構写真撮影等の記録作業、ならびに基準点・水準点測量については、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに作業を委託した。本書に使用した遺構実測図・遺構写真は同社の担当技師が作成・撮影したものを使用している。
- 4 調査の際には国土座標第II座標系（旧日本測地系）の座標値を実測・測量の基準として使用した。
- 5 SX210内容物の土壌分析については、株式会社バリノサーヴェイに委託した。
- 6 本書作成に至るまでの遺物整理作業（遺物の注記・復元・実測）並びに遺物・遺構図版作成作業（トレース・版組等）は整理作業担当職員である高島豊の他、坪根伸也、河野史郎、塩地潤一、中西武尚、佐藤道文（大分市教育委員会文化財課）、井口あけみ、梅田昭宏、勝間田あや（大分市教育委員会文化財課嘱託）ならびに次に記す大分市・大分市教育委員会臨時職員の多大な協力の下に実施されたものである。（順不同）
吉高和子、村木佳、薬師寺流美加、小田原由実、結城由利恵、小野千恵美、江藤井津子、林裕子、河野誠、大島紅、武田真知子、長木恵里子、木村藍子、松場泉、伊東みほ、今村信子、内田順子、沖本美和子、小山田裕子、河野裕子、黒田きくみ、後藤好美、堤美智代、三重野京子
また、出土遺物実測作業の一部を(有)九州文化財リサーチ並びに(株)人間文化都市研究所に委託した。
- 7 出土遺物の写真撮影は、高島豊が行った。
- 8 本書作成に至る作業中、下記の方々よりご指導並びに有益な助言をいただいた。（順不同、敬称略）
亀井明德 石井進 佐伯弘次 大庭康時 宮武正登 清水実 金沢陽 矢島律子 西田宏子 檜崎彰一
藤沢良祐 井上喜久夫 大橋康二 森本朝子 青柳洋治 森村健一 山本信夫 小野正敏 西尾克己
古賀信幸 増野晋次 乗岡実 菊池誠一 重見高博 川口洋平 柴田圭子 百瀬政恒 水野哲郎
降矢哲男 向井互 宮田絵津子 中島恒次郎 橋本久和 徳永貞紹 宮崎貴夫 中村和美 狭川真一
山村信榮 前川要 鳥谷和彦 上田秀夫 西野範子 佐藤浩司 西村昌也 服部実喜 堀内明博
- 9 本書で使用した方位は全て座標北（G.N.）である。
- 10 出土遺物および調査の記録・資料は大分市教育委員会文化財資料室に保管している。
- 11 本書の執筆は第4章を株式会社バリノサーヴェイが行ったほかは全て高島が行い、編集については井口の補助を受け高島が行った。
- 12 本書に用いた遺構略号は、SK：土坑、SD：溝、SE：井戸跡、SF：道路状遺構、SX：性格不明遺構を表す。
- 13 本書で用いた出土陶磁器の分類及び編年観は主として以下の文献による。
なお、中国産の染付を「青花」と呼称する。
青花 小野正敏 1982 「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』No 2
森毅 1995 「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通—大坂の資料を中心に—」
『ヒストリア』第149号
白磁 森田勉 1982 「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究』No 2
青磁 上田秀夫 1982 「14～16世紀の青磁碗の分類について」『貿易陶磁研究』No 2
備前焼 乗岡実 2000 「中世備前焼（壺）の編年案」『第2回中世備前焼研究会資料』
乗岡実 2000 「中世備前焼播鉢の編年について」『第3回中世備前焼研究会資料』
京都系土師器 塩地潤一 1998 「大友領国内における京都系土師器の分布とその背景」『博多研究会誌
第6号』
また、一部の陶磁器等の産地同定・分類・編年観については小野正敏氏（国立歴史民俗博物館）、山本信夫氏、森本朝子氏（福岡市教育委員会）、森村健一氏（堺市教育委員会）、木村幾多郎氏（大分市歴史資料館）、吉田寛氏（大分県教育委員会）よりご教示いただいたものである。
- 14 SX210出土トラディスカント壺破片の部位同定にあたっては木村幾多郎氏より御教示を得た。
また、その際使用した文様展開図は、大分市歴史資料館に寄託・展示されている、大分市内所在の勝光寺所蔵品を中西武尚（大分市教育委員会文化財課）が実測して作成したものを原図にしている。

本文目次

第1章	序	1
1	調査に至る経過	1
2	調査組織	1
3	調査区の位置と環境	5
第2章	調査の成果	12
1	発掘調査の概要	12
2	遺構と遺物	14
	大甕埋設遺構 (SX)	
	SX210	14
	大甕埋設遺構 (SX210) に伴うと考えられる遺構	14
	SX074	42
	SX194	42
	井戸跡 (SE)	
	SE120	43
	SE206	44
	SE211	44
	SE212	46
	SE213	46
	土坑 (SK)	
	SK054	47
	SK056・057	47
	SK025	49
	SK032	49
	SK070	51
	SK073	51
	SK080	53
	SK083	53
	SK189	53
	SK192	54
	SK188	55
	SK200	55
	SK216	56
	SK221	56
	SK223	57
	SK224	59
	SK233	59
	SK235	62
	道路状遺構 (SF)	
	SF226	62
	溝状遺構 (SD)	
	SD177	64
	性格の不明な遺構 (SX)	
	SX176	64
	SX208	71
	そのほかの遺構からの出土遺物	73
	各遺構出土瓦	73

各遺構出土銭貨	77
包含層出土遺物・採集遺物	77
第3章 まとめ	80
第4章 付篇 錦町東地区出土埋甕などに関する自然科学分析調査	89
遺物観察表	
写真図版	

挿 図 目 次

第1図 周辺遺跡位置図	5
第2図 府内古図	7
第3図 中世大友府内町跡調査地点位置図	8
第4図 調査区位置図2	9
第5図 検出遺構略図	12
第6図 検出遺構配置図	13
第7図 SX210平面・土層断面図	15
第8図 SX210完掘状況平面・断面図	15
第9図 SX237平面・断面図	16
第10図 SX210出土遺物実測図1	18
第11図 SX210出土遺物実測図2	19
第12図 SX210出土遺物実測図3	20
第13図 SX210出土遺物実測図4	21
第14図 SX210出土遺物実測図5	22
第15図 SX210出土遺物実測図6	23
第16図 SX210出土遺物実測図7	24
第17図 勝光寺蔵トラディスカント壺実測図・SX210出土資料文様位置復原図	25
第18図 SX210出土遺物実測図8	26
第19図 SX210出土遺物実測図9	27
第20図 SX210出土遺物実測図10	28
第21図 SX210出土遺物実測図11	29
第22図 SX210出土遺物実測図12	30
第23図 SX210出土遺物実測図13	31
第24図 SX210出土遺物実測図14	32
第25図 SX210出土遺物実測図15	33
第26図 SX210出土遺物実測図16	34
第27図 SX210出土遺物実測図17	35
第28図 SX210出土遺物実測図18	36
第29図 SX210出土遺物実測図19	37
第30図 SX210出土遺物実測図20	38
第31図 タイ産陶器四耳壺形態分類図	39
第32図 SX074平面・断面図	42
第33図 SX194平面・断面図	42
第34図 SX074出土遺物実測図	43
第35図 SX194出土遺物実測図	43
第36図 SE120平面・断面図	44
第37図 SE120出土遺物実測図	45
第38図 SE206平面・土層断面図	46
第39図 SE206出土遺物実測図	46

第40図	SE211平面・土層断面図	47
第41図	SE211出土遺物実測図	47
第42図	SE212、SE213、SK054、SK056、SK057平面・土層断面図	48
第43図	SK054出土遺物実測図	48
第44図	SK056出土遺物実測図	49
第45図	SK057出土遺物実測図	49
第46図	SK025平面・断面図	49
第47図	SK025出土遺物実測図	50
第48図	SK032平面・断面図	50
第49図	SK032出土遺物実測図	50
第50図	SK070平面・断面図	50
第51図	SK070出土遺物実測図	50
第52図	SK073平面・断面図	51
第53図	SK080平面・断面図	51
第54図	SK083平面・断面図	51
第55図	SK073出土遺物実測図	52
第56図	SK083出土遺物実測図	52
第57図	SK080出土遺物実測図	53
第58図	SK189平面・断面図	54
第59図	SK189出土遺物実測図	54
第60図	SK192平面・断面図	54
第61図	SK192出土遺物実測図	54
第62図	SK188・SK200平面・土層断面図	55
第63図	SK188出土遺物実測図	56
第64図	SK200出土遺物実測図	57
第65図	SK216平面・断面図	58
第66図	SK221平面・断面図	58
第67図	SK216・221出土遺物実測図	58
第68図	SK223平面・断面土層断面図	59
第69図	SK223出土遺物実測図 1	60
第70図	SK223出土遺物実測図 2	61
第71図	SK224平面・断面図	61
第72図	SK233平面・断面図	61
第73図	SK224・SK233出土遺物実測図	61
第74図	SK235平面・断面・土層断面図	62
第75図	SK235出土遺物実測図	62
第76図	道路状遺構（SF226）平面・土層断面図	63
第77図	SF226出土遺物実測図	63
第78図	SD177出土遺物実測図 1	65
第79図	SD177出土遺物実測図 2	66
第80図	SX176平面・断面・土層断面図	67
第81図	SX176出土遺物実測図 1	68
第82図	SX176出土遺物実測図 2	69
第83図	SX176検出時・拡張区出土遺物実測図 3	70
第84図	SX208平面・断面図	71
第85図	SX208出土遺物実測図 1	72
第86図	SX208出土遺物実測図 2	73
第87図	その他の遺構から出土した遺物	73

第88図	各遺構出土瓦実測図1	74
第89図	各遺構出土瓦実測図2	75
第90図	各遺構出土銭貨拓影	75
第91図	包含層出土遺物、採集遺物実測図	76
第92図	堺環濠都市等出土タイ陶器壺編年図	81
第93図	中世大友府内町跡第1次～3次調査区位置関係図	83
第94図	地籍図に基づく戦国時代府内	84
第95図	調査区内出土遺物接合関係図	85
第96図	中世府内町道路推定位置図	86
第97図	大友3次出土埋甕の底部付着白色物のX線回析チャート	93
第98図	大友1次遺構出土の土器付着物の材質	96
第99図	炭化材顕微鏡写真①	99
第100図	炭化材顕微鏡写真②・植物珪酸体顕微鏡写真	100

表 目 次

第1表	SX210出土遺物接合関係表	16
第2表	SX210出土陶磁器組成	80
第3表	採取試料一覧表	90
第4表	大友3次埋甕の土壤理化学分析結果	91
第5表	大友1次S-155の植物珪酸体分析結果	94
第6表	大友3次遺構埋甕出土の炭化材の樹種同定結果	94

写真図版目次

巻頭カラー図版	S210-9 半裁・遺物出土状況
中世大友府内町跡 全景空中写真	S210-10 半裁・遺物出土状況
写真図版1	写真図版4
SX210検出状況（東から）	SX176上層 礫出土状況
SX210遺物出土状況（東から）	SX176上層 トリベ出土状況
SX210甕内完掘状況（東から）	SX176 (S176a) 石列（北から）
SX210完掘状況（西から）	SX176 (S176a) 石列（南から）
写真図版2	SX176 (S176a) 石列（西から）
SA239完掘状況（西から）	SX176・拡張区（南から）
SX237完掘状況（西から）	SX176・拡張区（北から）
調査区西側全景（北から）	SX176・拡張区完掘状況（南から）
S210-1 遺物出土状況	写真図版5
S210-2 遺物出土状況	SX074
写真図版3	SX194
S210-3 遺物出土状況	SE120完掘状況（北から）
S210-4 遺物出土状況	SE120井筒検出状況（南から）
S210-5 遺物出土状況	SE120井筒内遺物出土状況（井筒上段：北から）
S210-6 遺物出土状況	SE120井筒内遺物出土状況（井筒下段：南から）
S210-7 遺物出土状況	SE206完掘状況（北から）
S210-8 遺物出土状況	SE206土層断面（南から）

写真図版 6

SE211完掘状況（北から）
SE212・213土層断面（西から）
SK025礫出土状況（南から）
SK073（南から）
SK054土層断面（西から）
SK223土層断面（西から）
SX208（東から）
調査区南端部完掘状況（東から）

写真図版 7 SX210出土遺物 1

青白磁・白磁菊皿（10-1～3）
白磁小坏・白磁皿（10-4～10,12）
粗製白磁皿・白磁菊皿（10-10,11,13）
色絵皿（10-22）
灰色磁器碗（10-14）
灰色磁器碗（10-19）
灰色磁器碗・皿（10-15～20）
青磁瓶類（10-23～26）
青磁皿・碗（10-27～30）

写真図版 8 SX210出土遺物 2

青花小坏（10-31,32）
青花碗E群（10-33,34）
青花碗C群（10-35）
青花碗（漳州窯系：10-36～40）
青花皿B/C群（11-41～44）
青花皿E群（11-58）
青花皿E群（11-61）
青花皿E群（11-51～57,59,60,62）
青花皿E群（11-45～50）
青花皿E群（11-53,54）

写真図版 9 SX210出土遺物 3

青花大皿（12-69）
青花大皿（12-71）
漳州窯系青花大皿（12-67,68,70）
青花皿F群（11-63～66）
青花壺？（13-72）
青花壺（13-73）
褐釉陶器壺（13-84）
褐釉陶器壺（14-88）
褐釉陶器壺（14-86）

写真図版10 SX210出土遺物 4

褐釉陶器壺（14-85）
刻印「五」
焼締陶器挿鉢（87）

華南三彩陶器（15-90～103,16-104～113）

華南三彩陶器（16-114～120）

写真図版11 SX210出土遺物 5

華南三彩陶器壺（16-121～133）
華南三彩陶器蓋（15-89）
不明華南三彩陶器（18-134）
朝鮮王朝産陶器（13-74,75）
朝鮮王朝産白磁皿（13-76）
朝鮮王朝産白磁皿（13-77）
朝鮮王朝産白磁皿（13-80）

写真図版12 SX210出土遺物 6

朝鮮王朝産白磁皿（13-78）
朝鮮王朝産白磁皿（13-82）
朝鮮王朝産白磁皿（13-79）
朝鮮王朝産白磁皿（13-81）
朝鮮王朝産白磁皿（13-83）
ベトナム産焼締陶器長胴瓶（21-154）

写真図版13 SX210出土遺物 7

タイ産陶器四耳壺（19-137）
タイ産陶器四耳壺（19-138）
タイ産陶器四耳壺（19-135）
タイ産陶器壺（20-141）
タイ産陶器壺（20-143）

写真図版14 SX210出土遺物 8

タイ産陶器壺（19-136）
タイ産陶器壺（20-142）
タイ産陶器壺（20-151）
タイ産陶器壺（20-152）
タイ産陶器壺（20-139）
タイ産陶器壺（20-140）
タイ産陶器壺（20-144）
タイ産陶器壺・耳（20-145～150）

写真図版15 SX210出土遺物 9

ミャンマー産陶器三耳壺（21-153）
胴部
底部
備前・挿鉢（22-155～166）
備前・壺，瓶（23-168～170,172）
備前・水屋甕（23-174～179）

写真図版16 SX210出土遺物10

備前・壺（23-173,24-180）
備前・壺？（24-181）

備前・薬研 (23-173, 180)
備前・德利 (23-167)
信楽・建水 (28-201)
信楽・壺 (28-202)
備前・大甕 (26-196)
備前・大甕 (27-197)
備前・大甕 (28-200)
備前・大甕 (27-199)
備前・大甕 (27-198)

写真図版17 SX210出土遺物11

ロクロ成形土師器 (29-204~206, 209)
京都系土師器 (29-210~212)
瓦質鉢 (29-214)
不明瓦質土器 (29-215~219)
瓦質火鉢 (29-220, 221)
骨牌 (29-222~224)
硯 (29-225)
焼けた壁土 (30-226, 227)

写真図版18 SE120, SK025出土遺物

SE120タイ産陶器壺 (37-11)
SE120タイ産陶器壺 (37-4)
SE120瓦質風炉 (37-12)
SE120備前小壺 (37-3)
SE120瓦質井筒 (37-14)
SE206中国産陶器蓋 (39-5)
SE211不明陶器 (41-1)
SK025中国産陶器壺 (47-16)
SK025タイ産陶器壺 (47-16)
SK025備前壺 (47-5)

写真図版19

SK032, 073, 025, 083, 200, 216, 223出土遺物
SK032備前坏 (49-2)
SK073中国産陶器 (55-3)
SK025タイ産陶器壺底部 (51-3)
SK083青磁 (56-1)
SK200漳州窯系青花大皿 (64-4)
SK216朝鮮王朝陶器 (67-2)
SK216焼けた壁土 (67-3~5)
67-3の拡大
SK223備前德利 (69-12)
SK223華南三彩陶器壺 (69-13~16)
SK223タイ産陶器壺 (69-25)
SK223朝鮮王朝陶器 (69-11)
SK223青花碗 (69-2)

写真図版20 SK235, SD177, SX176出土遺物
SK235土師器 (75-1~4)
SD177青花皿「嘉靖年造」銘 (78-9)
SD177産地不明陶器鉢 (78-15)
SD177タイ産陶器壺 (78-18)
SD177中国産陶器壺 (78-17)
SD177灰色磁器掛花入 (78-13)
SX176タイ産陶器壺 (82-17)
SX176華南三彩陶器盤 (81-14)
SX176瓦質火鉢 (82-18)

写真図版21

SX176, 208, SK053出土遺物、表土／表採遺物
SX176中国産陶器壺 (82-20)
SX176朝鮮王朝陶器 (82-21)
SX176中国産陶器壺 (82-22)
SX176金属生産関係遺物 (82-42~49)
SX176拡張区 瓦質火鉢 (83-19)
SX208華南三彩果実形水注 (85-17)
SX208中国産陶器 (85-16)
SX053融着瓦 (87-2)
表土／表採 青磁鉢 (85-14)
表土／表採 灰色磁器皿 (85-9)
表土／表採 灰色磁器掛花入 (85-18)

写真図版22 表土／表採遺物、出土銭貨

タイ産陶器壺 (91-22, 23)
タイ産陶器壺 (91-24)
中国産陶器壺 (91-16)
タイ産陶器壺耳 (91-25~28)
青花 (91-1, 2, 4~6, 8, 12, 13)
青花碗 (91-3)
青磁 (91-11, 15, 17)
白磁 (91-7, 10)
各遺構出土銭貨 (91-1~8)

第1章 序

1 調査に至る経過

大分市では、21世紀における県都の中心市街地としてふさわしい都市環境の整備と都市機能の集積を図ることを目指し、大分駅周辺総合整備事業を計画した。これは、大分駅周辺のJR鉄道線および大分駅の高架・立体交差化を図る「大分駅付近立体交差事業」、大分駅操車場跡地等を活用しつつ駅周辺街区の有効高度利用や駅前広場をはじめとする公共施設整備の整備を図る「大分駅南土地区画整理事業」、地域高規格道路大分中央幹線道路（庄の原佐野線）をはじめとする大分駅周辺の幹線道路整備を図る「庄の原佐野線等関連街路事業」の三事業からなる。これら三事業を一体として進めることにより、駅とJR鉄道線に分断されていた南北市街地の一体化、新たな新都心の形成と都市内交通の円滑化が期待された。これらの事業のうち庄の原佐野線は平成6年12月に計画路線が決定され、他の二事業は平成7年4月に事業採択、翌平成8年3月に都市計画決定された。

ところで大分駅南土地区画整理事業については、事業対象地区の既存住宅の中に、移転を要するものが出る事が予想され、これに対する代替地事業が平成8年度から着手されることになった。事業に先立って、事業を主管する都市整備課駅南対策室（平成7年度、平成8年度から駅周辺総合整備課）から大分市教育委員会へ埋蔵文化財に関する照会があり、代替地予定地のうち数カ所については埋蔵文化財包蔵地にあたることが判明した。その一つである錦町地区は、周知の埋蔵文化財包蔵地である「中世大友城下町跡」の範囲内にあたっていた。「中世大友城下町跡」については、戦国大名大友氏の築いた都市として、近世以来、今日に至るまでフロイスの「日本史」等海外のものを含む様々な歴史書に記述されてきた。また、往事を描いたとされる絵図も存在し、その現地比定についても、1987年、大分市史刊行にあわせて行われていた。このように文献上では有名であったが、考古学的な遺構としてはこの時点までほとんど知られておらず、実体が不明なままであった。このため大分市教育委員会では代替地事業の実施に先立って試掘調査を実施して、遺構の遺存状態を確認することとし、平成7年9月13日に試掘調査を実施した。その結果、戦国時代のものと思われる遺構及び遺物が検出された。大分市教育委員会は、駅周辺総合整備課と遺跡の取り扱いについて協議を行った結果、錦町地区の代替地全域の発掘調査を実施して遺構の記録保存を行うことにした。

第1次調査は平成8年5月7日～平成9年4月2日まで行われ、620㎡を調査した。第2次調査は第1次調査地点の北側及び西側の残りの面積を調査したもので、平成9年4月7日～平成9年8月11日まで行われ、調査面積は200㎡であった。

第3次調査は、第1次・第2次調査地点とは市道を隔てて東側の地割において計画された。しかし、これまで2次にわたる発掘調査によって、当該地区にはきわめて高密度に遺構が存在することが明らかとなり、調査期間は既に延べ15ヶ月余りと、従来の発掘調査にかかった期間をはるかに上回るものとなっていた。このため第3次調査においては、木造の専用住宅が建てられる部分については盛土により遺構保存をはかることとし、宅地中央の道路部分のみ発掘調査を実施して記録保存をはかることにした。第3次調査は平成9年8月19日～平成9年12月5日まで行われ、調査面積は160㎡であった。

2 調査組織

平成7年度（試掘調査）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘
事務局 大分市教育委員会 文化振興課
課長 工藤久典

参事	秦政博	主任技師	塔鼻光司
文化財室	室長 堀和則	主任技師	坪根伸也
主査	佐藤宏明	主事	徳丸ひとみ
専門員	讃岐和夫	技師	池邊千太郎
指導主事	後藤典幸	技師	塩地潤一

平成9年度（本調査）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化振興課

課長 野尻政文

参事 秦政博

主幹 玉永光洋

文化財室 室長 植木正巳

次長 讃岐和夫 嘱託 杉崎重臣（調査担当）

主査 佐藤宏明 嘱託 大野康弘 発掘作業員

指導主事 藤沢敏夫 嘱託 奥村義貴 古城英治

指導主事 後藤典幸 嘱託 羽田野達郎 麻生妙子

主任 安部貴美代 文化財調査員（臨時）中西武尚 玉井多紀子

主任技師 塔鼻光司 文化財調査員（臨時）幸しのぶ 井野和歌子

主任技師 坪根伸也 文化財調査員（臨時）田淵芳則 利光克寛

主任技師 池邊千太郎 文化財調査員（臨時）小野貴史 林房枝

技師 塩地潤一 文化財調査員（臨時）林潤也 吉高和子

技術員 河野史郎 文化財調査員（臨時）大藤弥生

技術員 高島 豊 文化財調査員（臨時）永松正大

平成10年度（整理作業）

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 生涯学習課

課長 園田裕彦

参事 秦 政博

主幹 玉永光洋

文化財室 室長 植木正巳 嘱託 杉崎重臣 文化財調査員（臨時）栃原嘉明

次長 讃岐和夫 嘱託 大野康弘 文化財調査員（臨時）小野貴史

主査 福田誠一 嘱託 奥村義貴 文化財調査員（臨時）近藤晃弘

指導主事 藤沢敏夫 嘱託 神尾至 文化財調査員（臨時）幸しのぶ

指導主事 後藤典幸 嘱託 佐藤道文 文化財調査員（臨時）荻谷史穂

主任 安部貴美代 嘱託 荻幸二 文化財調査員（臨時）永松正大

主任技師 塔鼻光司 嘱託 羽田野達郎 文化財調査員（臨時）古木裕文

主任技師 坪根伸也 嘱託 橋本幸治 文化財調査員（臨時）野中慶誠

主任技師 池邊千太郎 文化財調査員（臨時）水上仁

技師 河野史郎
技師 塩地潤一
技師 高島 豊 (整理担当)

文化財調査員 (臨時) 安部知美

平成11年度 (整理作業)

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 生涯学習課

課長 安部信彦

参事 秦 政博

主幹 玉永光洋

文化財室 室長 植木正巳

次長 讃岐和夫

主査 福田誠一

指導主事 藤沢敏夫

指導主事 後藤典幸

指導主事 甲斐猛

主任 安部貴美代

嘱託 杉崎重臣

嘱託 羽田野達郎

主任技師 塔鼻光司

嘱託 高木隆司

嘱託 大野康弘

主任技師 坪根伸也

嘱託 奥村義貴

嘱託 栃原嘉明

主任技師 池邊千太郎

嘱託 神尾至

嘱託 横山歩

技師 河野史郎

嘱託 佐藤道文

嘱託 早田利宏

技師 塩地潤一

嘱託 荻幸二

嘱託 宮川泰男

技師 高島 豊 (整理担当)

嘱託 小野貴史

嘱託 永松正大

平成12年度 (遺物整理作業)

調査主体 大分市教育委員会 教育長 清瀬和弘

事務局 大分市教育委員会 文化財課

課長 秦 政博

課長補佐 帯刀修一

主幹 玉永光洋

文化財係長 讃岐和夫

主査 福田誠一

指導主事 藤沢敏夫

指導主事 後藤典幸

指導主事 甲斐猛

指導主事 姫野公德

主任 幸裕美

嘱託 杉崎重臣

嘱託 横山歩

主任技師 塔鼻光司

嘱託 奥村義貴

嘱託 早田利宏

主任技師 坪根伸也

嘱託 荻幸二

嘱託 宮田剛

主任技師 池邊千太郎

嘱託 田中貴

嘱託 羽田野裕之

技師	河野史郎	囑託	佐藤孝則	囑託	上野淳也
技師	塩地潤一	囑託	羽田野達郎	囑託	小住武史
技師	高島 豊 (整理担当)	囑託	大野康弘		
事務員	永松正大				
事務員	三浦亜紀				

平成13年度 (遺物整理作業)

調査主体 大分市教育委員会 教育長 御沓義則
 事務局 大分市教育委員会 文化財課
 課長 帯刀修一
 主幹 玉永光洋
 管理係
 課長補佐兼管理係長 熊谷一秋
 指導主事 姫野公德
 主任 幸裕美
 主事 三浦亜紀

文化財係

課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫

指導主事	後藤典幸		囑託	杉崎重臣	囑託	上野淳也	
指導主事	甲斐猛		囑託	奥村義貴	囑託	小住武史	
主任技師	塔鼻光司	技師	河野史郎	囑託	荻幸二	囑託	松尾聡
主任技師	坪根伸也	技師	高島豊 (整理担当)	囑託	佐藤孝則	囑託	松竹智之
主任技師	池邊千太郎	技師	中西武尚	囑託	羽田野達郎	囑託	荻谷史穂
主任技師	塩地潤一	主事	永松正大	囑託	宮田剛	囑託	水町裕子
				囑託	羽田野裕之	囑託	梅田昭宏

平成14年度 (調査報告書刊行)

調査主体 大分市教育委員会
 教育長 御沓義則 (~平成14年6月27日)
 秦 政博 (平成14年6月28日~)
 事務局 大分市教育委員会 文化財課
 課長 帯刀修一
 参事 玉永光洋
 管理係
 課長補佐兼管理係長 熊谷 一秋
 指導主事 姫野 公德
 主任 幸裕美
 主任 桑原治
 主事 三浦亜紀

文化財係

囑託	奥村義貴	囑託	松尾聡
囑託	荻幸二	囑託	松竹智之

課長補佐兼文化財係長 讃岐和夫

嘱託 佐藤孝則

嘱託 苺谷史穂

指導主事 後藤典幸

技師 高島豊 (報告書担当)

嘱託 羽田野達郎

嘱託 水町裕子

専門員 塔鼻光司

技師 中西武尚

嘱託 宮田剛

嘱託 梅田昭宏

主任技師 坪根伸也

主事 永松正大

嘱託 羽田野裕之

嘱託 勝間田あや

主任技師 池邊千太郎

事務員 佐藤道文

嘱託 上野淳也

嘱託 岩尾美保子

主任技師 塩地潤一

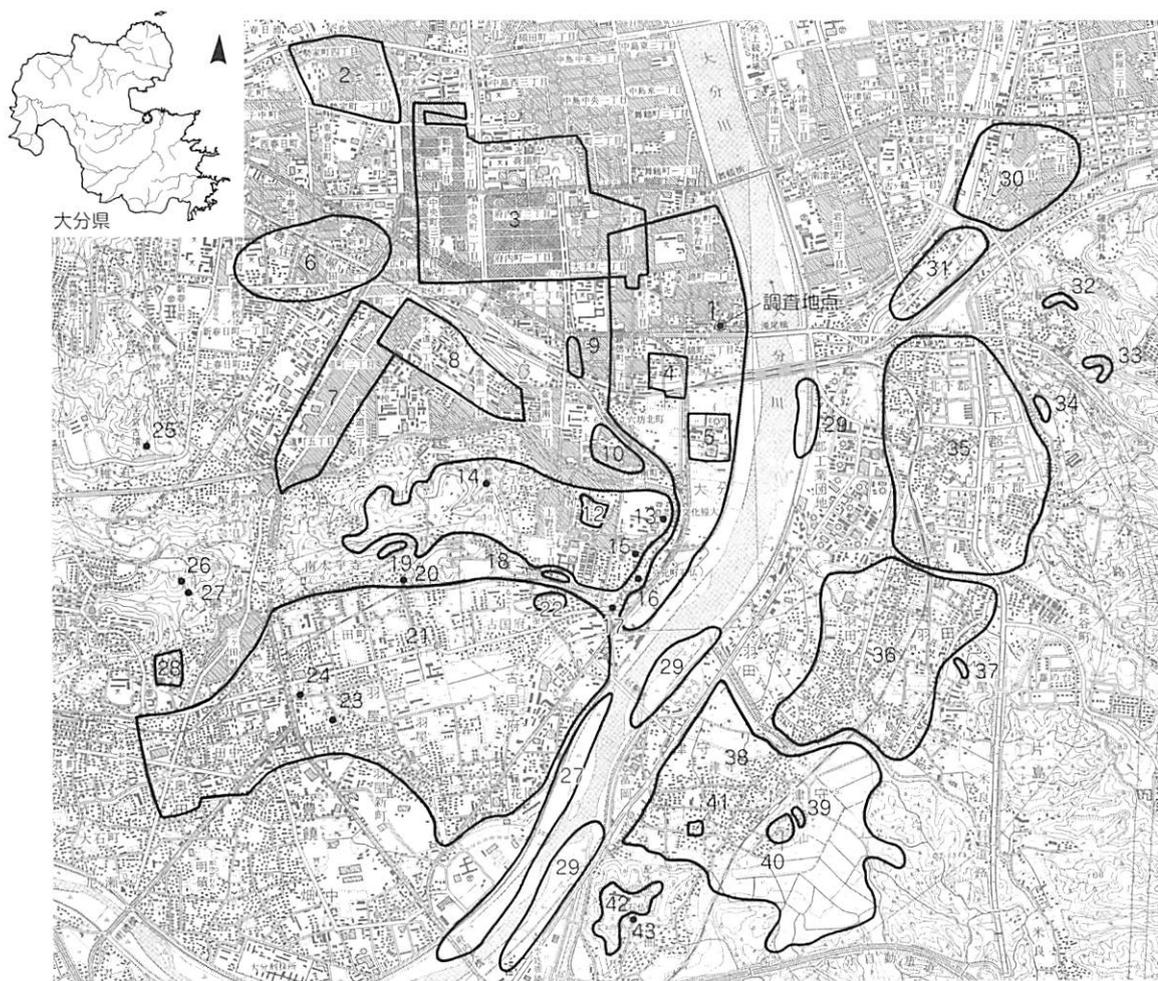
嘱託 井口あけみ

嘱託 小住武史

嘱託 梅木信宏

3 調査区の位置と環境

由布岳と久住高原に源を発する大分川は中流域で盆地状の平野を形成しながら流下し、河口部にデルタ平野を形成して瀬戸内海に注いでいる。近代以前、河口部は多くの流路に分流していたと考えられ、これに伴い多くの微高地群が形成された。これらのうち、今回の調査地点の位置する大分川本流の西岸に形成された微高地群では、



1	中世大友府内町跡	11	上野遺跡群	22	岩屋寺遺跡	33	北下郡横穴墓群
2	沖ノ浜遺跡	12	上野大友館跡 (上原館跡)	23	羽屋園遺跡	34	穴井前横穴墓群
3	府内城・城下町跡	13	大臣塚古墳	24	羽屋井戸遺跡	35	下郡遺跡群
4	大友氏館跡	14	上野庵寺	25	古宮古墳	36	羽田遺跡
5	万寿寺跡	15	上野竜王畑遺跡	26	千人塚古墳	37	滝尾百穴横穴古墳群
6	東田室遺跡	16	元町石仏	27	弘法穴古墳	38	津守遺跡
7	大道条里跡	17	岩屋寺石仏	28	永興遺跡	39	碓山横穴墓群
8	大道遺跡群	18	岩屋寺横穴墓群	29	大分川河川敷遺跡	40	碓山山頂遺跡
9	南金池遺跡	19	南太平寺横穴墓群	30	牧遺跡	41	松平忠直津守館跡
10	若宮八幡宮遺跡	20	伽藍石仏	31	牧六分遺跡	42	守岡遺跡
		21	古国府遺跡群	32	下郡横穴墓群	43	曲石仏

第1図 周辺遺跡位置図 (1/50000)

弥生時代終末～古墳時代初頭には陸地として安定して、遺構が形成されていることが判明している。そして、これら河口部の微高地を望む上野丘陵北東端部には、5世紀前半に埴輪を伴い首長墓と推定される大臣塚古墳が築造される。しかし、この地域で本格的に遺構が展開し始めるのは古代以降である。

古代には上野丘陵上で多数の遺跡が形成されている。丘陵東端部の竜王畑地区では、9世紀代を中心とし10世紀前半に至るまでの掘立柱建物跡や築地堀跡などが多数検出されており、国司館等、豊後国衙関連の施設であると推定されている⁽¹⁾。(上野竜王畑遺跡) また、丘陵の中央部付近では8世紀～9世紀に築造された版築基壇と礎石建物跡を伴う古代寺院跡が検出されている⁽²⁾。(上野廃寺跡) 出土した多量の瓦の中には豊後国分寺創建瓦も含まれており国衙との密接な関係を窺わせる。

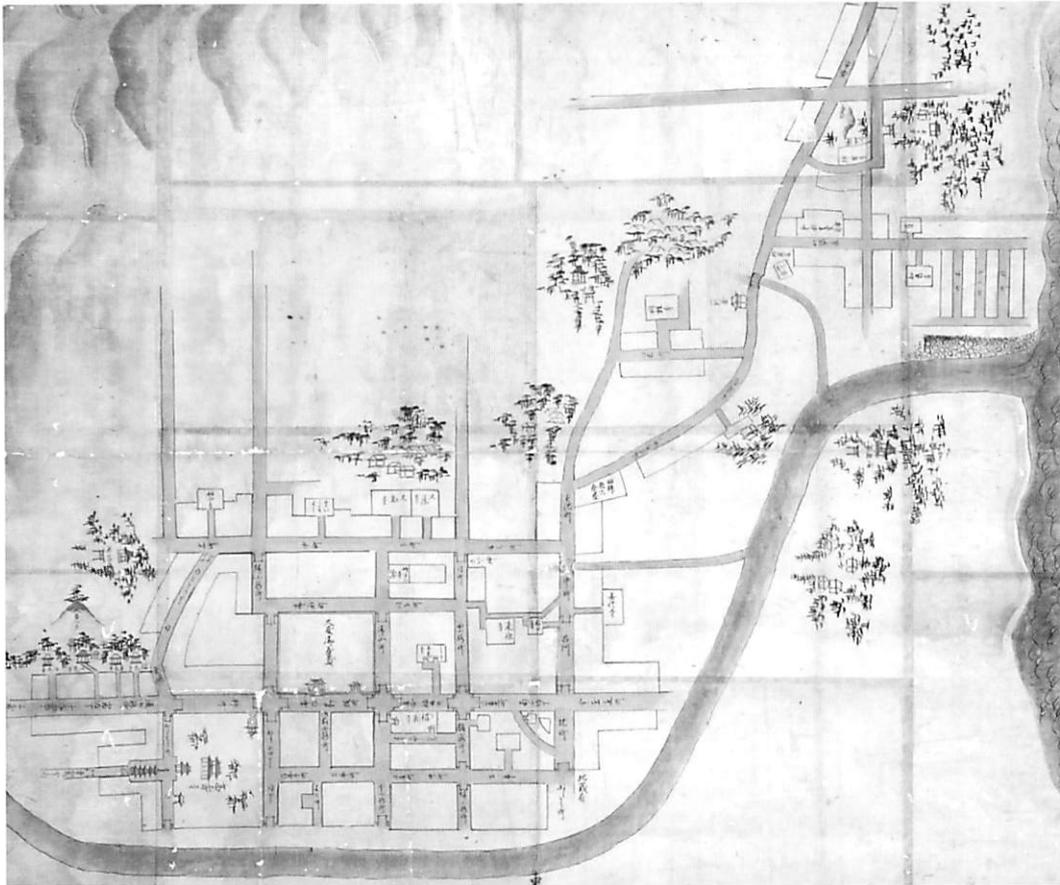
従来、豊後国衙推定地としては、上野丘陵よりも南側に所在する古国府地区が推定されていた。古国府遺跡群内に所在する、羽屋井戸遺跡及び羽屋園遺跡においては7世紀後半から8世紀初頭の掘立柱建物跡群が検出され、官衙的な性格を有する施設が想定されている⁽³⁾。しかし、8世紀以降に整備されたとされる国衙関連施設と推定できる遺構は検出されていない。従って、現在までのところ、豊後国衙の初現地については不明とせざるを得ない。上野丘陵東部も、従来より有力な国衙比定地の一つであったが、遅くとも9世紀以降にはここに国衙が置かれていた可能性が高くなりつつあるといえよう。

古代における大分川河口部西岸では、まとまった形で遺構が形成されはじめる。中世大友府内町跡第7次調査では8世紀代の大型掘立柱建物群が検出されており、何らかの官衙的施設と考えられている⁽⁴⁾。また南金池遺跡第2次調査では、8世紀末から9世紀前半にかけての井戸や製塩土器を多数伴う土坑等が検出されている⁽⁵⁾。このほか中世大友府内町跡の各調査地点においては、多くの遺構で古代の土器や緑釉陶器、越州窯系青磁が出土しており、中世遺構に破壊されたため残っていないと考えられるものの、この時期の遺構が存在していたことを窺わせる。これらの遺構や遺物から、この地域が豊後の政治的中心地に隣接していることや大分川河口部から瀬戸内海につながる交通の拠点的な位置にあることと関連して遺跡が形成されていたものと思われる。しかし、現在のところ検出されている遺構の密度は低く、上野丘陵上や大分郡衙比定地である対岸の下郡地区に比べてはるかに希薄であるといわざるを得ない。

古代末期の上野丘陵の周辺には岩屋寺石仏、元町石仏等の石仏が築造される。これらの造営主体として国衙勢力あるいは有力な国衙在庁官人が想定されている。古代末期の上野丘陵一帯は「高国府」と称されており、この時期に至るまで国衙の中核施設が存在し続けていたことを示す。また、この11世紀の文献「宇佐大鏡」には、大分川と推定される川が「市河」として記述されており、その河原において市が開かれていたことを窺わせるものである⁽⁶⁾。

中世の当該地域には、鎌倉時代中期に豊後守護大友氏が入部して以来、その本拠である守護所がおかれ、戦国時代にかけては中世都市「府内」として発展したことが特筆される。

中世都市「府内」の淵源としては、先述した古代末期の河原市を挙げる説が提示されている。大友氏入部以前の仁治3年(1242年)に出された「新御成敗条」⁽⁷⁾中には「大路の事」「府中墓所の事」等、都市内における禁制と見られる条文が認められることから、この時期の当該地域に都市の原型となるようなものが実在したことが想定されている。後述する「府内古図」における最も東側、すなわち最も川寄りの大路に面する上市町、下市町等がこれに相当し、最も古くに遡る可能性の高い町屋であろうとするものである⁽⁸⁾。しかしながら、この町屋の位置にあたとされる中世大友府内町跡第4次、第7次の発掘調査地点においては、当該期の遺構がほとんど検出されていないばかりか、出土遺物についても僅少である。これは対岸の下郡遺跡群における当該期の遺構密度や遺物量をも下回るものであり、後世の遺構掘削による破壊を考へても多くの遺構が本来存在していたとはとうてい想定できない。従って中世前半期における市町の所在を裏付ける資料は未だ得られておらず依然として仮説にとどまっている状況である。こうした状況をふまえると、「新御成敗条」が実在の都市を対象として出され



第2図 府内古図 (B類：大分市歴史資料館蔵)

たものではなく守護大友氏により理念的・名目的なものとして出されたと極論することさえ可能と思われる。しかしながら、この時期の河原市あるいは市町の位置が、後の中世府内の位置と同一であるとする説についても、十分強固な根拠があるわけではないのである。「市河」という用語自体は川の名称を示したものであり、市の開かれた場所それ自体を直接示しているわけではないと考えられる。実際、上野丘陵の南東側に所在する古国府岩屋寺遺跡等では当該期の遺構・遺物がまとまって出土しているらしい⁽⁹⁾。大友氏入部前後の中世前半期においては、後に「府内」の範囲のとなる上野丘陵北東側から東側にかけての低地以外に町屋が存在した可能性も考えておく必要がある。この問題については、今後の発掘調査による解明とともに、従来の調査成果の再点検が必要であろう。

中世大友府内町跡

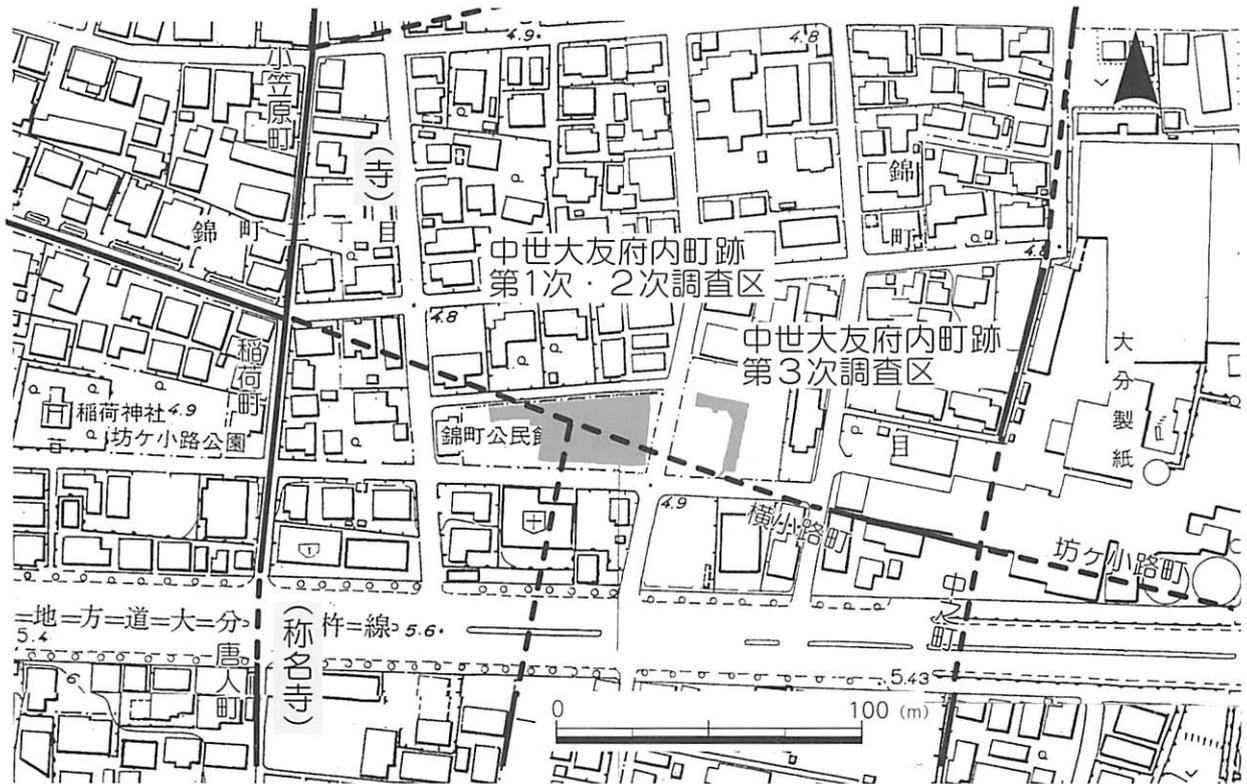
以上のように「府内」の起源については未だ解明されたとはいえないが、戦国時代に都市として発展を遂げたことは、1996年以来行われてきた発掘調査により考古学的に証明されつつある。

戦国時代の府内については、近世以降に作成された絵図が残されており、具体的な都市像についての情報が提供されている。これらは、大きく分けて3種類、計12点知られているが、1つの原図から写された同一系統のものと推定されている⁽¹⁰⁾。それによれば「府内」は大友氏館を中心として3本の南北大路与東西方向の4本の小路によって区画され、辻には木戸状の表現が描かれており、44もの町名が記入されている。

この絵図の現地比定作業が1987年の大分市史編纂時に行われ、それにより、外港である沖ノ浜等を除く「府内」中心部の範囲は大分川左岸の微高地上にあり、南北2.2km、東西0.7kmに及ぶことが明らかとなった（「戦国時代の府内復原想定図」⁽¹¹⁾）。この範囲が現在、「中世大友城下町跡」として周知される範囲となっている。1996年



第3図 中世大友府内町跡調査地点位置図 (大分市史中巻付図2より作成 1/8000)



第4図 調査区位置図2 (大分市史中巻付図2より作成 1/2500)

に始まる中世大友府内町跡の発掘調査は、この現地比定を参照しつつ進められてきたものであるが、これまでのところ、大友氏館の位置を含め大きな齟齬を来してはいないようである。

発掘調査により、遺構の出現は14世紀に遡るが、万寿寺関連と推定されるもの以外はわずかで、遺構の本格的な展開は15世紀後半以降であることが明らかとなってきた。また、府内全域に共通する遺構の基本軸線には14世紀後半～15世紀中頃のN-10°-Eと15世紀後半から出現し16世紀前葉から広くみられるようになるN-4°-Eの2方向があることが判明している⁽¹²⁾。遺構の本格的な展開は新しい軸線の採用と関連しているようであり、戦国時代において大友氏によりある程度計画的に都市建設が行われたことが想定される。文献上で「府内」建設に関するものとしてはこれよりもやや降る。御蔵場建設に関わるとされる天文13年(1544年)文書や大友氏館そのものの建設に関わるとみられる天文16年(1547年)文書、さらに大友氏館における築地塀整備に関わるとみられる天正3～6年(1575～78年)の文書が知られている⁽¹³⁾。このように考古学的に明らかになりつつある「府内」の都市整備の画期について、現状では文献資料と必ずしも一致するものではなく、今後の課題といえる。しかし、先に挙げた文書の時期は「府内」各地において遺構の展開が最盛期を迎える時期にあっており、考古学的所見と決して矛盾するものではないことも確かである。今後、これらの文書より遡る時期、すなわちN-4°-E軸線が採用される15世紀後半～16世紀前葉にかけての都市整備に大友氏権力がどのように関与したか解明されることが期待される。

こうして大友氏権力のもとで戦国時代末期に至るまでほとんど戦火に遭わず発展してきた「府内」であるが、ついに天正14年～15年(1586年～1587年)の島津軍の府内侵攻により占領され、その際に焼亡したといわれる。この府内焼亡については、良好な一次資料が知られておらず、フロイス「日本史」あるいは「大友興廃記」等近世の文献により知られており、またそれが人口に膾炙され伝えられてきた。しかし、これまでの発掘調査により、今回の報告地点を含む多くの調査地点で16世紀後葉の焼土層あるいは火災処理土坑が検出されていることから、かなり広範囲に及ぶ火災に被災した可能性は高くなってきたといえる。その後の復興については「天正十六年伊

勢参宮帳」において府内11の町名とその住人とみられる人名が記されており、一定の範囲で復旧が行われたことが窺われる。しかし、これまでのところ復旧後の町屋に関連する明確な遺構は少数にとどまっており、島津軍の府内侵攻後の府内について具体的な姿は依然として明らかになっていない。いずれにしても島津軍の府内侵攻以前の遺構・遺物の量と比較すればその差は歴然としており、相当に縮小したものと考えてよいと思われる。

文禄3年(1593年)、大友吉統は朝鮮出兵での失態を理由に豊臣秀吉により豊後から除国される。豊後は秀吉の蔵入地となり、秀吉の馬廻衆に分け与えられた。府内には早川長敏が1594年に入部し、大友館(おそらく上原館)を修築して使用したとされる。次いで府内に入部した福原直高のもとで慶長2年(1597年)より「府内」の北西隣接地に府内城が築城されはじめる。ここは当時「荷落」と称される地であったが、「府内古図」では同慈寺町と呼ばれる町場や舟入が描かれている付近に相当し、これらを取り込む形で新城下町は建設されたのである。府内城は関ヶ原の戦い後、竹中重利のもとで建設が続行され、慶長13年(1608年)に完成を迎える。元の「府内」を構成していた44の町のうち20の町名は近世府内城下の町名に見ることができ、府内城下町完成までに住民ごと移転したものと考えられる。

近世府内城下町は旧「府内」中心部とはわずかしか重なっておらず、旧「府内」のほとんどは近世以降農村化した。近年になり、住宅地化もかなり進んだものの大規模なビル等は依然少なく、現在も広大な田園地が残されているほどである。これは、現在の大分市街地中心部が、近世府内城下町を基本的に踏襲しているためである。中世と近世以降とでこのような都市域の地理的変遷があったため、「府内」の遺構は良好な形で保存されることとなったのである。

調査地点横小路町

「戦国時代の府内復原想定図」によれば、今回の調査地点横小路町は大友氏館が所在する「府内」中心部からやや北寄りに位置し、W-19° Nに斜行する東西方向の道路に面している。この道路については中世大友府内町跡第1・2次調査により、幅10mにも及ぶことが判明している。また、この道路の東端は坊ヶ小路町で、近世には対岸の下郡に渡る渡河点、坊ヶ小路渡しがあった地点にあたる。

註

- (1) 高橋信武1999「大分県大分市上野遺跡群竜王畑遺跡」『日本考古学協会年報』50日本考古学協会
- (2) 讃岐和夫1999「上野遺跡群(上野廃寺跡)」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.10大分市教育委員会
- (3) 坪根伸也・塩地潤一1996「豊後国府推定地付近の発掘調査Ⅱー羽屋・井戸遺跡とその周辺の調査からー」『大分県地方史』163大分県地方史研究会
- (4) 田中裕介2001「第7次調査(中世大友府内町跡)」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会
- (5) 姫野公德・宮田剛2001「南金池遺跡第2次調査」『大分市埋蔵文化財調査年報』vol.12大分市教育委員会
- (6) 『宇佐大鏡』の中に宇佐八幡宮の神領「勝津留」ないし「勝津留島」の四至を示した記述があるが、この中に「市河」、「高国府」の記述がある。
天喜元年(1053年)8月「且開作空閑常荒地壹所状、在大介郡管荏限郷字勝津留河尻野、四至東限北廻二方市河也、南石崎際、限西高国府岸上額島際者」
承保4年(1077年)8月「大分郡内、判太・笠和・荏限三箇郷境空閑字勝津留田畠佰町事、四至限市河、南限石屋寺前、西限高坂并横道、北限市河并田中寺」
渡辺澄夫1989『豊後国莊園公領史料集成5(上)』所収
- (7) 佐藤進一、池内義資編1955『中世法制史料集第一卷鎌倉幕府法』

- (8) 鹿毛敏夫2001「文献・絵図からみた大友館と府内の町 ～都市と国際性～」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会
- (9) 讃岐和夫1985「豊後国府推定地周辺の発掘調査—大分市古国府・羽屋地区の近年の調査から」『大分縣地方史』117大分県地方史研究会
- (10) 木村幾多郎2000「府内古図再考」『Funai府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報Ⅸ』大分市歴史資料館
- (11) 大分市史編纂委員会1987『大分市史』中巻付図Ⅱ
- (12) 坂本嘉弘2001「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会
- (13) 註8文献

参考文献

大分市史編纂委員会1987『大分市史』上巻、中巻

大分市教育委員会・中世都市研究会2001『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』

河野史郎編2002『大友府内4 中世大友府内町跡第4次発掘調査報告書』大分市教育委員会

第2章 調査の成果

1 発掘調査の概要

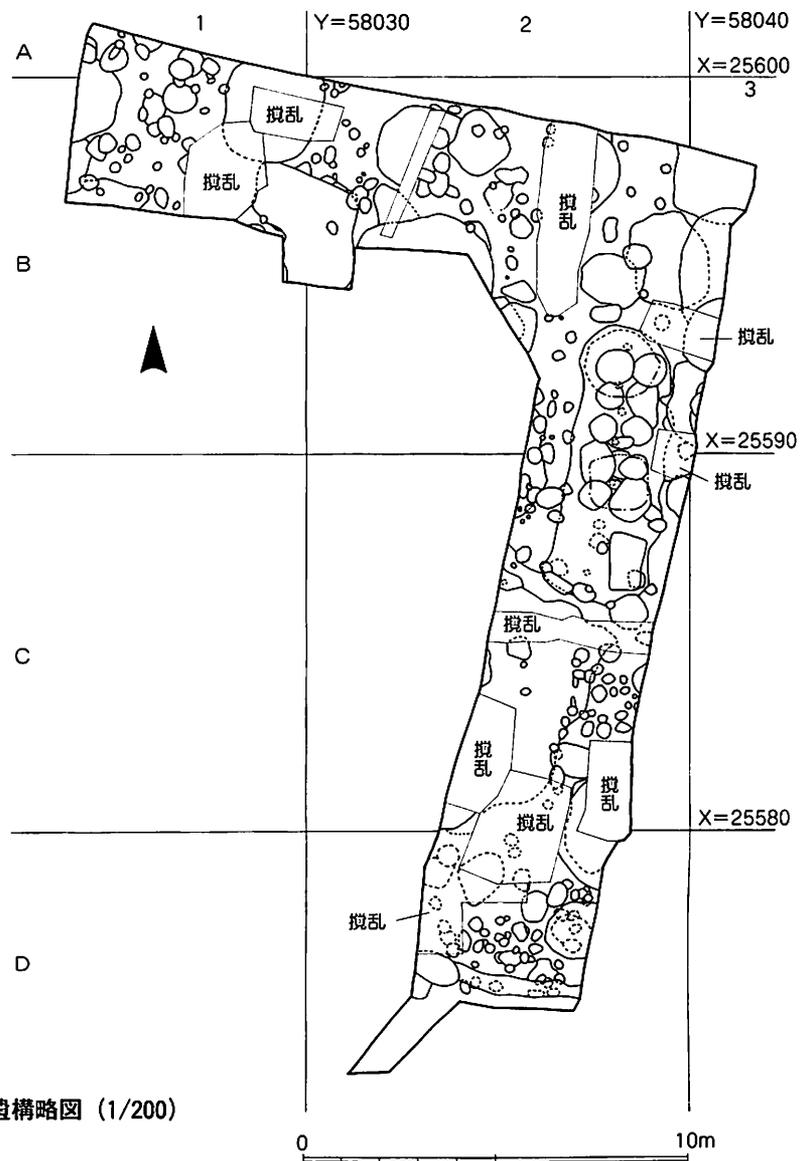
今回の発掘調査は、区画整理代替地予定地のうち、遺構面に影響する恒久的構造物と判断された道路予定地のみを対象とするものである。このため、L字形に曲がる約160㎡を発掘調査したにとどまる。ただし、石組みを伴う遺構が検出されたSX176については南側に一部拡張して遺構の広がりの確認につとめた。また、道路状遺構と判断された整地が検出された調査区南端部については、第1次第2次調査において検出された道路状遺構との関係を明らかにすることと、整地よりも下層における遺構の存在を確認すること等を目的として確認トレンチの設置を行って調査を行っている。

調査は重機により遺構検出面までの表土を剥がし、以後の遺構検出作業および遺構の掘り下げは全て人力で行ったものである。重機による表土剥ぎの際、少なくとも10cm程度掘り下げ過ぎたとみられ、このため大甕埋設遺構SX210等に埋置されていた大甕の胴部が一部削り取られるなど、遺構や遺物の一部が失われた。このため遺物整理作業の際、復元に支障を来す等の障害が発生したことは悔やまれる点である。井戸遺構については、狭い調査区の壁面沿いで検出されたものがあり、これらについては崩落の危険が生じたため一定以上の深さの掘り下げを断念した。

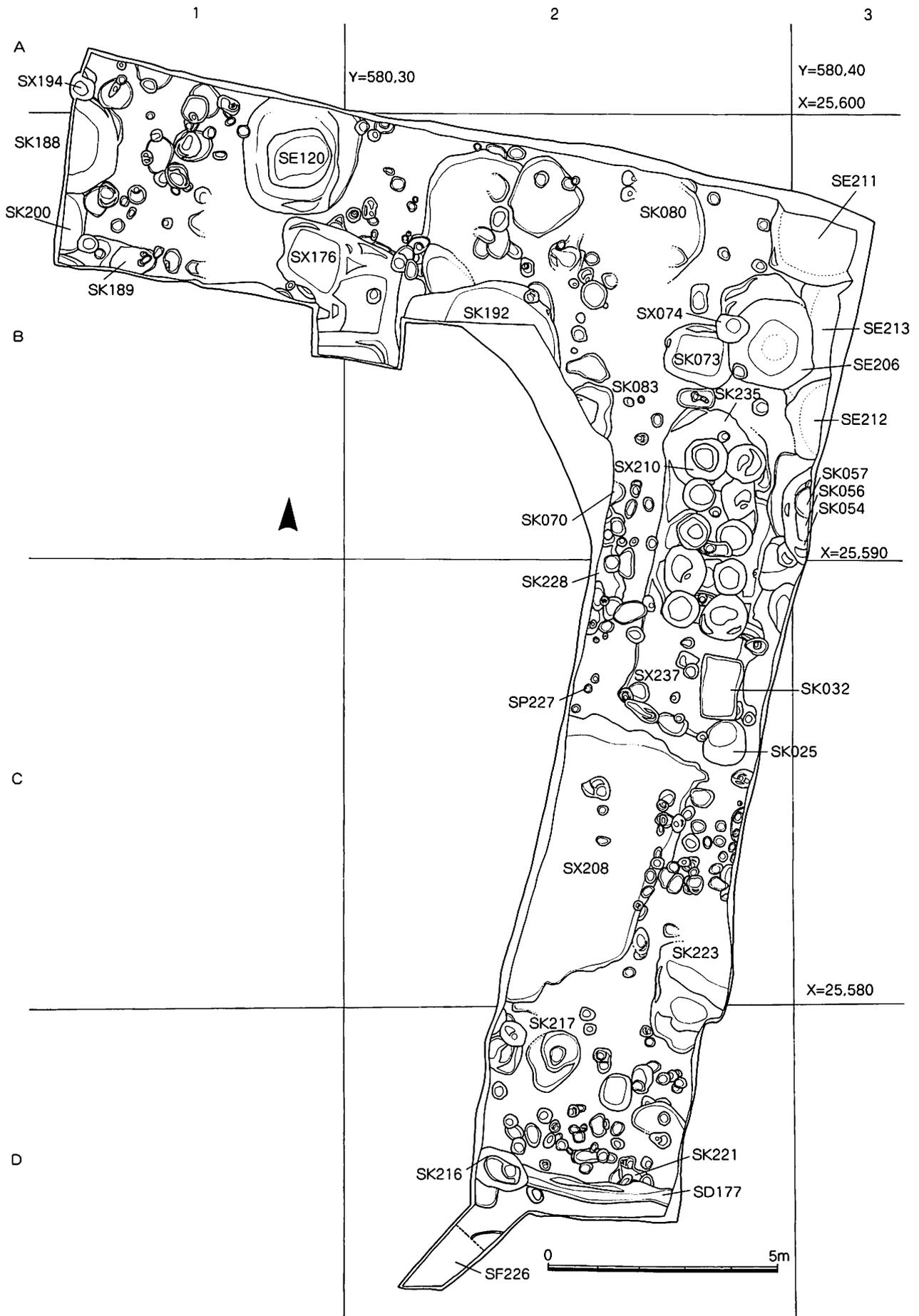
調査区内には大きなもののみで10箇所、中世の遺構面に及ぶ近現代の攪乱があり、遺構が破壊されていた。しかし、そのほかの部分については遺構の保存状況は良好で、調査地が大分市中心部に近い住宅地に所在することを考慮すれば望外の遺存状態といえる。

検出された遺構は暗茶褐色シルト土層の上面において確認されたものである。一部においては部分的な整地層も認識できたが、明確な形で複数の遺構面に分けて発掘調査を進めるには至らなかった。わずかに道路状遺構の整地層よりも下層において、遺構が存在することを確認できたが、確認トレンチ内で遺構の存在を確認したのみであり、詳細を知ることができなかった。従って本報告書において報告する遺構は、基本的に1遺構面で検出されたものとして取り扱う。後述するように大甕埋設遺構(SX210)等、一部の遺構群には大規模な火災に由来するとみられる炭化物や焼土を多量に含む土を埋土とするものが認められる。しかし、遺構面がこうした土により整地されている状況や、連続する焼土層は今回の調査地点においては確認できなかった。

調査において検出された遺構は大甕埋設遺構(SX)3基をはじめとして井戸跡(SE)6、溝状遺構(SD)1、道路状遺構(SF)1、土坑(SK)20、性格不明遺構(SX)5、ほかに小穴160等がある。



第5図 検出遺構略図(1/200)



第6図 検出遺構配置図 (1/120)

2 遺構と遺物

大甕埋設遺構 (SX)

SX210 (第7図・第8図)

調査区南東部で検出された遺構で、主軸をN-9°-Eとして南北に10基の円形・不正円形の土坑が5基ずつ2列に並行して掘られており、このうちS210-1、S210-3、S210-4、S210-7、S210-8の計5基には備前焼大甕(底部)が埋設されていたものである。甕が出土しなかった土坑S210-2、S210-5、S210-6、S210-9、S210-10も、大甕が出土した土坑と形状や深さが類似しており、本来は10基の大甕が埋設されていたものと推定される。大甕底部が残存していた5基の遺構については、甕の中に堆積した埋土がいずれも焼土と炭化物を多量に含むものであった。一方、甕の無い遺構の土層堆積状況を見ると、S210-2の1～3層、S210-5の1・2層、S210-10の1・2層については、掘り返しととらえることが可能であり、しかも掘り返し部分の埋土は、甕内の埋土ときわめて類似した焼土と炭化物を多量に含む土である(第7図)。残りのS210-6、S210-9は明確な掘り返しをとらえることはできないが、やはり焼土と炭化物を多量に含む土で埋積していることが観察された。これらの遺構埋土からは多数の陶磁器等の遺物が出土しているが、それらの中には表面が融解してスリガラス状になったり泡立ったりしたもの、他の陶磁器の釉薬が融着したものなど、二次的被熱の痕跡を明瞭に残すものが多数認められた。また、これらの陶磁器には遺構間で複雑な接合関係を有するものも多数確認され、3遺構以上の間で接合するものが21点存在する。(第1表)以上のことから、SX210は一連の遺構であり、本来、10基の備前大甕を埋設した遺構であった可能性が高いと考えられる。本来の機能停止後に火災処理に用いられ、その際に焼けたものを含む遺物が一括廃棄され、埋められたものと考えておきたい。甕が検出されなかった5基の土坑については火災処理に用いられる前までには甕が抜き取られていたと判断される。ただ、調査の際には甕のある遺構と甕の無い遺構が接しているS210-1・S210-2・S210-3、S210-4・S210-5、S210-8・S210-9では、それぞれの平面上あるいは土層断面の観察によっても切り合い関係が微妙であり、判断できていない。

SX210にみられるような大甕を多数並べて埋設した遺構は、中世から近世にかけての遺跡で数多く検出され「甕倉」⁽¹⁾とも呼称されている。これらは、建物の中に設置され、酒の醸造・油の貯蔵・染め物(藍甕)等に利用されていたことが推定されているところであるが、根来寺坊院跡において検出された遺構については、口縁部に付着した黒色物質の分析によりこれがススであると判明し、内容物が油であると推測された⁽²⁾。SX210についても「甕倉」と判断されるものであり、その性格が注目された。そこで今回出土した遺構について、内容物の分析を行って、機能の推定を試みた(第4章付篇)。しかしながら、今回の分析によっては内容物を特定することができていない。

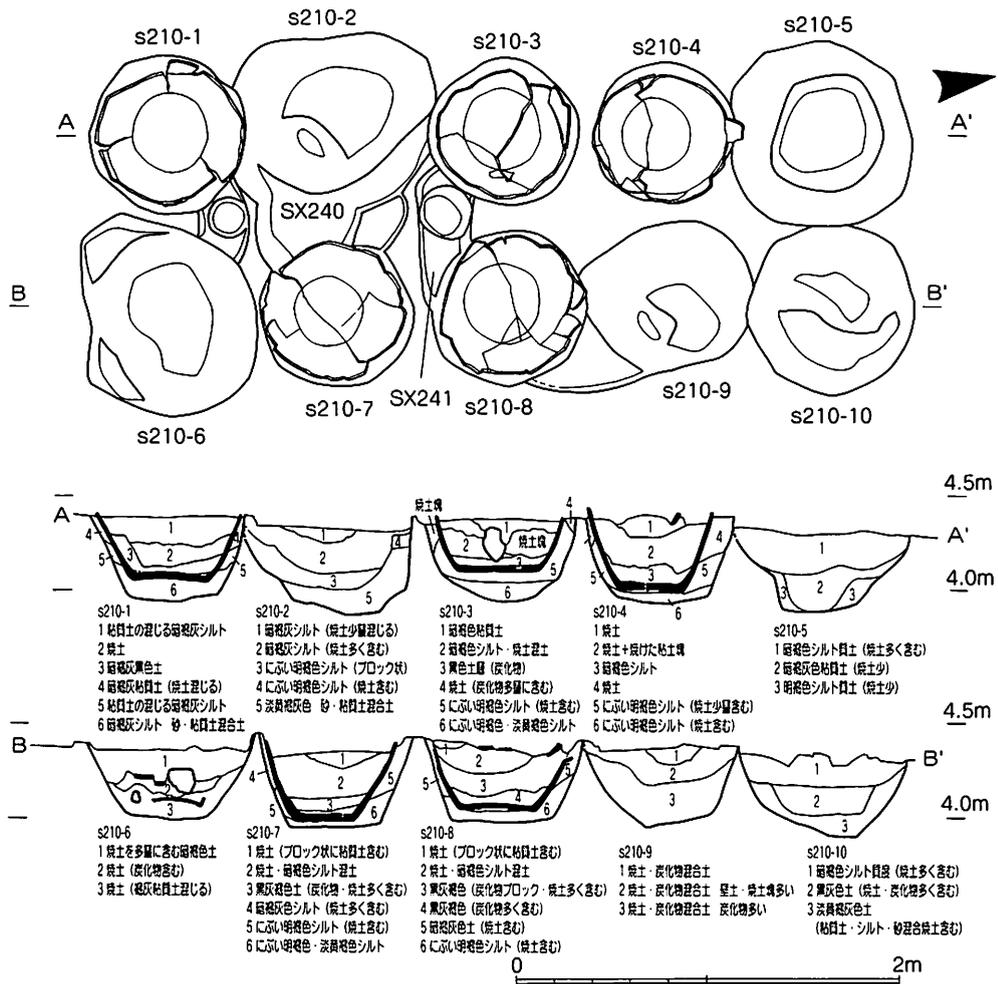
大甕埋設遺構 (SX210) に伴うと考えられる遺構

SA239 (第8図)

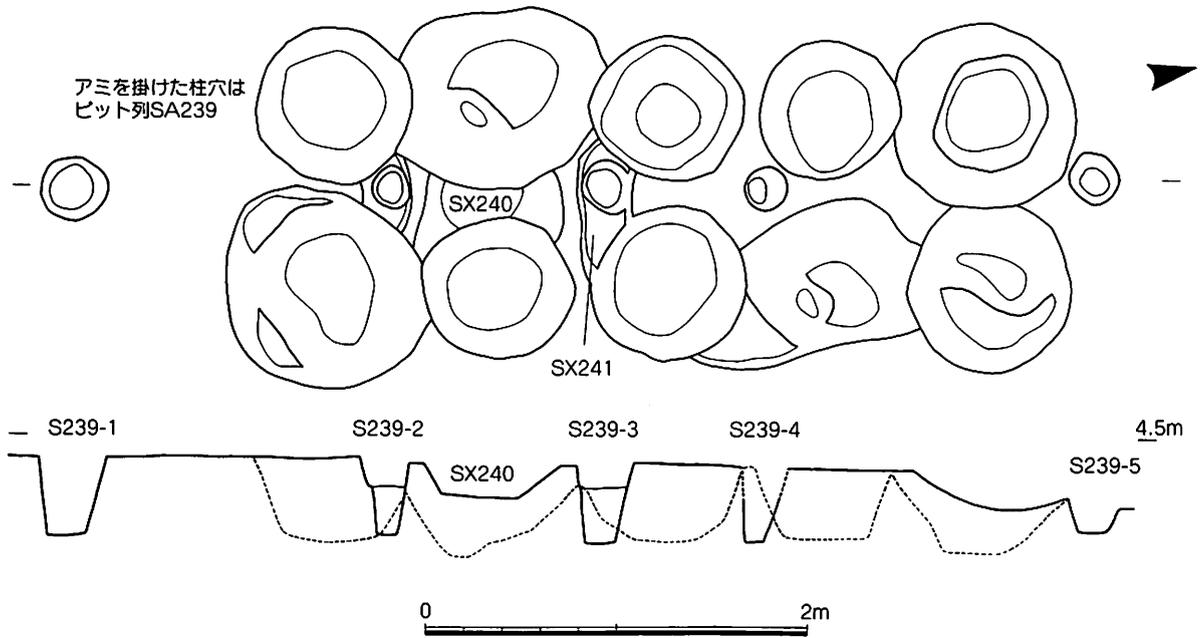
SX210の中央の長軸(南北軸)方向に掘り込まれたピット列で、軸方向がSX210とほぼ一致する。ただし、これらのうちS239-1、S239-2、S239-3、S239-5はSX210検出時には検出できず、甕取り上げ後、全体を掘り下げる際に検出されたものである。これ以外、SX210周辺に明確に関連を認めうる柱穴等が検出できていないが、SX210を納める建物等の構造物に関わる遺構と推定される。これらの遺構の埋土は、焼土を含む暗褐色シルトで、焼土を多量に含むSX210各遺構の埋土とはやや異なっている。

SX237 (第9図)

SX210と重なる位置に掘り込まれた遺構であり、7.3m×2.5mの略長方形で深さ約45cmを測る。埋土は褐色のシルト質土で焼土を少量含むものである。この遺構は、平面的な位置はやや南側に寄っているものの、プラン



第7図 SX210平面・土層断面図 (1/40)



第8図 SX210完掘状況平面・断面図 (1/40)

はSX210とよく重なっており、主軸方向も全く一致している。また、SX210を構成する各遺構の掘り込みの底面レベル、ならびにピット列SA239の底面レベルはいずれもSX237の底面とほぼ一致している。このようなことから、SX237はSX210築造に伴って掘り込まれた遺構であり、基礎地業としての掘り込みであった可能性を考えておきたい。

SX240 (第7図・第8図)

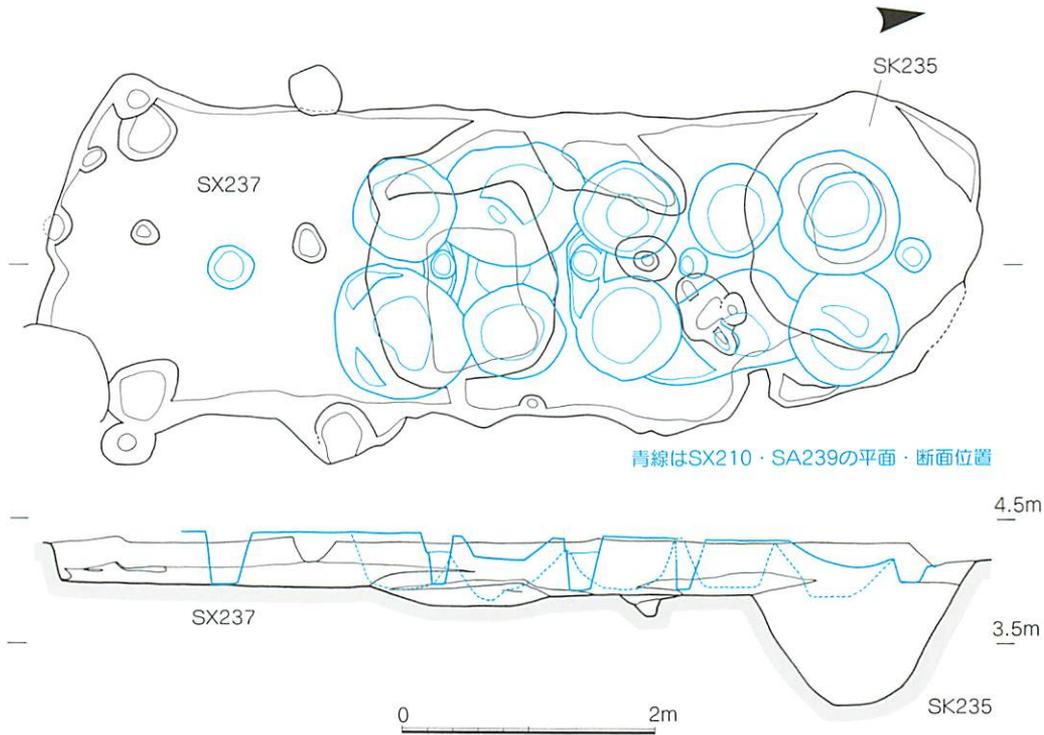
S210-2とS210-7との間で検出された性格不明の土坑で、これらの遺構との切り合い関係は明確にできなかった。深さ約20cmの浅い土坑で、焼土を多量に含む土で埋積しており、焼けたものを含む陶磁器も出土していることから、SX210の各遺構と同時期に埋められた可能性が高いと考えられる。

SX241 (第7図・第8図)

SA239を構成するピットの一つS239-3を切っている、深さ約15cmの浅い土坑である。焼土を多量に含む土で埋積している。

第1表 SX210出土遺物接合関係表

図版番号	器種	接合関係
第14図 94	中国産褐釉陶器五耳壺	210-5/-8/-9
第14図 95	中国産褐釉陶器四耳壺	210-5/-6/-9
第14図 96	中国産焼締陶器搦鉢	210-2/-3/-6/-7/-8/-9
第14図 97	中国産褐釉陶器壺	210-1/-3/-6/-10
第19図 157	タイ産陶器四耳壺	210-2/-6/-7
第19図 158	タイ産陶器四耳壺	210-4/-6/-7
第19図 159	タイ産陶器四耳壺	210-3/-7/-8
第19図 160	タイ産陶器四耳壺	210-4/-8/-9
第20図 148	タイ産陶器四耳壺	210-7/-8/-9
第21図 161	ミャンマー産陶器三耳壺	210-1/-6/-7
第22図 163	備前搦鉢	210-1/-6/-7
第22図 169	備前搦鉢	210-1/-2/-7
第22図 170	備前搦鉢	210-1/-3/-7
第22図 176	備前搦鉢	210-1/-3/-7
第24図 194	備前四耳壺	210-3/-4/-9
第27図 212	備前大甕	210-7/-8/-9
第27図 213	備前大甕	210-3/-9/-10
第28図 215	信楽鉢	210-4/-5/-9
第28図 216	信楽壺	210-2/-5/-6/-7/-8
第29図 227	瓦質土器鉢	210-1/-7/-8
第29図 233	器種不明瓦質土器	210-1/-6/-7
第16・17図98~122	【参考】華南三彩陶器(貼花)	210-1/3/4/5/6/8/9
第18図130~142	【参考】華南三彩陶器(刻花)	210-6/7/9



第9図 SX237平面・断面図 (1/60)

大甕埋設遺構 (SX210) 出土遺物

ここでは、大甕埋設遺構 (SX210) 出土遺物を報告するが、大甕埋設遺構に伴うと考えられる遺構 (SX237・238・240・241およびSA239) から出土した遺物、さらに大甕埋設遺構から出土した遺物と同一個体と考えられる他遺構出土遺物についてもあわせて掲載し、報告する。

1) 中国産陶磁器

白磁・青白磁 (第10図1～13)

1～3は白磁もしくは青白磁の皿である。成形後に口縁部を工具で削って輪花とし、体部外面に鎬状の沈線を彫り込んでいる。3はさらに内面にもやや幅広の沈線が彫りこまれる。4・5は白磁の小坏で、器壁が非常に薄く作られたものである。6は口縁部が内湾するタイプの白磁皿、7～9は口縁部が端反となる白磁皿である。10・11は見込と体部下半が無釉となる白磁皿で、高台は低く削り出される。胎土が陶器質の粗製のものである。

13は口縁部が輪花となる皿で、口縁部外面のみ菊皿状の窪みを巡らせる。釉は焼成不良のためか不透明な淡黄緑色となっておりあるいは青磁かもしれない。

灰色磁器 (第10図14～21)

灰色～暗灰色の磁器質の緻密な胎土で、灰白色～灰色を呈して貫入の著しい白濁釉のかかる特徴的な一群であり、「灰色磁器」と仮称しておく。いわゆる「鳥の子手」と称される伝世品の一部がこれに類するものではないかと推定される⁽³⁾。14・17・18は口縁部が端反となり、見込はやや窪む器形の碗である。17と18には黒く細かな貫入が網目状に認められる。16・19～21は口縁部が輪花となる型押し製の碗である。15は型押し製の菊皿である。これらの一群には景德鎮系の窯で生産されたと考えられる同じ器形の青磁および白磁が存在するようであり⁽⁴⁾、同じ技術系統の窯で生産された可能性が高いと考えられる。

色絵磁器 (第10図22)

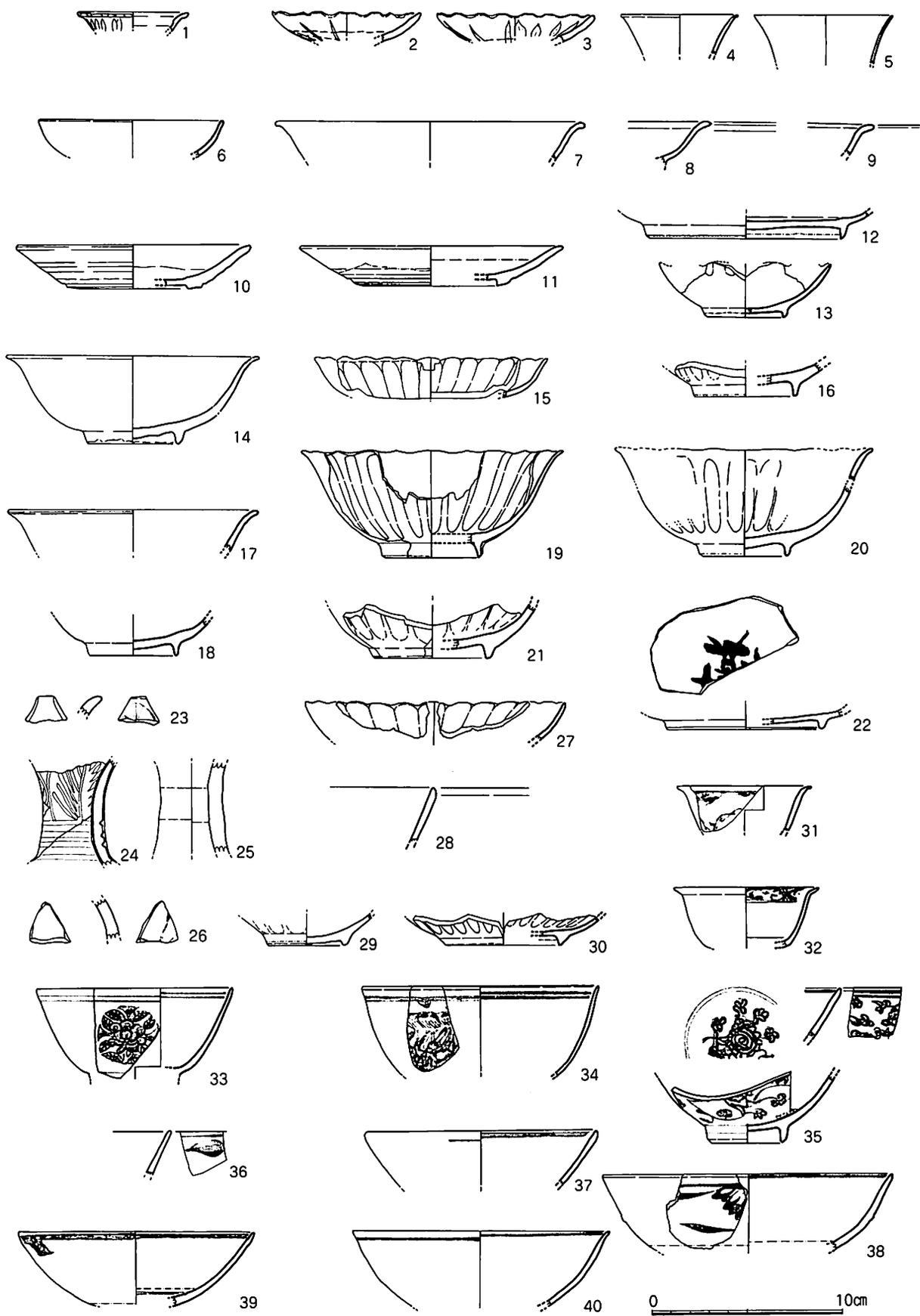
22は皿で、見込に花卉文?を白磁の素地に上絵付したものである。文様は赤紫色を呈するが、銅を含む顔料が二次被熱によって還元されたものと推定され、緑もしくは青であったと推定される。

青磁 (第10図23～30)

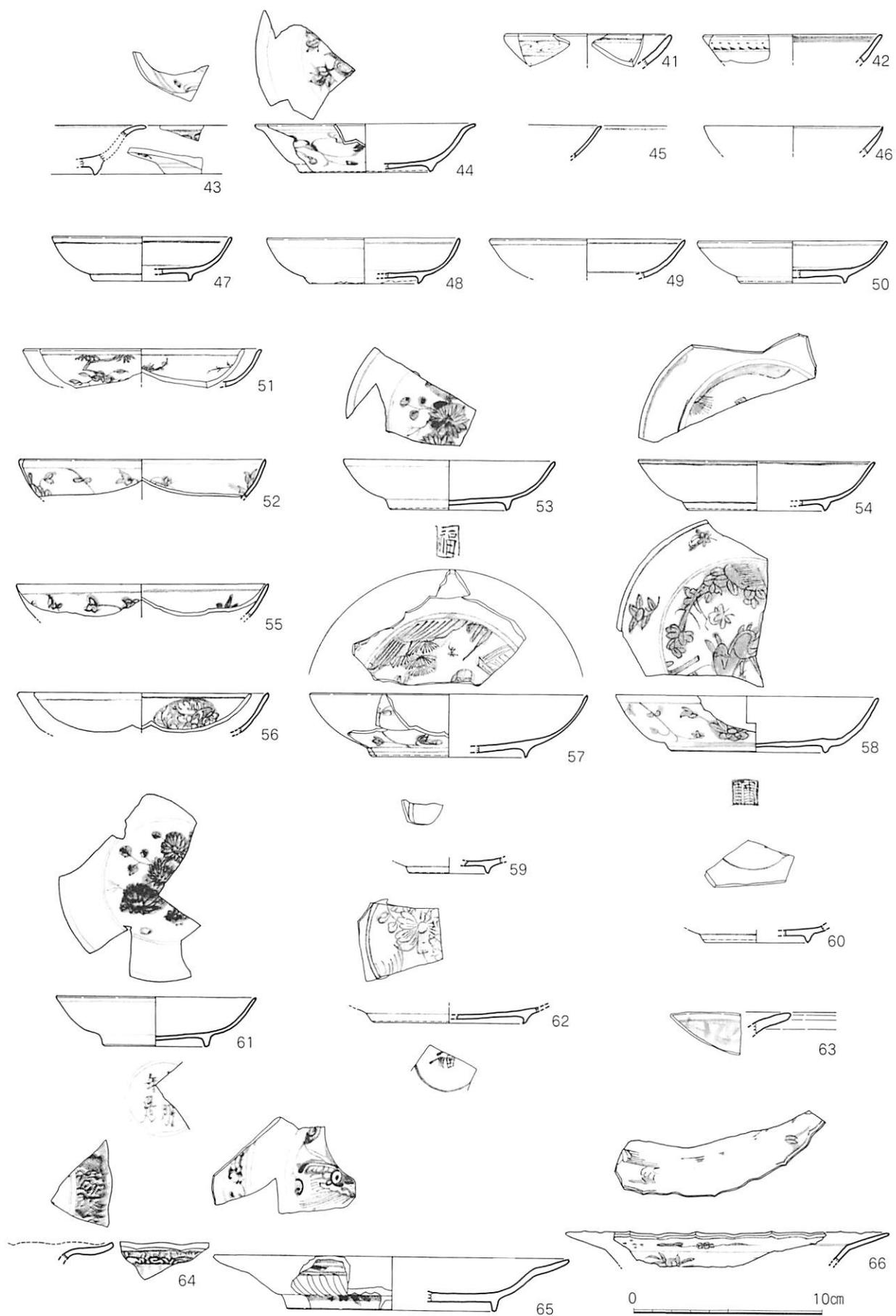
23～26は瓶で、23・24・26は外面に沈線を彫り込み、施文したもので同一個体の可能性が高い。25は無文の頸部破片である。27・29・30は菊皿である。29は焼成不良のためか淡緑色不透明に発色しており、13にも類似する。30は二次被熱が著しい。28は青磁碗である。

青花 (第10図31～40・第11図・第12図・第13図72・73)

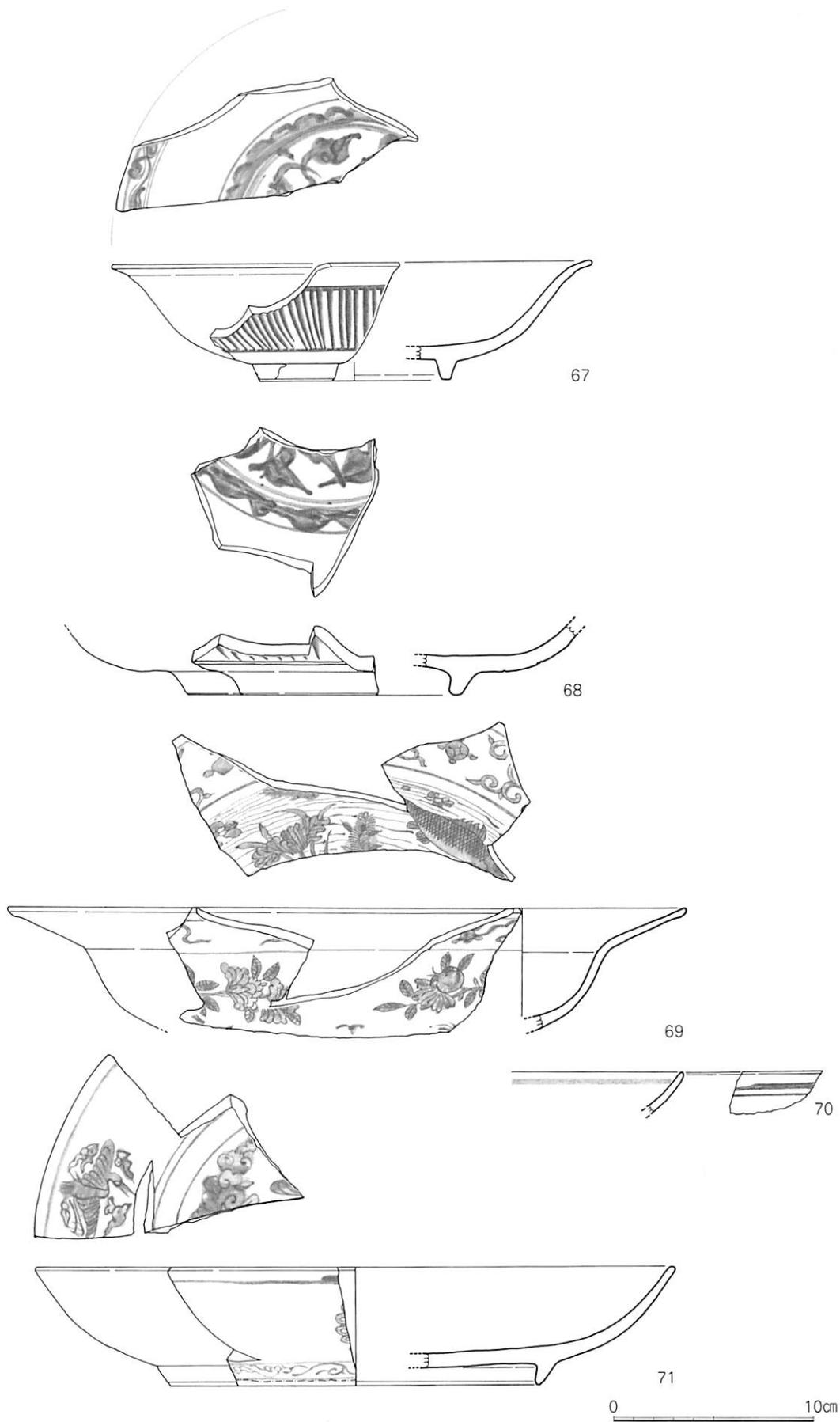
31・32は口縁端部が外反する小坏である。33・34は碗E群、いわゆる饅頭芯碗であろう。35は外面に花唐草文、見込みに花卉文を描く碗C群である。口縁部破片は接合しないが、同一個体の可能性が高い。36～40は漳州窯系の碗で38・39は見込が釉剥ぎされており、39は釉剥ぎされた部分に呉須で圈線が描かれている。41・42は皿C群の口縁部と推定される。43・44は皿B1群である。45～50は圈線のみを施文する皿E群である。51～61は皿E群である。このうち53は高台内に「福」、58は落款状の、61は「大明年造」の銘がそれぞれ確認できる。59・60もおそらく皿E群と推定されるものである。62は高台内に圈線と「福」銘を描くもので皿E群もしくはF群と推定される。大甕埋設遺構中央にあるピット列SA239から出土したものである。63は漳州窯系の皿の口縁部で皿F群に類似した器形のものとして推定される。64・65は口縁部が輪花となり体部外面に鎬状の沈線を彫り込むもので、65の見込には獅子文が描かれている。口縁部が屈曲し皿F群に分類されるものであるが、出土事例により16世紀中葉以前に生産されたものと見られる。66は口縁部が輪花となり器壁が薄く作られた皿F群である。二次被熱が著しく他の陶磁器の釉も釉着しているため内面の模様は読み取れない。外面には花卉文などが描かれる。16世紀後半以降に位置づけられるものであろう。67～71は大皿である。67・68は福建省漳州窯系の窯で生産された製品である。外面には工具により圈線と鎬状の沈線が彫り込まれ、ここに釉がたまり、文様効果を出している。内面には唐草



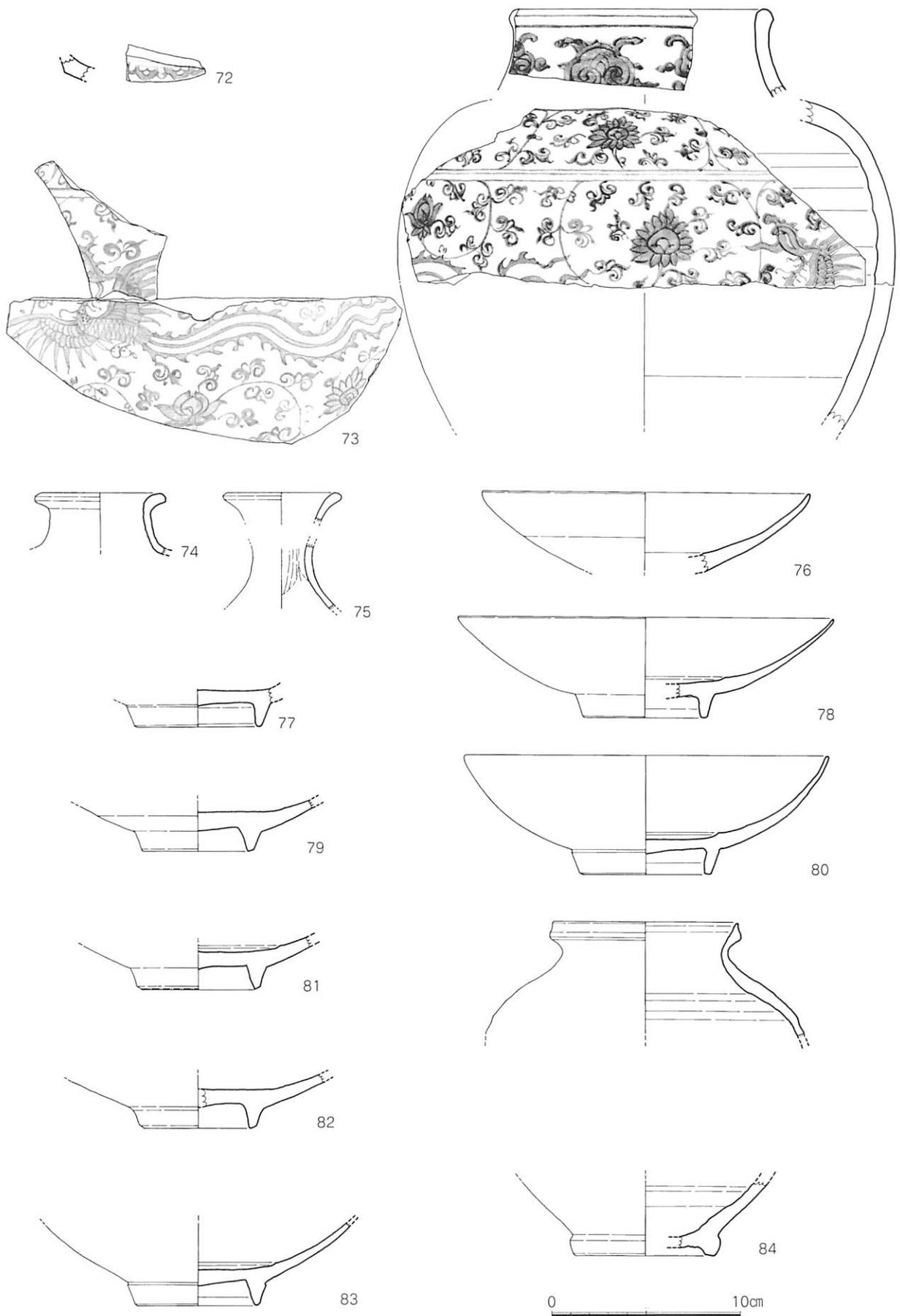
第10图 SX210出土遗物实测图1 (1/3)



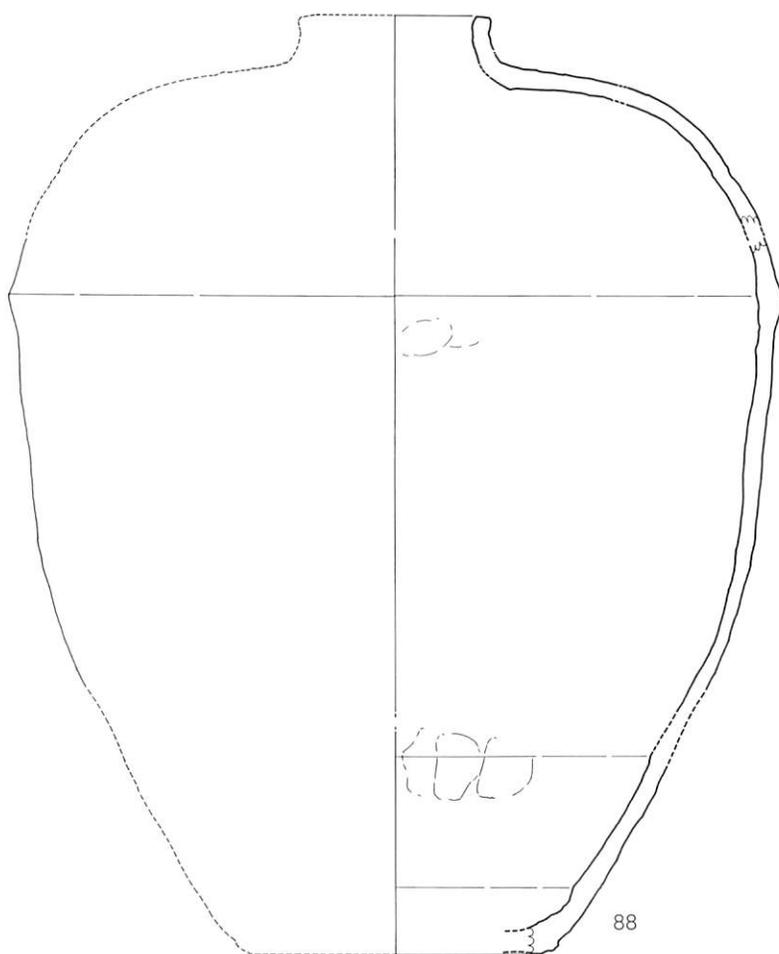
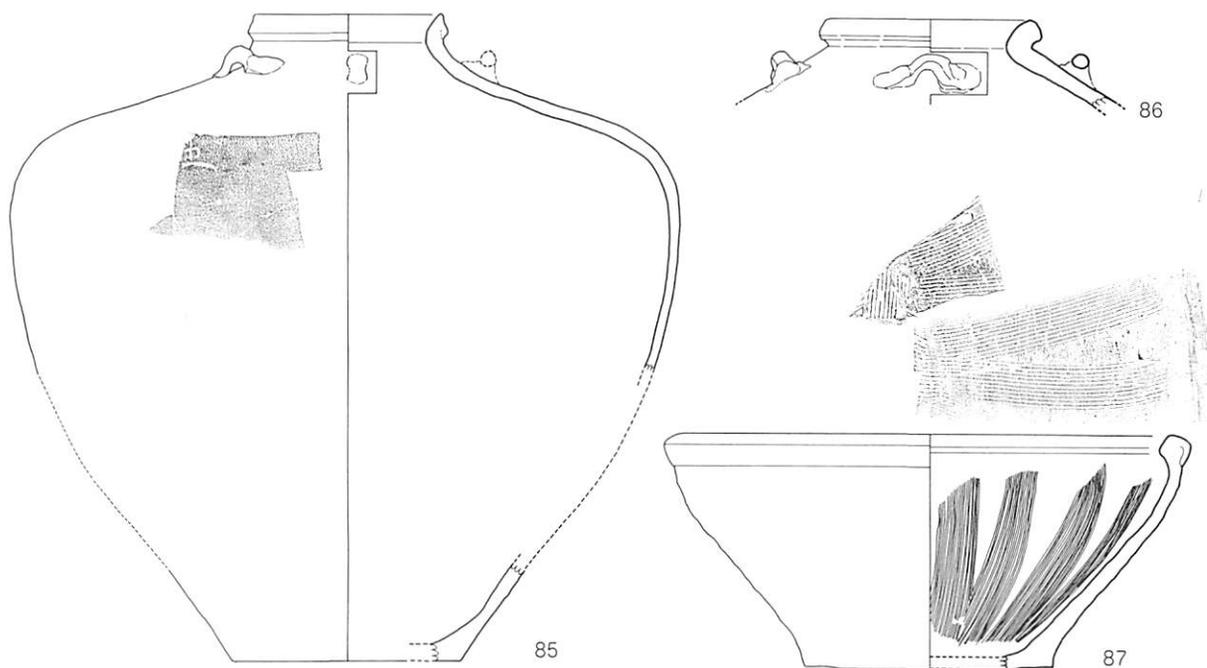
第11图 SX210出土遗物实测图2 (1/3)



第12図 SX210出土遺物実測図3 (1/3)

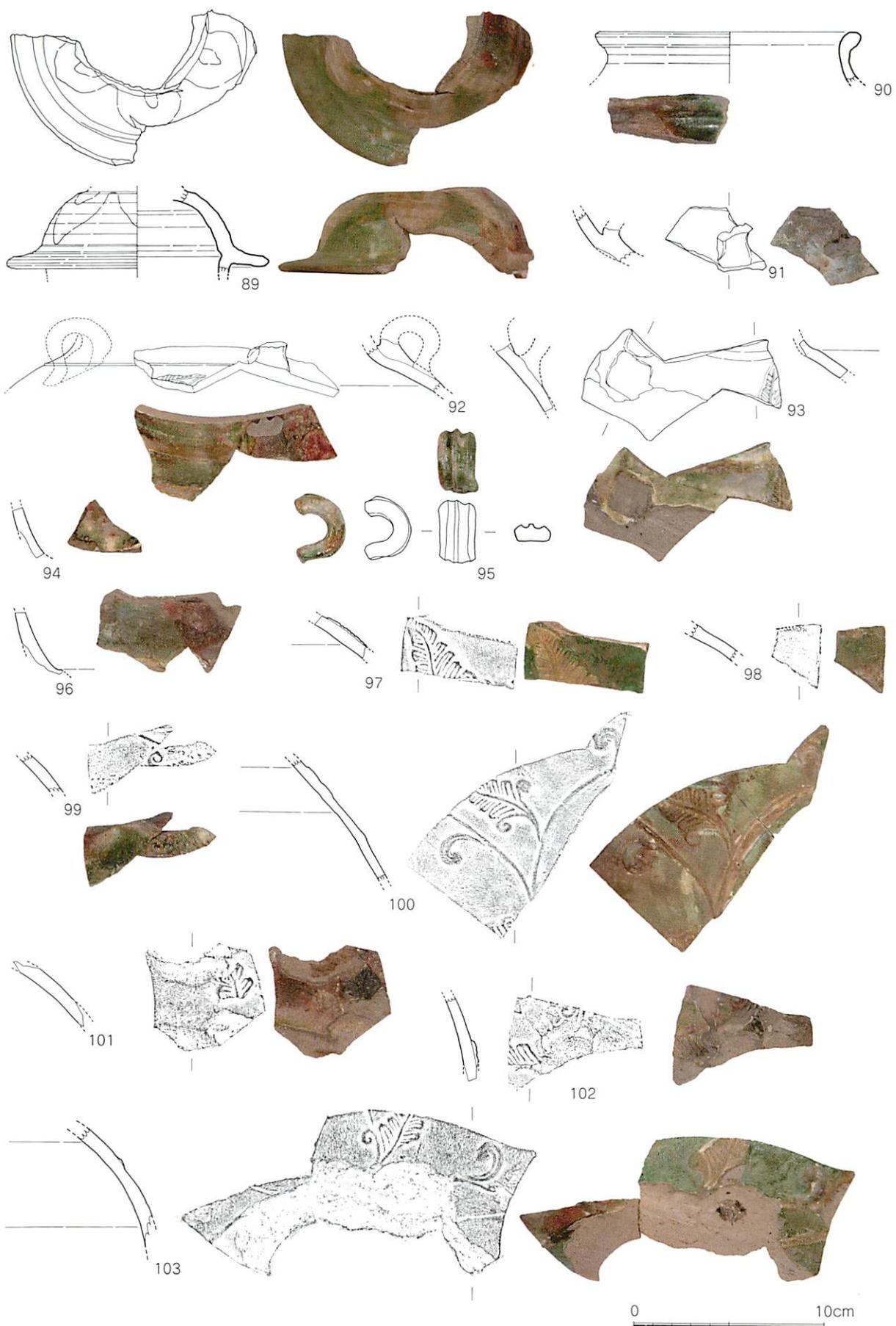


第13图 SX210出土遺物実測図4 (1/3)

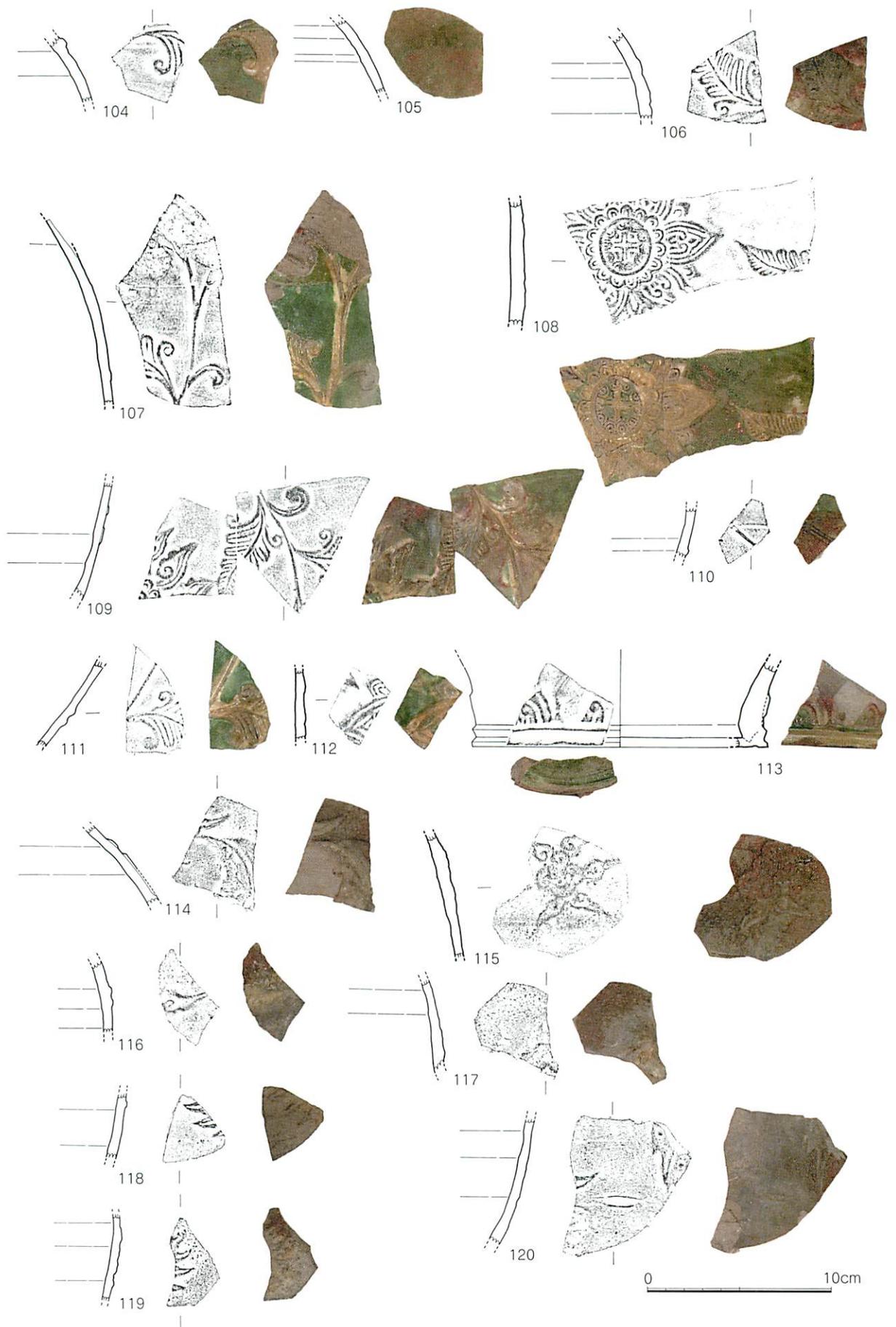


0 20cm

第14図 SX210出土遺物実測図5 (1/4)



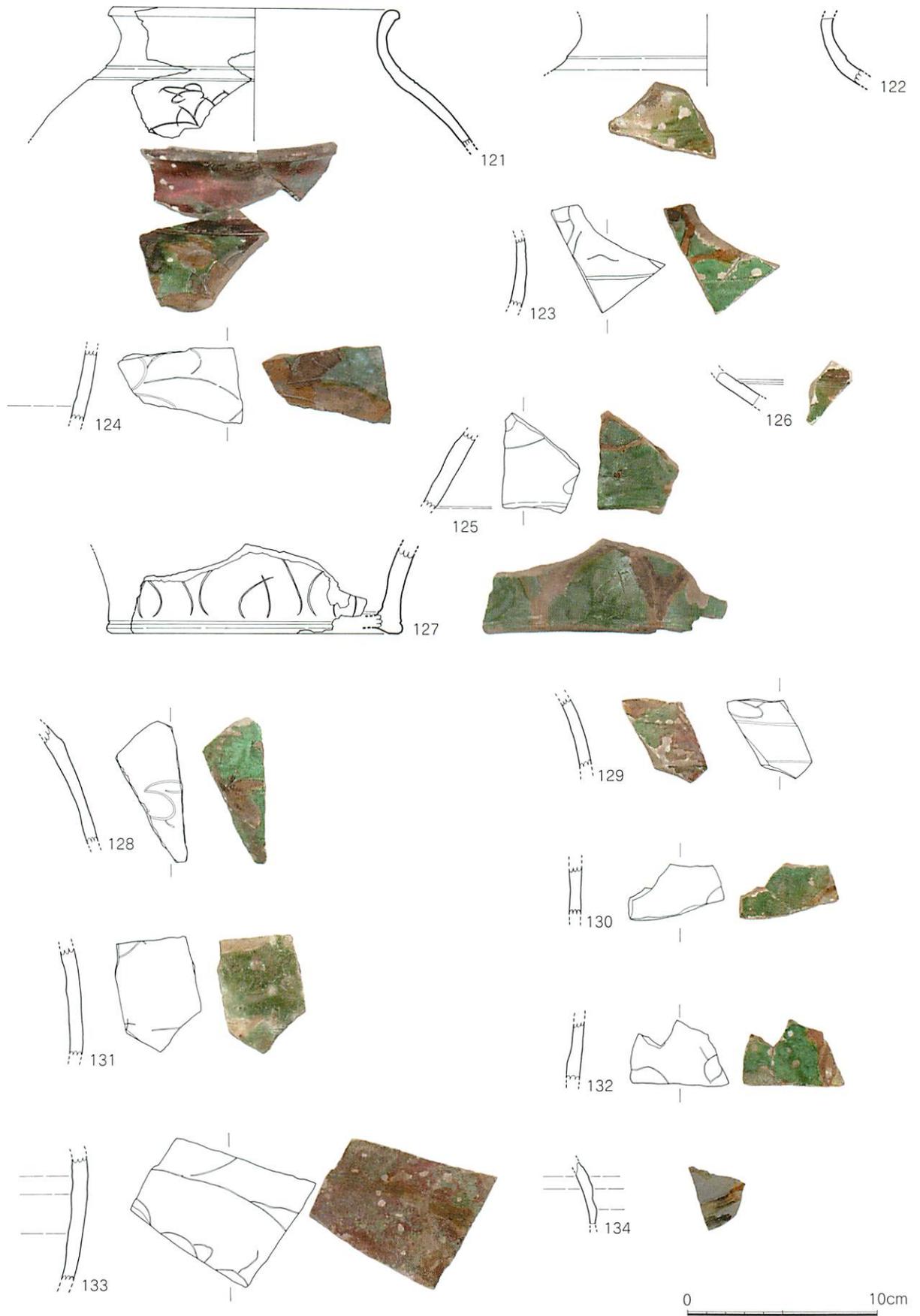
第15图 SX210出土遺物実測図6 (1/3)



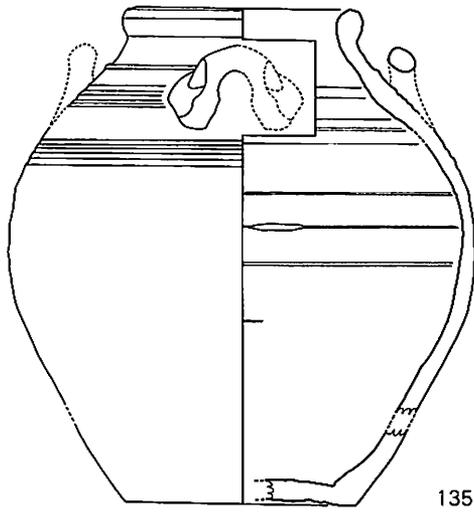
第16图 SX210出土遺物実測图 7 (1/3)



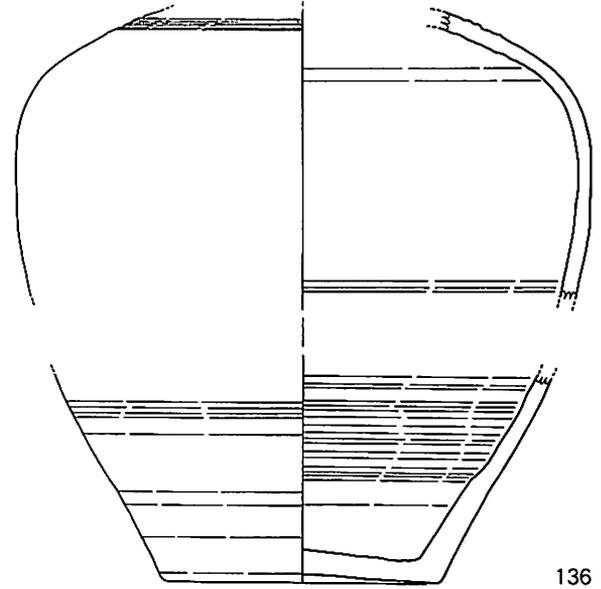
第17図 勝光寺蔵トラディスカント壺実測図・SX210出土資料文様位置復原図（実測図：1/8・復原図：1/4）



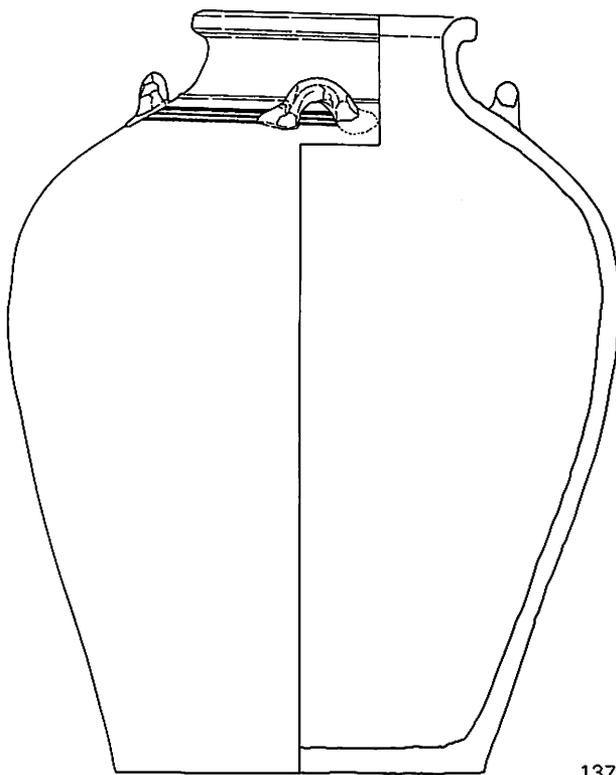
第18图 SX210出土遺物実測図8 (1/3)



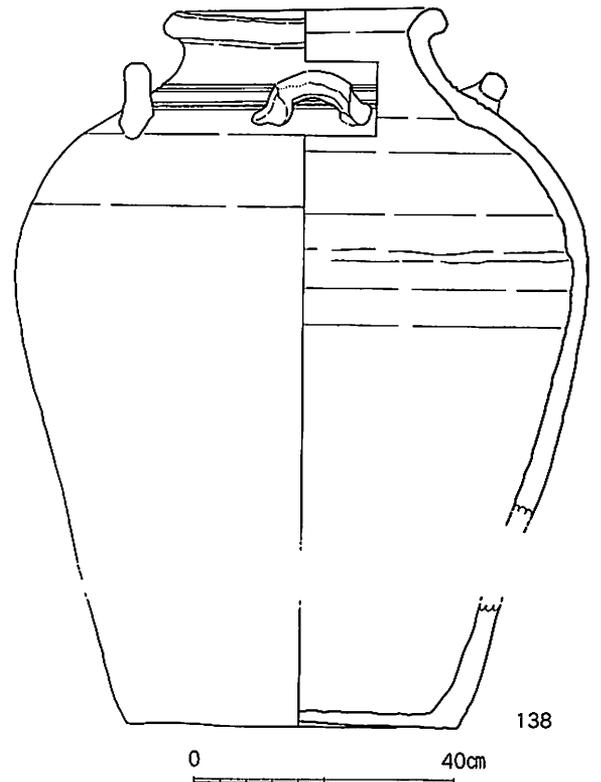
135



136



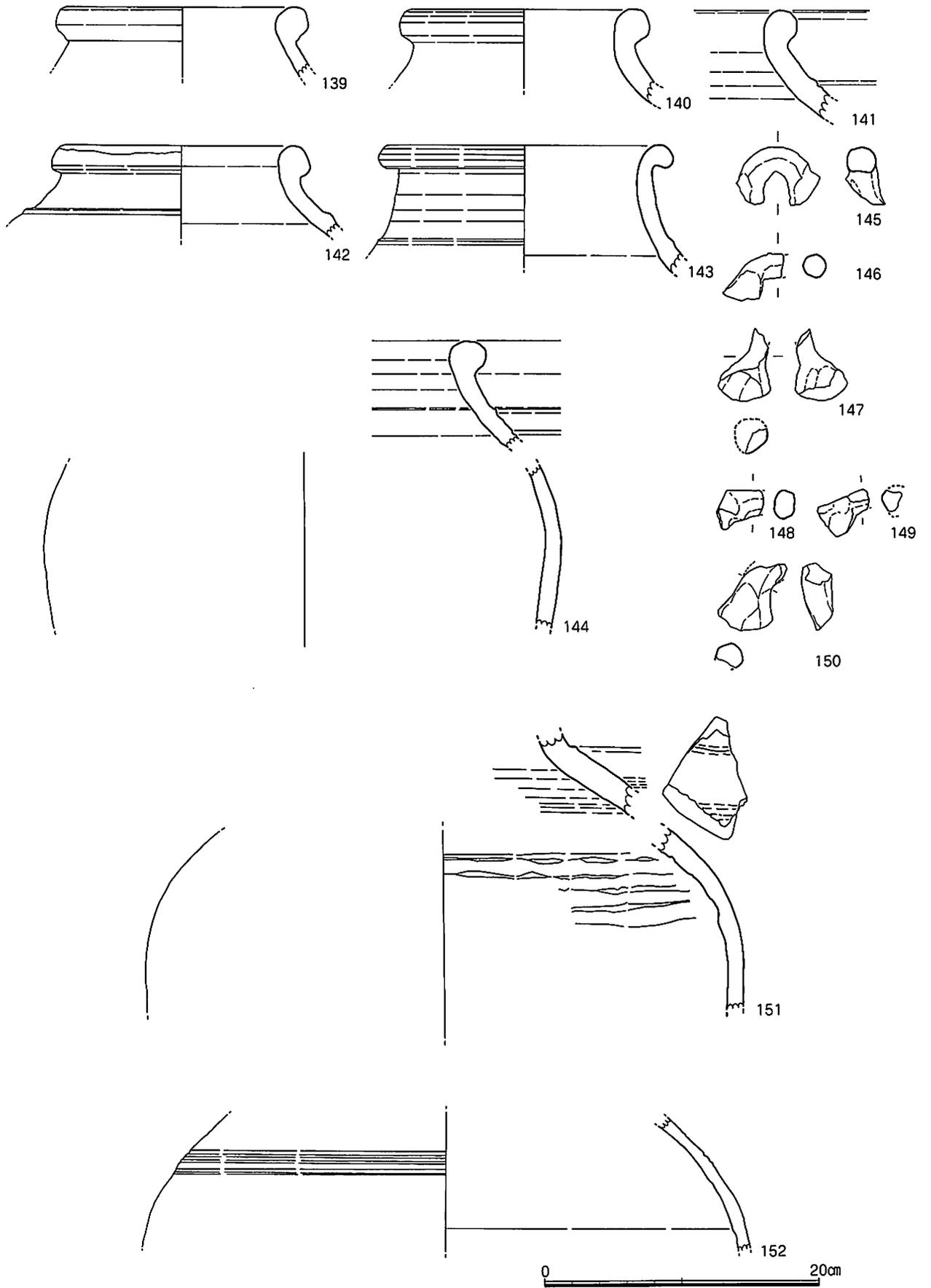
137



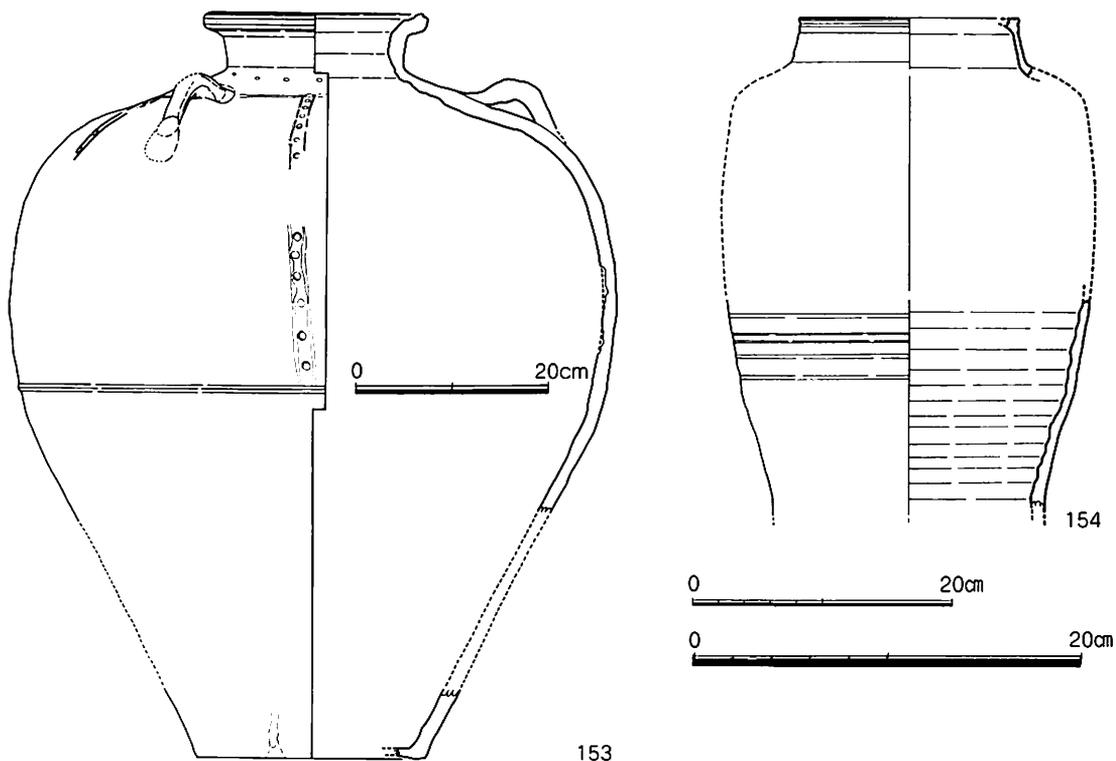
138

0 40cm

第19図 SX210出土遺物実測図9 (1/6)



第20图 SX210出土遗物实测图10 (1/4)

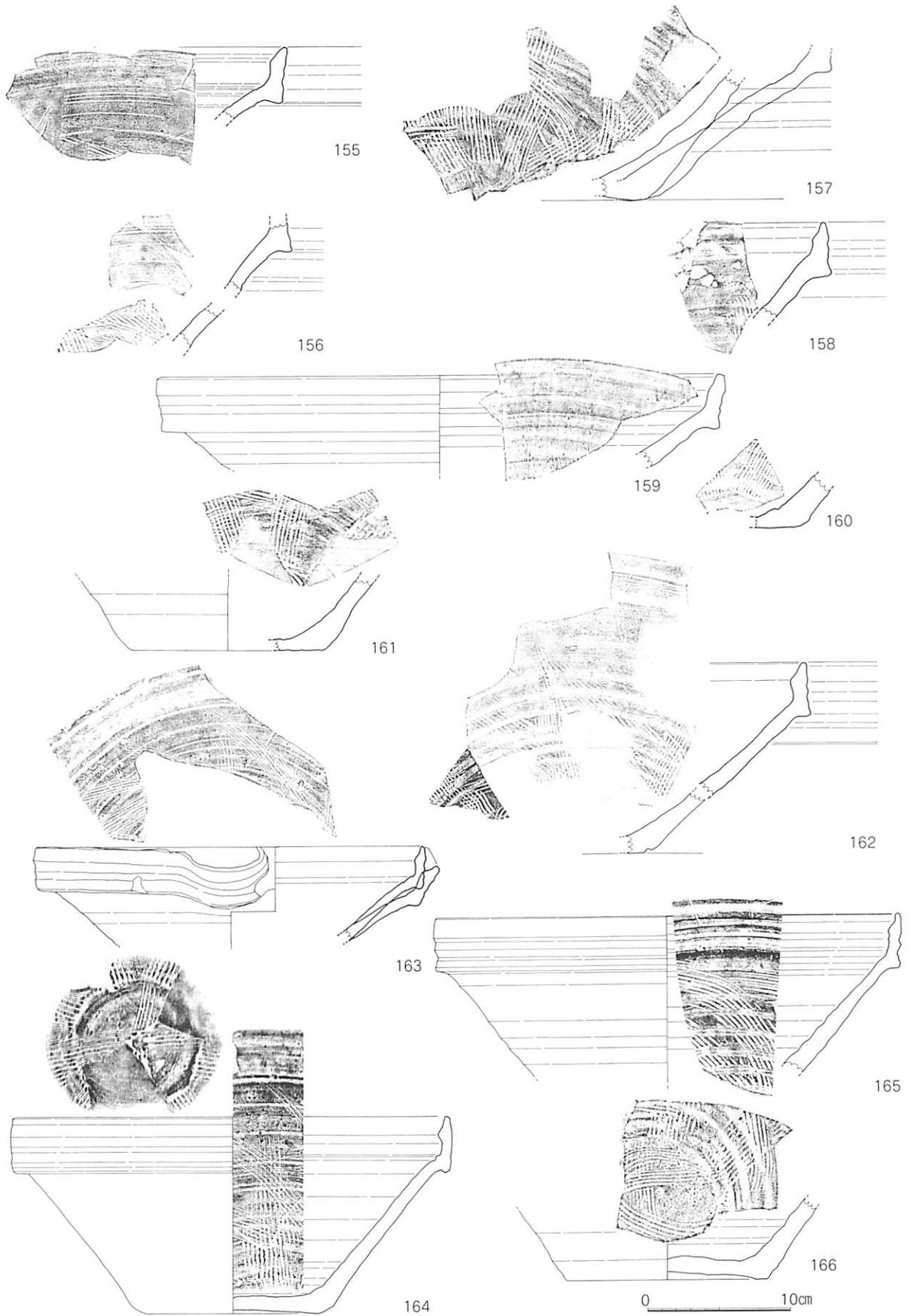


第21図 SX210出土遺物実測図11 (153 : 1/6, 154 : 1/4)

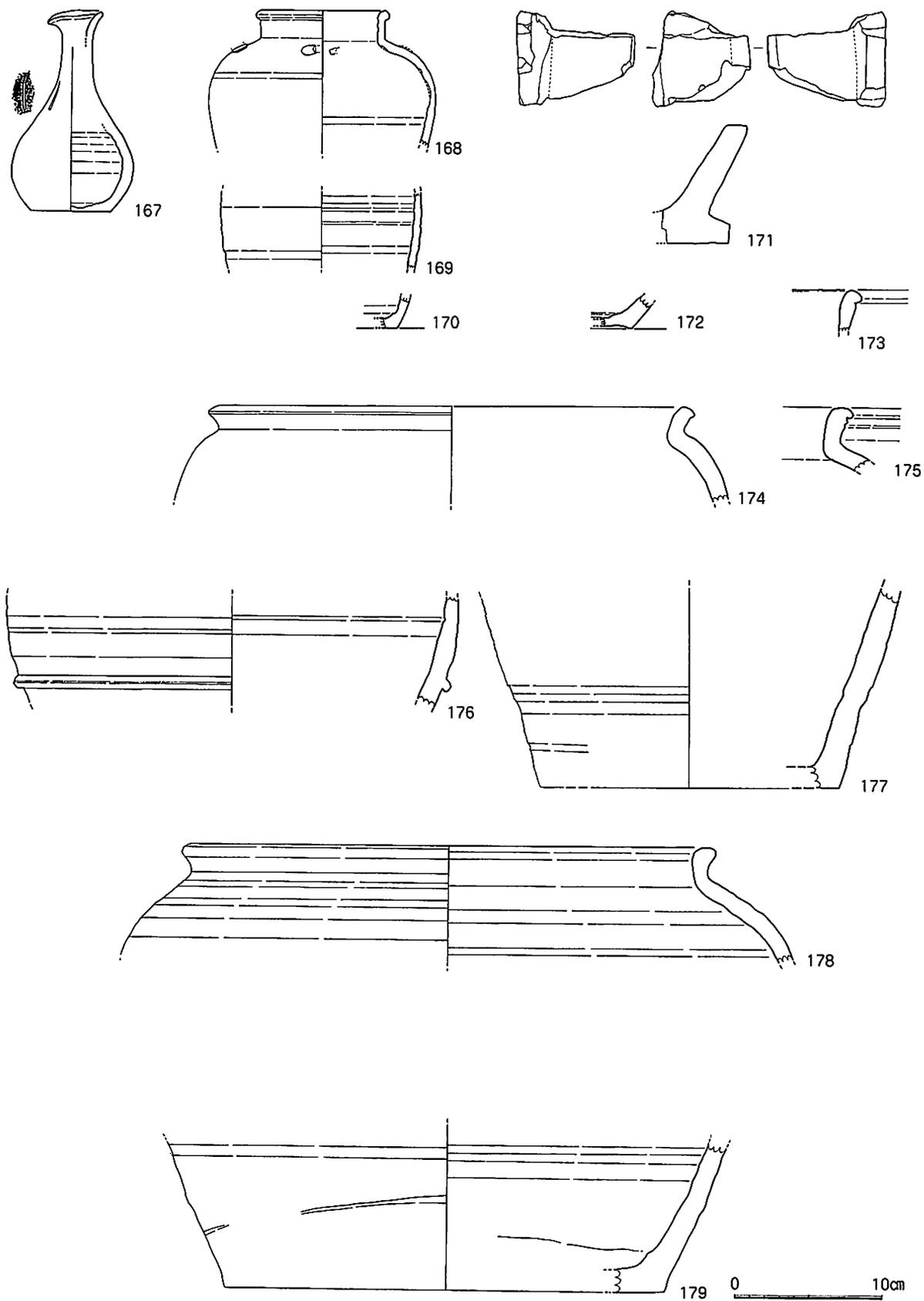
上の文様が描かれる。いずれも高台や高台内に砂の付着は見られないが、68は高台畳付けにモミガラ様の痕跡がみられる。これらについては、近年発掘調査が行われ報告された福建省漳州窯の報告書に酷似するものが掲載されており、同窯で生産されていたことが明らかにされた⁽⁵⁾。70は漳州窯系の大皿口縁部と推定されるものであるが口縁部が内湾する器形であろう。69は皿F群の器形を有する大皿で、内面に蓮池魚藻文、外面にザクロと思われる花と果実が描かれている。内面の文様については、万曆年製（明万曆年間：1573～1620）銘を有する資料が知られており⁽⁶⁾本資料も同時期に生産されたものと考えられる。71は皿E群に類する器形の大皿で内面には雲鶴文等を描く、体部外面の文様は不明であるが、高台には唐草文が描かれる。73は壺で、4点の破片資料があり、接合しないが同一個体と判断されるものである。口縁部に如意頭文、体部外面に花唐草文と鳳凰文が描かれる。図の左に図示した破片資料を観察すると、壺の体部を成形する際、上半部と下半部を別々に成形したことが明らかである。すなわち、接合部には上半部に凸部が下半部には凹部が削りだされていることが観察され、これをあわせて接合する「胴継ぎ」が行われたことを示す。なお、この資料は、右側に図示した体部破片の裏側に位置するものと考えられるため、鳳凰は2対描かれているようである。72も壺の可能性のある資料である。

褐釉陶器・焼締陶器（第13図84、第14図）

84は外面に透明な薄い褐釉の掛かる陶器で壺もしくは瓶と推定され、内面にも薄い釉が施釉される。85は褐釉陶器の壺で横方向に貼り付けられた耳の間にも縦方向の耳がつけられており、六耳壺もしくは五耳壺と推定される。黒に近い黒褐色の釉が施釉されているが内面は無釉であり、全体に著しい二次被熱が認められる。肩の部分に「五」と判読できる文字が施釉後にヘラ書きされる。86は黒に近い黒褐色の釉が内外に施釉されている四耳壺である。この他、図示していないが、胎土および釉調、器面調整から別個体と推定される胴部破片が2個体分存在する。88は器高が50cm程度に復元される大型の壺である。著しく二次被熱したものを多く含む多数の破片が



第22图 SX210出土遺物実測图12 (1/4)



第23图 SX210出土遗物实测图13 (1/4)

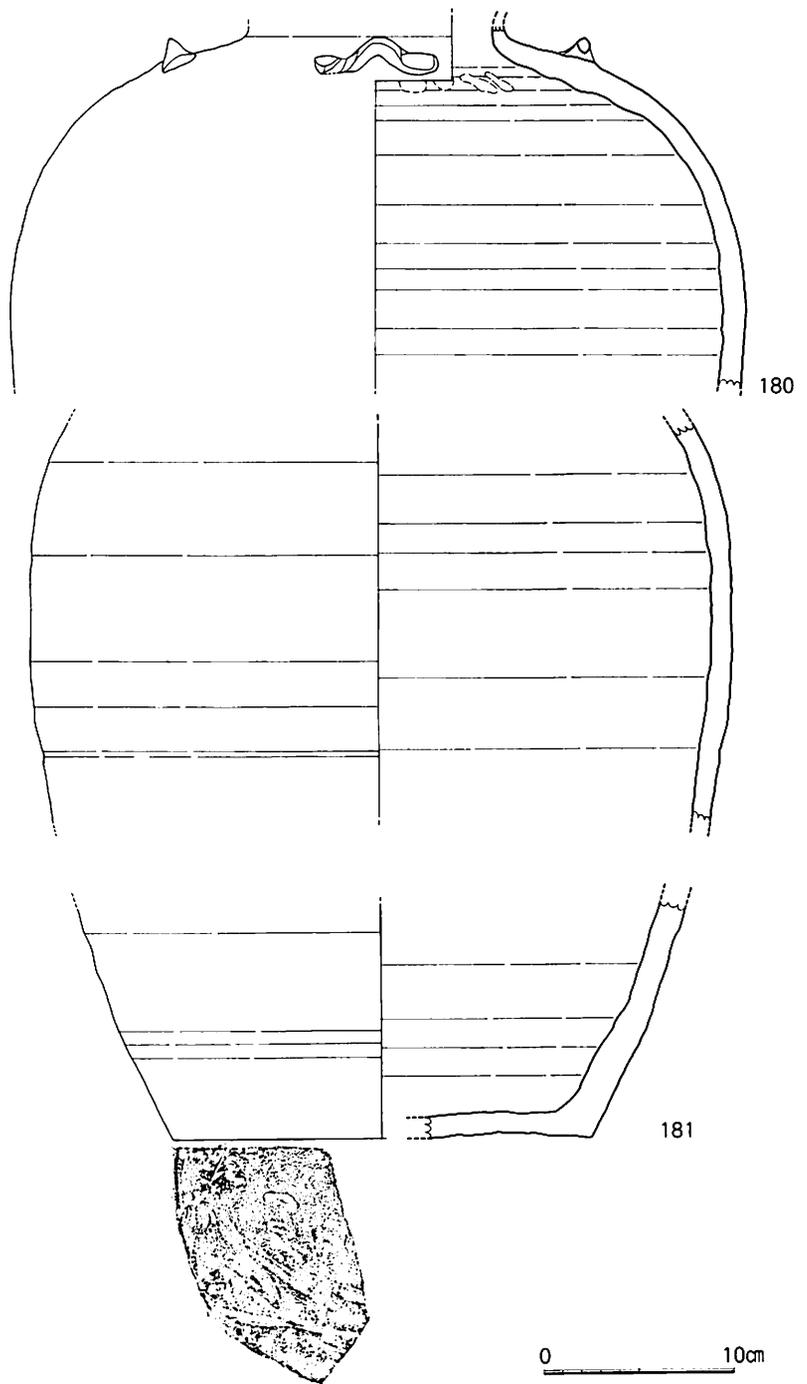
あるが1個体分と考えられる。胎土は多くの砂粒を含む粗いもので、84~86とは明確に異なる。黒に近い黒褐色~茶褐色の釉が外面に施釉されるが、底部と内面は無釉である。体部の上部にはっきりとした稜が作り出されている。肩部には輪状に釉着痕が廻っている。愛媛県湯築城跡ならびに1600年にフィリピンで沈没したサンディエゴ号積載品に類品が認められる⁽⁷⁾。87は焼締陶器播鉢である。口縁部が内湾し、端部が内側に向けた玉縁状となる特徴的な形態のもので、共伴する備前焼のものよりも器壁が薄く、11本を単位とする播り目が施されている。胎土は砂粒等の粒子をほとんど含まない極めて緻密なものである。国産の焼締陶器の中に類例が無いことから中国産のものではないかと考えられる⁽⁸⁾。県内では他に、府内城・城下町跡第12次調査で、戦国時代の溝遺構から出土した1点（口縁部破片）のみ類例がある⁽⁹⁾。

華南三彩陶器（第15図~第18図）

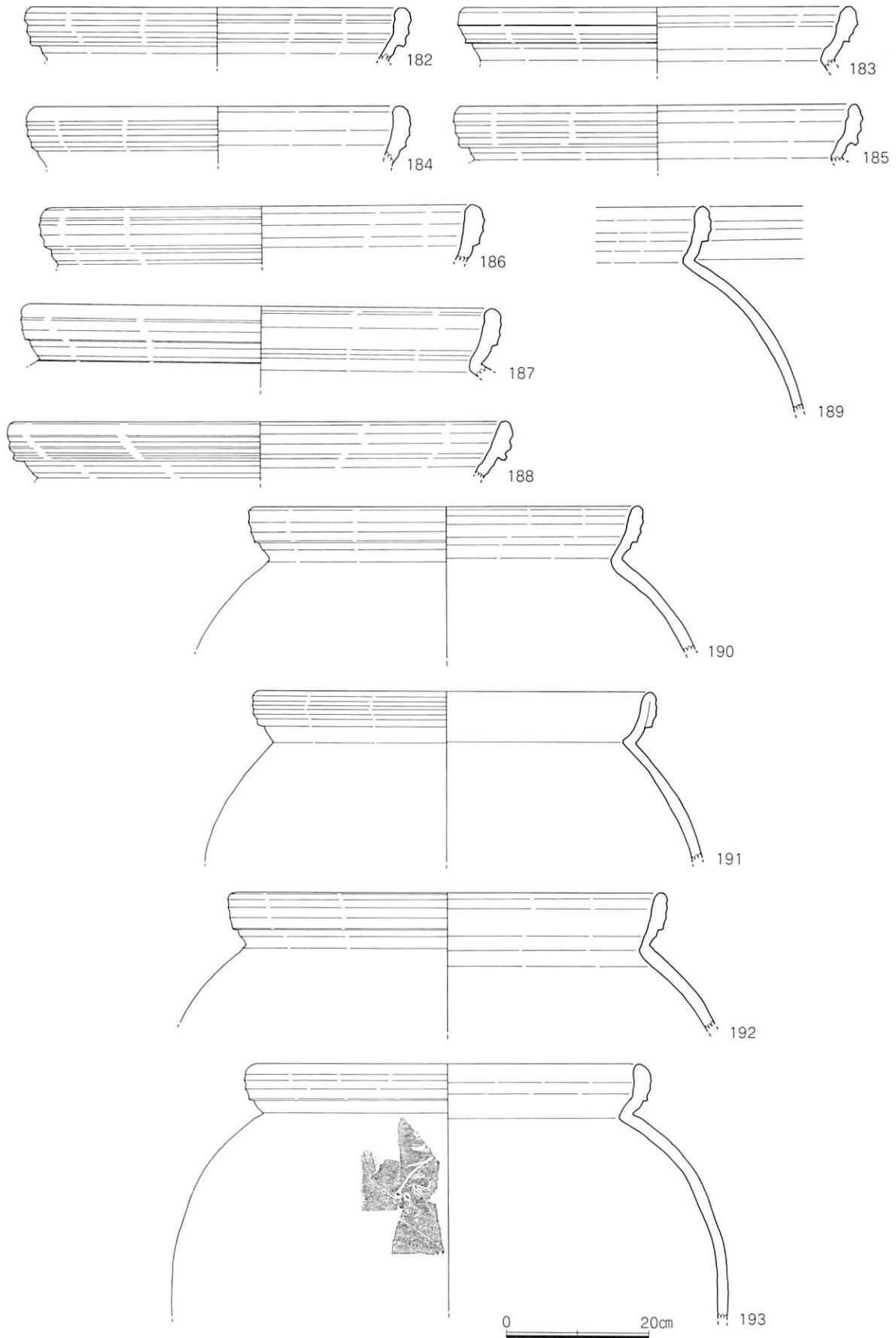
壺が3個体と蓋が1個体出土している。他に器種不明の破片が1点ある。壺には施文方法により2タイプが存在する。一つは、文様部分を別に型で成形して貼り付ける貼花タイプのもので、いわゆる

「トラディスカント壺」と称されるものである。体部に牡丹唐草文、底部付近には蓮弁状の文様が施されているが、一部剥落しており、施文手法を如実に示している。底部はほぼ平底で全面に施釉されている。肩部には縦方向の耳が付く。外面に三彩が施釉されているが、口縁部付近を除く内面には薄い褐釉が施されており、底部外面は無釉である。胎土は中国産褐釉陶器（84~86）と類似している。多くは激しい二次被熱により、釉が失われたり、変色している。

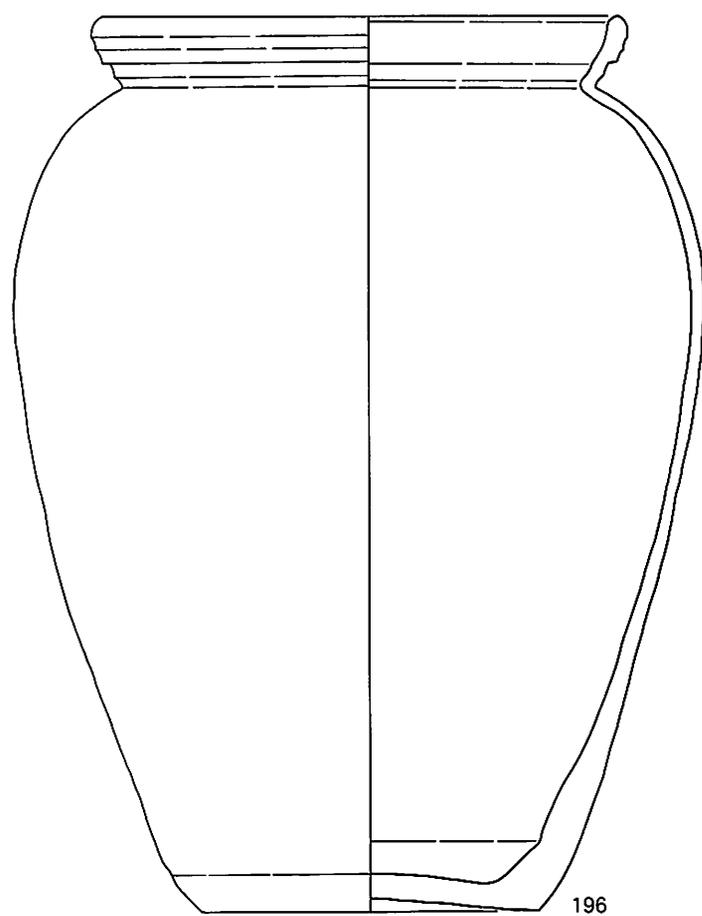
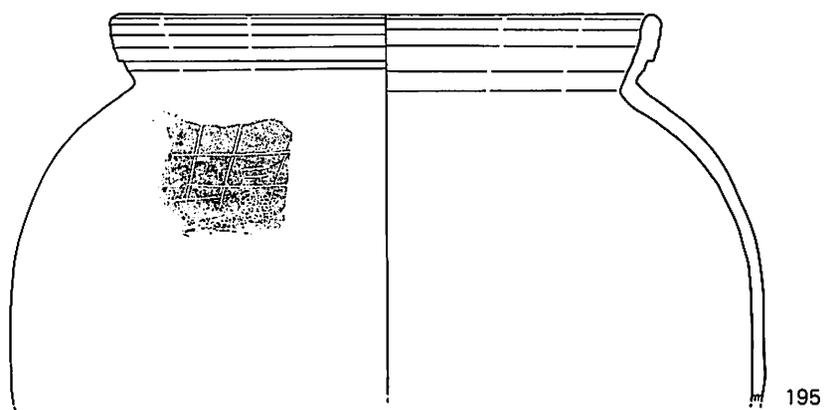
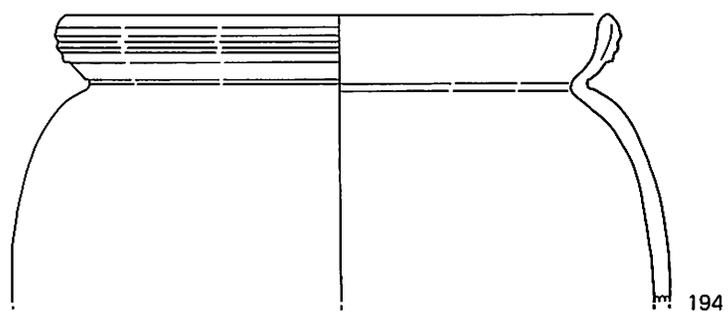
89は壺の蓋と考えられるものである。外面に文様が貼り付けられてはいないが、外面に釉が蓮弁状に付着している部分があり、本来文様が貼り付けられていたものが剥離したものととらえている⁽¹⁰⁾。90はトラディスカン



第24図 SX210出土遺物実測図14 (1/4)

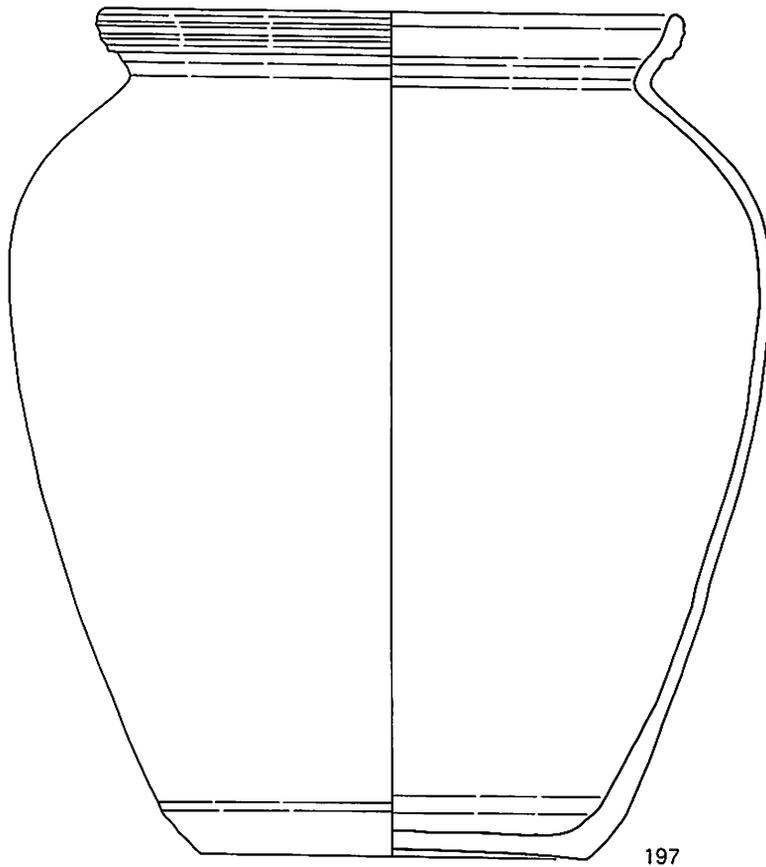


第25图 SX210出土遺物実測図15 (1/8)

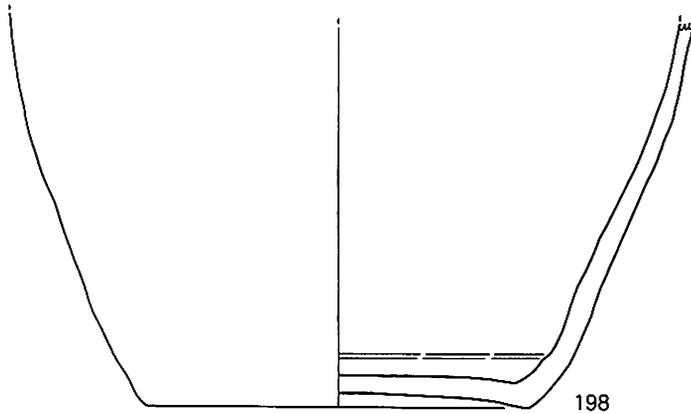


0 20cm

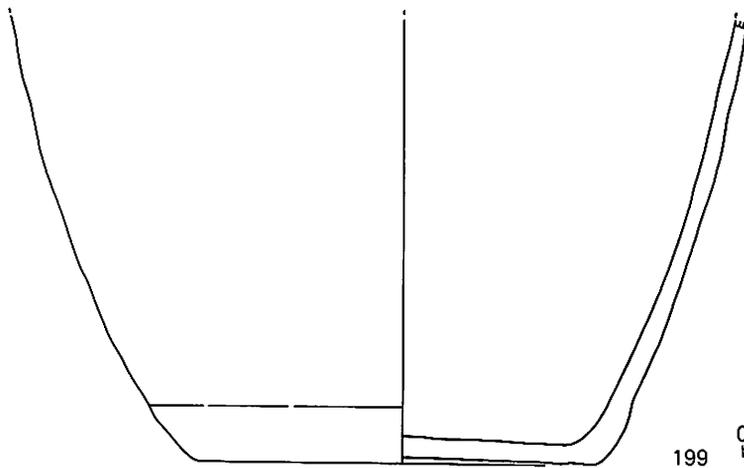
第26図 SX210出土遺物実測図16 (1/8)



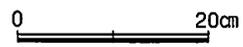
197



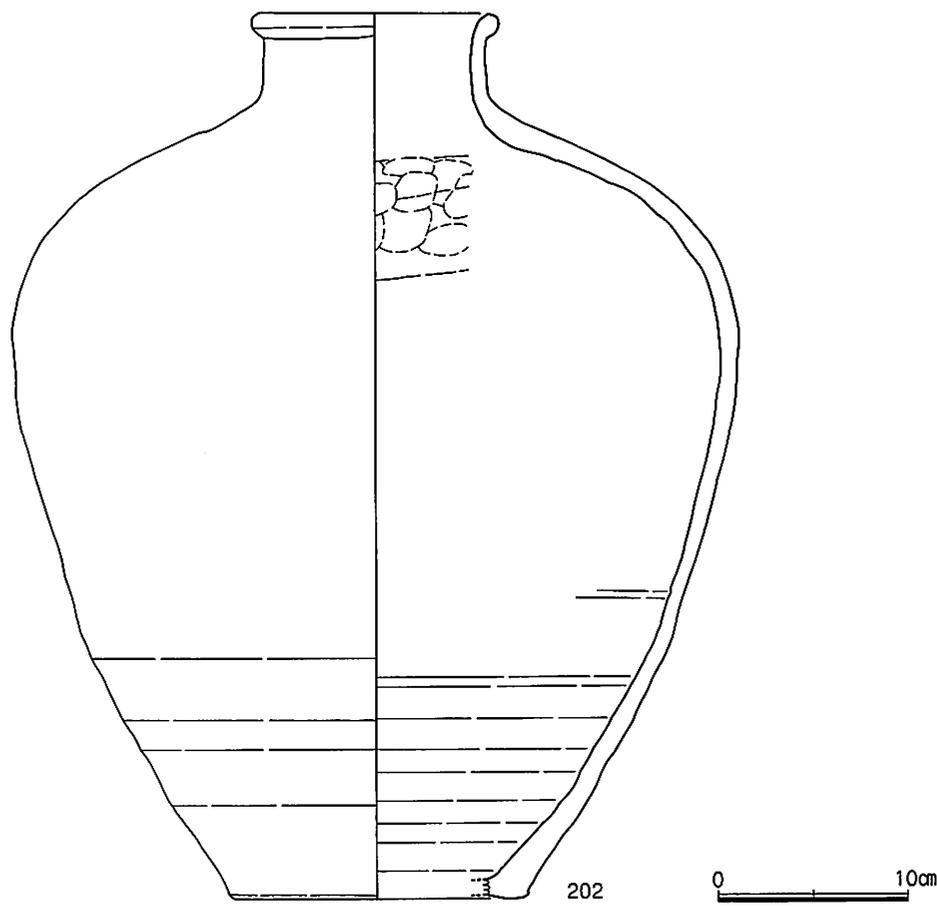
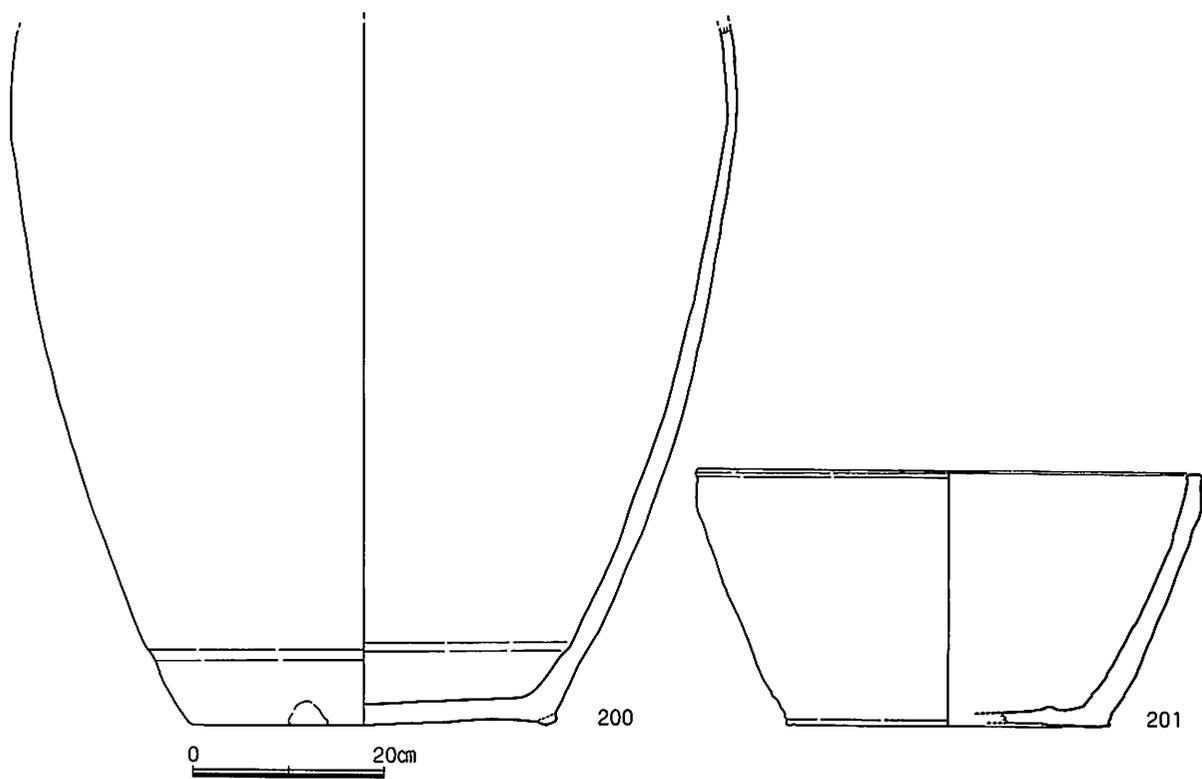
198



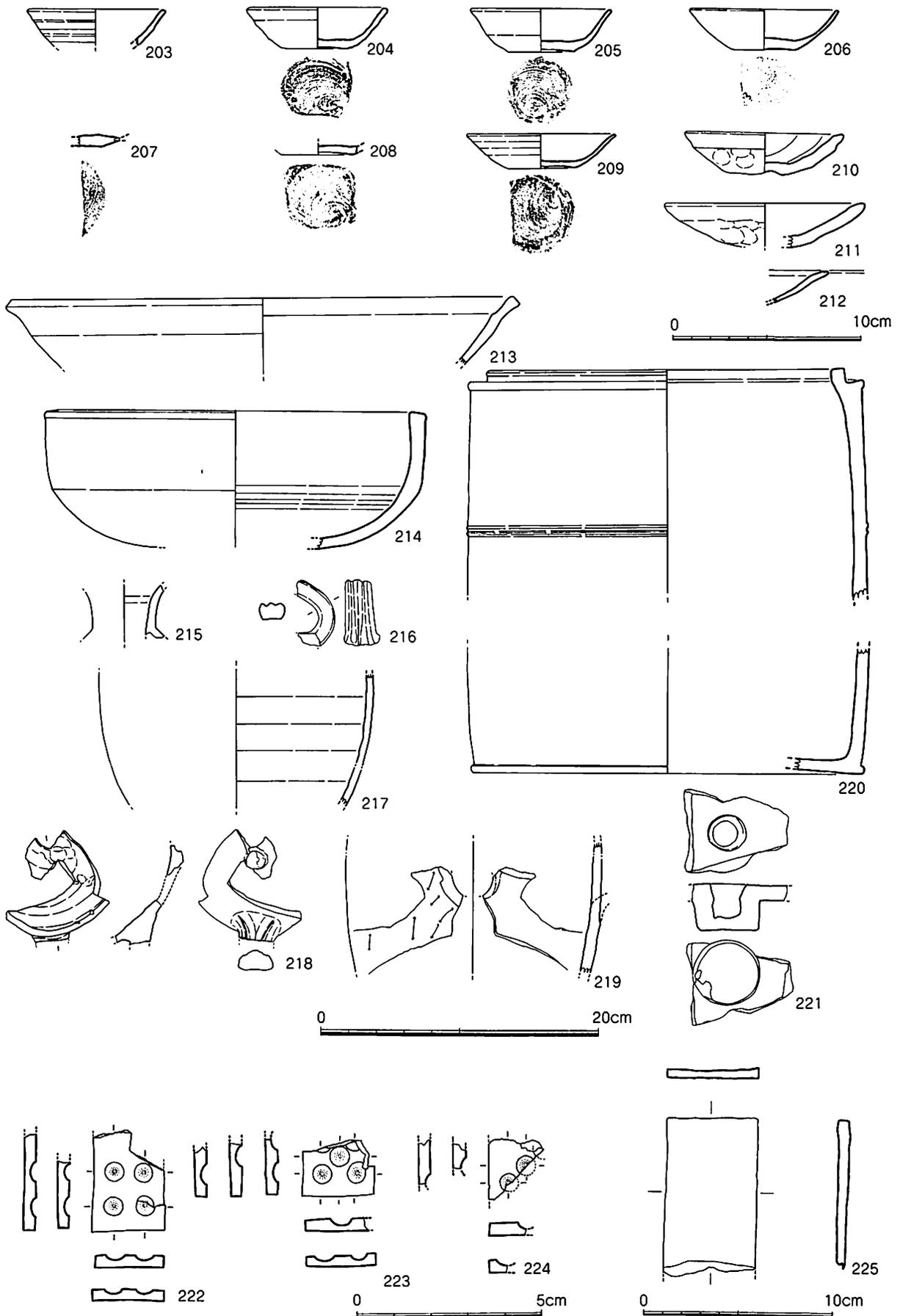
199



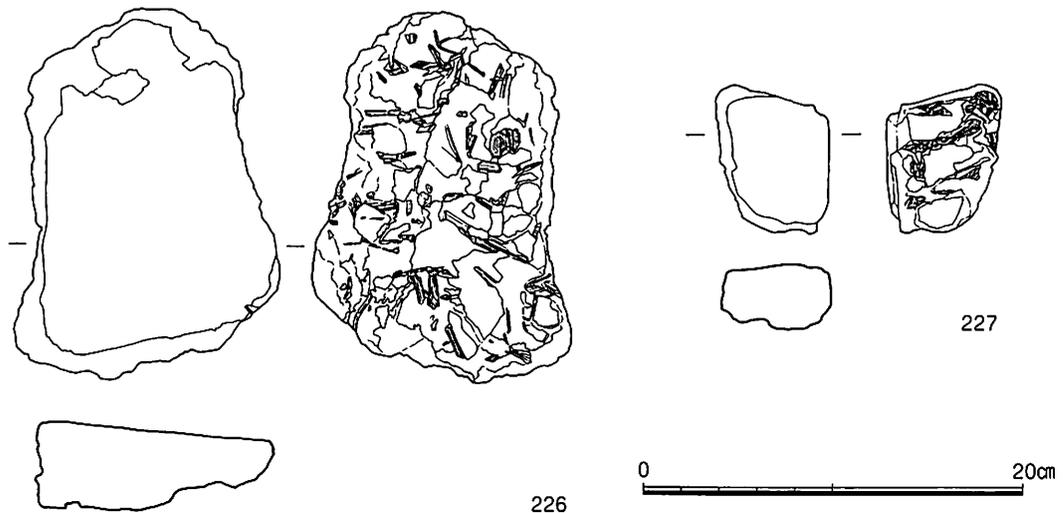
第27図 SX210出土遺物実測図17 (1/8)



第28図 SX210出土遺物実測図18 (200 : 1/8, 201・202 : 1/4)



第29图 SX210出土遗物实测图19 (203~212·225:1/3, 213~221:1/4, 222~224:2/3)



第30図 SX210出土遺物実測図20 (1/4)

ト壺の口縁部と判断されるものであり、口径は13.4cmに復元される。91～93は肩部で、縦方向に貼り付けられていた耳が折損あるいは剥離している。92から、頸部は直径16.7cmに復元される。95は耳で、外面に2本の凹線が施文される。94・96は頸部破片である。97～107は肩部から体部上半にかけての破片である。108・109・112は体部中央ないしやや下の花文の部分に当たる。110・111は体部下半の破片である。113は底部の破片で、平底と考えられ、底部外面にまで全て施釉される。蓮弁状の文様は一部剥離しているが、剥離痕からみると、蓮弁の各单位は密に接して貼り付けられていたことがわかる。

この資料の全形を推定する手がかりとしてはサンディエゴ号積載品のほか、内外の美術館所蔵品などいくつかの伝世品がある⁽¹¹⁾。このうち、大分市郊外に所在する勝光寺に伝世された資料の実測図をもとに今回の出土資料の破片を当てはめると第17図のようになる⁽¹²⁾。この資料は、口径12cm、胴部最大径28.2cm、底径15.6cmを測る五耳壺であり、体部には2対の花を含む唐草文が貼り付けられている。今回の出土資料を当てはめると、唐草の向きや葉・花の位置が異なっていることが観察され、また花の形についても微妙に異なっているようである。しかし底部蓮弁が密に施文される点や口縁部・底部径が類似しており、基本的には同様の器形に復元できるものと推定される。

114～120は113までとは別個体と判断される資料である。これらは全て二次被熱がきわめて著しく、表面が泡立ち、黒灰色を呈している。わずかに114には黄緑色の釉が確認できるため、三彩もしくは緑釉が施釉されていた可能性が推定される。文様はいずれも貼付けによっていることが確認され、トラディスカント壺と共通する。しかし、115・116や118・119にみられる花文の形態は、先述したSX210出土のものや勝光寺伝世品をはじめ、これまでに確認されているトラディスカント壺のいずれとも異なるものであるため、別の貼花タイプの三彩壺もしくは彩釉陶器壺である可能性が高いと判断される⁽¹³⁾。

121～133は文様を沈線により表現する刻花タイプの壺で、壺1個体分が出土している。複数個体になる可能性も否定はできない。口径14.7cm、底径15cmに復元されるものであり、胴部最大径は体部の上半にあり、肩の張る器形で、基本的にトラディスカント壺に類似するものである。底部は上げ底である。外面に三彩が施釉されているが底部外面は無釉である。内面には部分的に薄い褐釉が掛けられている。胎土は中国産褐釉陶器(84～86)と共通する。多くの破片は二次被熱により原色を失っており、顔料中の銅が還元されたため、赤銅色を呈するものも多くみられる。外面には蓮華状の花文が描かれており、この他に唐草文も描かれている。底部の外面には二

重に描かれた沈線により、蓮弁が表現されている。なお、130は蓮華文の描かれた肩部破片の一部がSE120から出土しており、SX210 (S210-6) から出土した口縁部破片と接合した。134は、別個体の器種不明品である。

2) 朝鮮王朝産陶磁器 (第13図74~83)

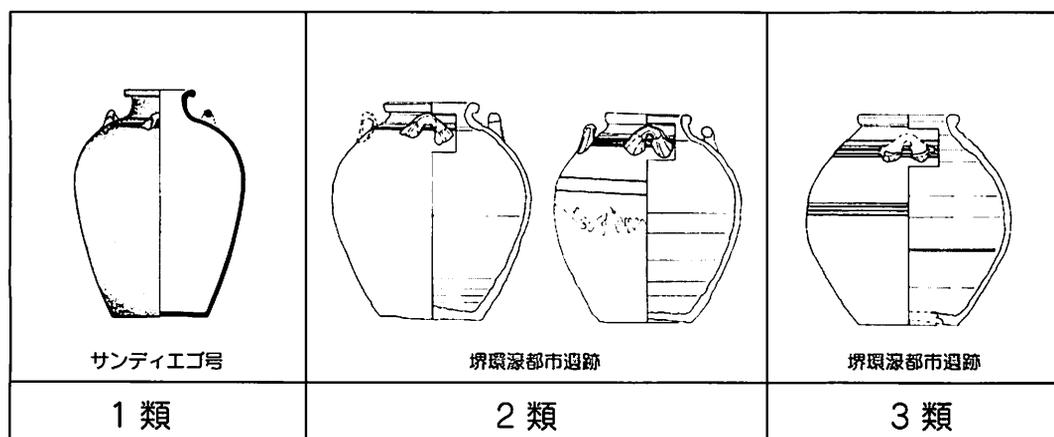
74・75は内外面に緑褐色釉が施釉された陶器で、75は舟徳利、74は瓶もしくは壺と推定される。この他、図示していないが、いずれかのもとのみられる内面に同心円タタキを有する体部破片が多数存在する。85~92は白磁皿である。高く削りだされた高台を有し、見込に顕著な段を有する特徴的な形態で、口縁部が比較的直線的に開くもの(78)、口縁部が直線的に開き、端部が内湾するもの(76)と口縁部全体が大きく内湾するもの(80)とがある。胎土はいずれも「磁器」と呼称することが躊躇される陶器質のものである。また、砂目、胎土目いずれの目跡も認められない。81を除いて、畳付けには細かい砂が付着している。76は最も白色に近いもので、貫入の著しい透明釉がかかる。一部は焼成不良のため、胎土が赤褐色に発色している。77・79・81・82は底部破片である。いずれも断面台形状の削り出し高台を有し、灰色の胎土で貫入の著しい透明釉が掛かる。78は灰白色~淡灰褐色の胎土に貫入の著しい透明釉のかかるもので一部は二次被熱により器面がすりガラス状に荒れている。見込には直径5~8cmの不整形の無釉部があるが、融着痕などはみられないため、目跡ではないと考えられる。89は高台の幅が狭く長方形を呈する。焼成不良のため淡褐色に発色する胎土に透明釉が掛けられている。

これらは、日本各地から出土した資料で、これまでいわゆる朝鮮王朝(李朝)白磁として認識されているものや粉青沙器あるいは雑釉陶器と呼ばれる朝鮮王朝産陶器類のいずれとも異なる属性を持つものである。しかし管見の限りでは、韓国の広州窯址出土の朝鮮王朝白磁の中に、器形においてきわめて類似するものが見いだされる⁽¹⁴⁾。しかし、官窯生産品は磁胎のものであることから、官窯そのもので生産されたものではないと考えられる。

3) タイ産陶器 (第19図・第20図)

タイ産四耳壺が多数出土しており、口縁部破片も含めると少なくとも11個体分あるものと推定される。これらは、器形により以下の3類型に大別される(第31図)。

- 1類 頸部と胴部が明瞭に区別され、肩の張る器形である。口縁部は、直立気味の頸部から強く外反し、断面はやや角張った「コ」の字状を呈する。頸部と肩部の境界には1状の凸線が廻る。ケズリの痕跡が著しい細身の把手が貼り付けられる。底部は平底となる。サンディエゴ号積載品に類似したものがみられる⁽¹⁵⁾。
- 2類 全形の判明するものが無いが、堺環濠都市出土品のⅡ型式ないしⅢ型式⁽¹⁶⁾に相当するものが想定される。すなわち、頸部が非常に短く、胴部との境界が不明瞭であり、胴部最大径が体部中央よりやや上部にくる器形ではないかと考えられる。頸部と肩部の境界には1条の凸線が廻る。口縁部は玉縁状に近い形となる。
- 3類 頸部と胴部の境界が判別できないもので、胴部最大径が体部中央付近にあって肩の張り出しが無い樽状の



第31図 タイ産陶器四耳壺形態分類図

器形となる。口縁部は玉縁状、底部は上げ底である。堺環濠都市遺跡出土品のⅣ型式⁽¹⁷⁾に相当する。

これらには明瞭に褐色の釉がかかるものと、黄褐色に発色する泥状を呈するものがかかっているものがあるが、後者は焼成が甘いことが原因で釉が十分融解していないためであることも考えられ、基本的に全て施釉陶器と考えてよいようである。

137・138は、1類である。赤褐色に発色する胎土で外面には白泥状の釉が粗く掛けられ、黄褐色に発色している。頸部直下には低い凸線が削りだされており、その下側には137では4本、138では4本の凹線が施文される。体部下半は工具による削り痕がみられ、無釉である。138の体部内面は成形に伴う粘土紐巻上げの痕跡が著しい。両者とも削りの痕跡が著しい細身の耳がつけられる。138の底部内面にも白泥状のものが粗く掛けられているが外面と異なり、白色に発色している。136は1類と判断されるもので、体部と底部は接合しないが、色調・調整により同一個体と推定されたものである。胎土は備前焼に類似し、堅緻に焼き締まっている。体部内面には回転による横方向の削り痕が著しい。外面上半部には緑褐色～褐色の釉がかかる。肩部には4条の凹線が施文される。出土した破片が一部であるため、耳の痕跡は確認できなかった。135は3類で、体部と底部は接合しないが、胎土・色調・調整により同一個体と推定されたものである。体部外面には緑褐色に発色する釉がかかる。胎土は136と類似し、備前焼に似て堅緻に焼き締まったものである。口縁部は断面楕円形状を呈する玉縁である。耳は1類に比べ大きく、馬蹄形となる。口縁部下に凸帯が削り出され、その下に凹線が2ヶ所に分かれた帯状に施文される。上方の凹線帯は4本、下方の凹線帯は3本が認められる。内面は無釉で回転による横方向の削り痕が著しい。体部外面下半は工具による横方向の削り調整が観察される。143は1類の口縁部と判断される。頸部の下に凸帯が削りだされ、わずかに黄褐色に発色する不透明釉が確認される。胎土は堅緻に焼き締まったものである。144は同一個体と推定される口縁部破片と胴部破片である。口縁部は口径の復元が困難であるが丸い玉縁を呈するものである。胴部破片と接合しないが器形のカーブを考えると1類ほどの肩の張りは無いが、3類のように頸部と胴部の境界が無くはない形と考えられ、2類に分類されると思われる。139・140・141は2類もしくは3類の口縁部資料である。いずれも胎土は焼締陶器状である。139は外面に黄褐色の泥状の釉がかかる。140は無釉である。142は2類と考えられ、外面に褐釉がかかるもので、口縁部上端全体に融着痕がみられ、焼成の際重ね焼を行った可能性が考えられる。151は1類と推定されるもので、図示した資料は接合しないが同一個体と判断されるものである。外面には黄褐色の泥状の釉がかかり、内面は粘土巻き上げ痕が著しい。胎土は137・138に類似する赤褐色に発色する。152は2類もしくは3類の胴部破片資料で、外面には4条の凹線が施文され、黄褐色の泥状の釉がかかる。139と152は、胎土や釉が類似しており、同一個体の可能性が高い。145～150は四耳壺の耳で、145～149は1類、150は2類もしくは3類のものと考えられる。

4) ミャンマー産陶器 (第21図)

153は黒釉陶器三耳壺である。口縁部は直立する頸部から大きく外反し、端部には凹線を施す。点状あるいは線状の白色緻密土を器面に貼り付けて文様としており、肩部から頸部にかけて横方向の線と列点を巡らし、肩部から胴部にかけては、縦方向の2本線の間に列点をおく帯状の文様を一定の間隔で巡らせている。縦方向の文様帯は6本が残存しているが、全体では8～9本であったものと推定される。胴部中央付近に横方向に白線が貼り付けられており、これよりも上のみ文様が施文されるらしい。文様貼付後、わずかに緑があった黒釉を掛けているが、底部付近は無釉となっている。胴部のカーブから推定して器高を復元したため、確証は十分といえないが59cm程度の器高があるものと思われる。胎土には、特徴的な暗紫色の砂粒を多量に含んでいる。国内では博多遺跡群での出土資料が知られているほか⁽¹⁸⁾、サンディエゴ号の積載品に類似のものが認められる⁽¹⁹⁾。このようなミャンマー産の大型の壺は「マルタバン壺」と称され、東南アジアやインド洋沿岸の地域やエジプトで多くの資料が知られているらしい⁽²⁰⁾。これらの資料は博多遺跡群出土資料と同じく、耳が板状で横方向に貼り付けられているのに対し、本資料は断面円形状の耳が縦方向に付けられている点で違いがある。

5) ベトナム産陶器 (第21図)

154は焼締長胴瓶である。外面黄灰褐色、内面灰褐色を呈し、胎土は灰色緻密で、黒色粒子を多く含み、内面にはロクロ目が密に残っている。ベトナム中部で生産されたものと考えられる。口縁部は、出土遺構が不明な検出時出土のもので二次被熱が著しいが同一個体の可能性が高いと判断したものである。

6) 国産陶器・土器

備前 (第22図～第28図)

155～166は備前焼播鉢である。155と156、157と158、163と164、165と166はそれぞれ同一個体の可能性がある。内面の摺目が十分確認できるものうちでは160のみが交差する摺目を持たないものであり、他は全て交差する摺目を有する。したがって、大半の資料が乗岡編年近世1期bに比定され、天正初年(1573年頃)以降に位置付けられる。167は徳利で、「1」字状の記号が頸部にヘラ書きされる。168は小型の四耳壺で169・170は同様の器種の胴部および底部であろう。171は葉研の破片である。研面は摩滅が著しい。172は鉢の底部か。174～179は水屋甕である。少なくとも6個体あるものと思われるが、口縁部に明瞭な蓋受け部を作り出すものは認められない。180は四耳壺である。173が同器種の口縁部と考えられる。181は四耳壺もしくは水屋甕で同一個体と判断される胴部と底部である。底部には判読不明な記号状のものがヘラ書きされる。182～200は大甕である。口縁部形態では全て乗岡編年近世1期bと並行する時期に比定されるものである。195にはヘラ記号が認められ、193には「二石入」と判読できる刻印がヘラ書きされる。196～200が、底部が埋置されていた甕である。接合関係が確認できていないが胎土や色調等から判断して、口縁部が接合していない198の口縁部は191、199の口縁部は194と推定される。

信楽 (第28図)

201は鉢で建水と思われる。胎土に石英粒を多く含む。202は壺で、茶壺に使用されたものであろう。肩の大きく張る特徴的な器形で、内面には巻き上げにより成形された痕跡が著しい。内外の表面には白色の噴き出しがみられる。生産窯における編年では16世紀後葉に相当するものと思われる⁽²¹⁾。

土器 (第29図)

203～209はロクロ成形の土師器小皿である。口径は7.3cm～7.8cm、底径は3.4～3.6cmである。内外面に回転によるナデ調整が施される。胎土には石英粒等の粒子がほとんど含まれず、京都系土師器と似通ったきめ細かい胎土である。口縁部のナデが強くと体部下半に稜が形成されるものもある。こうした特徴を有する土師器は中世府内町はもちろん、県内においても知られていないため、いずれかの地域から搬入されたものと推定される。210～212は手づくねにより成形されるいわゆる京都系土師器皿である。212は、在地で製作されたと考えられる同種の資料とは異なり、器壁が非常に薄く胎土は粒子をほとんど含まない精良なもので、色調もより白色に近い。搬入品である可能性が考えられるが、SK235出土資料(第75図3)と同一個体の可能性もある。

213は土師質土器の鍋である。214は瓦質土器の鉢で、大半の破片が明褐色を呈するが、一部の破片は黒灰色であることから本来は黒灰色を呈する瓦質土器であり、二次被熱により変色したものであると思われる。220は瓦質土器の鉢で、これと同一個体と思われる表採資料(221)が存在することから円筒形の脚部がつくものと推定される。215～219は器種不明の瓦質土器で、2ないし3個体あるものと考えられる。214と同様、二次被熱により本来の色調を失い、215以外は灰褐色～褐色を呈する。215・217は胎土や器厚が類似していることから同一個体の可能性があり、壺もしくは瓶状のものであるかもしれない。216はこれに伴う耳であることが考えられる。218は器種不明の底部、もしくは壺などの肩部と考えられるものである。前者とすれば獣脚のような脚部がつくものと考えられる。219は注口が取り付けられていたのではないかと考えられるもので、器表面はきわめて密に磨かれている。

7) 骨角製品 (第29図222～224)

222～224は骨もしくは角で作られた製品であり、薄い板状に加工された素材の片面に直径5～5.5mmのほぼ円

形の凹みを彫り込んだものである。彫り込みは、222では4箇所、223では5箇所、224では3箇所認められ、サイコロの目と同じような定型的な配列が取られている。いずれも二次被熱が著しい。222は幅が2.0cm、長さが2.7cm以上であり、平面形が長方形を呈する札状であった可能性が高く、何らかの遊具の一種であると考えられる。中世大友府内町跡第14次調査では類似した形状の骨角製品が出土しているが⁽²²⁾、管見の限り国内で報告された例は他に無い。しかし、韓国の民俗資料で「骨牌」と称される遊具が非常に類似しているようであり⁽²³⁾、関連が注目される。

8) 石製品 (第29図)

225は赤紫色を呈する粘板岩もしくは輝緑凝灰岩製の硯で、いわゆる「赤間硯」の可能性はある。石の節理に沿って破損して、硯面が失われている。

9) その他 (第30図)

226・227は建物の土壁と考えられるものである。短く切られた藁状の植物痕が多くみられ、スサが多く混ぜられていたものと考えられる。図中左面側は滑らかに仕上げられており、壁の表面側であったと推定される。二次被熱により橙褐色を呈する。同様の資料は、SX210を構成する各遺構から、焼土塊とともに多量に出土している。

SX074 (第32図)

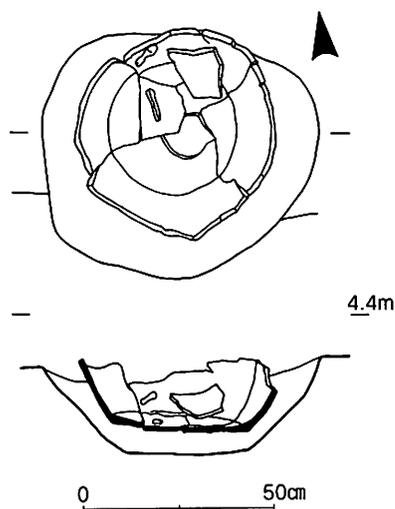
調査区北東部で検出された遺構で、備前焼大甕底部が土坑内に埋置されていたものである。掘り方は長軸70cm、短軸65cmと円形に近く、検出面からの最大深は約25cmである。大甕の内部の埋土は炭化物や木片を含む焼土であった。SX074はSX210の西側の列を延長した線に近い場所に位置し、埋土の状況も酷似している上、甕底面のレベルもSX210のなかで最も高いS210-3とほぼ同じ標高約4.1mであることから、SX210と強い関連性が示唆され、同一建物内に設置された施設として同時期に使用されていたことも想定される。しかし埋土内からは遺物が少量しか出土しておらず、SX210のように最終的に火災処理に使われた状況は窺えない。

出土遺物 (第34図)

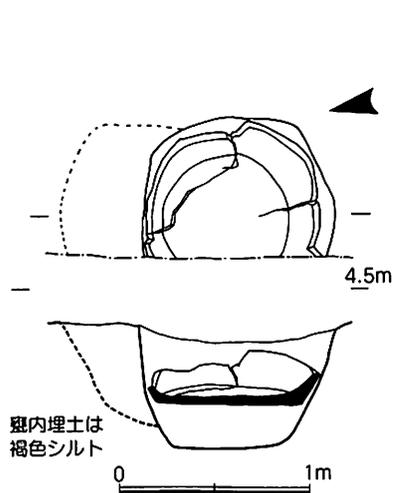
第34図は、埋設されていた備前焼大甕の底部である。このほか、土師器小片、青花小片、備前焼小片が出土しているが図示できなかった。

SX194 (第33図)

調査区西端で検出された遺構で備前焼大甕底部を埋設していたものである。SK188を切って掘り込まれてお



第32図 SX074平面・断面図 (1/20)

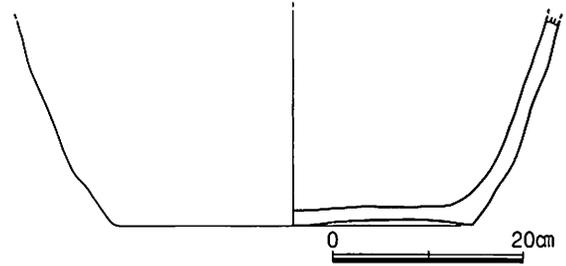


第33図 SX194平面・断面図 (1/20)

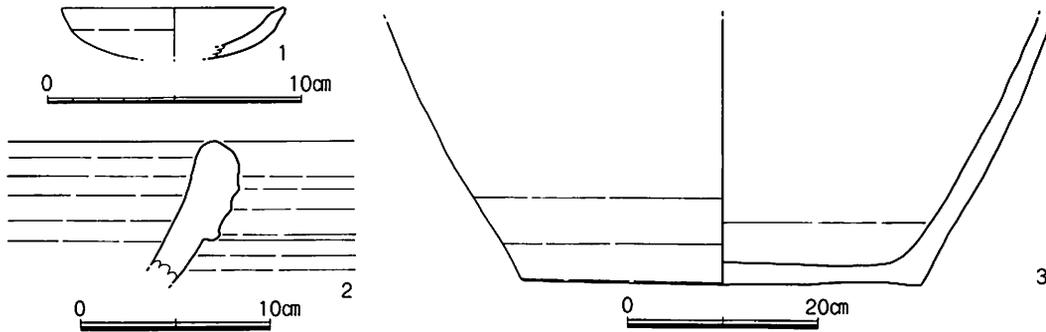
り、堀り方は推定で直径約50cmの円形状、検出面からの最大深は33cmである。他の大甕埋設遺構SX210、SX074と異なり、焼土を殆ど含まない土により埋められていた。

出土遺物（第35図）

1は京都系土師器小皿、2は備前焼大甕の口縁部破片である。3は埋置されていた備前焼大甕底部であるが、2が3と同一個体であるかどうかは不明である。



第34図 SX074出土遺物実測図（1/8）



第35図 SX194出土遺物実測図（1：1/3，2：1/4，3：1/8）

井戸跡（SE）

SE120（第36図）

調査区北端部で検出された井戸跡である。井戸の堀り方は、長軸2.5m+α、短軸2.5mの隅丸形状で、深さは3.05mを測る。最下部の湧水点付近には瓦質の円筒形井筒が2段残存していた。これよりも上位には井筒が残っておらず、井戸廃絶の際抜き取られたものと推定されるが、現存する2個体以外の個体と判断できる瓦質井筒片が出土していないことから、上位の井筒が同様の瓦質井筒を用いていたかどうかはわからない。最下段の井筒上面には完形の備前焼小壺、瓦質風炉片等が置かれており、その後埋め戻されていることから、井戸の廃絶と埋め戻しにあたっては何らかの儀礼行為が行われたものと推定される。また、出土した華南三彩壺片（第18図121）はSX210出土遺物と接合関係を有しており、SX210と同時期に機能し廃絶したことを窺わせるものである。

出土遺物（第37図）

1・2は青花の皿E群である。3は備前焼の小壺で、口縁端部がわずかに欠けているのみでほぼ完形のものである。4は褐釉陶器四耳壺である。5は備前焼水屋甕。6～9は備前焼大甕の口縁部破片で、SX210で出土しているものと同一型式に分類されるものである。この他胴部破片があるが復元には至らなかった。10は備前焼播鉢で、内面に交差する摺目を有する乗岡分類の近世1期bに位置づけられるものである。11はタイ産の陶器四耳壺とみられる口縁部破片である。内外面に薄い褐釉が掛かり、頸部には削出の突帯がみられる。12は瓦質土器の風炉であり口縁端部内外面と焚き口部の内外面は面取りされる。13・14は瓦質の井筒で14が最下段、13が2段目のものである。14の口径・底径は58cm、13はこれよりもわずかに小さい。いずれも粘土帯の巻き上げにより成形され、外面は板状工具によりハケ目状の調整が施される。

この他、華南三彩壺（刻花）片が3点出土している。このうち2点はSX210出土の破片と接合したものであり（第18図121）、1点はこれと同一個体と考えられる肩部破片（第18図126）である。

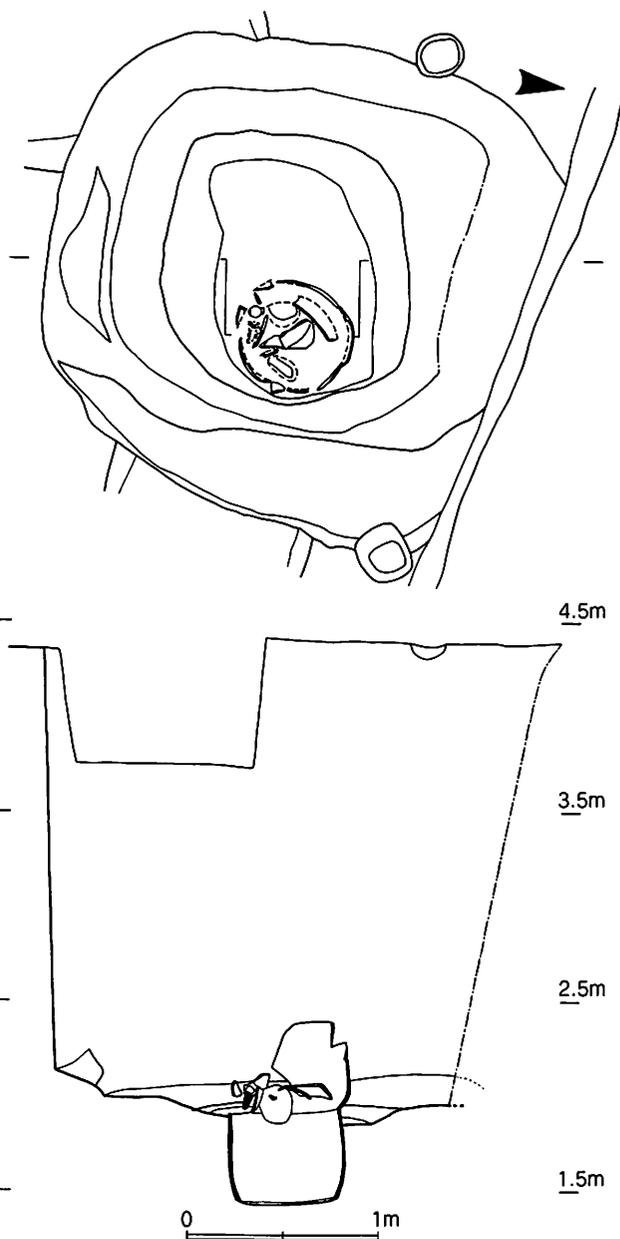
SE206 (第38図)

調査区北東部で検出された井戸で、掘り方の直径は約2m、検出面からの最大深は約2.6mをはかり、最深部の標高は1.6mである。SE213を切っており、SK073・SX074に切られている。土層断面では井筒の痕跡が明瞭に残り、その直径が50~60cmであったことを推定できる。おそらく結桶を使用していたと思われるが完全に腐朽しており、痕跡が残っていたのみであった。井筒内下底部あるいはウラゴメ土下部の土層のグライ化が弱いが、これは井戸使用時に比べ現在の地下水位が下がってしまったためとも考えられる。

出土遺物は全て井筒検出のため掘り下げを行った際出土したものであり、土層図に示す土層よりも上位で出土したものである。これらから判断すると、比較的古相の京都系土師器が出土していることから、この井戸の廃絶年代は16世紀中葉以降と推定される。

出土遺物 (第39図)

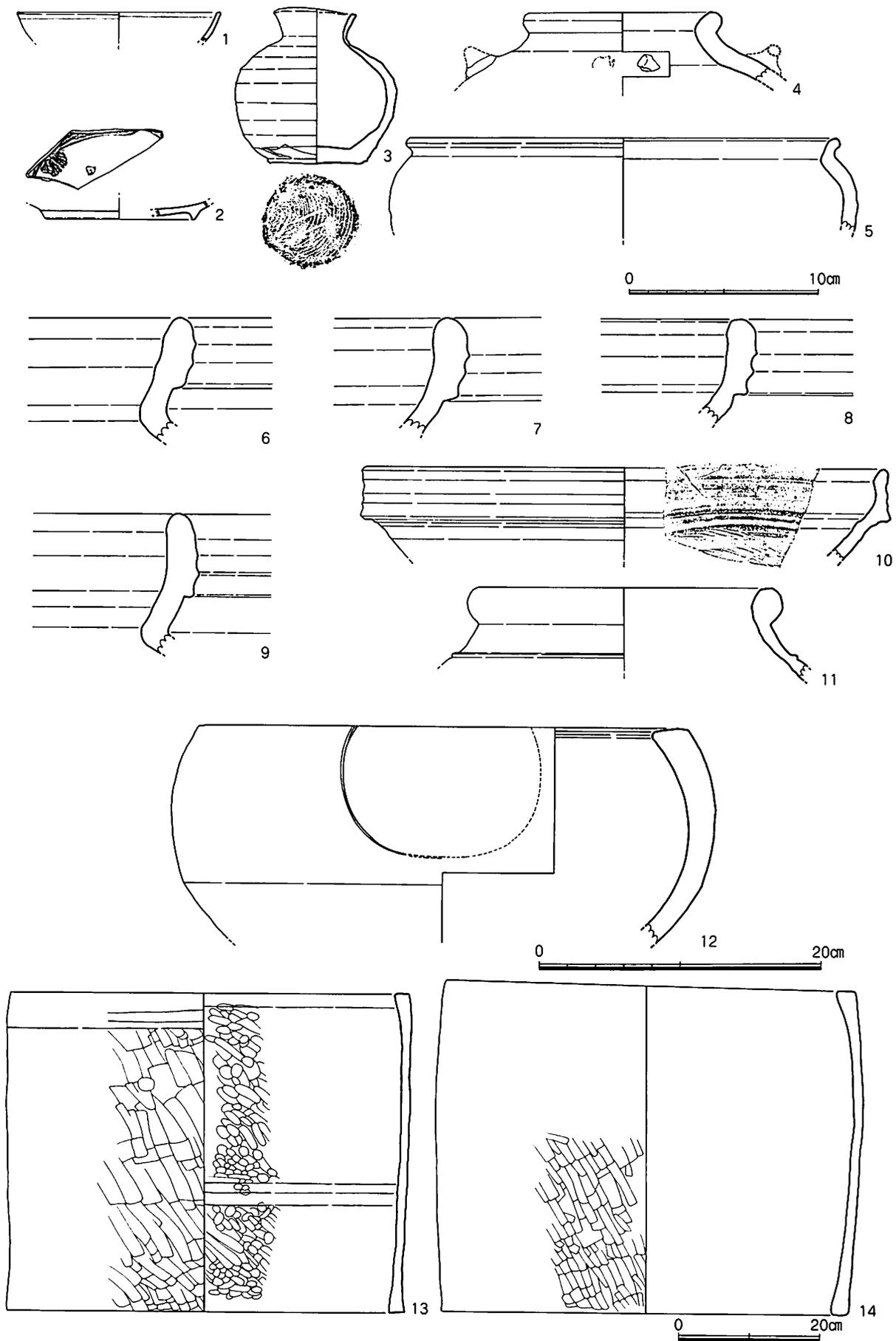
1は畿内産と推定される緑釉陶器碗の口縁部である。2は白磁皿、3は青磁碗底部で、見込に刻花文を施文するものである。4は青花皿で見込みに十字文を施す皿B1群である。5は小壺等の蓋と考えられるもので外面に薄い褐釉を施す陶器である。胎土はきわめて緻密で砂粒等の粒子を含まない。中国産と考えられる焼締陶器と胎土や焼成が類似しており、本資料も中国産ではないかと思われる。6は青白磁梅瓶の胴部破片で、櫛状の施文具により渦巻き文を施すものである。7・8は京都系土師器で、塩地編年1期に位置づけられる古相のものであろう。9は手づくね成形の小皿で、京都系土師器の中で最も小型の器種である。10は底部糸切りの土師器小皿である。



第36図 SE120平面・断面図 (1/40)

SE211 (第40図)

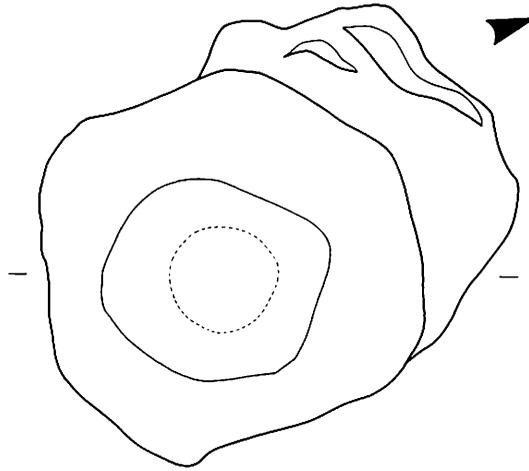
調査区北東隅で検出された井戸である。掘り方は直径3m程度と推定されるが、壁面沿いで検出されたため、一部を発掘したにとどまる。検出面からの深さ約2.2m(標高2.25m)で推定直径約50cmの井筒痕跡を確認したが、調査が危険になったためこれ以上の掘り下げを断念した。埋土の3層~8層は基本的に井戸廃絶時に井筒を抜き取った跡埋め戻した土とみられ、9層は井筒のうらごめと推定される。遺物は僅少であるが全て3層~8層からのものであり、これらの中に京都系土師器が含まれることから、遺構の廃絶時期は16世紀中葉以降と推定される。



第37图 SE120出土遗物实测图 (1~5 : 1/3, 6~12 : 1/4, 13·14 : 1/8)

出土遺物（第41図）

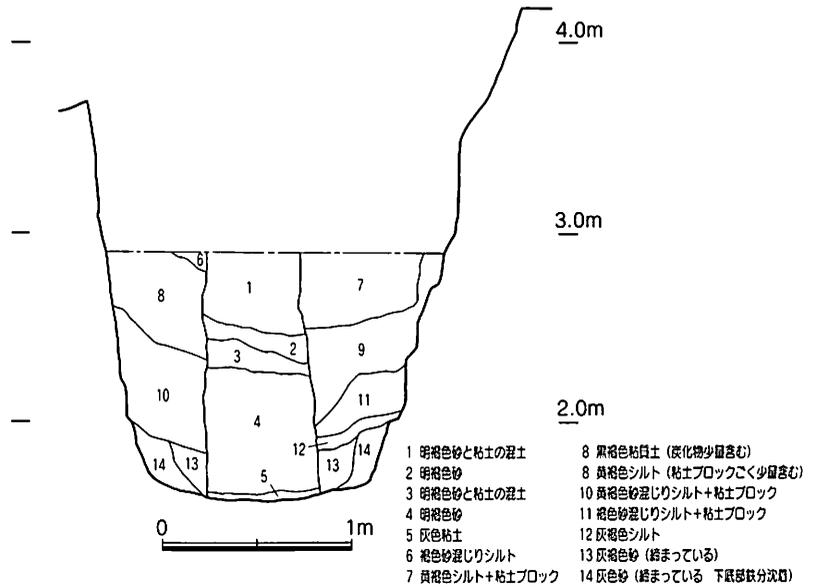
1は器種の不明な陶器で、粘土板による体部に脚が貼り付けられているようにも見えるものである。被熱により他の釉薬もしくはスラグ状の黒褐色物質が付着している。SX176から出土した遺物にも類似するものが見られる。（第81図13）2は白磁皿、3は京都系土師器皿である。



SE212（第42図）

調査区東端部で検出された遺構で、井戸と推定される遺構である。壁面にかかっているため全形は不明であるが、掘り方の直径は2m以上あるものと推定される。検出面から約1.4m（標高約3.0m）まで掘り下げたところで崩落の危険が生じたため、以下の掘り下げを行わなかった。

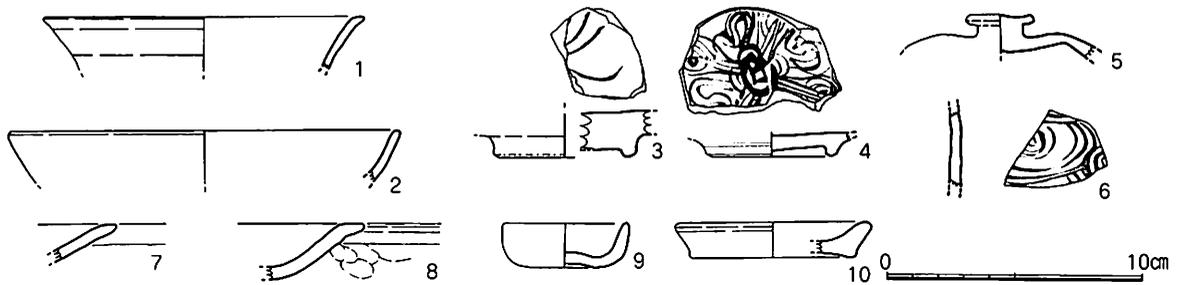
出土遺物は土師質土器の小片が出土しているのみである。



第38図 SE206平面・土層断面図（1/40）

SE213（第42図）

SE206及びSE212に切られている遺構で、井戸と推定されるものである。壁面沿いのため全形は不明であるが、検出された平面プランから推定すると、掘り方は4m近くある可能性が考えられる。検出面から約1.5m（標高約2.7m）まで掘り下げたところで安全面が懸念されたため、それ以下の掘り下げを行っていない。埋土からは底部系切りの土師器小片、鉄釘が出土しているのみで、時期の推定は困難であるが、京都系土師器が出土していない点を評価すれば、16世紀前半以前に位置づけられる可能性がある。



第39図 SE206出土遺物実測図（1/3）

土坑 (SK)

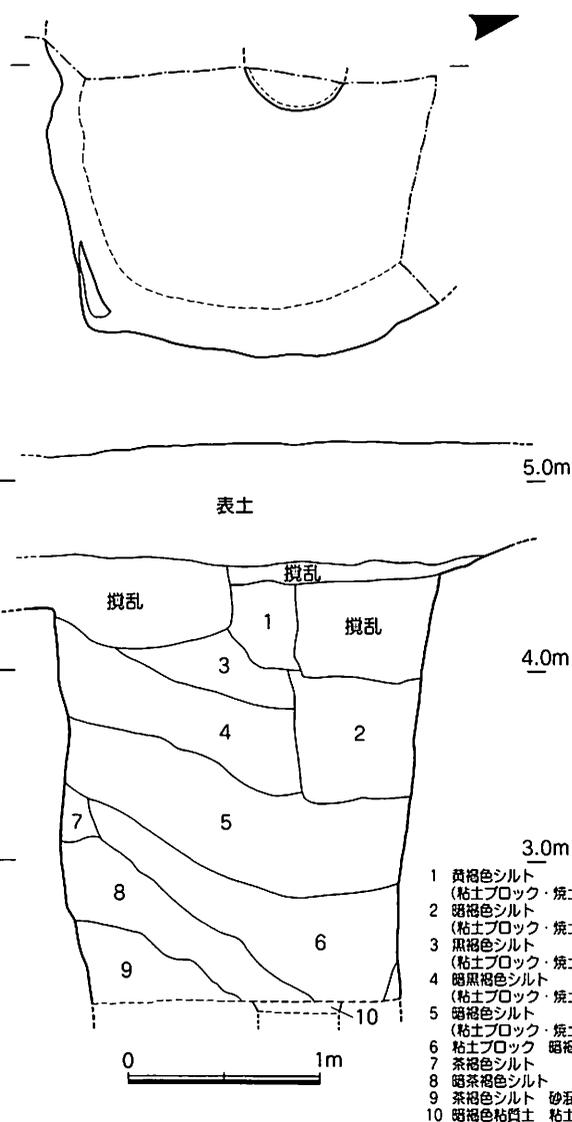
SK054 (第42図)

調査区南東部で検出された廃棄土坑と考えられる遺構である。壁面沿いにあるため全形を明らかにできないが、長軸約2.5m、短軸約0.6m、検出面からの深さは約80cmを測る。

出土遺物から、16世紀後半に埋積したと推定されるが、SX210等よりもやや遡る時期に位置づけられよう。

出土遺物 (第43図)

1は白磁皿、2は青花碗E群である。5は漳州窯系の青花皿で、器形の上では、景德鎮系の青花皿B群とC群の特徴を併せ持つ製品である。3・7～9は京都系土師器で概ね塩地編年2期に位置づけられるものであろう。6はロクロ成形の土師器坏である。4は9世紀頃に比定される緑釉陶器碗の底部で、畿内産のものと推定される。10は備前焼播鉢である。内面の摺り目はわずかに交差するのみであり、乗岡編年近世1a期に位置づけられる。



第40図 SE211平面・土層断面図 (1/40)

SK056・SK057(第42図)

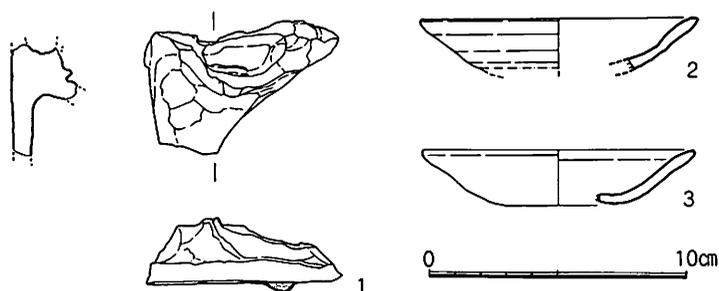
SK054の最上層に掘り込まれた浅い土坑であり、SK056→SK057の切り合い関係がある。SK057は焼土を多く含む土で埋積しておりSX210等と同時期に廃絶した可能性も考えられる。

SK056出土遺物(第44図)

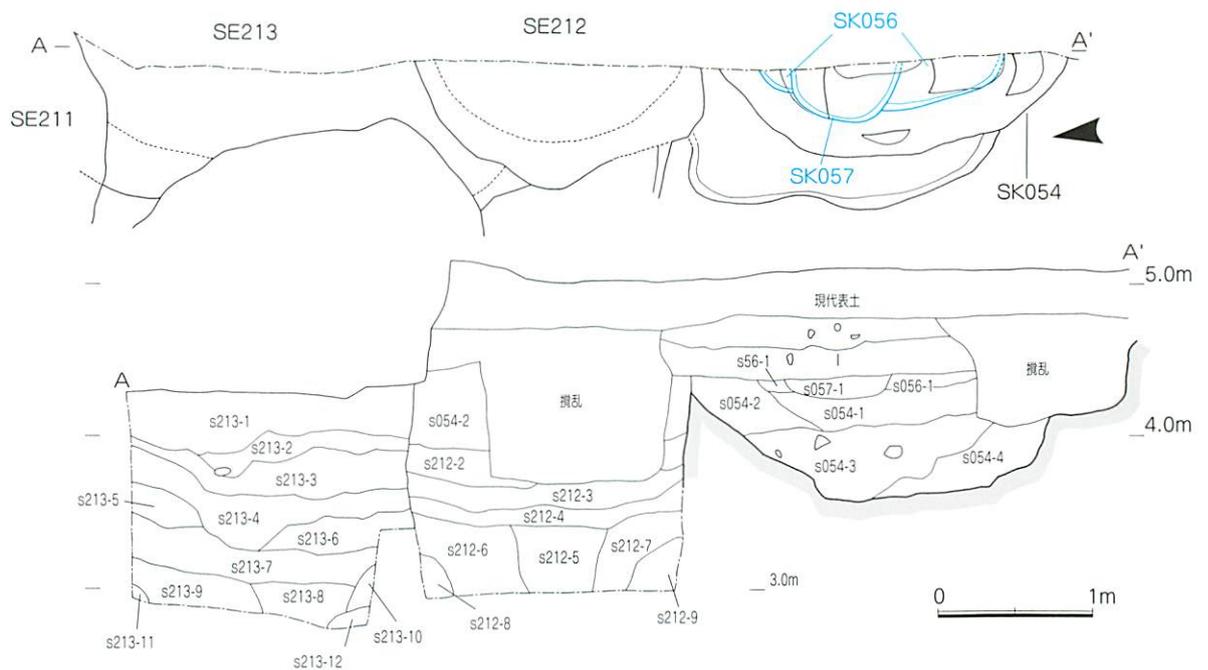
1は白磁もしくは青白磁皿で、内外面の鐏状の文様と口縁部の輪花は、いずれも成形後に工具により彫り込んだものである。2はロクロ成形の坏である。

SK057出土遺物 (第45図)

1は漳州窯系の青花皿で文様は内・外の圈線のみ確認できる。4は景德鎮系の青花皿である2～5は京都系土師器の坏であり、塩地編年2期に比定される。

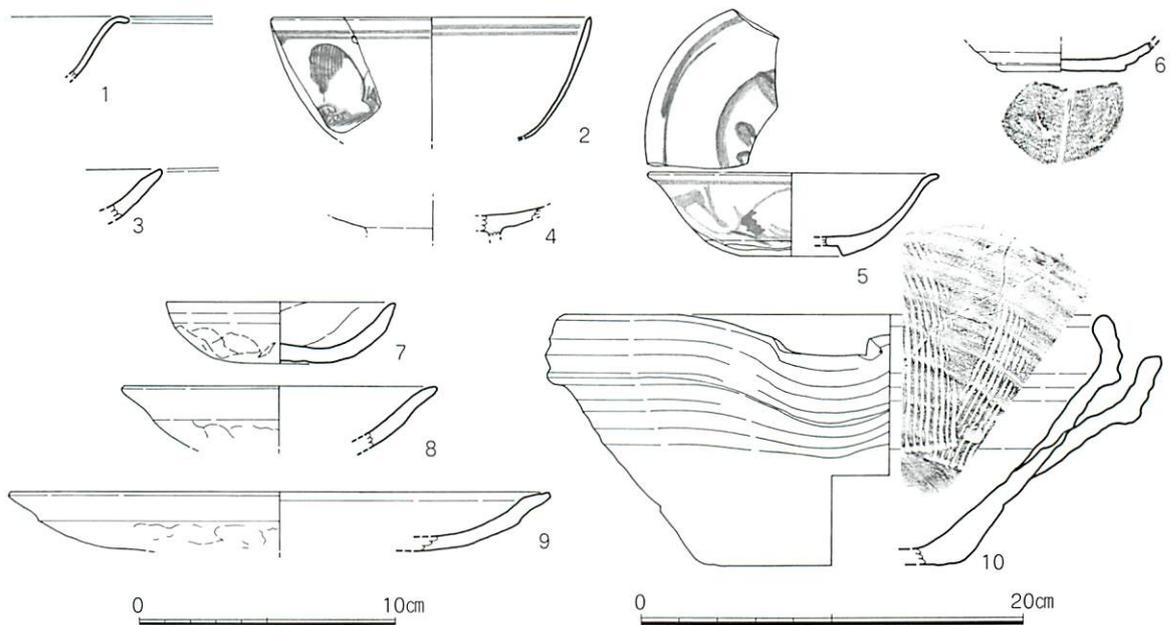


第41図 SE211出土遺物実測図 (1/3)

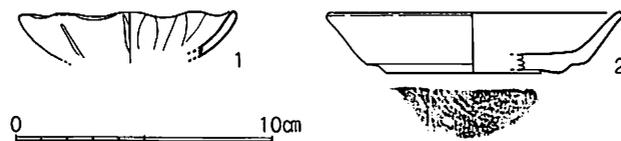


- | | | | |
|--------------------------------|--------------------------------|------------------------------------|-----------------------|
| s213-1 灰褐色シルト (炭化物少量含む) | s213-7 茶褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s212-1 茶褐色シルト (焼土少量含む。下部に粘土ブロック含む) | 0 旧表土 |
| s213-2 灰褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s213-8 灰褐色シルト (粘土ブロック少量含む) | s212-2 茶褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | 1 黒褐色シルト (焼土含む) |
| s213-3 灰茶褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s213-9 暗褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s212-3 茶褐色シルト (粘土ブロック含む) | s056-1 黒褐色シルト |
| s213-4 灰褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s213-10 暗褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s212-4 茶灰褐色砂質シルト (粘土ブロック含む) | s057-1 暗茶褐色シルト (焼土含む) |
| s213-5 暗褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s213-11 茶褐色シルト (粘土ブロック含む) | s212-5 暗褐色シルト (粘土ブロック含む) | s054-1 茶褐色粘質土 |
| s213-6 暗褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | s213-12 暗褐色シルト | s212-6 暗茶褐色シルト (粘土ブロックわずかに含む) | s054-2 黄褐色粘質土 |
| s213-9 灰茶褐色シルト (焼土・粘土ブロック少量含む) | | s212-7 灰褐色シルト (細かい粘土ブロックを含む) | s054-3 砂礫混じり暗褐色シルト |
| | | s212-8 暗褐色粘質土 (粘土ブロック含む) | s054-4 黒褐色シルト |
| | | s212-9 暗褐色シルト (粘土ブロック含む) | |

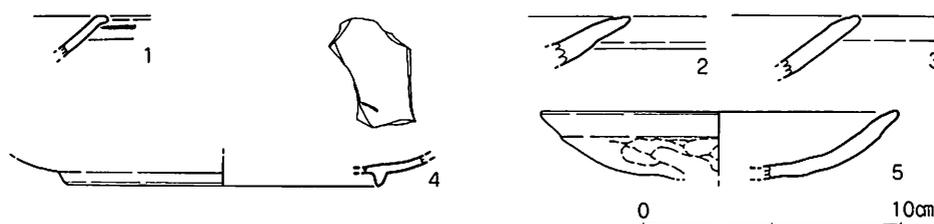
第42図 SE212、SE213、SK054、SK056、SK057平面・土層断面図 (1/50)



第43図 SK054出土遺物実測図 (1~9 : 1/3, 10 : 1/4)



第44図 SK056出土遺物実測図 (1/3)



第45図 SK057出土遺物実測図 (1/3)

SK025 (第46図)

調査区東南部で検出された廃棄土坑である。直径約1mの不正円形状を呈し、検出面からの最大深は約70cmを測る。SX210の基礎構造である可能性があるSX237を切って掘り込まれていることから、SX210と同時に存在した可能性もある。ただし、埋土は焼土を少量含む暗褐色土と灰褐色土である。埋土の下部からは10~15cmの礫が多数出土した。出土遺物から16世紀末に埋められたものと推定され、埋土は異なるがSX210と同時期に廃絶した可能性が考えられる。

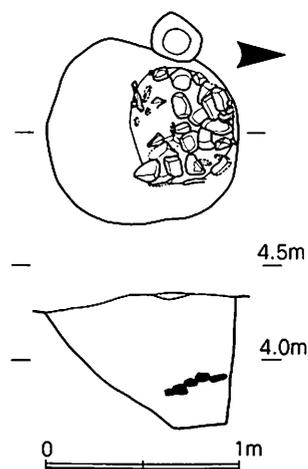
出土遺物 (第47図)

1は青磁盤の口縁部。2は青磁碗の底部で陶器質の胎土で焼成は不良である。全面施釉され、豊付にはモミガラ状の痕跡がみられる。

3は白磁皿、4は青花皿E群で、文様は圏線のみ確認できる。5は備前焼ではないかと考えられる焼締陶器である。おそらく壺の肩部~頸部で、直径2mm程の孔が穿たれた半円形の耳が貼り付けられている。

6~14は京都系土師器坏で、塩地編年1期~3期まで時間幅のあるものが混在しており、周辺遺構からの混入が考えられる。13は備前焼播鉢底部で、交差する摺り目を有する乗岡編年近世1期bに比定されるものである。

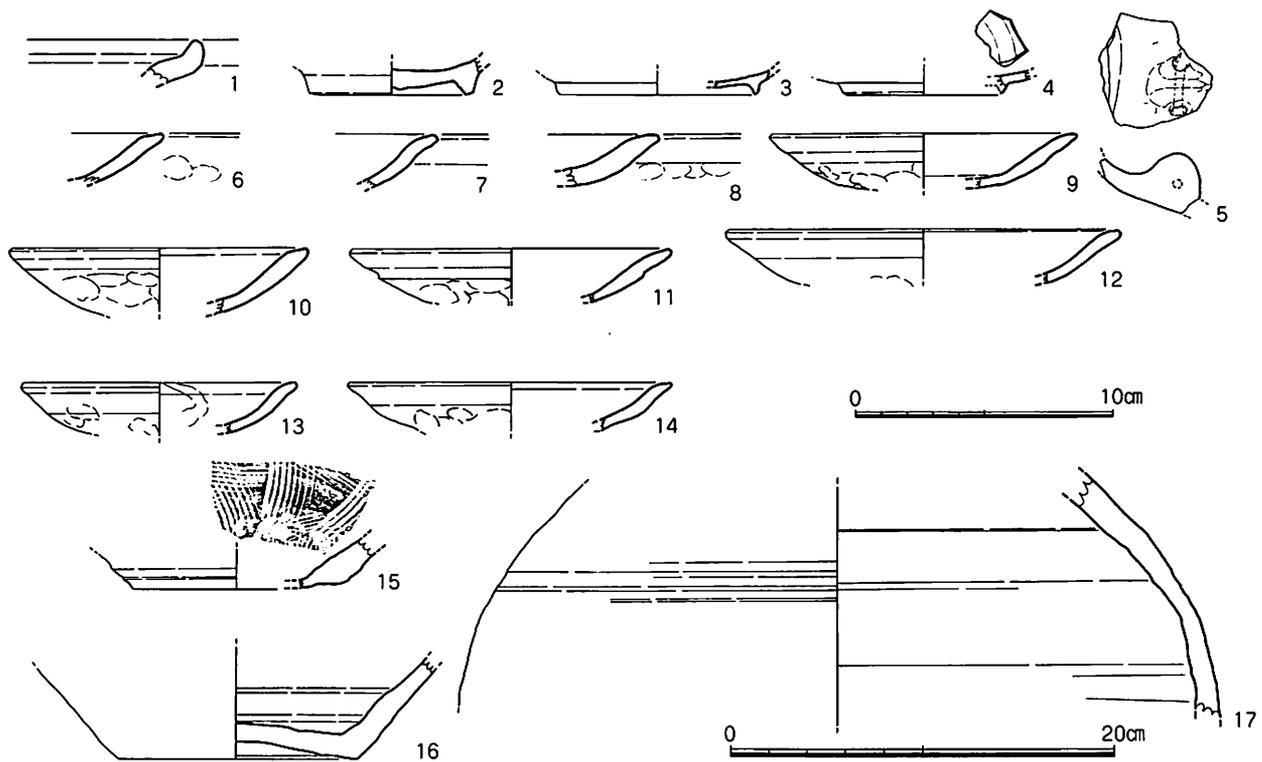
16は中国産褐釉陶器壺底部で、底部外面を除く内外面に茶褐色の釉が施釉される。上げ底状の底部には輪状に釉が付着していることから、焼成の際重ね焼きを行ったものと考えられる。17はタイ産の陶器壺である。外面には3~4条の凹線が認められる。黄白色の泥状となった釉が外面に掛かっており、焼成不良のため十分融解していないものと推定される。



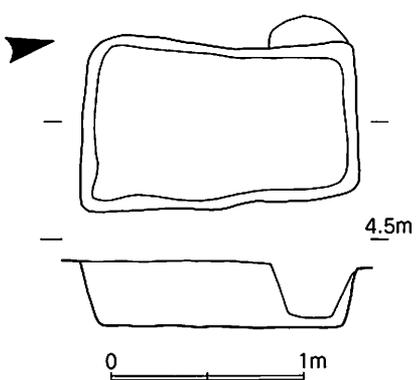
第46図 SK025平面・断面図 (1/40)

SK032 (第48図)

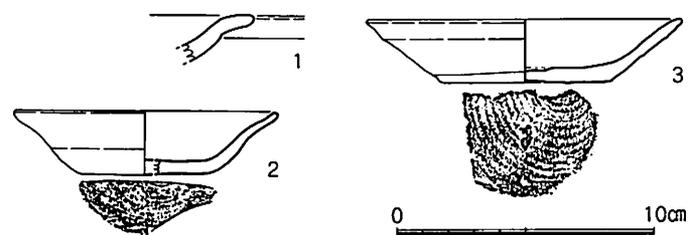
調査区東南部で検出された土坑である。平面プラン1.4m×0.9mの長方形で、検出面からの最大深は36cmである。SX237を切っており、その内部に掘り込まれていることから、SX210と同時に存在して、関連する遺構であった可能性も考えられる。ただ、埋土は少量の焼土を含む暗褐色シルト+灰褐色粘質土であるため、SX210のように火災にあった可能性を積極的に認めることはできない。出土遺物は僅少であるが、16世紀後半以降に廃絶したものと推定される。



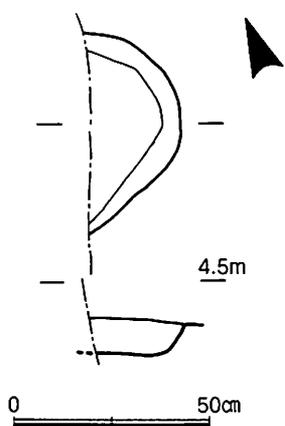
第47图 SK025出土遺物実測図 (1/3・1/4)



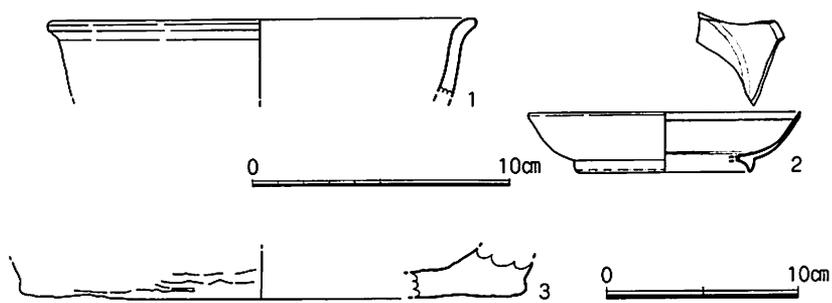
第48图 SK032平面・断面図 (1/40)



第49图 SK032出土遺物実測図 (1/3)



第50图 SK070平面・断面図 (1/20)



第51图 SK070出土遺物実測図 (1・2 : 1/3, 3 : 1/4)

出土遺物（第49図1～3）

1は京都系土師器坏で、塩地編年2期に比定される。2は備前焼と推定される焼締陶器の坏で、底部に糸切り痕が認められる。3はロクロ成形の土師器である。

SK070（第50図）

調査区中央部壁面沿いで検出された、浅い小土坑である。埋土は褐色のシルト質土である。

出土遺物（第51図）

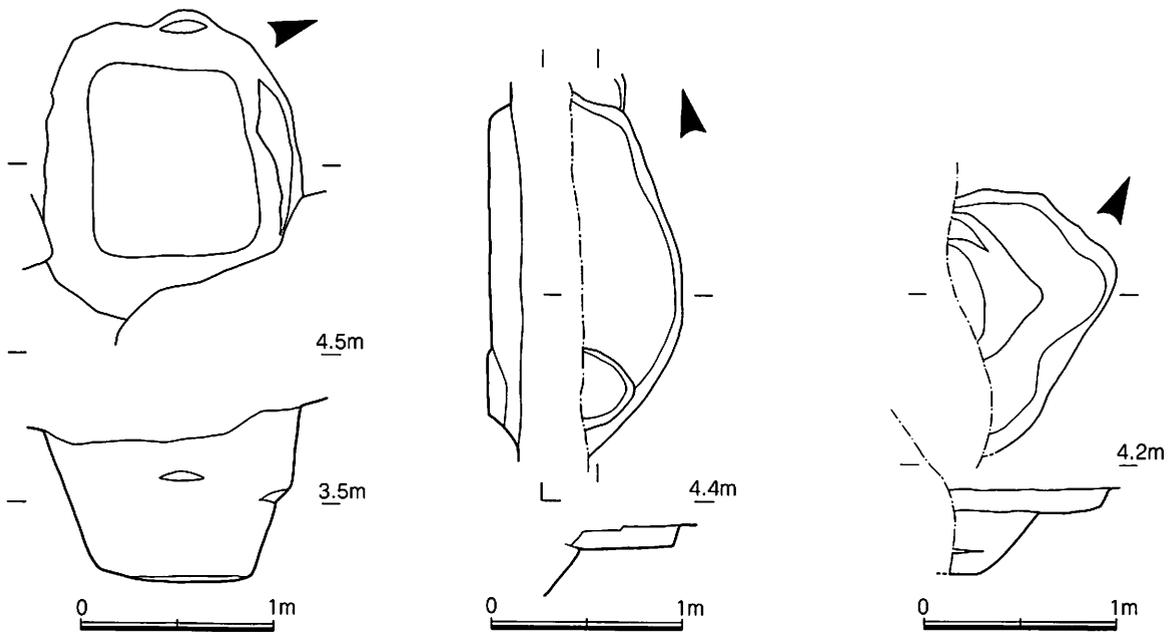
1は龍泉窯系の青磁碗である。2は内面に圈線のみが描かれた青花皿E群である。3はタイ産の陶器壺と推定されるもので、暗赤褐色に発色し、無釉である。

SK073（第52図）

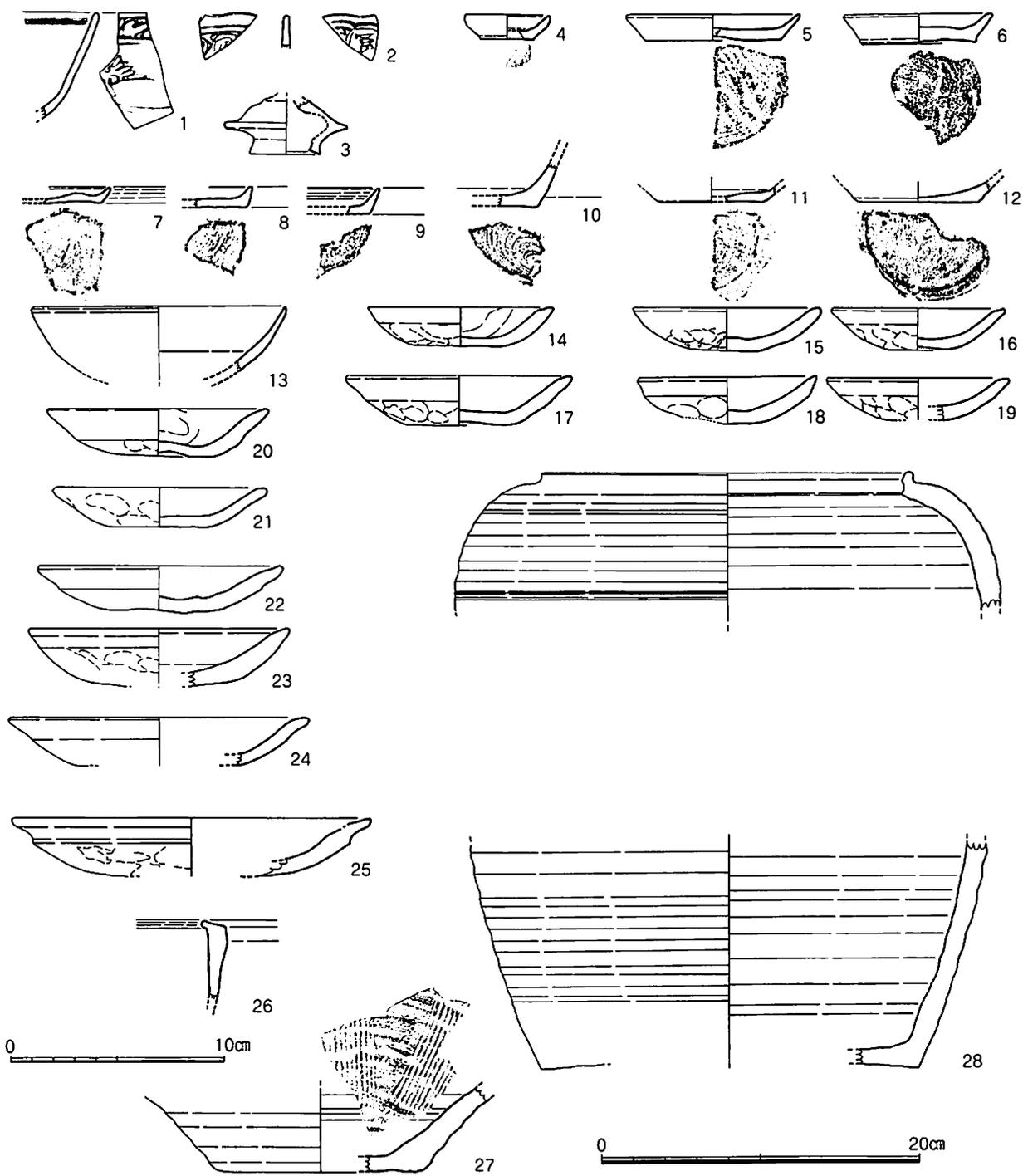
調査区西部で検出された廃棄土坑で、SE206を切っており、SX074に切られている。長軸1.55m、短軸1.35mの隅丸方形で、検出面からの最大深は90cmを測る。焼土を多く含む暗褐色土により埋められており、埋土の最上部には10～20cmの礫が多量に廃棄されていた。出土遺物より、16世紀後半に埋積したものと推定される。

出土遺物（第55図）

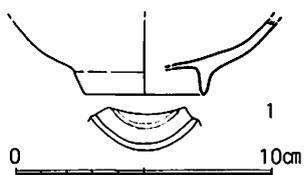
1は青花碗E群、2は口縁部が輪花となる青花皿F群である。3は中国産と推定される褐釉陶器で、小型の壺等の蓋と推定される。4～9はロクロ成形の土師器小皿、10～12はロクロ成形の土師器坏であるが、5～9及び10は15世紀代に遡るものと考えられ、混入品とみられる。13は土師質土器の碗と思われる。近年、豊後地域を中心に県内で資料が検出されているもので、内型を使用して成形されるものである⁽²³⁾。ただ、13は内外面にヨコナデがみられ、布目は確認できない。14～25は京都系土師器で、概ね塩地編年の2期～3期に比定されるものである。26は土師質土器の火鉢口縁部と推定される。27は備前焼擂鉢底部で、摺目の交差しない乗岡編年近世1期aもしくはそれ以前のものである。28は備前焼水屋甕で口縁部と底部は同一個体と推定されるものの接合・復元できなかったものである。



第52図 SK073平面・断面図(1/40) 第53図 SK080平面・断面図(1/40) 第54図 SK083平面・断面図(1/40)



第55图 SK073出土遺物実測図 (1~26:1/3, 27·28:1/4)



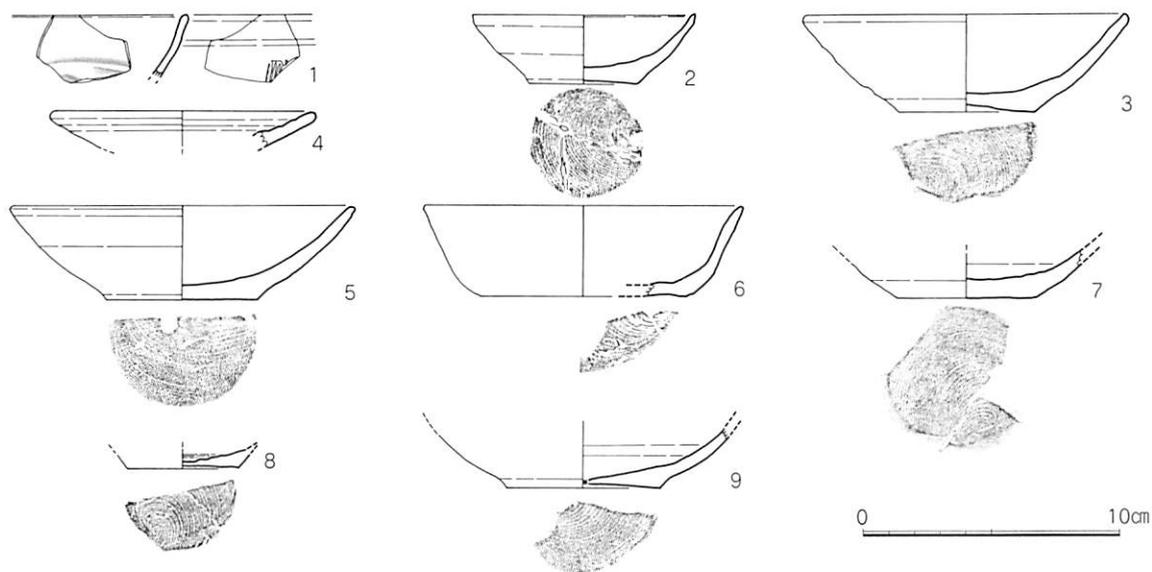
第56图 SK083出土遺物実測図 (1/3)

SK080 (第53図)

調査区西部で検出された浅い土坑である。遺構の西半は攪乱によって失われており、現存長1.5m、現存幅0.55mである。焼土を少量含む暗褐色シルト質土を埋土とする。出土遺物に京都系土師器が含まれていないため16世紀前半以前の所産と推定される。

出土遺物 (第57図)

1は同安窯系の青磁碗で、混入品の可能性が高い。2はロクロ成形の土師器小皿で、8も同器種の可能性がある。3・5は2と同様な器形を有する土師器坏で、7・9も同一種であろうと思われる。4は内面に工具により段が形成されたロクロ成形の土師器で、おそらく小皿であろう。6もロクロ成形の土師器であるが他のものと異なり、口径に対して底径が大きい器形である。



第57図 SK080出土遺物実測図 (1/3)

SK083 (第54図)

調査区中央部で検出された土坑である。壁面沿いであるため全形は知ることができないが、長軸1.3m、短軸0.8m+ α を測る。検出面からの最大深は45cmであるが、壁面沿いが特に深く掘り込まれている。

出土遺物 (第56図)

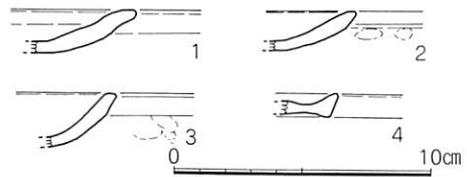
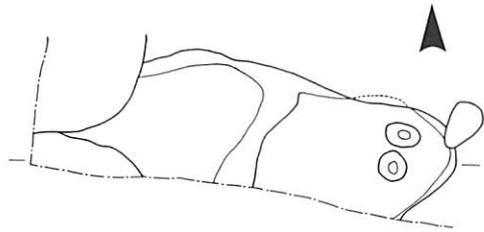
1は、青磁碗であるが高台内には青磁釉が掛けられておらず、通常青花と同じように呉須で二重圈線が描かれている。景德鎮窯系の製品であろう。

SK189 (第58図)

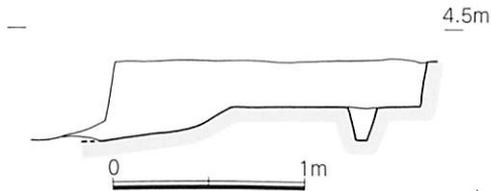
調査区西端で検出された土坑で、SK200によって切られている。壁面沿いのため全形は不明であるが、長軸4.1m+ α 、短軸0.7m+ α 、最大深約40cmを測る。遺構の西半分が階段状に深くなっており、本来2基の遺構が重複して掘られていた可能性もある。出土遺物から16世紀後半に埋積したものと推定される。

出土遺物 (第59図)

1～3は京都系土師器、4はロクロ成形の土師器小皿である。4は15世紀代に遡るものと考えられ、混入品の可能性が高い。



第59図 SK189出土遺物実測図



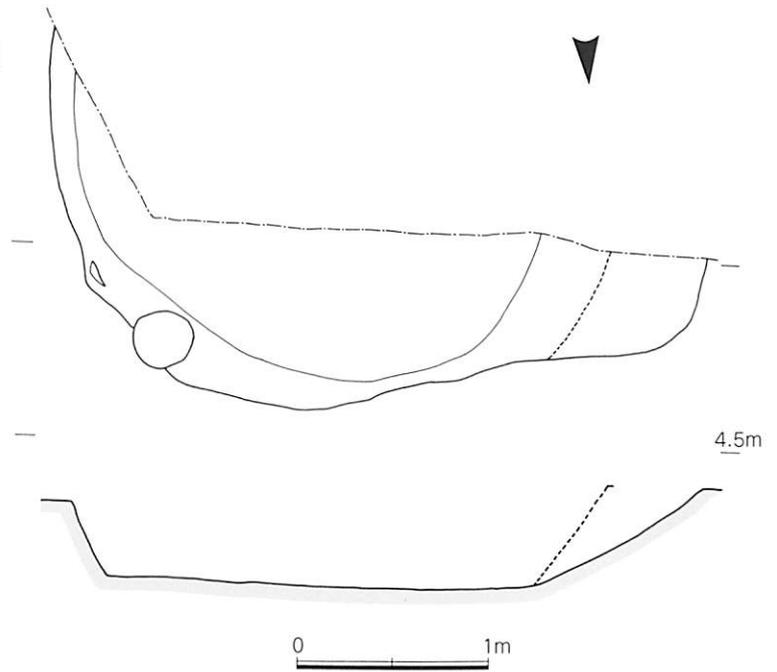
第58図 SK189平面・断面図 (1/40)

SK192 (第60図)

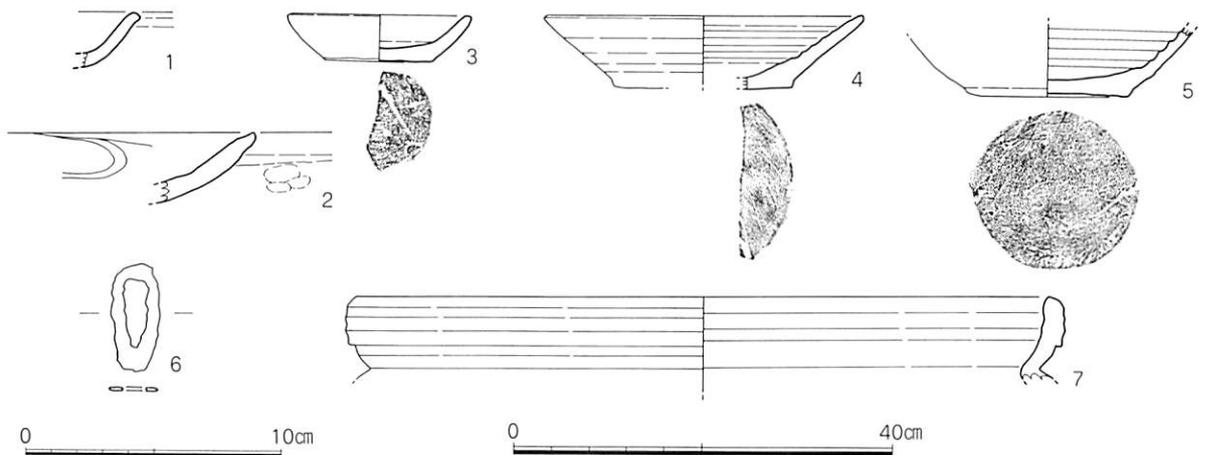
調査区中央部で検出された土坑である。調査区壁面沿いにあるため全形を知り得ないが、長軸約3.7m、検出面からの深さ約50cmを測る。焼土を少量含む暗褐色土で埋積している。出土遺物から16世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第61図)

1は龍泉窯系の青磁皿である。2は内面に2の字ナデが施された京都系土師器杯、3はロクロ成形の土師器小皿である。4・5はロクロ成形の土師器杯で、内面には工具による



第60図 SK192平面・断面図 (1/40)



第61図 SK192出土遺物実測図 (1~6 : 1/3, 7 : 1/8)

段状の調整が著しい。6は青銅製品で、刀装具である。7は備前焼大甕の口縁部で、SX210で出土しているものと同様なものであろう。

SK188 (第62図)

調査区西端で検出された廃棄土坑と考えられる遺構で、直径約2.2m程度の円形状と推定される。大甕埋設遺構SX194に切られている。焼土を含む土で埋積しているが、火災処理といえるような出土状況は認められない。備前焼大甕の破片が多量に出土したが、接合・復元できるものは少数にとどまった。出土遺物から、16世紀後半に位置づけられる。

出土遺物 (第63図)

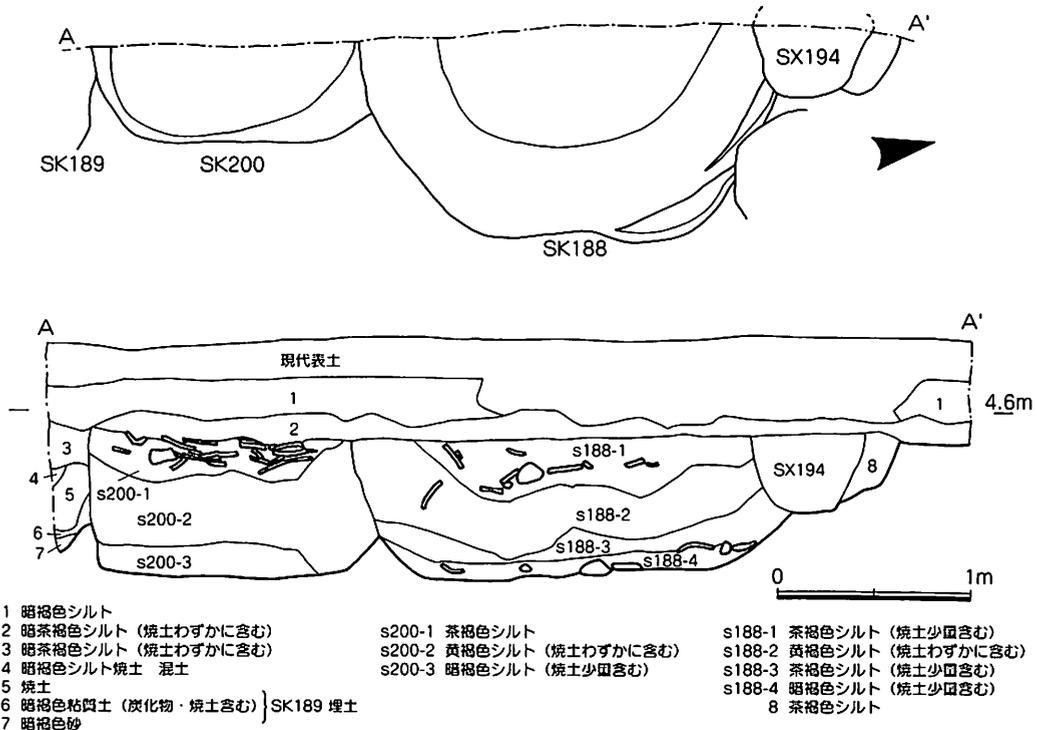
1・3は青花皿E群で、3は内面に鳳凰文が描かれているようである。2は白磁皿である。4・5は京都系土師器坏及び小皿であり、塩地編年2期に位置づけられる。4・5は備前焼大甕口縁部破片、6は同じく底部破片である。いずれも口縁部形態はSX210出土のものと同様であり、生産年代はほぼ同じ16世紀後半以降と見られる。

SK200 (第62図)

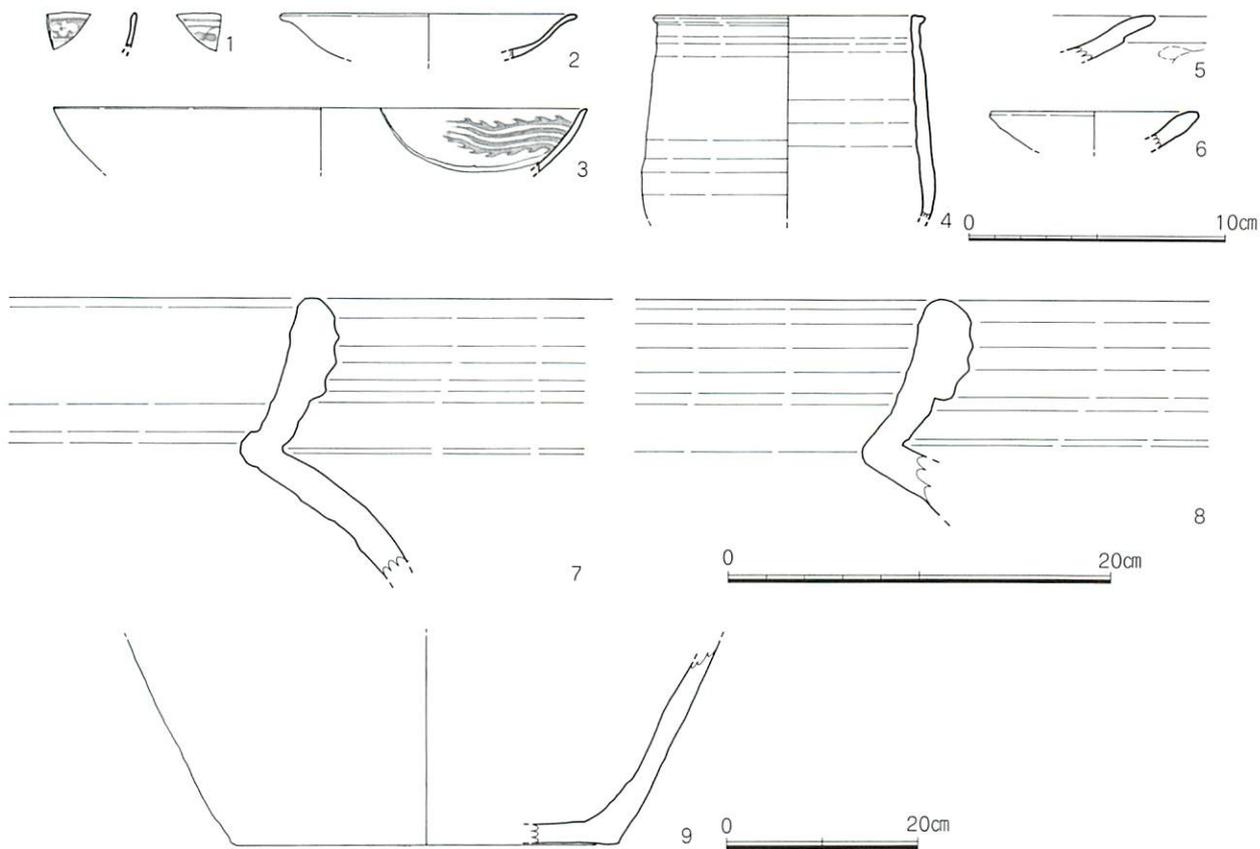
調査区西端で検出された廃棄土坑であり、SK188に切られている。埋土の最上層には備前焼大甕の破片が多量に廃棄されていたが、接合して復元可能なものは見られなかった。出土遺物から、16世紀後半に位置づけられるものであるが、SK188との時間的な差はほとんどないものと考えられる。

出土遺物 (第64図)

1は青花碗E群である。見込に「壽」字を描き、高台内に落款状の銘を記す。2は青磁碗である。3は青花の皿E群で、高台内には落款状の銘が記入されているようである。4は漳州窯系の大皿で、外面には鎬状の沈線を縦方向に施文しているようで、SX210出土の第12図76・77に類似する。5は交差摺り目を有する備前播り鉢で乗岡編年近世1期bに比定される。6はタイ産の陶器壺である。7・8は備前焼大甕である。外面には、それぞれ



第62図 SK188・SK200平面・土層断面図 (1/40)



第63図 SK188出土遺物実測図（1～6：1/3，7・8：1/4，9：1/8）

「㊦」・「用」字状の記号がヘラ書きされている。おそらく数個体分の破片があるものと推定されるがほとんどは胴部破片である。

SK216（第65図）

調査区南端部で検出された土坑である。道路状遺構SF226の側溝と考えられる溝SD177を切って掘り込まれている。長軸1.4m+α、短軸0.8mの楕円形状を呈し、深さは約1mと深く、最深部は柱穴状になっている。焼土を少量含む暗褐色土を埋土とする。出土遺物は非常に少数であり、遺物から磁器を判断するのは困難である。切り合い関係から見ると16世紀末に位置づけられる可能性が高いと判断される。

出土遺物（第67図1）

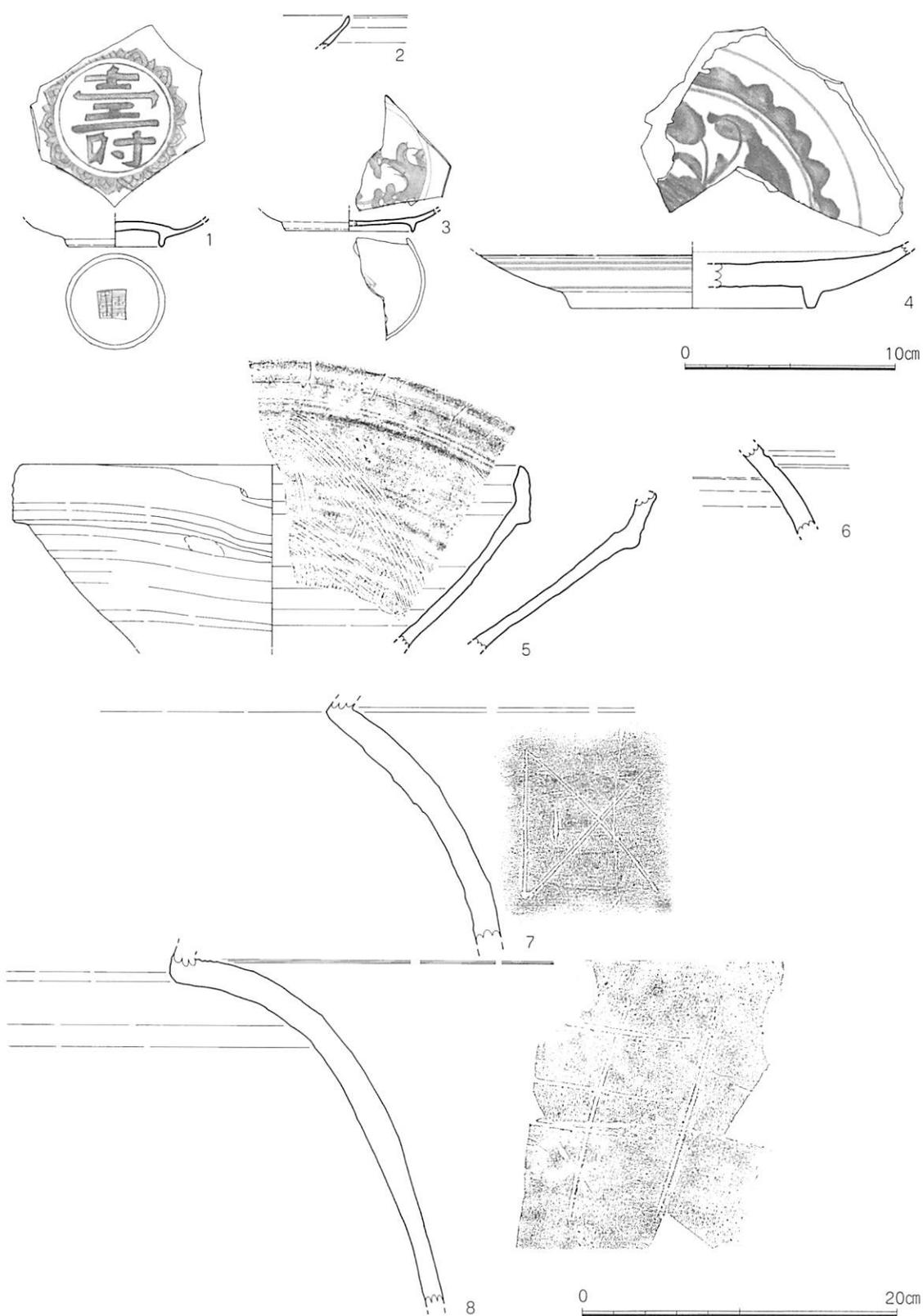
1は白磁皿で、体部から口縁部が大きく外反するタイプのものである。

SK221（第66図）

調査区南端部で検出された不定形の土坑で、SD177に切られている。埋土は焼土を少量含む暗褐色土である。埋土中から焼けた土壁片が多量に出土した。

出土遺物（第67図2～5）

2は朝鮮王朝産の陶器舟徳利と考えられる。3～5は土壁で、全面的に焼けているものである。いずれも内部にスサと見られる植物繊維を多量に含んでいた痕跡が見られる。それぞれの実測図左面が表面側であると推定され、表面が滑らかに仕上げられている。4の実測図右面には壁の芯材と考えられる痕跡が縦横に見られる。3は壁土の中に磁器片が混入している資料で（図中↓部分）染付皿B1群の破片であろう。



第64図 SK200出土遺物実測図 (1~4 : 1/3, 5~8 : 1/4)

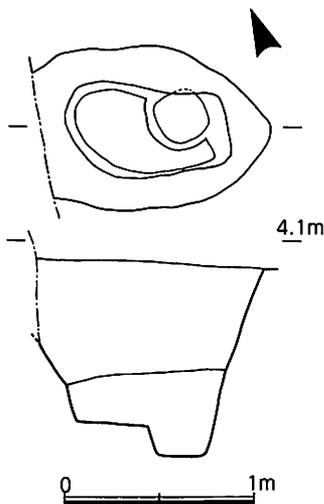
SK223 (第68図)

調査区南東部で検出された不定楕円形の土坑である。北半は、攪乱に切られており、さらに壁面沿いのため全形は不明であるが、長軸2.9m、短軸1.6m+α、検出面からの最大深は約1.0mを測る。遺構床面の状況と埋土の堆積状況により、掘り返しが行われたものと判断され、1~3層がこの埋土であろう。このうち1・2層は焼土

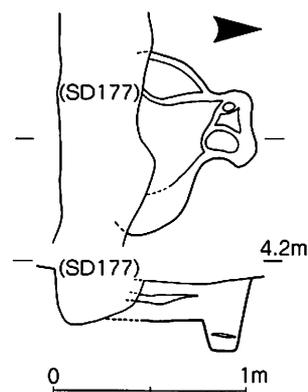
ないしは焼土を多量に含む土であり、出土遺物の年代観とあわせれば、SX210等と同時期に火災処理坑として使用された可能性が考えられる。

出土遺物（第69図・第70図）

1・3・6は青花碗E群である。3の高台内には落款状の銘が描かれている。5は白磁皿、7は青磁菊皿である。2は従来の分類には当てはまらない青花碗である。外面にはラマ式蓮弁に類似した文様と雷文が描かれ、見込には花卉文が描かれる。高台内には中央の□を囲み、「萬福攸同」銘が記されているようである。高台や体部の形状は碗E群に類似するが、見込が盛り上がっていない点が異なる。また文様もきわめて丁寧に施文されていることが観察される。8・10は青花皿E群、4・9は青花皿F群である。12は朝鮮王朝産とみられる緑褐色釉の掛かる陶器でおそらく舟徳利と推定される。11は焼締陶器の徳利であるが、焼成不良のため黄灰色に発色している。おそらくは備前焼であろう。13～16は体部に唐草文と蓮華文を陰刻する刻花タイプの華南三彩陶器壺である。SX210及びSE120から出土したものと同一個体である可能性もあるが、全体の色調や、内面に施釉された薄い褐釉の釉調が異なっており、一応別個体として扱っている。14のみ著しい二次被熱により釉が失われているが、他のものは原色を保っている。13により胴部最大径は28.2cmに還元される。17～19は京都系土師器坏である。20～22はロクロ成形の土師器小皿で、23は小型の坏である。23は内面に弱いながらも段が形成される。24はロクロ成形の土師器小皿であるが内面にスサ入りの土が多量に付着している。同様な壁土に陶磁器が混入していた例（第67図3）があることから、この資料も壁土に混入していたもの

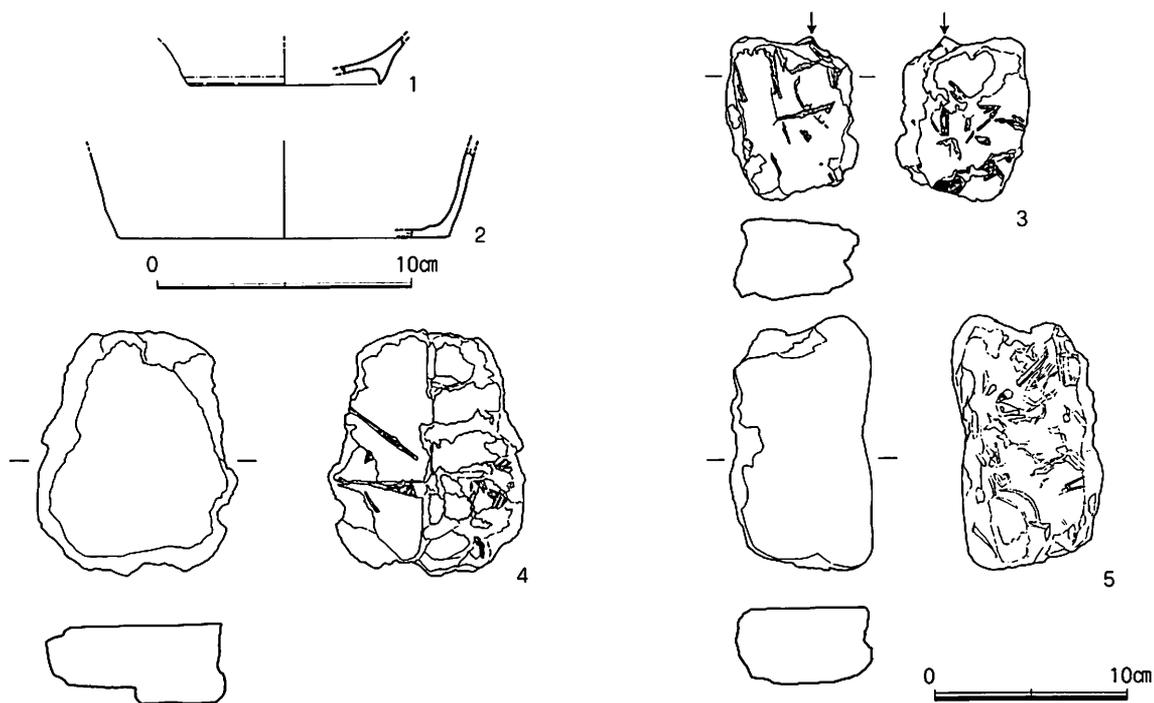


第65図 SK216平面・断面図 (1/40)

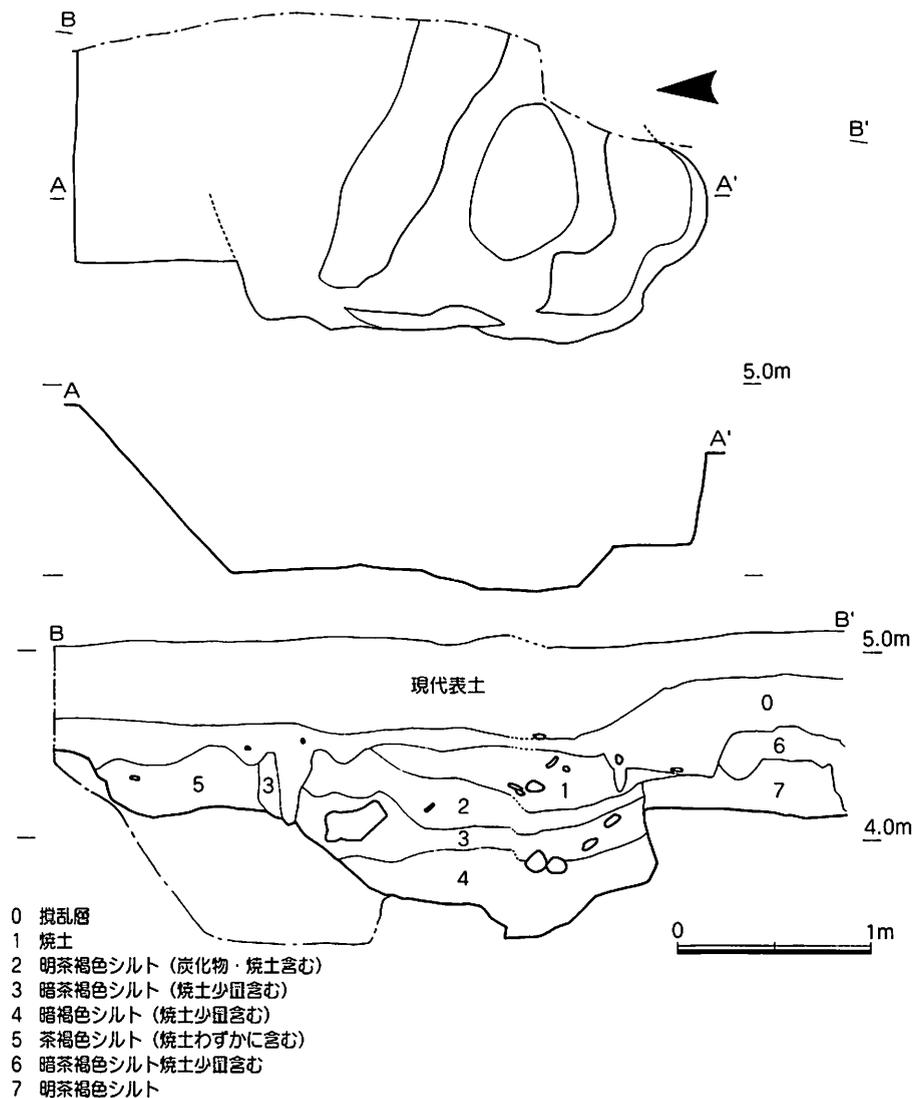


第66図 SK221平面・断面図 (1/40)

る。また文様もきわめて丁寧に施文されていることが観察される。8・10は青花皿E群、4・9は青花皿F群である。12は朝鮮王朝産とみられる緑褐色釉の掛かる陶器でおそらく舟徳利と推定される。11は焼締陶器の徳利であるが、焼成不良のため黄灰色に発色している。おそらくは備前焼であろう。13～16は体部に唐草文と蓮華文を陰刻する刻花タイプの華南三彩陶器壺である。SX210及びSE120から出土したものと同一個体である可能性もあるが、全体の色調や、内面に施釉された薄い褐釉の釉調が異なっており、一応別個体として扱っている。14のみ著しい二次被熱により釉が失われているが、他のものは原色を保っている。13により胴部最大径は28.2cmに還元される。17～19は京都系土師器坏である。20～22はロクロ成形の土師器小皿で、23は小型の坏である。23は内面に弱いながらも段が形成される。24はロクロ成形の土師器小皿であるが内面にスサ入りの土が多量に付着している。同様な壁土に陶磁器が混入していた例（第67図3）があることから、この資料も壁土に混入していたもの



第67図 SK216・221出土遺物実測図 (1・2 : 1/3, 3～5 : 1/4)



第68図 SK223平面・断面・土層断面図 (1/40)

である可能性もある。25はタイ産の陶器壺で、赤褐色に発色し、無釉である。26は備前焼壺と思われる。27は瓦質土器播鉢、28は石臼である。

SK224 (第71図)

調査区南端付近で検出された土坑である。長軸0.8m、短軸0.7mの楕円形状を呈し、深さは35cmを測る。出土遺物はわずかであるが、京都系土師器が出土していないことから、16世紀前半に遡る可能性が考えられる出土遺物 (第73図1～3)

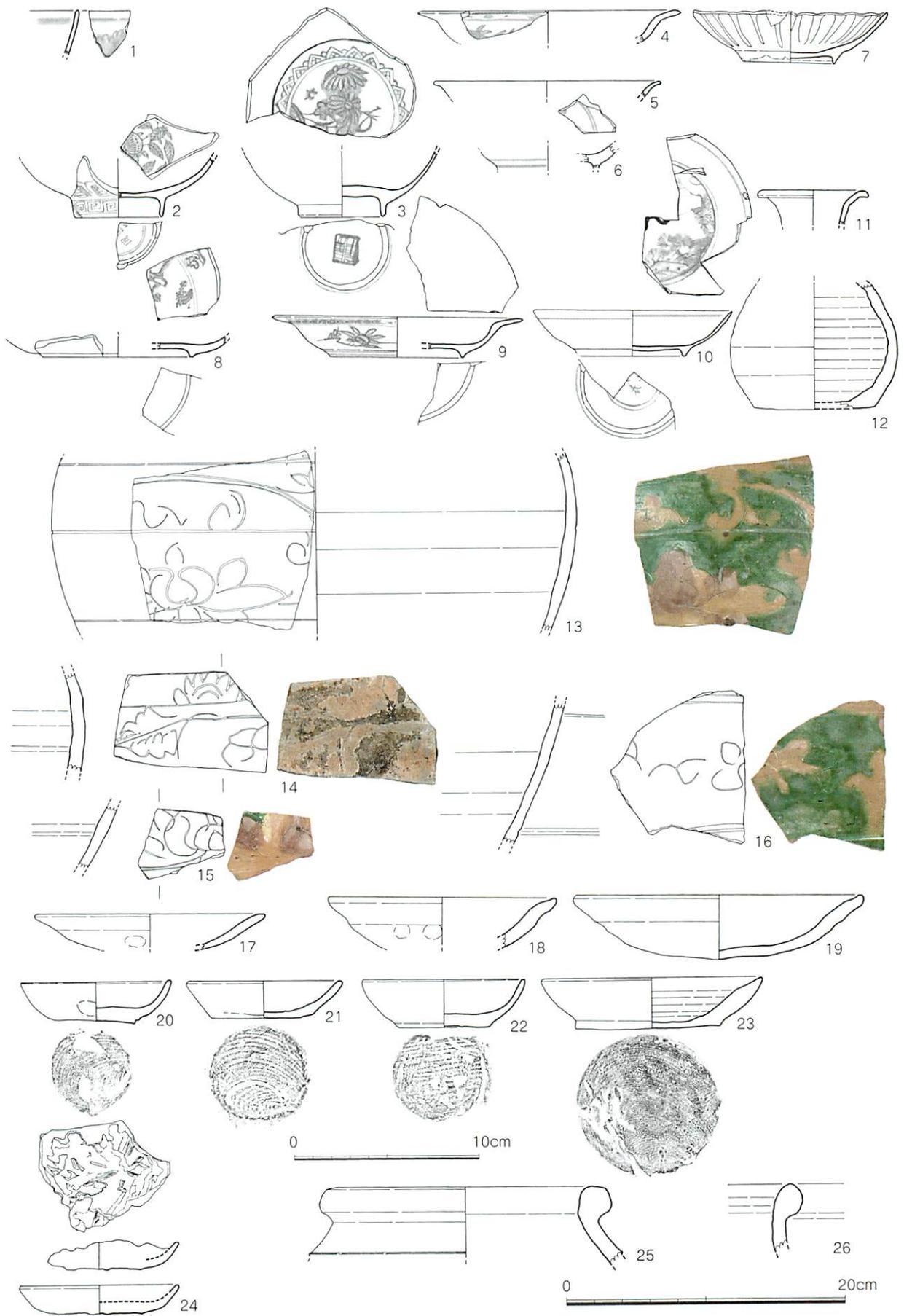
1は青花碗C群の底部である。2・3はロクロ成形の土師器で2は小皿、3は坏である。

SK233 (第72図)

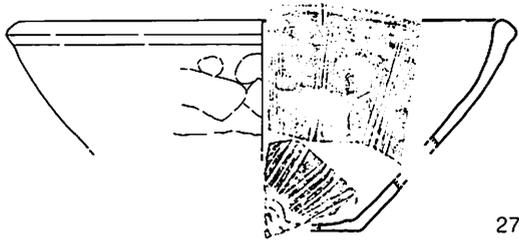
調査区中央部で検出された土坑である。壁面沿いにおいて一部しか検出されていないと考えられるため、全形は不明であるが、長軸2.9m、短軸0.7m、最大深0.4mである。床面に段差が見られ、床面で検出されるピットや落ち込みもあることから、複数の遺構が複合している可能性もある。

出土遺物 (第73図4～7)

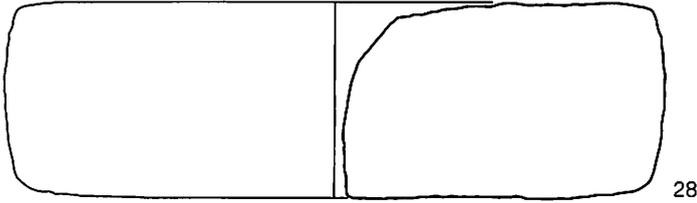
4は青花皿E群、5は見込が無釉で陶胎の粗製白磁皿である。6はロクロ成形の土師器坏であるが、口縁部内



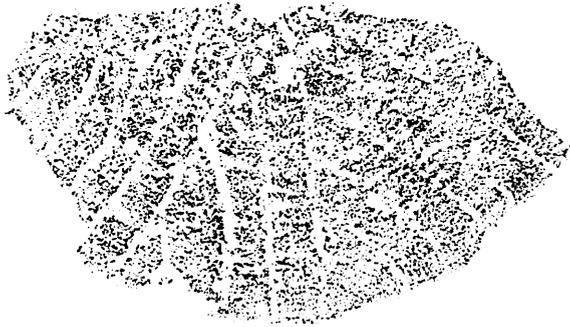
第69图 SK223出土遺物実測図1 (1~24:1/3, 25·26:1/4)



27

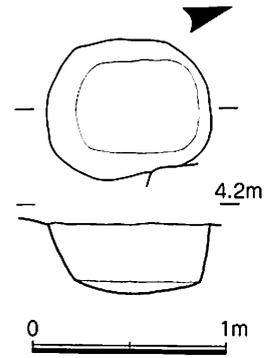


28

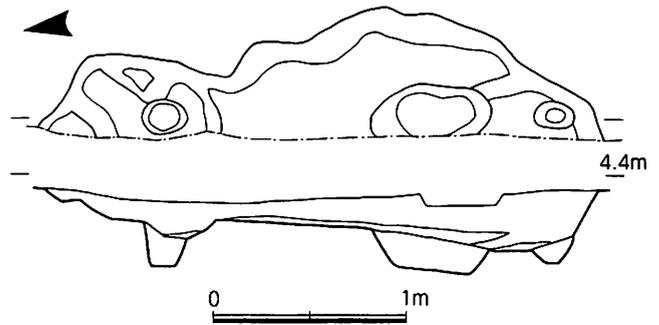


0 20cm

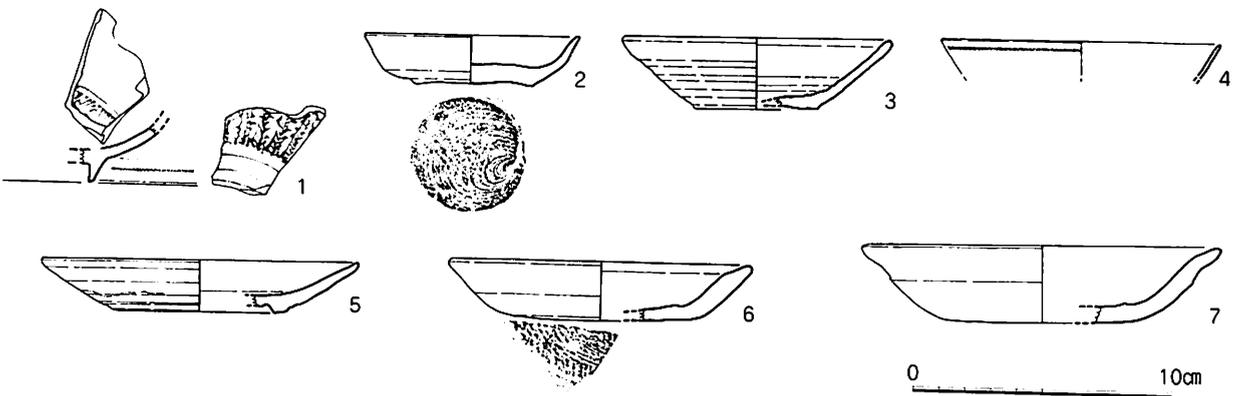
第70図 SK223出土遺物実測図 2 (1/4)



第71図 SK224平面・断面図 (1/40)



第72図 SK233平面・断面図 (1/40)



第73図 SK224・SK233出土遺物実測図 (1/3)

外が強いヨコナデにより調整され、京都系土師器に類似した断面形状になっているものである。ただし、胎土は石英や赤色粒子を多く含み橙褐色に発色するもので通常のロクロ成形土師器と変わらない。7は京都系土師器坏である。

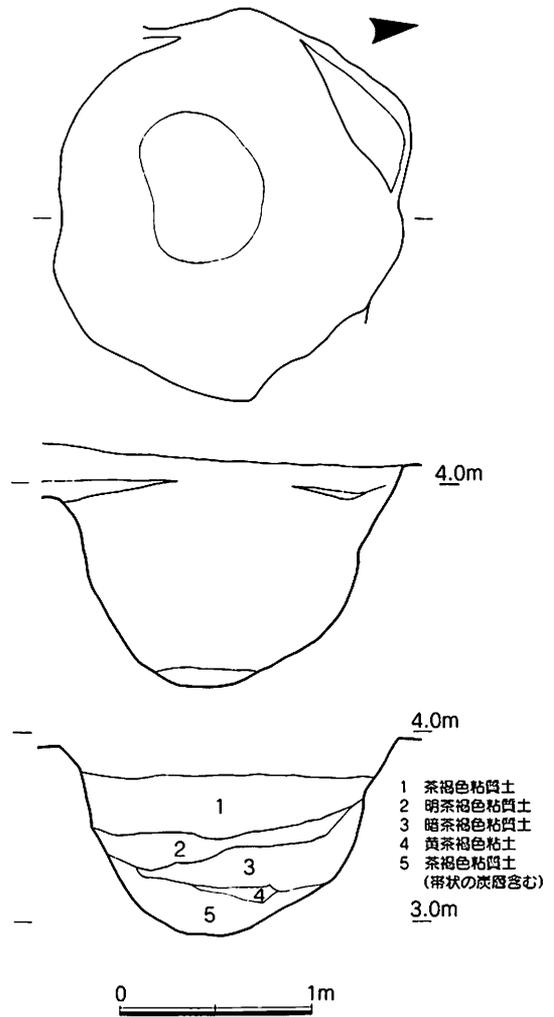
SK235 (第74図)

大甕埋設遺構SX210に伴う掘り込みと推定されたSX237の床面で検出された土坑で、SX210およびSX237に確実に先行する遺構である。長軸2.05m、短軸1.8m、深さ1.2mを測り、灰褐色粘質土を主体とする土で埋積している。出土遺物から、16世紀前半～中葉の年代が考えられる。

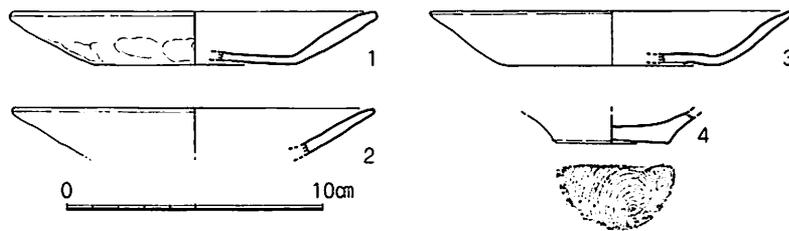
出土遺物 (第75図)

1～3は京都系土師器皿である。いずれもこれまで中世府内町跡の調査において知られているものの中では最も器壁の薄い一群に属し、京都系土師器出現期に近く位置づけられるものであろう。とりわけ最も薄い3については、1・2の胎土が在地のものだと判断されるのに対し、白色に近い粒子を全く含まないきめ細かな土を使用したものである。管見の限りではあるが京都もしくはその周辺地域で生産された土師器に近い属性を有しており、当該地域もしくは山口等、京都系土師器が先行して導入されている地域からの搬入品と推定される。

4は底部系切りの在地系土師器坏である。



第74図 SK235平面・断面・土層断面図 (1/40)



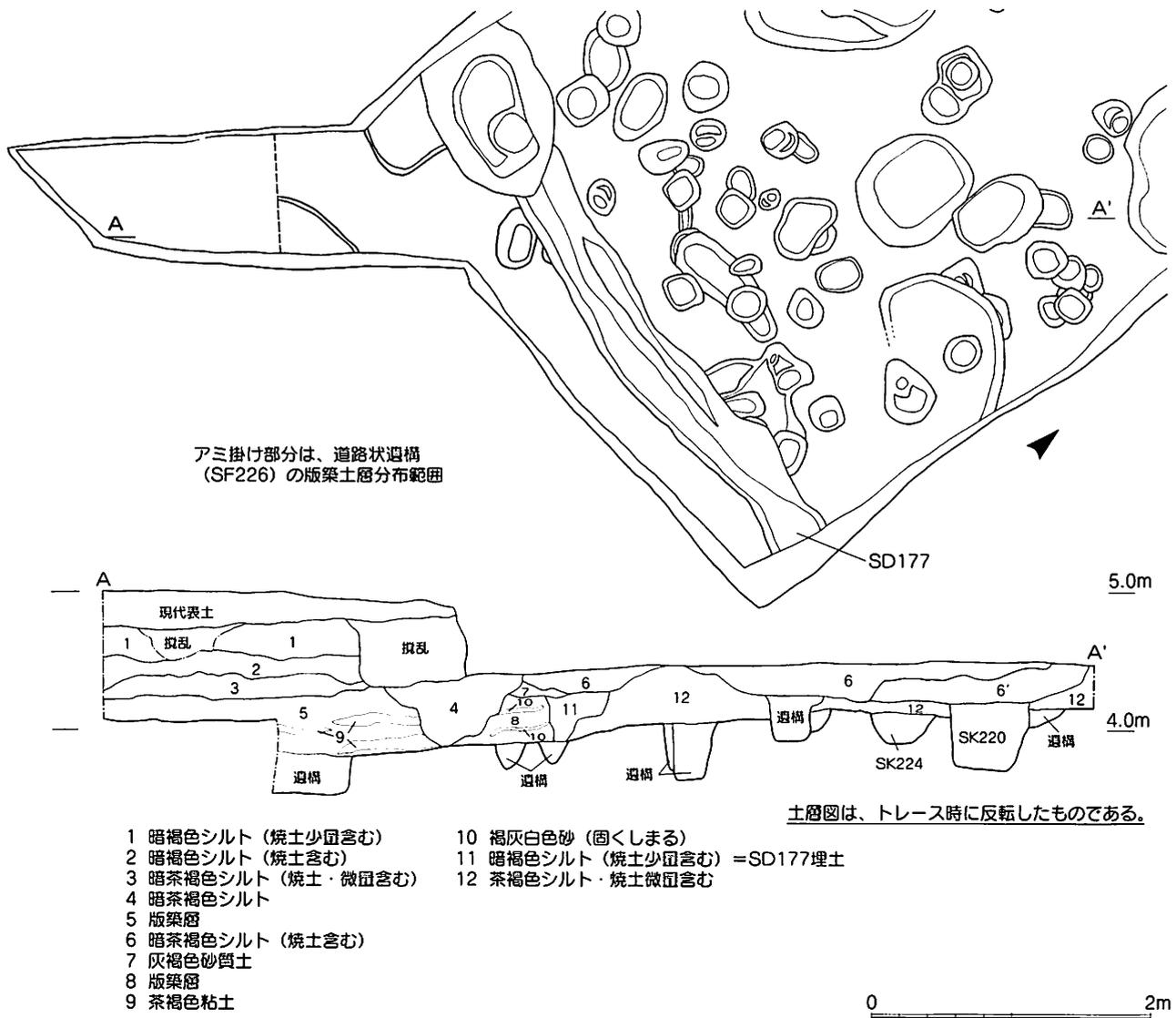
第75図 SK235出土遺物実測図 (1/3)

道路状遺構 (SF)

SF226 (第76図)

第1次・第2次調査で検出された道路状遺構の延長ではないかと考えられる整地遺構で、調査区南東端部から土層確認のため設けたトレンチにかけて検出された。遺構は砂・小礫・粘土を版築状に固く突き固めた土層として確認される。版築状の整地層の厚さは34～48cmを測る。焼土層もしくは焼土を多量に含む土で埋められた状況ではなく、当時の確実な路面は確認できていない。遺構の基盤面はSD177の掘り込み面と同じ12層と推定されるが、整地層は12層よりも下にまで存在しているため、一種の掘り込み地業が行われたものと考えられる。北側に側溝と推定される溝SD177が伴い、その主軸方向から判断するとN-80°-Wと推定される。

なお、確認トレンチにおいては版築状の整地層よりも下に遺構があることが確認されているが、拡張して確認

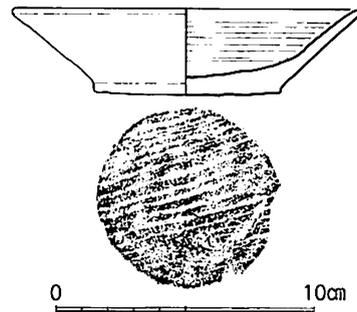


第76図 道路状遺構 (SF226) 平面・土層断面図 (1/50)

できていないため詳細は明らかにできなかった。整地層から出土した遺物は少量であるが、京都系土師器と考えられる土師器細片も含むことから、道路状遺構の築造は京都系土師器出現以降、おそらく16世紀第2四半期以降と推定される。

出土遺物 (第77図)

版築状の整地層から出土したロクロ成形の土師器坏で、内面に工具による段が形成されるもので16世紀前半に位置づけられるものである。このほか、整地層には京都系土師器と判断される土器片や備前焼片、青磁・白磁片も含まれていたが図示できなかった。



第77図 SF226出土遺物実測図 (1/3)

溝状遺構 (SD)

SD177 (第76図)

道路状遺構SF226に伴う北側側溝と考えられる溝である。幅約40cm最大深35cmを測り、やや湾曲しているが平均するとN-80°-W方向に延びているものと推定される。焼土を少量含む暗褐色土により埋積しており、土層からはSX210等の廃絶時期との関係をうかがうことは困難である。しかし、出土遺物からみるとSX210等と同じ、16世紀末に廃絶した可能性が高いと思われる。

出土遺物 (第78図・第79図)

1～12は青花である。1は碗でC群と思われる。2・7は漳州窯系の大皿の口縁部破片である。3は外面に四方樺状の文様を有するもので碗か。4・5は青花碗B1群である。6・10は漳州窯系の製品で、皿C群に類する器形のものである。

8・12は見込み花卉文を描く漳州窯系の皿である。9は圏線のみを文様とする皿E群であるが、高台内に「□靖□造」と読める銘を有する。「嘉靖年造」と推定され、明の嘉靖年間(1522年～1566年)を示す。13は掛け花入れである。灰色磁器と仮称する材質の磁器で、暗灰色の磁胎に白色不透明の釉が掛かるものである。14は備前焼の瓶(徳利)である。15は焼締陶器の鉢と推定される。胎土中に白色の粒子を多く含んでおり、焼成は不良で明赤褐色を呈する。国内産の焼締陶器に該当するものがみられないことから中国等の製品ではないかと考えられる。18はタイ産の陶器壺口縁部で無釉である。19・20は備前焼描鉢で20は乗岡編年近世1期aに比定される。16は備前焼鉢であろう。21は瓦質土器描鉢である。17は中国産褐釉陶器四耳壺で、内外面に黒に近い黒褐色釉を施釉するが、肩部以下の内面は無釉のようである。22は備前焼大甕の肩部破片で外面に「式」と判読できる文字がヘラ書きされており、「式石入」と書かれていたものと推定される。23～37は京都系土師器の坏で、概ね塩地編年の2期におさまるものである。このうち29・30は箱形の器形に作られるものである。38は土師質土器の碗で、内型により成形されると推定されているものである。外面下半は横方向のケズリ痕がみられる。39～41はロクロにより成形された土師器小皿である。

42は砂岩製茶臼である。

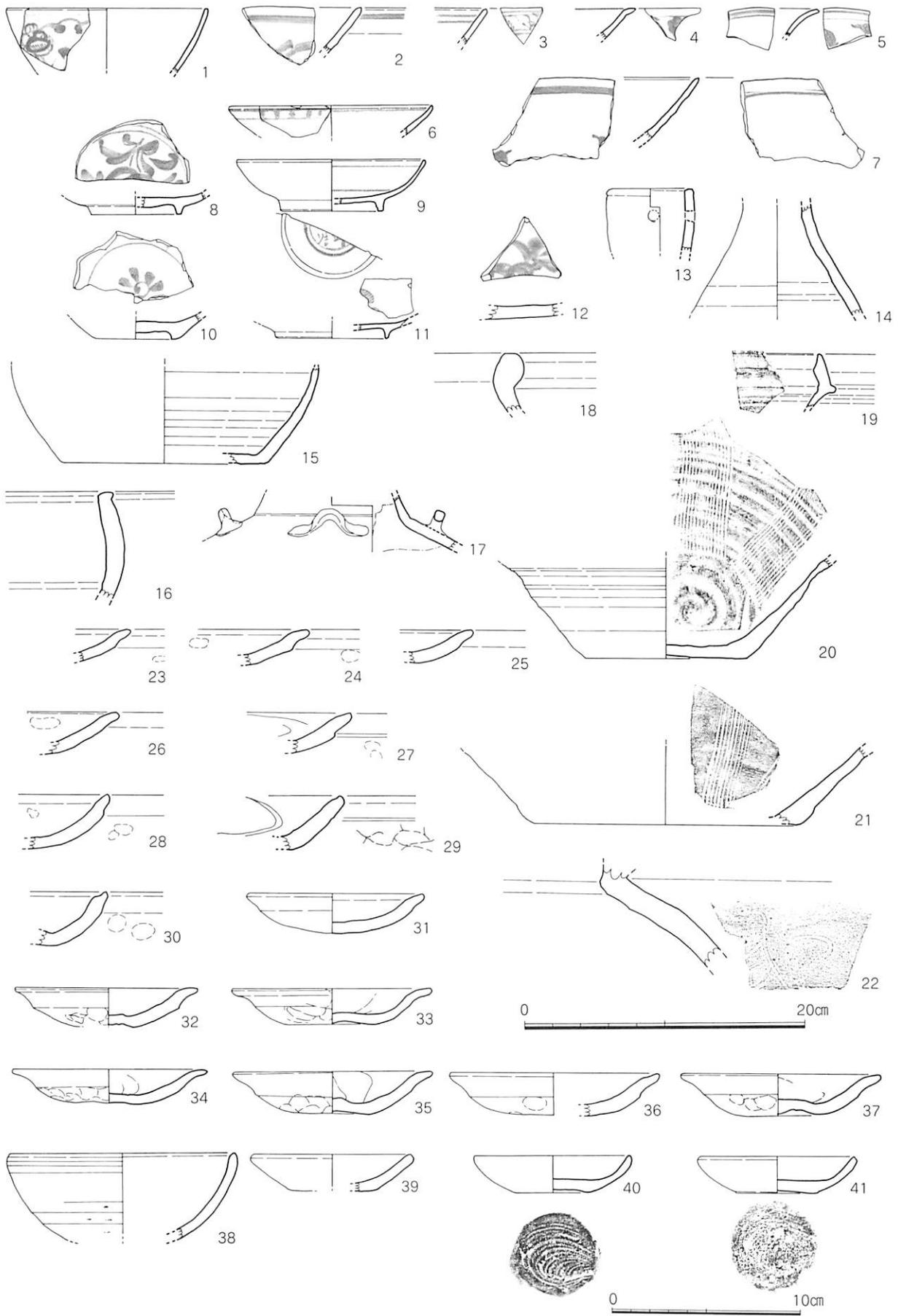
性格の不明な遺構 (SX)

SX176 (第80図)

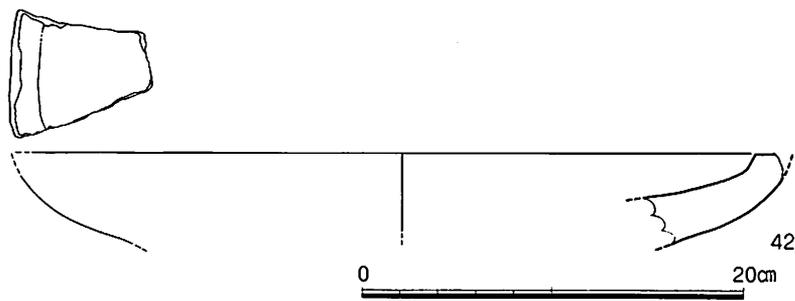
調査区の北部で検出され、検出面付近では焼けたものを含む角礫が集中した状態で出土した。一部南側に拡張して掘り下げを行った結果、複数の遺構が連続して切り合っていることが判明した。北西部の遺構S176-aは、石組みを伴う土坑である。掘り方は長軸2.0m、短軸1.8m+αの不正方形を呈する。中央部分が不正楕円形状に一段深く掘られており、検出面からの深さは、最深部で65cmを測る。東側には2段に積まれた石組みが残存していたが、他の3辺には石組みが認められない。北側・西側の壁には段状の部分が認められることから、本来は石組みがあったものと推定される。遺構埋土からは多量の礫が出土しており、石組みに使用していた石を含めて遺構埋め戻しの際に廃棄されたものと考えられる。

このS176-aの東側から南側の拡張部にかけてでは、先行する遺構S176-bが検出された。埋土内からは焼けたものを含む多量の礫が出土しているが明確な石組みは認められない。埋土はその多くが固くしまったものであり、入念に埋め戻されたものと思われる。なお、S176-bは、遺構主軸がS176-aよりもやや西に振っていることが観察される。

南側に拡張して調査した部分の南端では、S176-bを切って掘り込まれた土坑S176-cが検出されている。S176-cの埋土からも多量の礫が出土しているが、石組みは認められない。これ以上の拡張は行えなかったため遺構の



第78图 SD177出土遺物実測図1 (1~13・23~41:1/3, 14~22:1/4)



第79図 SD177出土遺物実測図 2 (1/4)

性格等詳細は明らかにできず、全く別遺構であることも考えられる。

S176-aに伴う可能性のある遺構としては、S176-aと同じ面で検出され、S176-bを切って掘り込まれた溝S176-dがある。S176-dは焼土を多量に含む土により埋まっており、SX210等と同時期に廃絶した可能性が考えられる。S176-aの東側から南側を囲むように掘られている可能性もあるが、どのような機能を持つものかは不明である。

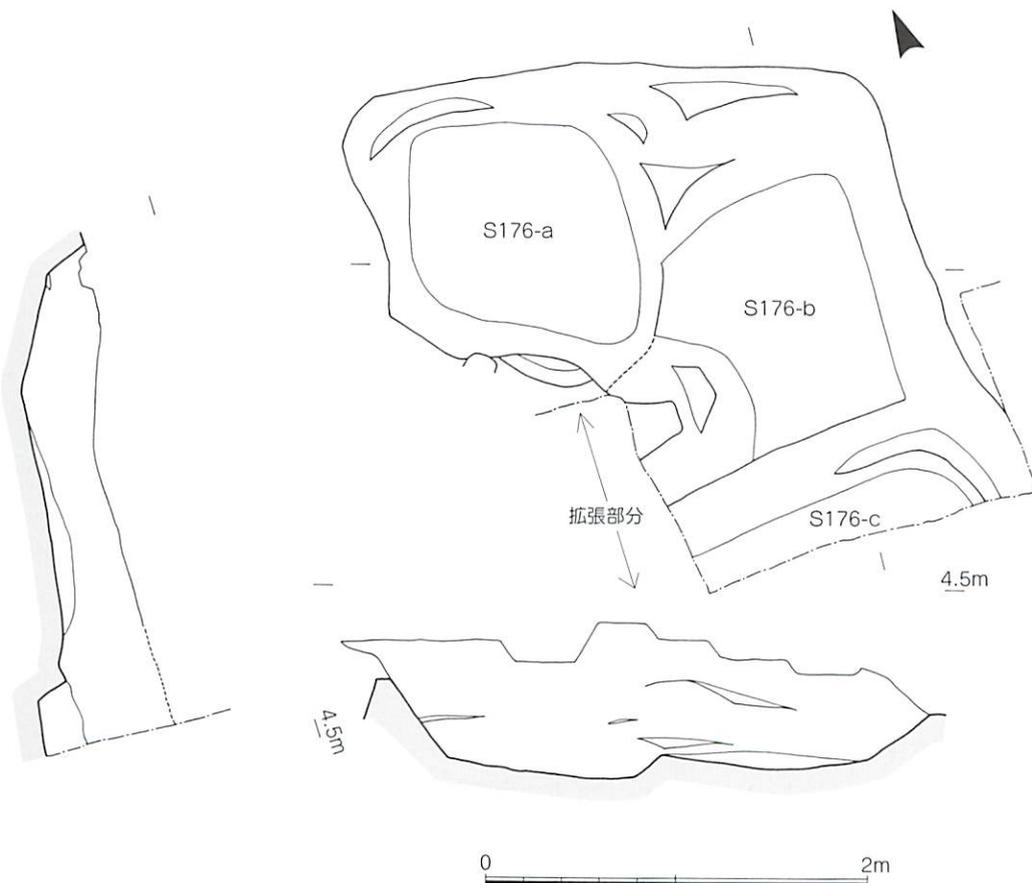
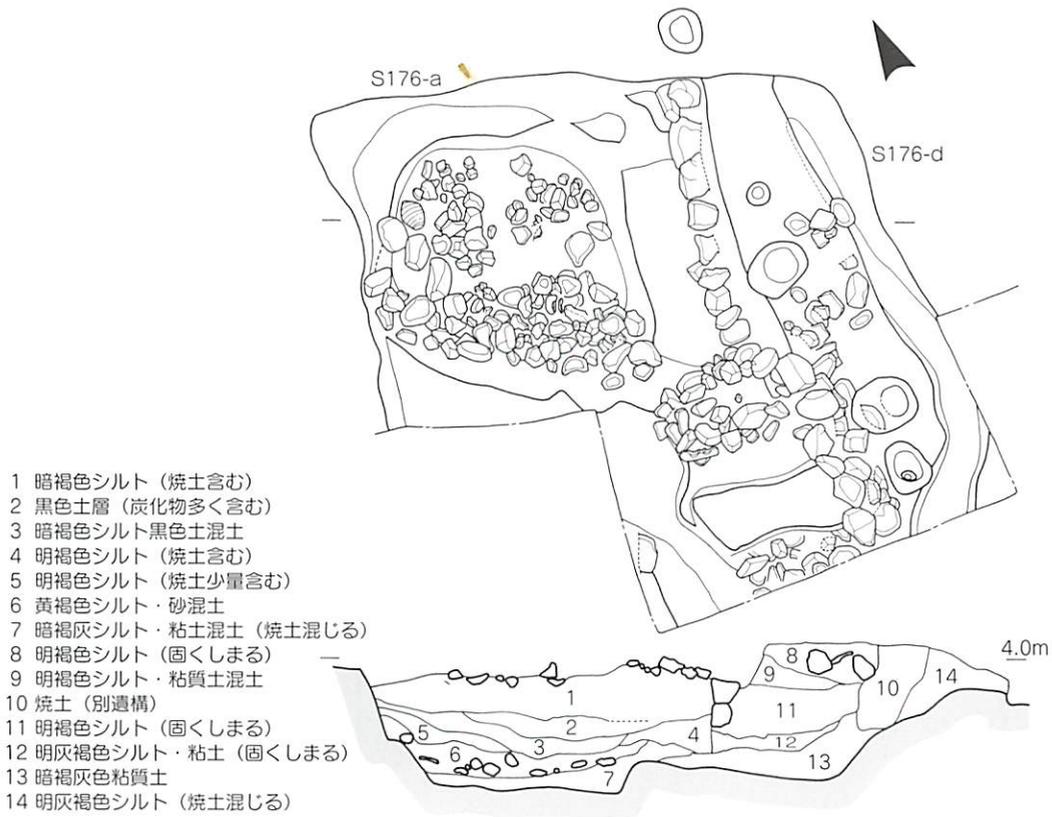
SX176からは、S176-aを中心に銅滓と推定されるものの付着したトリベやふいごの羽口が出土しており、青銅製品の鑄造に関わる遺構であった可能性が推定される。

出土遺物 (第81・82図)

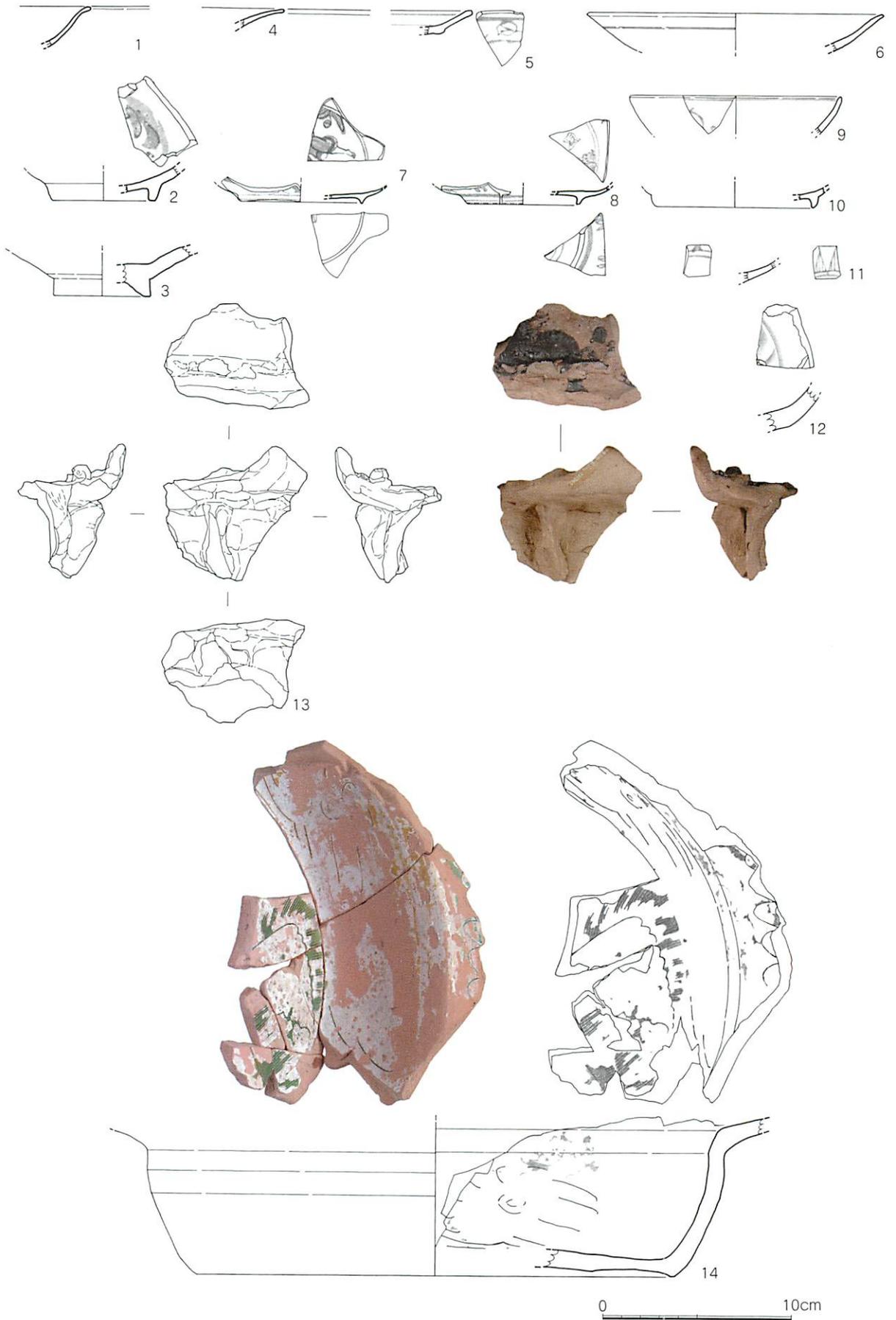
調査時に遺構プランを十分把握できなかったため、元々の調査区内から出土した遺物をSX176出土遺物と拡張部分から出土したものを区分したにとどまる。石組みを有する遺構、S176-aから確実に出土したものは把握できていない。

1・4・6・10は白磁皿である。このうち6は見込が無釉で陶器質の粗製品である。5は青花皿B群と思われるが、体部下半に砂が付着し、それ以下に釉が掛かっていない。2は青花碗C群、7～9は青花皿E群であろう。11は青花皿C群である。12は12世紀代に比定される龍泉窯系青磁碗である。13は器種の不明な陶器で、粘土板を折り曲げた体部に脚が貼り付けられているようにも見える。被熱により他の釉薬もしくはスラグ状の黒褐色物質が付着している。土師器坯の口縁部のようなものも釉着しており、何らかの土製品が高熱により焼き締まったものとも考えられる。14は華南三彩陶器の盤で、口縁部内面に波状文、体部内面に花文、見込にも花文を陰刻するものである。焼成は不良で土師質といってよいような軟質の胎土である。白色の化粧土を掛けた後施釉しているがほとんど剥落してしまっている。口縁端部は欠失しており、輪花であるか平縁かの確認はできない。15は備前焼甕、16は播鉢の口縁部である。17はタイ産の陶器壺で肩部の破片と推定され、外面に2状の凹線がみられる。無釉で暗赤褐色に焼成されている。22は陶器壺と思われるもので、外面に薄い褐釉がかかる。胎土には砂粒等の粒子を含まず焼成はきわめて堅緻である。SE206出土の陶器蓋(第39図5)と胎土や釉、焼成が類似しており、中国産と推定される。19は備前焼播鉢で、乗岡編年近世1a期もしくはそれ以前に比定される。20は中国産と推定される褐釉陶器壺である。18は瓦質火鉢で、外面の2条突帯の間に2つを一単位とする唐草様の文様をスタンプする。21は朝鮮王朝産陶器の舟徳利と推定されるものである。本来緑褐色の釉が施釉されているものだが、2次的な被熱のためか、灰緑色に変色している。

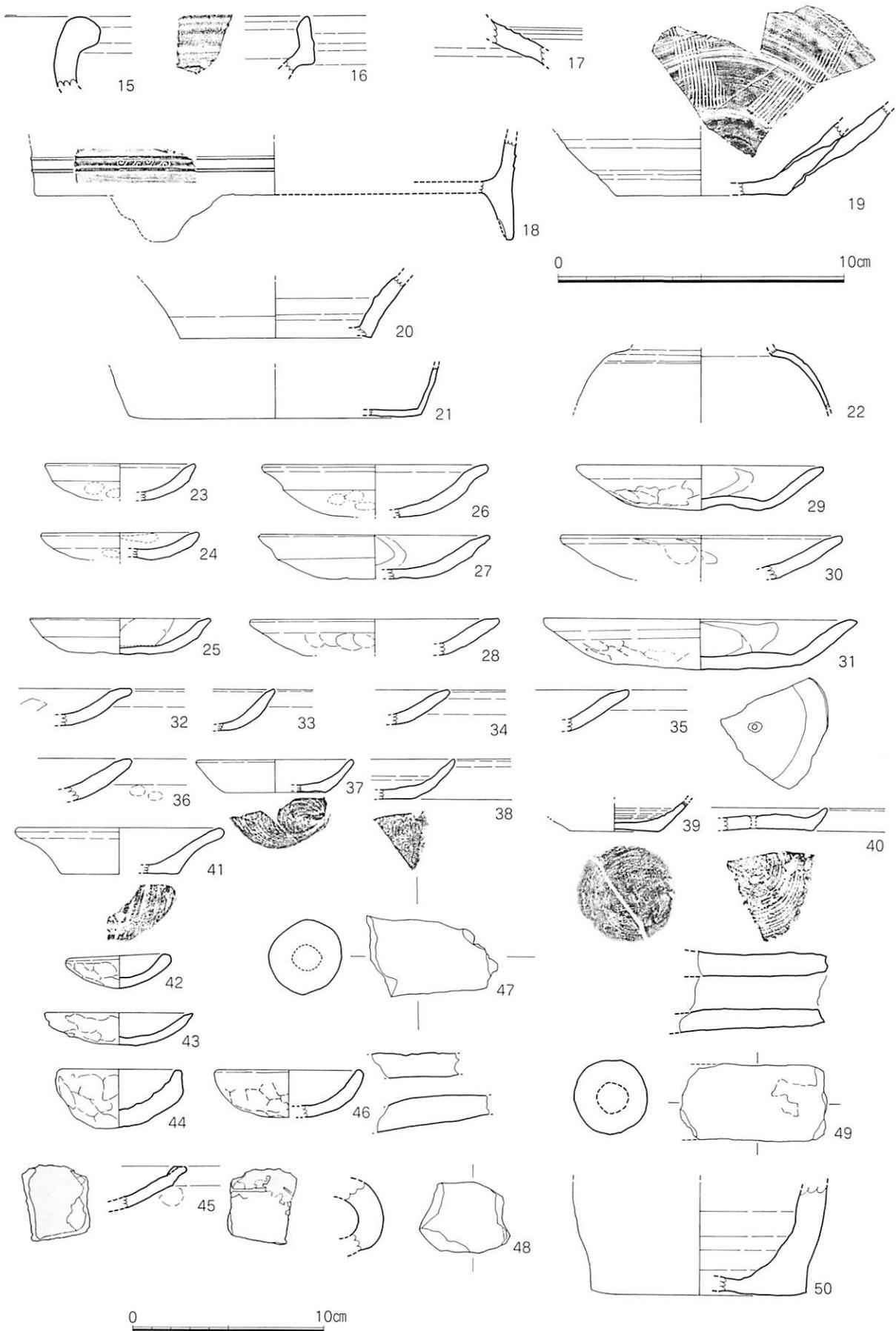
23～36は京都系土師器坯で、概ね塩地編年2期に比定できるものである。37～41はロクロ成形の土師器で、39・40は小皿、他は坯である。40は底部に焼成後の穿孔がみられる。50は備前焼と推定される焼締陶器で、壺と推定される。42～46はトリベで、いずれも被熱のため暗灰色に変色し、内面及び口縁部にスラグが付着している。43・47は京都系土師器の転用品でその他は手づくねにより作成されたいわば専用品であろう。47～49は土製のふいご羽口で、内径は47が1.3～1.5cm、48は推定で約2.2cm、49は1.4～1.6cmである。



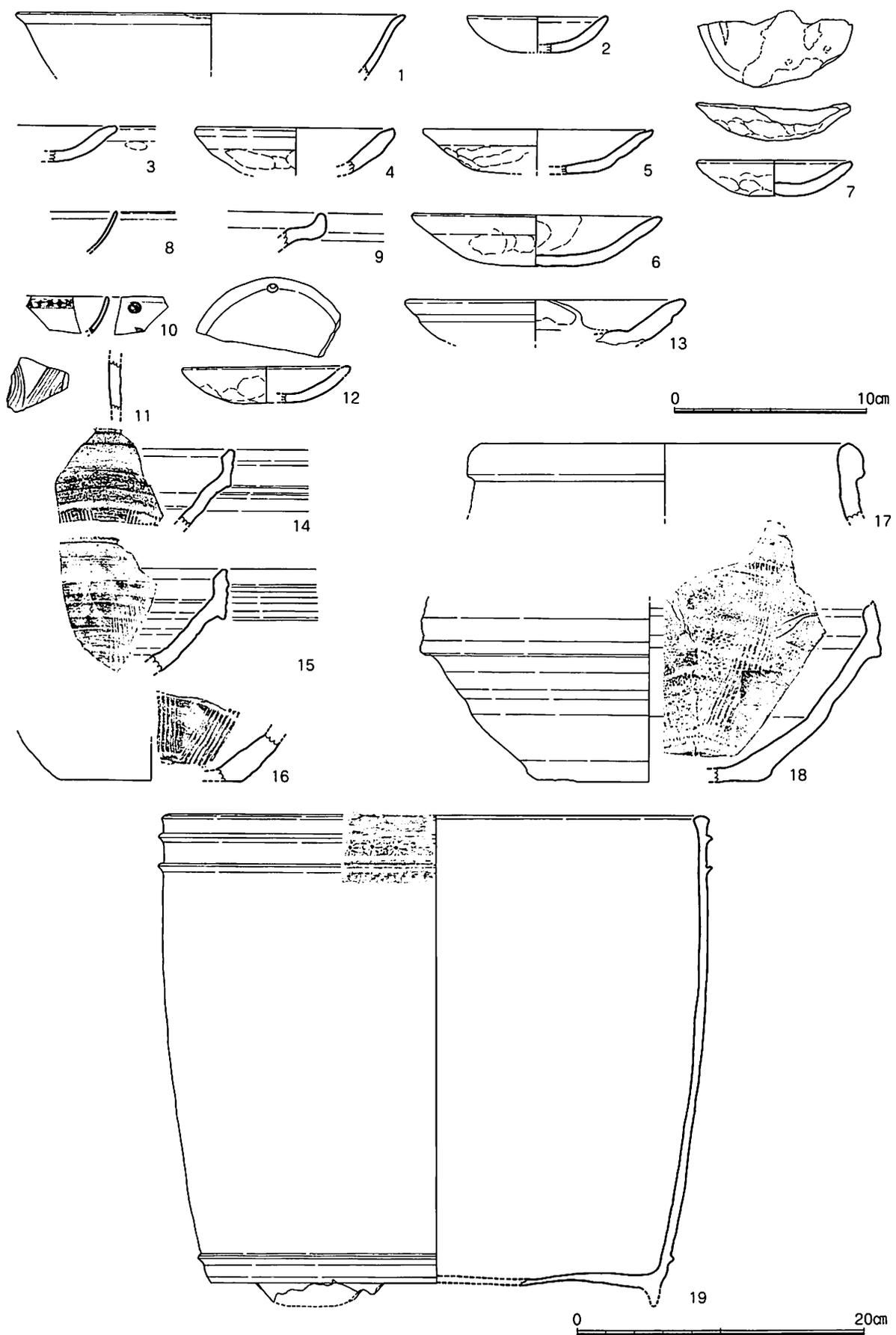
第80図 SX176平面・断面・土層断面図 (1/40)



第81图 SX176出土遺物実測図1 (1/3)



第82図 SX176出土遺物実測図 2 (15~20 : 1/4, 21~50 : 1/3)



第83図 SX176検出時・拡張区出土遺物実測図3 (1~13:1/3, 14~19:1/4)

SX176検出時・南側拡張区出土遺物（第83図）

ここでは、SX176検出時に出土したもの（1～4・7）と南側拡張部分から出土したもの（5・6、8～19）を掲載する。

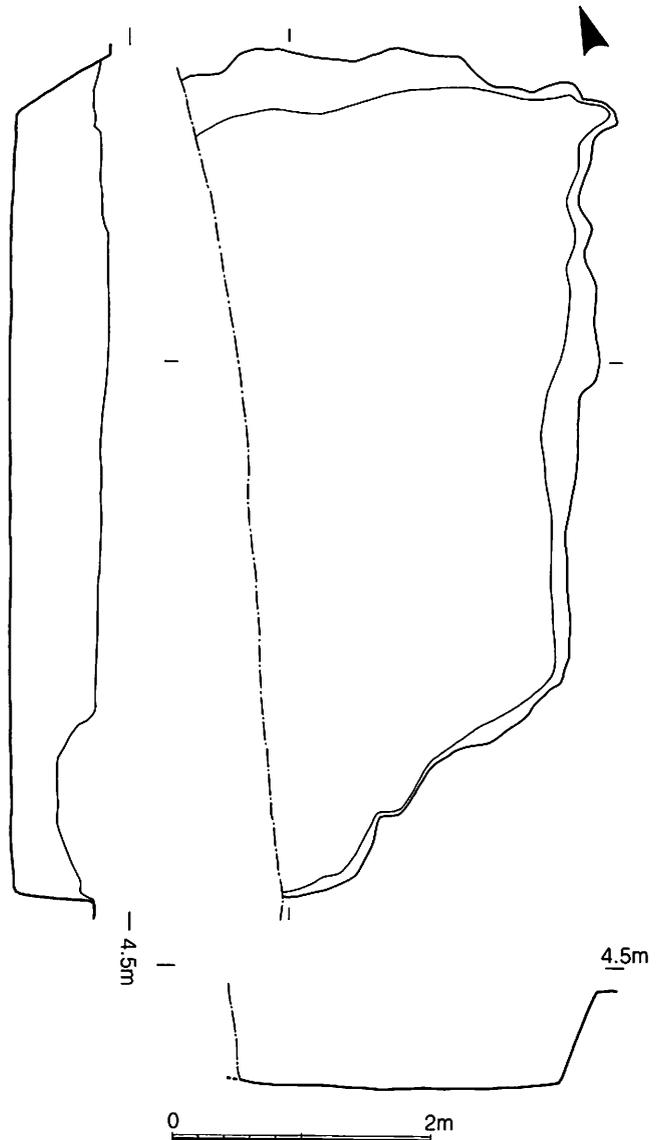
1は龍泉窯系青磁碗である。2～7・13は京都系土師器である。7はトリベに転用されたもので、内面にスラグが付着する。12は焼成後、口縁部に穿孔されている。13は表面が剥落した破片が接合したもので、土器焼成に伴う「破裂土器」の可能性が考えられるものである。10は内面に七宝繋ぎ文を施す青花皿E群、11は渦巻き文を有する青白磁梅瓶の体部破片であろう。14～16・18は備前焼播鉢で乗岡編年近世1a期に比定されるものである。17は備前焼壺である。19は三足を有する瓦質火鉢で、口縁部付近に貼り付けられた2条突帯の間に菊花文をスタンピングするものである。

SX208（第84図）

調査区中央部で検出された遺構で、壁面沿いのため全形は不明であるが長軸約6.7m、短軸約3.3m+αと非常に大型の掘り込み遺構である。最大深は約70cmで、逆台形状に掘り込まれているが、土層堆積は自然堆積状の様相であるため何らかの遺構の基礎地業とは考えにくく、どのような性格のものかは不明とせざるを得ない。なお埋土の上層は、焼土及び焼土を多量に含む土であり、ある程度埋積した状況でこうした埋土が流入して埋まっていることが観察された。また、埋土からは焼けたものを含む陶磁器がまとまって出土していることから、最終的にはSX210等と同時期に、火災処理に使用された可能性が推定される。

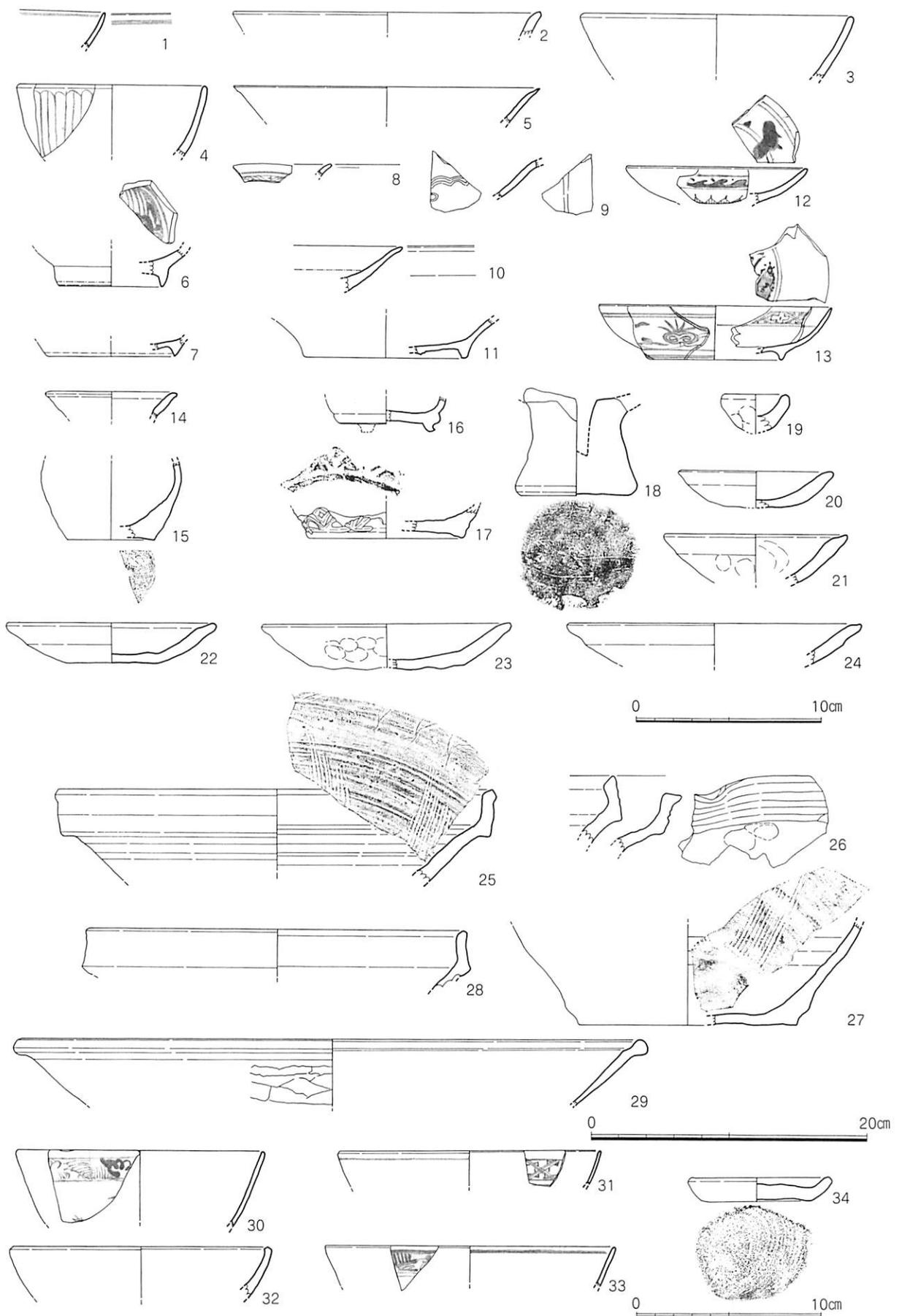
出土遺物（第85図・第86図）

1は漳州窯系の青花皿である。2～4は龍泉窯系の青磁碗で3は外面に退化した蓮弁文を施文する。4は剣先状の蓮弁文を有する。5・10は陶胎の白磁碗で、見込が無軸となるものである。6は青花碗C群の底部である。8は青花皿B2群で内面に四方襷文を有する。9は青磁皿で内外面に蓮弁状の文様を有するものである。12は青花皿C群、13は青花皿E群である。7・11は体部から口縁部が大きく外反する白磁皿である。11は高台内に多数の砂が付着している。14・15は備前焼徳利でそれぞれ別個体であるが、14が口縁部、15が体部から底部である。15は底部に糸切り痕を残す。16は中国産と考えられる陶器で三足がつくものと推定され、小型の壺等の容器であろう。全面に黒に近い黒褐色の釉が掛けられている。SK073で出土した蓋（第55図3）と組み合わせる可能性が考えられる。17は華南三彩陶器の水注とみられるものの底部破片

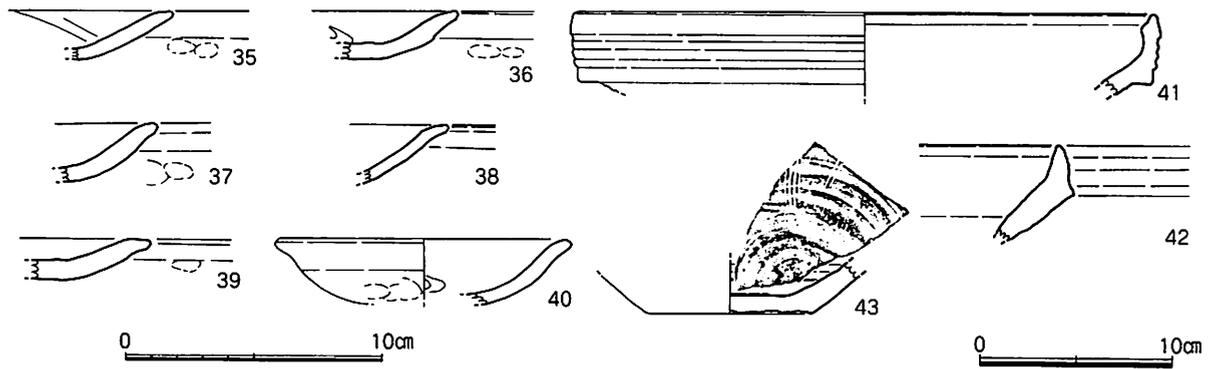


第84図 SX208平面・断面図 (1/60)

17は華南三彩陶器の水注とみられるものの底部破片

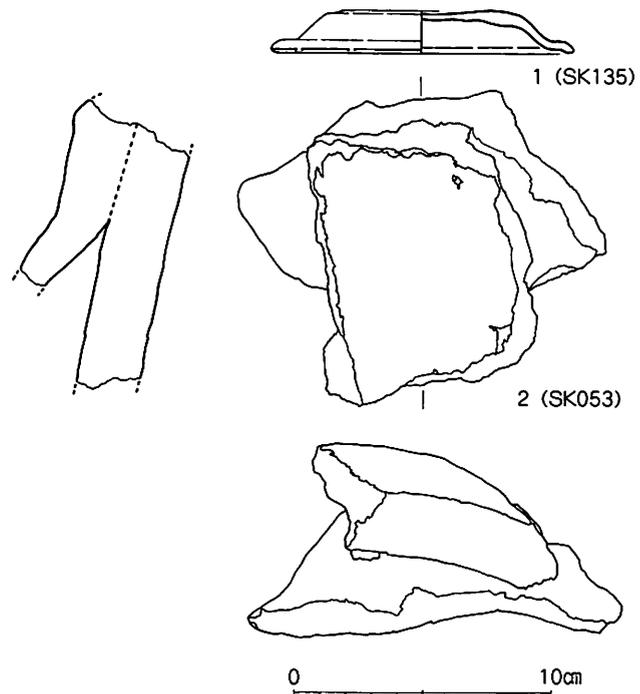


第85図 SX208出土遺物実測図1 (1~24・30~34:1/3, 25~29:1/4)



第86図 SX208出土遺物実測図2 (35~40 : 1/3, 41~43 : 1/4)

で、外面に蓮弁状の文様が太い線で陰刻されている。沖縄県首里城から出土した瓜形の水注⁽²⁵⁾と類似しており、同様の器形であった可能性が高い。白化粧の後施釉されていたものと推定されるが2次焼成により釉がほとんど失われているため元の色調を知ることができない。18は土師質土器の灯火具と考えられるものである。底部に糸切り痕を有し、ロクロ成形であることは明らかであるが、京都系土師器と類似した胎土を使用して製作されている。11は手づくねで成形されたトリベである。20~24は京都系土師器で、塩地編年2期に相当するものである。25~28は備前焼播鉢である。25~27は乗岡編年近世1期a、28は15世紀代に比定されるものであろう。29は瓦質土器の鍋である。外面にはケズリ調整の痕跡が著しい。



第87図 その他の遺構から出土した遺物 (1/3)

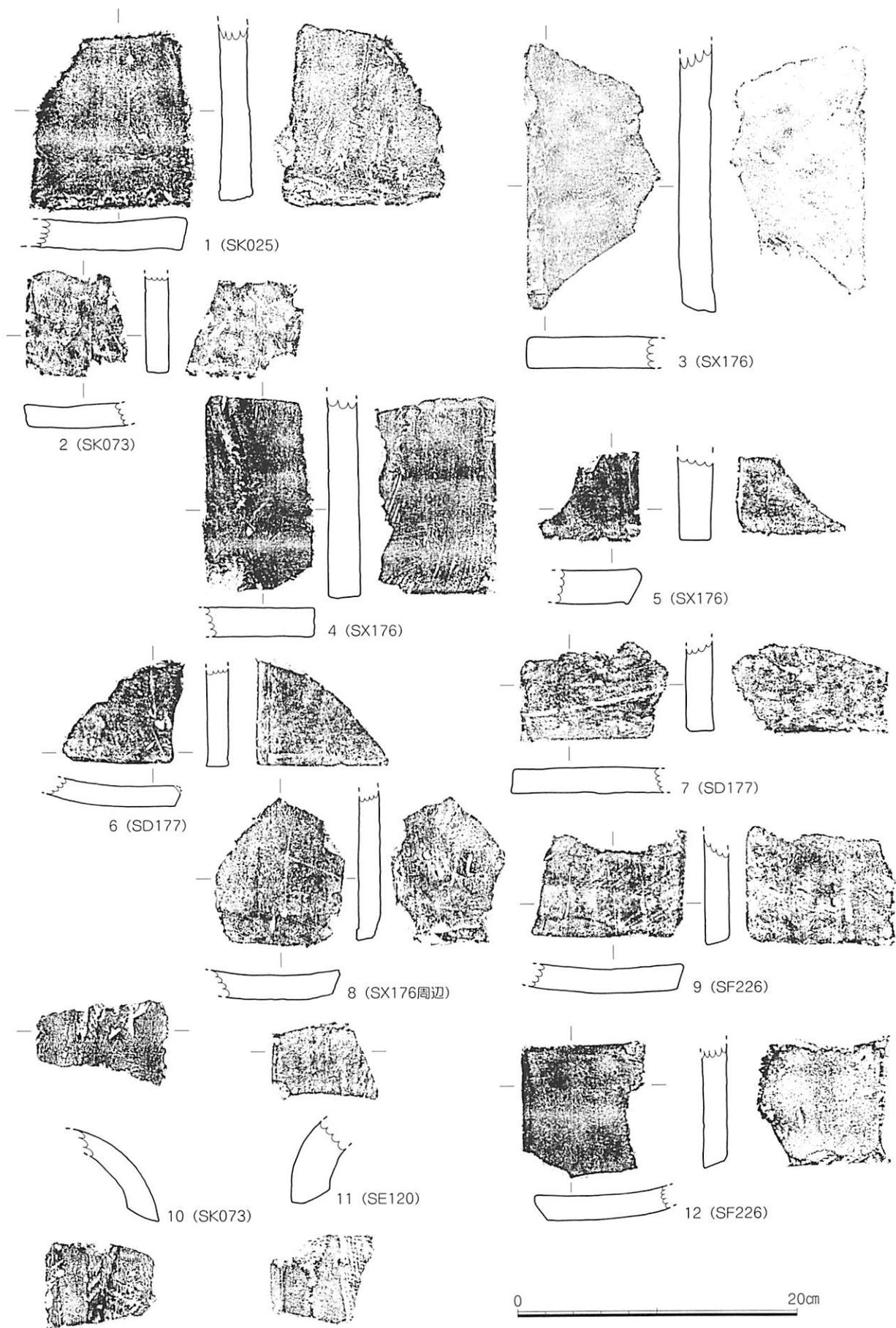
30・33は青花碗C群、31は青花皿E群であろう。32は青磁碗である。34はロクロ成形の土師器小皿である。35~40は京都系土師器で、概ね塩地編年2期に比定されるものである。41~43は備前焼播鉢である。

そのほかの遺構からの出土遺物 (第87図)

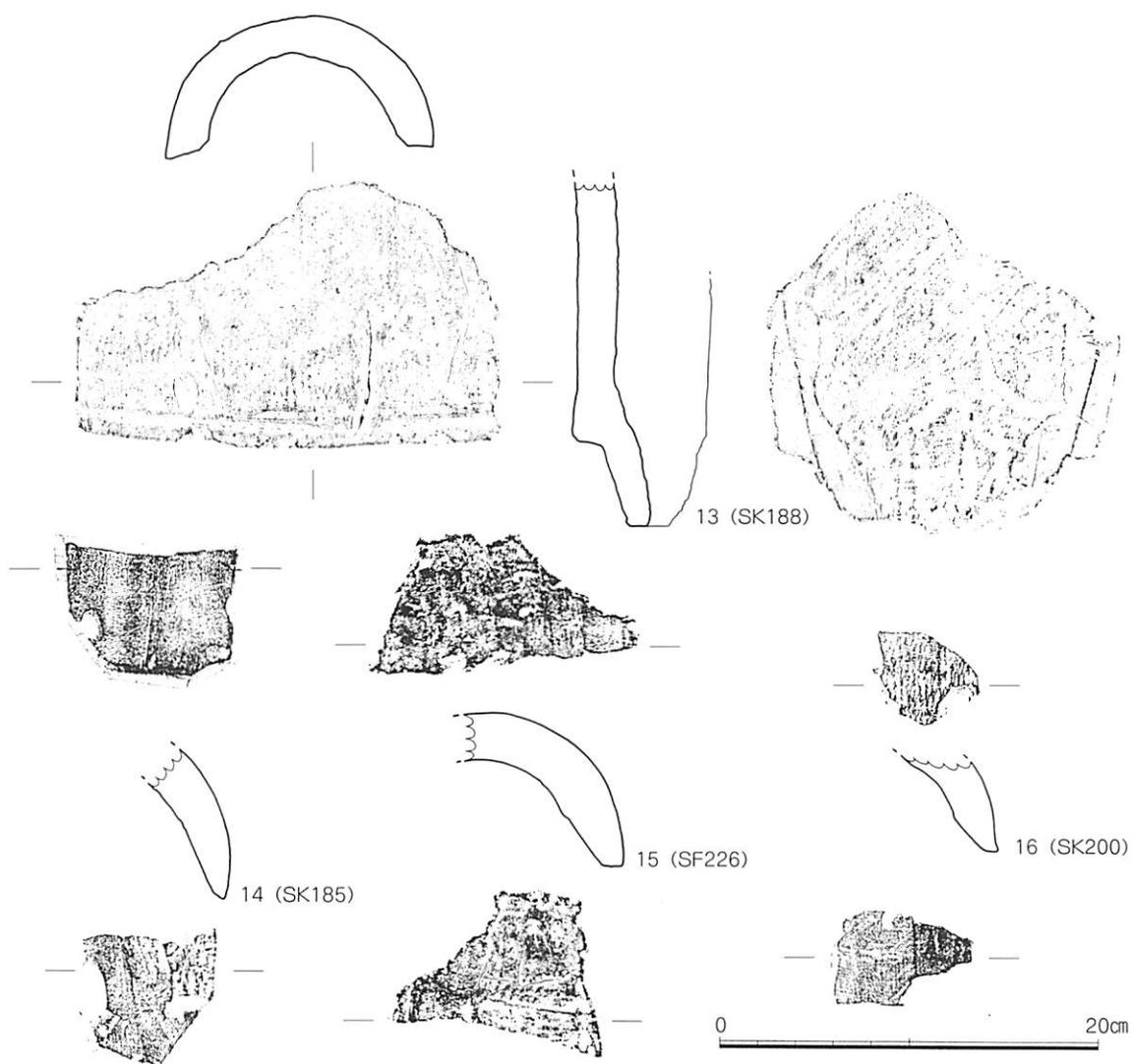
1はSK135から出土した土師器蓋で8世紀末から9世紀初頭に比定されるものである。SK135はSK188に切られている小土坑で、出土遺物は僅少であるがロクロ成形と見られる土師器片が出土していることから、中世の遺構と判断されるものである。2はSK053から出土した瓦で、2枚の平瓦が二次的に被熱して融着したものである。SK053はC-2区で検出された小土坑であり、瓦質土器やロクロ成形土師器の小片が出土していることから中世のものと見られる。

各遺構出土瓦 (第88図・第89図)

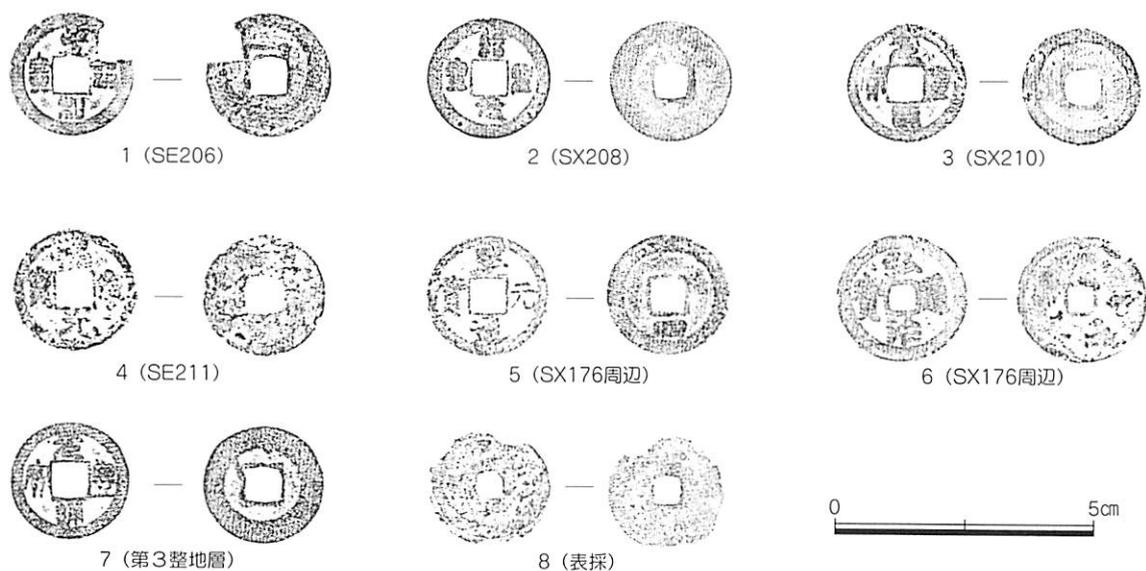
今回の調査地点では少量ではあるが瓦が出土している。一部の遺構でまとまって出土するような傾向は認められなかった。



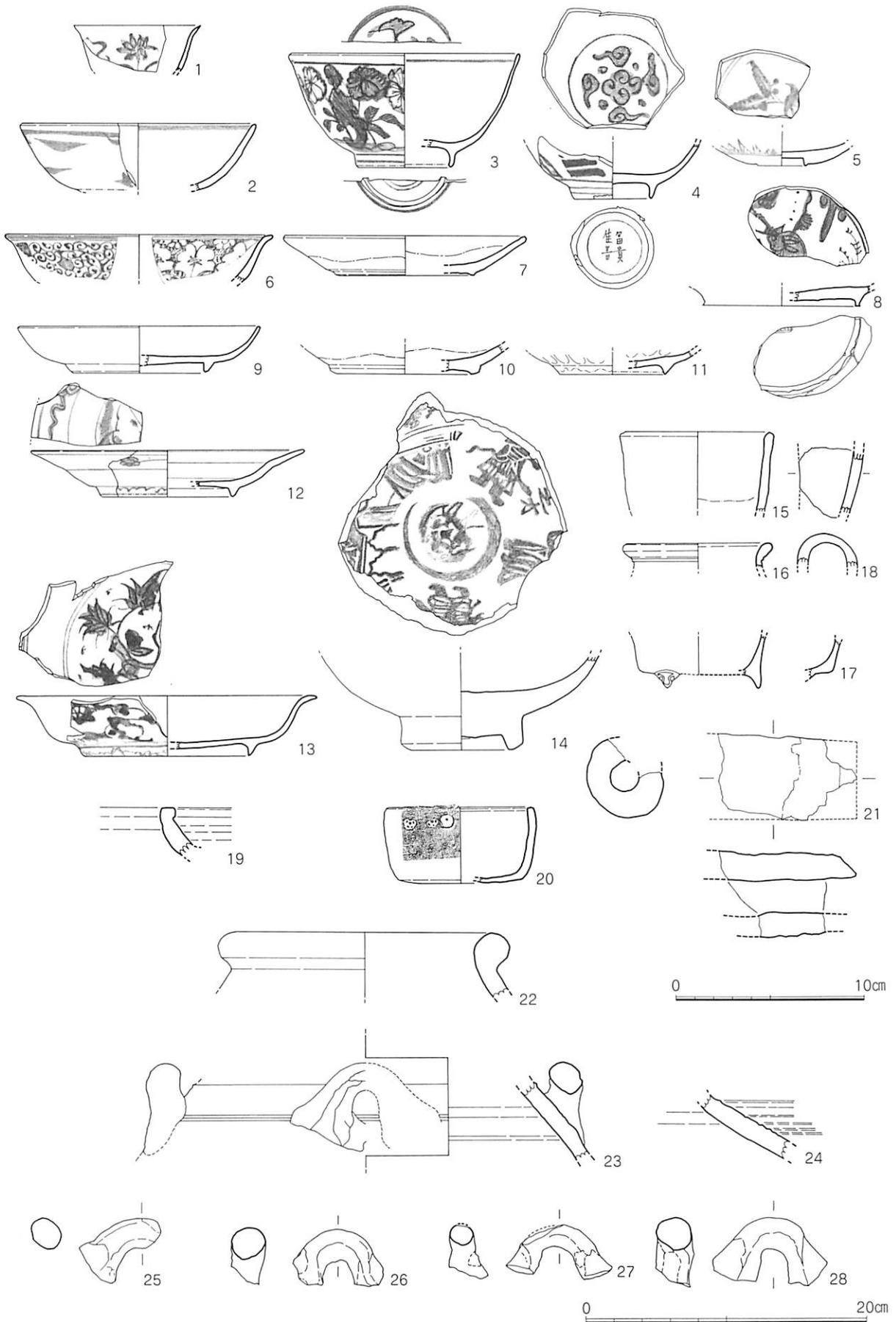
第88図 各遺構出土瓦実測図1 (1/4)



第89図 各遺構出土瓦実測図 2 (1/4)



第90図 各遺構出土銭貨拓影 (2/3)



第91図 包含層出土遺物、採集遺物実測図 (1~21:1/3, 22~28:1/4)

1～9・12は平瓦である。1面もしくは両面に糸切り痕を残すものが多く認められ、一枚造りにより製作されるものである。10・11、13～16は丸瓦である。外面にはタタキ痕内面には布目ないし糸切り痕が認められる。いずれも16世紀末に出現するいわゆる鉄線引きの痕跡は認められなかった。

各遺構出土銭貨（第90図）

いずれも中国銭と見られるものである。1はSE206から出土した至和通寶で、初鑄年は北宋の至和元年（1054年）である。2はSX208から出土した紹聖元寶で、初鑄年は北宋の紹聖元年（1094年）である。3はSX210から出土した元豊通寶で、初鑄年は北宋の元豊元年（1078年）である。4はSE211から出土した熙寧元寶で、初鑄年は北宋の熙寧元年（1068年）。5はSX176拡張区から出土した慶元通寶で、初鑄年は南宋の慶元元年（1201年）。6はSX176拡張区から出土した弘治通寶で、初鑄年は明の弘治元年（1488年）である。7は道路状遺構整地層から出土した元豊通寶である。8は表面採集された帰属する遺構が不明なもので、銭名は判読困難である。

包含層出土遺物・採集遺物（第91図）

本章の冒頭で触れたように、今回の調査においては、表土剥ぎの際やや深くまで重機により掘り下げてしまったため、遺構検出時に帰属する遺構が不明な状況で多くの遺物が出土した。これらの遺物は整理作業の段階で接合作業を行い、遺構に帰属するものと接合した場合にはその遺構に帰属させている。ここでは遺構に帰属させることのできなかつた包含層出土遺物及び、遺構検出時等の採集遺物を掲載する。

1は青花小坏で外面には花唐草文を描く。2は漳州窯系の青花碗で体部下端以下は無釉である。3は青花碗E群で高台内には二重の圈線が描かれる。4も青花碗E群であるが、見込の盛り上がりがわずかなものである。高台内に「富貴佳器」銘がある。二次被熱により他の陶磁器の釉が付着している。5は青花皿C群、6は青花皿B1群である。7・10は見込と体部下半以下が無釉で低い削出高台の粗製白磁皿である。8は見込に鹿？を描く青花皿で高台内に落款状の銘が見られるものである。SX210出土の第11図58と類似した青花皿E群であろう。11は青磁菊皿で二次被熱により表面がすりガラス状に荒れている。12は口縁部が屈曲する青花皿F群である。13は青花皿B1群で二次被熱により他の陶磁器の釉が付着している。14は青磁鉢で、内面に人物等の文様をスタンプにより施文するものである。人物と人物の間には「口之才」と判読できる文字も施文される。いわゆる「人形手」と称されるもので、中国龍泉窯系の15世紀～16世紀前半の製品と考えられる。15は青磁香炉である。16は黄緑褐色の薄い釉が施釉された陶器瓶で、中国の製品と考えられる。17は青磁香炉で三足がつくものである。18は灰色磁器の掛け花入れで、SD177出土の第77図13と同一個体である可能性のあるものである。19は中国産と考えられる褐陶器壺の口縁部である。20は瓦質土器でおそらく香炉と考えられる。外面には花文がスタンプされる。21は土製のふいご羽口で内径は1.5cmをはかるものである。23・24はタイ陶器四耳壺で同一個体である可能性の高いものである。外面には褐釉がかけられている。口縁部はやや楕円形状の玉縁となり、大振りの耳がつけられるものである。耳と重なる位置の器表面には2条の凹線が確認できる。SX210出土の第19図135に類似しており同様の器形（3類）となる可能性が高いと考えられる。24はタイ陶器壺の肩部破片と考えられ、SX210出土の第20図152と同一個体の可能性がある。外面には削出の突帯と4条の沈線が確認でき、黄白色に発色する釉がかけられている。25～28はタイ陶器四耳壺の耳である。

註

(1) 菅原正明1992「甕倉出現の意義－中世経済の一側面－」『国立歴史民俗博物館 第46集』

(2) 註1文献。

(3) 鈴木裕子1998「出土資料からみた明末の陶器－「呉須赤絵と交趾三彩のうつわ－黄瀬戸・志野・織部・青

手古九谷の源流を求めて」展から－」【陶説】第546号

- (4) 大庭康時氏および森本朝子氏のご厚意により、博多遺跡群の資料を実見させていただいた際、森本氏よりご教示をいただいた。
- (5) 福建省博物館1993「漳州窯 福建省漳州地区明清窯跡調査発掘報告之一」
- (6) 朝日新聞社1988「青花磁器展－上海博物館所蔵－」青花魚藻文瓶がこれにあたり、口縁部に「大明萬曆年製」銘が呉須により描かれている。吉田寛氏よりご教示いただいた。
- (7) a National Museum, Philippines 1993 "Saga of the San Diego"
b中野良一・柴田圭子編2000「湯築城跡」第2分冊
なお、文献a掲載のものは四耳壺であり、文献b掲載のものも四耳壺と推定されている。
- (8) 中国南部福建・広東産の可能性については山本信夫氏および森本朝子氏によりご教示いただいた。また、直接実見していないが鳥根県富田月山城城下町において類品が出土しているらしい(吉田寛氏のご教示)。
- (9) 大分市教育委員会2001「大分市埋蔵文化財調査年報」vol. 11また、本報告書は平成14年度末に大分市教育委員会より刊行される。「府内城・城下町跡－第12次発掘調査報告書－」
- (10) 中西武尚氏より御教示いただいた。中西武尚1999「戦国期を生きぬいた壺」【Funai府内及び大友氏関連遺跡総合調査研究年報】Ⅷ大分市歴史資料館
- (11) 中西武尚2001「茶の湯と宗麟」【南蛮都市・豊後府内 都市と交易】大分市教育委員会・中世都市研究会
中西によれば、2001年8月現在、国内の伝世品・請来品7、遺跡出土品7、国外の伝世品・出土品5が確認されている。
- (12) 中西武尚氏により作成されたものである。註10文献に掲載されている。
- (13) 木村幾多郎氏にご教示いただいた。
- (14) 羅善華 1994「朝鮮前期 白磁古窯址考」【第4回九州陶磁研究会 資料】
梨花女子大校博物館・韓国道路公社1986「廣州朝鮮白磁窯址 発掘調査報告 一樊川里5
號・仙東里2・3號」
- (15) 註7a文献。なお、沖縄県首里城跡出土資料や、堺環濠都市出土品のI類(註17文献)も口縁部形態などが類似するが、これらは基本的に黒褐色の釉がかけられるものであり、その年代についても15世紀台に遡ると考えられるものであるため、サンディエゴ号出土品をもって代表させた。
- (16) 續伸一郎1989「堺環濠都市遺跡出土のタイ製四耳壺」【貿易陶磁研究】No9日本貿易陶磁研究会
- (17) 註16文献。
- (18) 大庭康時編1992「博多30－博多遺跡群第60次発掘調査報告書要－」福岡市埋蔵文化財調査報告書第559集
福岡市教育委員会
- (19) 註7a文献。サンディエゴ号からは23個体出土している。
- (20) 坂井隆2002「東南アジア群島部の陶磁器消費者」【国立歴史民俗博物館研究報告】第94集
鈴木重治1989「ケニア・タンザニア出土の中国陶磁器－1987年度の踏査から－」【貿易陶磁研究】No9日本貿易陶磁研究会
佐々木達夫1989「エジプトで中国陶磁器が出土する意味」【考古学と民族誌 渡辺仁教授古稀記念論文集】
- (21) 滋賀県立近江風土記の丘資料館1989「中世の信楽－その実像と編年を探る」
- (22) 上野淳也氏よりご教示いただいた。なお、本報告書は平成15年3月に刊行される予定である。
池邊千太郎・上野淳也編2003「大友府内6 中世大友府内町跡第14次調査報告書」大分市教育委員会
- (23) 韓国の民俗資料中に同様のものが存在し、【韓国国立民俗博物館展示図録】中に「骨牌」として紹介され、写真も掲載されていることを木村幾多郎氏にご教示いただいた。この遺物については「ドミノ様骨角製品」

として紹介したことがあったが（高島2001「戦国時代豊後府内の貿易陶磁器」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』）、「骨牌」の呼称で正式報告するものである。

(24) 塩地潤一1997「戦国時代土師器碗についての一考察」『大分・大友土器研究』第16号

(25) 沖縄県立埋蔵文化財センター2001「首里城跡ー下之御庭跡・用物座跡・瑞泉門跡・漏刻門跡・廣福門跡・木曳門跡発掘調査報告書ー」第45図14・17・20がこれにあたる。

第3章 まとめ

大甕埋設遺構SX210出土資料について

今回の発掘調査において検出された遺構・遺物のうち最も注目されるものは、大甕埋設遺構SX210である。この資料については第2章で述べているように、いくつかの所見により火災処理遺構と判断されたものであり、極めて良好な一括資料といえるものである。これまで複数の機会に概要を公表してきたが⁽¹⁾、本報告書のまとめにあたり、改めて検討を行ってみたい。

SX210から出土した陶磁器及び土器については、個体識別を実施し、器種・素材・産地別に分類してその組成を分析しており、第2表に示す。なお、土師器については出土した資料の大半が小破片であり、個体識別が困難であった。このため、破片数に近い計数結果となっており、本来の個体数はかなり少ない可能性がある。

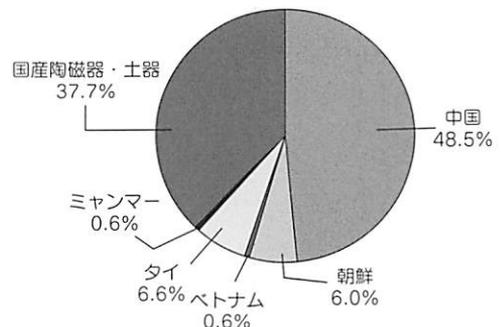
出土遺物中の主体を占め、編年上の鍵ともなる青花の組成については、皿E群および碗E群が主体をなしているもので、漳州窯系のものも青花のうちの約21%を占める。このような組成は根来寺坊院跡⁽²⁾（1585年焼亡）、大阪城豊臣前期⁽³⁾（1582年～1598年）、小田原城跡など16世紀後半から末に比定される資料に類似しているものであるといえる。

国産の陶器についてみると、主体を占めるのは備前焼であり、これに若干の信楽焼が加わる。SX210出土の備前焼で最も多くみられるものは播鉢であるが、これらの中には内面に交差する摺目を有するものが多数みられ、播鉢のほとんどを占めることが注意される。備前焼については近年、消費地における編年作業が進展し、乗岡実氏により詳細な編年案が提示されているが⁽⁴⁾、先述した属性を有する播鉢は天正年間（1574年～1591年）から

第2表 SX210出土陶磁器組成

貿易陶磁器					国産陶磁器・土器						
産地	種別	器種	個体数	%	産地	種別	器種	個体数	%		
中国	青花	碗C群	1		備前	焼締陶器	播鉢	8			
		碗E群	2				壺	2			
		皿B1群	2				水屋甕	4			
		皿C群	2				瓶?	1			
		皿E群	18				德利	1			
		皿F群	3				薬研	1			
		大皿	2				計	17			
		小坏	2				信楽	焼締陶器	壺	1	
		壺	2						鉢	1	
		碗	5						計	2	
	漳州窯系青花	皿	4		在地	土師質土器	火鉢	1			
		色絵磁器	皿	1				鉢	1		
		白磁・青白磁	皿	11		不明	瓦質土器	鍋	1		
		灰色磁器	碗	6				器種不明	2		
			皿	1				計	5		
		青磁	皿	3				国産陶磁器・土器計		63	37.7%
			碗	1							
		黒釉・褐釉陶器	瓶	2							
			壺	6							
			三彩陶器	壺	3						
	焼締陶器		不明	1							
			播鉢	1							
	朝鮮	白磁	皿	8	48.5%						
緑褐釉陶器		瓶	2								
ベトナム	焼締陶器	計	10	6.0%							
		長胴瓶	1	0.6%							
タイ	陶器	壺	11	6.6%							
ミャンマー	黒釉陶器	壺	1	0.6%							
貿易陶磁器計			104	62.3%							

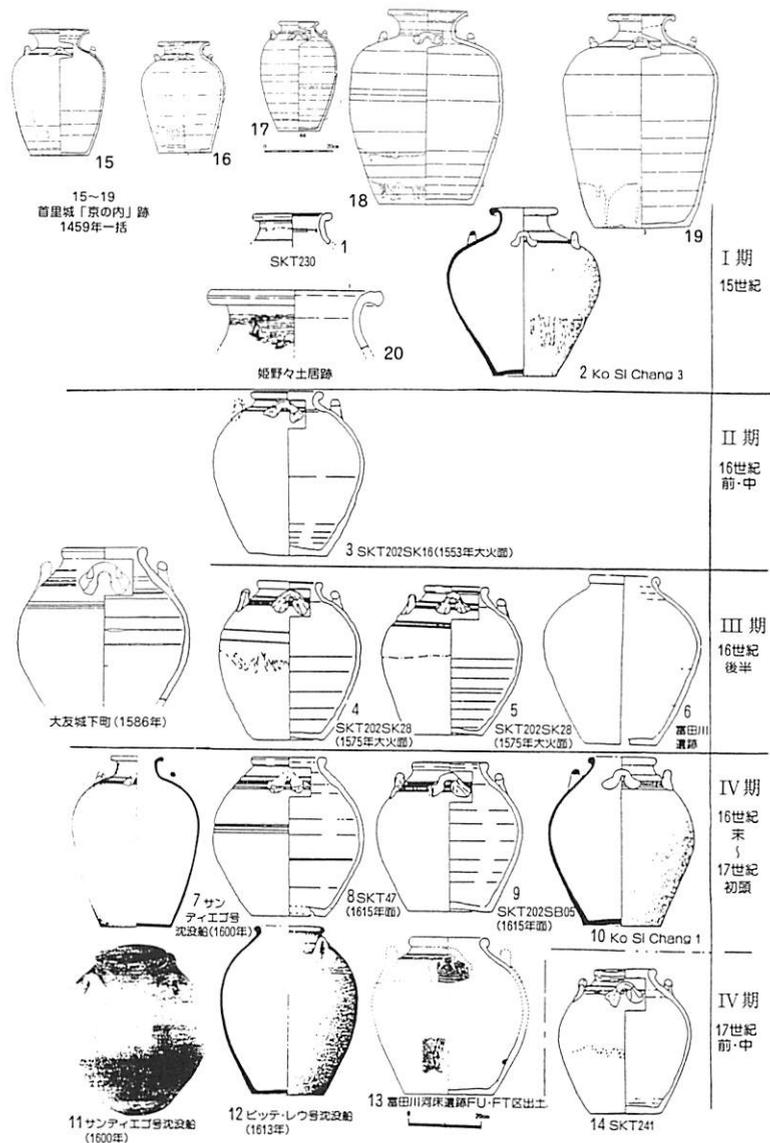
SX210出土遺物産地別組成



出現し、乗岡編年近世1期bとして位置づけられるものである。この他、SX210出土資料中には唐津焼（肥前陶器）が全く含まれていないことが注意される。唐津焼については、その初現が1580年頃まで遡る可能性はあるものの、近年の大坂城の調査成果によれば、大坂において多数出土し始めるのは1598年以降の豊臣後期であるとされる。豊臣前期に位置づけられる資料もあるが依然少数にとどまっている⁽⁵⁾。また、堺環濠都市遺跡においては天正13年銘の木簡資料を共伴した唐津焼の出土例があるものの、出土状況から、天正13年（1585）～文禄3年（1594）頃に唐津焼が搬入されたと考えられ、文禄年間（1592～1595）には確実にあるらしい⁽⁶⁾。一方、唐津焼の生産地における初現期の唐津焼については戦国時代末期の在地領主波多氏との関連が注意されている。初期唐津焼の窯は波多氏の岸岳城周辺に分布しており、波多氏の庇護の下で初期の唐津焼が生産されたと考えられるが、波多氏改易（1594年）とともに解体するらしい。こうした窯で生産される初期の唐津焼出現時期については、遅くとも天正末年（1591年）頃には生産が開始されていたと考えられている⁽⁷⁾。波多氏改易（1594年）と時期を同じくして朝鮮出兵により連行された朝鮮人陶工により肥前さらには九州各地で唐津焼の窯が開かれるようである。大坂や堺等の消費地資料から判断する限り唐津焼の生産量が増大するのは波多氏改易（1594年）・岸岳系諸窯の終焉時期とほぼ一致しているようであり、1590年代中頃以降と考えて大過ないのではあるまいか。よって、唐津焼が出土していないSX210については1590年代半ば以前に位置づけられる可能性が高いと判断される。

SX210出土資料個々についての以上のような年代観をふまえると、SX210の廃絶時期は1580年代以降1590年代中頃以前である可能性が高いということになる。そうした場合、府内における当該時期の火災記録としては、良好な一次史料が未だ未発見ではあるが、天正14年（1586年）末の島津氏の府内侵攻に伴う火災がまず想起されるであろう。SX210周辺にはその後、に再建されたものと考えられる遺構が存在しないことから考えても、この遺構が府内侵攻による被災後の伴う火災処理である蓋然性は高いと考えられる。したがって、SX210から出土した陶磁器類は府内侵攻後の1587年、もしくはそれにきわめて近い時期の一括資料である可能性が高いと判断しておきたい。

SX210から出土した陶磁器のうち最も多くを占めるものは中国産



第92図 堺環濠都市等出土タイ陶器壺編年図（森村2002）

陶磁器であるが、タイ産をはじめとする東南アジア産陶器や朝鮮王朝産陶磁器が一定量出土していることも注目される。

タイ産の陶器はいずれも大形の壺（四耳壺）と考えられるものであり、SX210から出土したものだけでも11個体存在する。このほか、表土剥ぎの際出土したものについても、本来SX210に帰属する可能性が高いものを複数含んでおり、出土個体数はさらに多いものになる。ちなみに調査区全体では、表採品等も含めて少なくとも18個体に達するほどである。タイ産の壺については、その器形について概ね1～3類に分類できる3種類があると第2章で報告した。これについては既に堺環濠都市遺跡において出土資料の分類と編年が試みられており、時期による型式変遷も想定されているところである⁽⁸⁾（第92図）。本報告の1類は堺環濠都市出土品のⅠ型式、2類はⅡ型式ないしⅢ型式、3類はⅣ型式に相当すると思われるが、堺Ⅳ型式の出土遺構は1615年の大坂冬の陣焼土層に比定されるものが主体であるらしい。一方、1600年にフィリピン沖で沈没したサンディエゴ号の資料をみるとそこには本報告1類と3類の資料が同時に含まれており、SX210と極めて似通った組みあわせであることが知られる。そのため、これらの壺については、型式学的な新古ととらえ得る関係があるものの、16世紀末～17世紀初頭にかけては同時に使用されていたものと考えられよう。従って、SX210で器形が異なるものが同時に出土している事象も矛盾無く理解できるものといえよう。

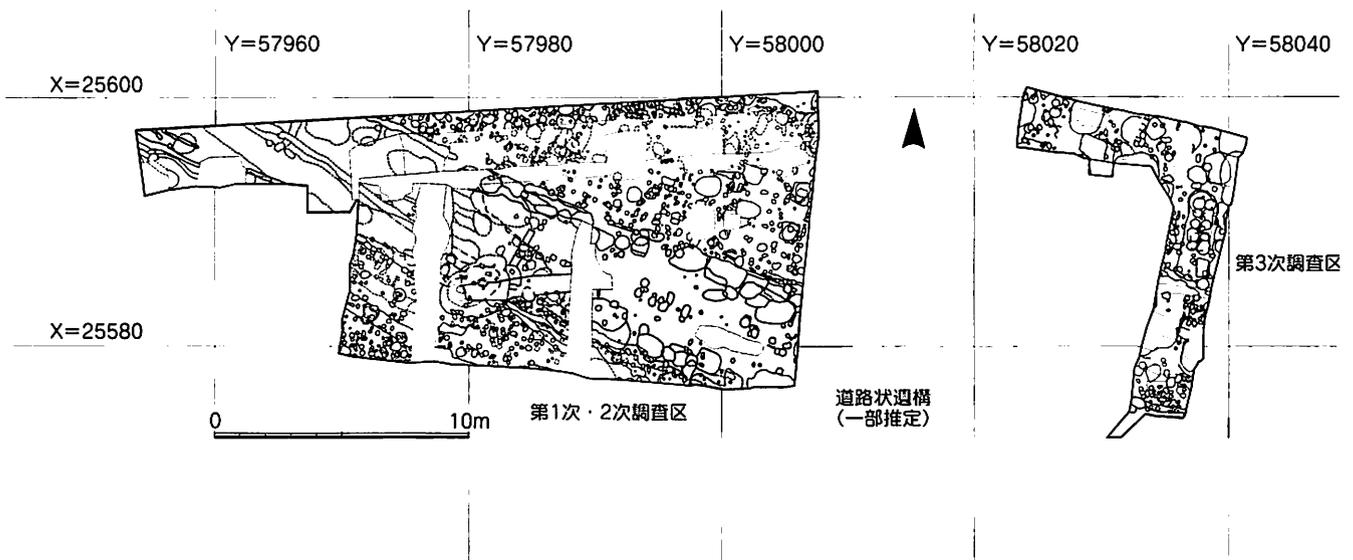
さて、SX210から出土した陶磁器を器種別にみると、タイ陶器壺のほか、ミャンマー産三耳壺、ベトナム産長胴瓶を加えた東南アジア産陶器はすべて貯蔵具であることが注意される。これらについては、陶器それ自体に商品価値があるというよりも、商品となる内容物を運搬する容器としての用途を考えるのが妥当と判断されるものである。中国産陶器貯蔵具についても、華南三彩陶器はそれ自体に価値をおいて招来されたと考えられるとしても、大型品を含む褐釉陶器が6個体以上あり、これらは運搬容器としての機能が想定される貯蔵具として位置づけられる。沈没船サンディエゴ号では、これら東南アジア産陶器貯蔵具や中国産褐釉陶器貯蔵具が積み荷として多量に積載されていたことが知られており、運搬容器としての使用状況を如実に示しているといえる⁽⁹⁾。このように、SX210出土遺物を特徴づける要素として、運搬容器としての機能を有する海外産陶器貯蔵具のまとまった存在を挙げることができよう。

このような出土状況が見られる背景としては、やはり当時の府内がもっていた中国南部や東南アジアとの結びつきを見逃すことはできないであろう。戦国時代の府内においては、中国あるいは東南アジアとの貿易を行った仲屋宗悦に代表される商人や中国から渡来した職人など、中国あるいは東南アジアとの関わりが深い人物が居住していたことが指摘されている⁽¹⁰⁾。このことに関連すると思われる遺物もSX210から出土している。それは中国産と推定される焼締陶器播鉢である。備前焼播鉢が圧倒的に大きいシェアを占めていた当時であって、こうした日常雑器が商品として流通するとは考えにくく、その産地と推定される中国南部とのより直接的なつながりが示唆される。

この他、朝鮮王朝産陶磁器が占める比率も6.0%とかなりまとまっていることが指摘できる。朝鮮王朝産陶器については、中世に朝鮮との貿易拠点であった博多においては、供膳具中15～20%と高率の組成比率を示すが、堺等他の地域においては1%未満できわめて少数しか出土していない⁽¹¹⁾。従って、SX210における6%という占有率は、博多には及ばないものの通常の遺跡に比べ著しく高いといえる。大友氏は博多息浜を拠点として15世紀以来朝鮮王朝との貿易を行ってきており、府内に居住していたとされる仲屋宗悦の取引先にも東南アジアや中国と共に朝鮮王朝の物産があったことが知られている。朝鮮王朝産陶器のまとまった出土についても、府内における商人の活動と関連して理解できる可能性があるといえよう。

調査区周辺の地割について

調査区の南端で検出された道路状遺構SF226については、これまで、単純に第1・2次調査区で検出された東

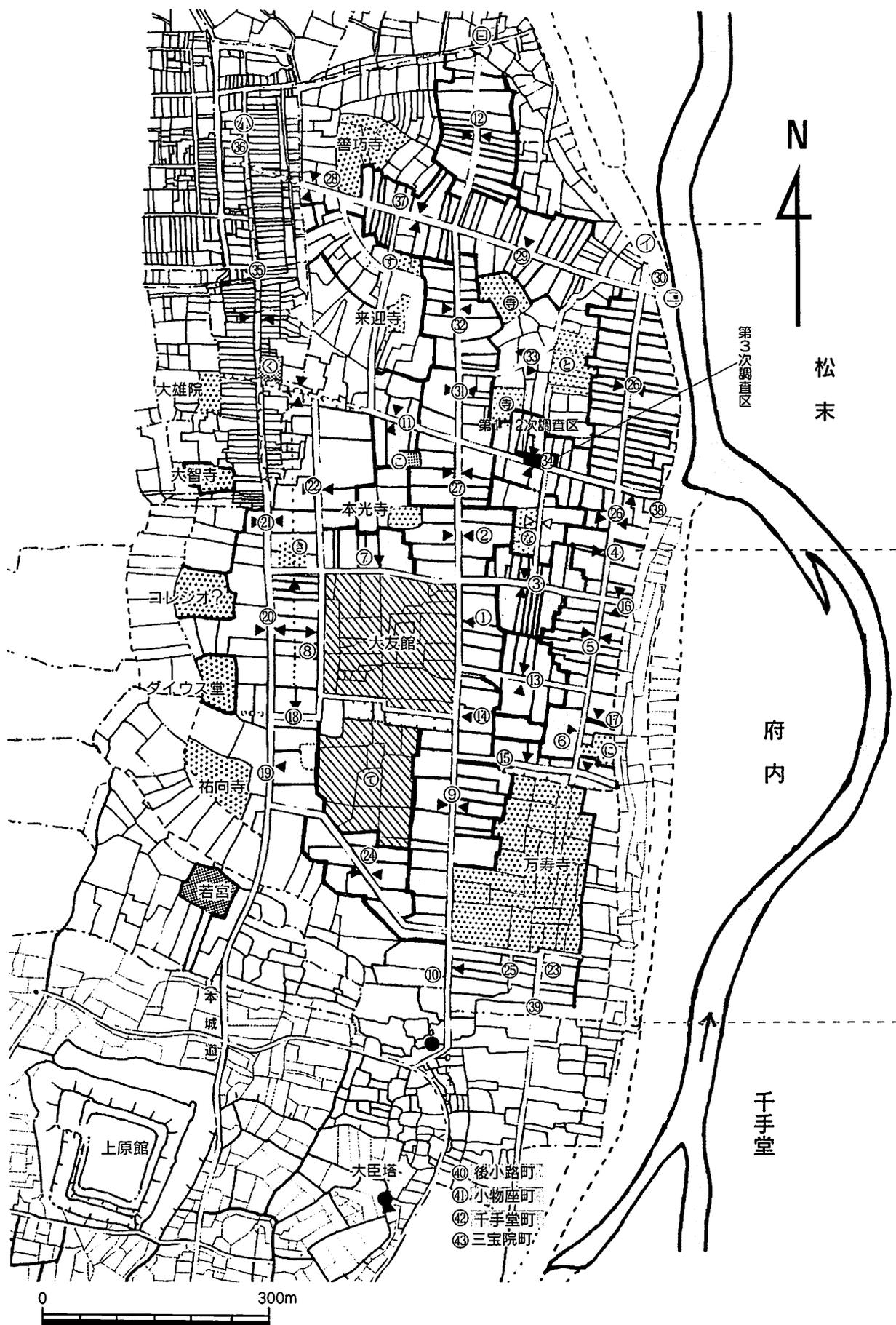


第93図 中世大友府内町跡第1次～3次調査区位置関係図 (1/600)

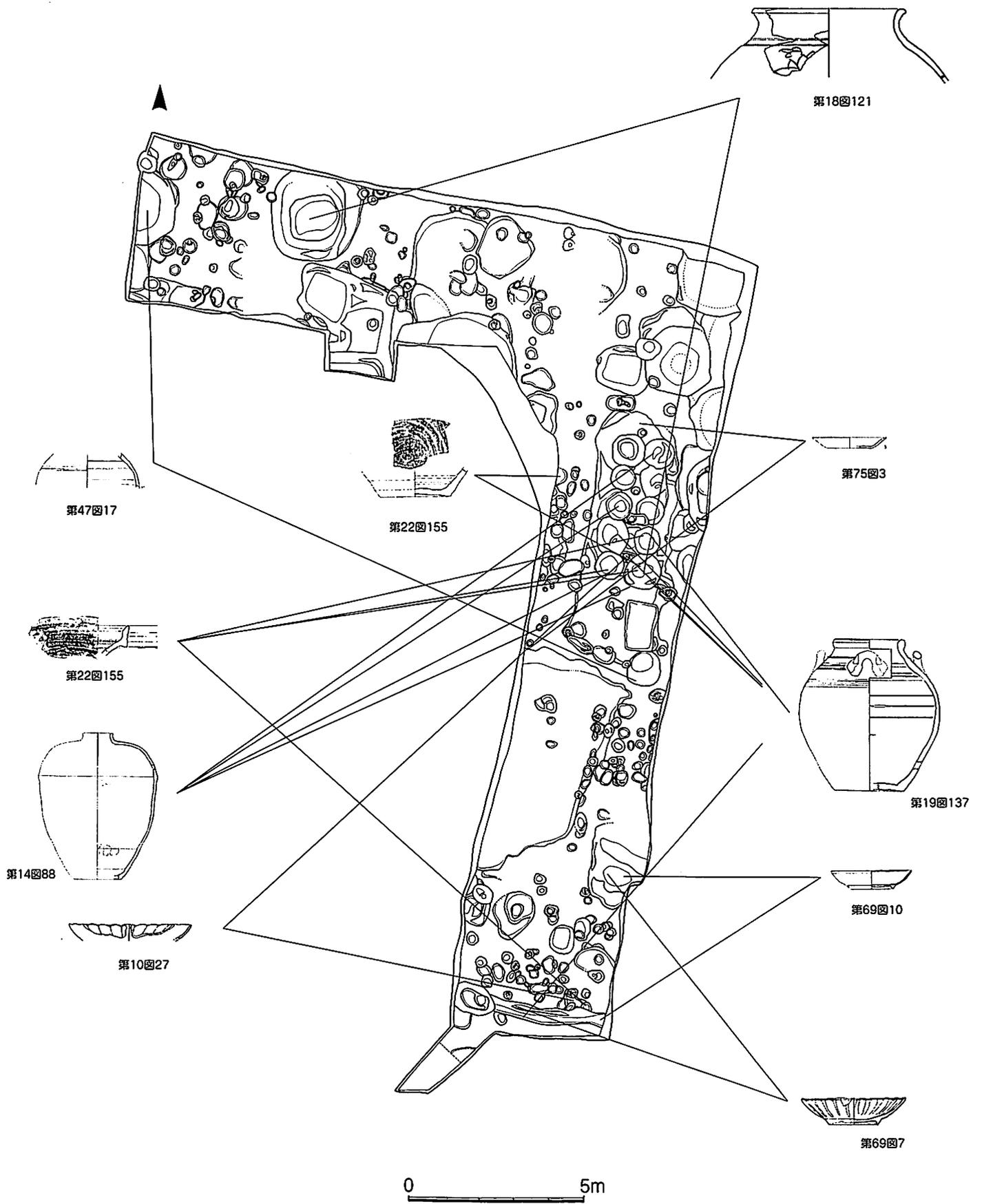
西方向の道路状遺構の延長としてとらえてきた⁽¹²⁾。しかしながら、今回の報告を行うに当たり、改めて見直しを行った結果、側溝と考えられる溝SD177の主軸方向が第1・2次調査区で検出された道路状遺構に比べやや南に振っているように思われることがやはり無視できないと判断した。すなわち第1・2次調査区で検出された道路状遺構はN-67°-Wの方向であるのに対し、SD177から推定される道路状遺構の方向はおよそN-80°-Wに近く、かなり異なっていると判断される。このN-80°-Wという方向は、SX210の主軸方向N-9°-Eとほぼ直交するものであり、さらにこれは中世府内町の基本地割のうち15世紀後半以前に遡るとされる、N-10°-E⁽¹³⁾と合致するものと考えられる。本調査区の東にはN-10°-E方向の南北道路が想定されており、これが府内において最も早く成立したと想定される道路「一之大路」⁽¹⁴⁾である。今回検出された道路状遺構はこの「一之大路」と直交することが推定されるのである。

ところで、「戦国時代の府内復原想定図」⁽¹⁵⁾によれば、第1・2次調査区内において南北方向の道路がT字形に交差するように復原されているが(第3図・第4図)、これは発掘調査によっては検出されなかった。一方、戦国時代府内の復原に関しては、明治時代の地籍図をより重視する形で行われた大分市歴史資料館による「府内」の現地比定図がすでに作成されている⁽¹⁶⁾(第94図)。それによれば、第1・2次調査区と今回の第3次調査区の間にも現在も存在する道路の位置に、未発見の南北道路が比定されるのではないかと推定されている。この現地比定と今回の調査所見をあわせると、名ヶ小路町から北に延びる南北道は中之町の交差点から西に延びる東西道と本調査地点の南西ではほぼ直角に交差する可能性が高いと考えられる(第96図)。道路の交差が、T字形となるか十字形になるかは不明であるが、この交差点付近を境として、東西道路が屈折し、その方向を変えているものと推定される。

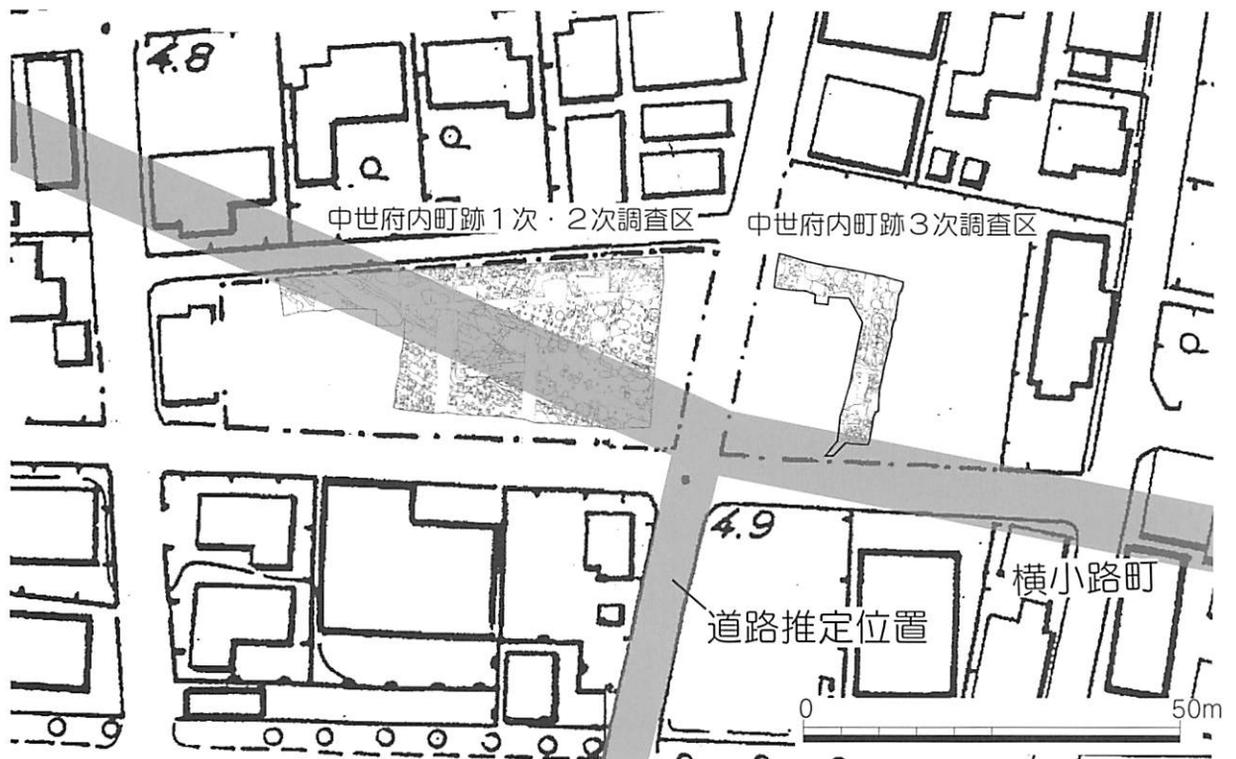
第3次調査区内での遺物の接合関係についてみると第95図のようになり、SX210とSE120、SK025とSK188の間で接合関係があるなど調査区全域にわたって接合関係が認められることから、これらの遺構が同一の地割内にあったことが示唆される。また、SX210の主軸方向は、東西方向の道路状遺構SF226と直交しており、さらに、調査区全体における遺構の分布状況を見ると、調査区の北辺付近に井戸が多く分布していることが観察される。以上のことから第3次調査区は、南側を表とし北側を裏としてSF226に面していた屋敷地の一部であったことが推定できる。この屋敷地は東西道路SF226と先述した未発見の南北道路との交差点に面した位置に所在したことが



第94図 地籍図に基づく戦国時代府内 (大分市歴史資料館1992を一部改変)



第95圖 調査区内出土遺物接合関係図 (1/150)



第96図 中世府内町道路推定位置図 (上:1/5000, 下:1/1000、大分市史中巻付図Ⅱを調査結果により修正)

推定されることになる（第96図）。

検出された遺構の帰属時期について

今回の調査で検出された遺構は、SX210に代表される16世紀後半～末に位置づけられる遺構が主体を占めている。これよりも確実に遡る時期の遺構はきわめて少なく、SK080等があるのみである。ただ、調査区が160㎡と狭いため完掘できていない遺構もあることや、道路状遺構SF226下層の遺構が調査できていないことから今回の結果をもって判断してよいかどうか問題があると考えられる。しかし、少なくとも16世紀前半に道路状遺構が築造されて以降、それに面する位置に遺構が展開した状況は窺うことができ、遺構の展開と道路状遺構の構築が密接に関連していると判断できる。

ところで、今回の調査では、SX210に代表される島津軍の府内侵攻（1586～1587）時に比定できる可能性がある遺構よりも明らかに後に築造されたと判断できるものについては全く検出されなかった。島津軍の府内侵攻後、府内城の築城（1597年～）と町屋の最終的な移転（1608年）までには最大約20年の時間幅があり、指標となる遺物である唐津や志野の出土により判別が可能と推定される。しかし、これらの遺物を伴う遺構は検出されず、今回の調査区においては、府内侵攻後の再建は確認することができなかった。

おわりに

本調査地点において多量に出土した東南アジア産陶器については、調査以来5年余りの間に中世大友府内町跡や大友館跡の調査が飛躍的に進んだにもかかわらず、依然として一調査地点でこれを越えるまとまりをもって出土した例を見ない状況が続いている。こうした状況からは、戦国時代府内における本調査地点の特殊性が次第に浮き彫りにされつつあると見てよいように思われる。これにはこの地点に居住していた特定人物の活動といったきわめて具体的な歴史事象が関わっている可能性が考えられるが、今後文献研究も含めて解明されることを期待したい。

今回の調査地点については、調査中から大甕埋設遺構SX210とその出土遺物とりわけ多彩な貿易陶磁器が注目され、中世府内と大友氏が行ったとされるいわゆる「南蛮貿易」を結びつけるものとして多くの機会に公開され多くの市民や研究者の目に触れることになった。しかし、発掘調査者と報告者が異なることもあり、調査中に得られたデータが十分に生かされたとはとうていいいえない報告となったことは残念である。とくに、整理作業においては幾多の試行錯誤があり、発掘調査以来5年余の歳月が流れ、その間一部の遺物については管理上の問題により散逸し、そのため特に金属製品についてはほとんど報告に加えることができなかったことは悔やまれる点である。今後、都市遺跡についての調査・整理体制の整備に、今回の経験が生かされることを望むものである。

註

- (1) a 大分市教育委員会駅周辺総合整備発掘調査班1998「中世大友城下町発掘調査事始め」【大分県地方史】第170号
b 高島豊1998「中世大友城下町跡出土の貿易陶磁器」貿易陶磁研究会発表資料
c 高島豊1999「中世大友城下町跡第3次調査」【大分市埋蔵文化財調査年報】vol.9
d 高島豊2001「戦国時代豊後府内の貿易陶磁器」【南蛮都市・豊後府内 都市と交易】大分市教育委員会・中世都市研究会
- (2) a 和歌山県埋蔵文化財センター1994「根来寺坊院跡－広域営農団地農道整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－」
b 上田秀夫1991「16世紀末から17世紀前半における中国製染付碗・皿の分類と編年への予察」【関西近世

考古学研究』I

- (3) 鈴木秀典1991「大坂城跡の豊臣前期と豊臣後期」『関西近世考古学研究』I
- (4) 乗岡実 2000 「中世備前焼播鉢の編年について」『第3回中世備前焼研究会資料』
乗岡実 2002 「近世備前焼播鉢の編年案」『岡山城三之曲輪跡一表町一丁目地区再開発ビル建設に伴う発掘調査一』
- (5) 森毅1995「16・17世紀における陶磁器の様相とその流通」『ヒストリア』第149号
- (6) 森村健一1994「堺環濠都市遺跡出土における出現期の唐津窯系陶磁器一秀吉世界における唐津の必要性一」『第4回九州近世陶磁研究会資料』
- (7) 盛峰雄2000「陶器の編年 1.碗・皿」『九州陶磁の編年』九州陶磁学会
- (8) 續伸一郎1989「堺環濠都市遺跡出土のタイ製四耳壺」『貿易陶磁研究』No.9 日本貿易陶磁研究会
森村健一2002「15～17世紀における東南アジア陶磁器からみた陶磁の日本文化史堺環濠都市遺跡出土遺物を中心として」『国立歴史民俗博物館研究報告』第94集
- (9) National Museum, Philippines 1993 "Saga of the San Diego"
- (10) a 鹿毛敏夫1999「戦国時代豪商の存在形態と大友氏」『大分県地方史』第160号
b 鹿毛敏夫2001「文献・絵図からみた大友館と府内の町 ～都市と国際性～」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会
- (11) 小畑弘己1993「博多における16世紀から17世紀初めの陶磁器組成一博多第60次調査の成果から一」『法哈噠』第2号
- (12) 註1 a文献。
- (13) 坂本嘉弘2001「考古学から見た中世大友府内城下町の成立と構造」『南蛮都市・豊後府内 都市と交易』大分市教育委員会・中世都市研究会
- (14) 註1 a文献。
「・・・なお、この柱穴列の軸方向はN9°Eで道路状遺構(SF001)に対しては約73°であり、むしろ今回の調査地の東側に比定されている南北道路の方向に対してよく一致していることが注意される」としている。これは直接にはSA239について述べたものであるが、SX210の主軸方向についても併せて示唆している。このときは東西道路(SF001=本報告におけるSF226)が第1次・第2次調査で検出されていた道路状遺構の延長であると単純に考えていたため、これとの角度の不一致を指摘し、「東側に比定されている南北道路」すなわち「一之大路」の方向と一致することに注目したものであった。これについては本報告書における見解に訂正し、これを正式報告とするものである。
- (16) 大分市歴史資料館1992「明治時代字図に見る大友氏時代府内町」『開館5周年記念シンポジウム 戦国大名大友宗麟一その実像に迫る』付図
大分市歴史資料館1993「明治時代字図に見る大友時代の府内町」『歴史資料館ニュース』21

第4章 付 篇

錦町東地区出土埋甕などに関する自然科学分析調査

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

大分市錦町東地区は、大分川左岸の自然堤防上に立地している。これまでの発掘調査により、中世(戦国時代)大友氏の町屋跡が確認されている。平成8年度は大友1次・2次調査^(註1)では道路状遺構や焼土遺構などが調査され、平成9年度に調査された大友3次調査^(註2)では井戸跡や備前焼の埋甕(大甕)などが確認されている。とくに備前焼の埋甕は8基が並んだ状態で検出され、さらにこれに並んで作り替えのために甕が取り除かれた痕跡を遺す土坑2基が認められた^(註3)。このような町屋跡の埋甕として、福井県一乗朝倉氏遺跡の町屋跡の発掘調査例があり、紺屋、油屋、酒屋などに利用された可能性が指摘されている(水野, 1989)。今回の埋甕についても同様な用途が想定されているが、発掘調査時にはこれを裏付ける所見は得られていない。

そこで、大甕内の充填物に関する資料などを自然科学分析手法を応用して得るために、次のような調査課題を設定した。

①埋甕内容物の検討

埋甕は紺屋・酒屋・油屋に由来するものと推測され、藍・酒・油などが内容物として存在していたのではないかと推測されている。この仮説に基づいて、採取した土壌試料を用いて理化学成分を調査し、埋甕の内容物に関する情報を得る。また、陶器内に内容物の成分が染み込んでいる可能性もあるため、備前焼の大甕の破片も対象とする。

②埋甕底部に付着する白色物質の由来

埋甕には底部に白色物質が付着するものがみられ、この物質の成分を明らかにすることで、内容物に関する情報が得られることが期待された。

したがって、白色付着物を対象としてX線回折分析を実施し、その素材を明らかにする。

③焼土遺構の燃料材に関する検討

調査区内からは、複数の焼土遺構が検出されている。遺構内に炭化物が認められる場合には、これが燃料材として利用された可能性があるとともに、焼き付けとしてイネ科植物などの植物体が用いられた可能性がある。そこで、遺構の燃料材とくにイネ科植物の燃料材に関する情報を得るために植物珪酸体分析を実施する。

一方、埋甕内からも炭化材が検出されているが、焼土遺構の燃料材の一部として埋甕内に混入してきたものと思われる。この点から炭化材の樹種を明らかにする。炭化材の樹種同定を知ることは、本遺跡が営まれた当時の周辺植生(森林植生)に関する情報にもなることが期待される。

④土器付着物の素材分析

大友1次C区で検出された土器の表裏に黒色の付着物が認められた。この黒色物は有機物と考えられ、その素材を明らかにするために赤外分光分析を実施する。

以下に、調査結果を報告する。

1. 大友3次遺構出土の埋甕の内容物

(1) 試料および観察所見

調査対象は、大友3次遺構より出土した3号甕(S210-3)、7号甕(S210-7)、8号甕(S210-8)の3基である。各埋甕からは、埋甕の陶器片、埋甕内部の土壌、外側表面の土壌を採取し、その中から分析試料として合計

第3表 採取試料一覧表

調査区	遺構	試料	材質	土	X	PO	材	IR
大友3次	1号壘	S210-1	材				●	
	3号壘 S210-3	S210-3	陶器片	●				
		下層 (内部に堆積した土壌)	土壌	●				
		東側埋土外側壘 (外側表面に付着した土壌)	土壌	●				
		東側埋土付着土 (内側表面に付着した土壌)	土壌	●				
		S210-3	材					●
		下層	材					●
		取り上げ後	材					●
	6号壘 S210-6	S210-6	材					●
		東側	材					●
	7号壘 S210-7	S210-7	陶器片	●				
		下層 (内部に堆積した土壌)	土壌	●				
		最下層 (内部に堆積した土壌)	土壌	●				
		壘付着土壌 (内側表面に付着した土壌)	土壌	●				
		壘外側 (外側表面に付着した土壌)	土壌	●				
		S210-7						
	8号壘 S210-8	下層 (内部に堆積した土壌)	土壌	●				
		壘外側 (外側表面に付着した土壌)	土壌	●				
		壘底土 (内部に堆積した土壌)	土壌	●				
		S210-8	陶器片		●			
S210-8		材					●	
大友1次	S-155	ベルト (壁面土壌: 焼土遺構)	土壌			●		
	S-104	No. 34 (陶器片表面に付着した黒色物質)	鉱物?				●	
分析点数				12	1	1	8	1

土: 土壌理化学分析, X: X線回折分析, PO: 植物珪酸体分析, 材: 炭化材同定, IR: 赤外分光分析

12点を選択した (第3表)。

なお、分析に際して試料とされた陶器片や土壌を肉眼観察したところ、陶器片表面や土壌が青くなるなど、藍が染み込んだ痕跡は認められなかった。むしろ、大気に曝され、十分に酸化していた。藍は、インジゴ (C₁₆H₁₀N₂O₂) という青色を発色する有機物が含まれているため、酸化されると水 (H₂O) や二酸化炭素 (CO₂) が生じ、最終的には全て分解・消失してしまう。そのため、今回のような酸化が十分な場所では藍が入っていたとしても分解・消失した可能性が高い。酒や油についても同様である。この点をふまえて分析をすすめる。

そのため、今回は有機物の痕跡である炭素や窒素、リン酸の含量を測定するとともに、埋壘の内容物が海塩や塩が使われた味噌・醤油などの可能性も考慮して、塩類濃度の測定も行うこととした。そこで、塩類濃度の指標としてpH (H₂O)、電気伝導度 (EC)、交換性塩基の測定を、また有機化合物の指標として全炭素、全窒素、可給態窒素、可給態リン酸の含量測定を分析項目として選択した。

(2) 分析方法

pH (H₂O) はガラス電極法 (土壤標準分析・測定法委員会, 1986)、電気伝導度 (EC) は白金電極法 (土壤標準分析・測定法委員会, 1986)、全リン酸は硝酸・過塩素酸分解-バナドモリブデン酸比色法 (土壤養分測定法委員会, 1981)、全炭素、全窒素はCHNS/Oアナライザー法 (土壤環境分析法編集委員会, 1997)、可給態窒素はリン酸緩衝液抽出-水蒸気蒸留法 (小川ほか, 1989)、交換性塩基はショーレンベルガー法 (土壤養分測定法委員会, 1981) でそれぞれ行った。

以下に各項目の操作工程を示す。

・分析試料の調製

試料を風乾後、土塊を軽く崩して2mmの篩で篩別する。この篩通過試料を風乾細土試料とし、分析に供する。

また、風乾細土試料の一部を乳鉢で粉碎し、0.5mm篩を全通させ、粉碎土試料を作成する。さらに、風乾細土

試料の一部をタングステンカーバイド粉砕機で粉砕し、微粉砕試料を作成する。風乾細土試料については、105℃で4時間乾燥し、分析試料の水分量を求める。

・pH (H₂O) の測定

風乾細土10.0gを秤量し、25mlの蒸留水を加えてガラス棒で攪拌する。30分間放置後、再びガラス棒で懸濁状態とし、pHメーター（ガラス電極法）でpH (H₂O) を測定する。

・電気伝導度 (EC) の測定

風乾細土10.0gを秤量し、50mlの蒸留水を加えて1時間、振とうする。振とう後、すみやかにECメーター（白金電極法）で電気伝導度を測定する。

・全リン酸の測定

風乾細土1.00gをケルダール分解フラスコに秤量し、はじめに硝酸 (HNO₃) 5 mlを加えて加熱分解する。放冷後・過塩素酸 (HClO₄) 10mlを加えて再び加熱分解を行う。分解終了後、蒸留水で100mlに定容し、ろ過する。ろ液の一定量を試験管に採取し、リン酸発色液（バナドモリブデン酸・硝酸液）を加えて分光光度計によりリン酸 (P₂O₅) 濃度を測定する。

この測定値と加熱減量法で求めた水分量から乾土あたりの全リン酸含量 (P₂O₅mg/g) を求める。

・全炭素・全窒素の測定

微粉砕試料100mg前後をスズカプセルに精秤し、CHNS/O元素分析装置 (PERKIN ELMER2400 II) に挿入する。挿入した試料を酸素気流中で高温燃焼させ、燃焼生成したガスをフロントアルクロマトグラフ法により展開し、熱伝導度検出器 (TCD) により測定する。

測定値と加熱減量法で求めた試料中の水分量から、乾土あたりの炭素量 (T-C%) と窒素量 (T-N%) を求め、同時にC/Nを算出する。また、炭素含量に1.724を乗じたものを腐植含量として算出する。

・可給態窒素の測定

風乾細土10.00gを100ml三角フラスコに秤量し、pH7.0リン酸緩衝液50mlを加え、室温で1時間振とうした後、ろ過する。ろ液一定量を硫酸分解法により分解した後、水蒸気蒸留法によってアンモニア態窒素を定量する。

この定量値と加熱減量法で求めた試料中の水分量から、乾土あたりの可給態窒素量 (NH₄-Nmg/100g) を求める。

・交換性塩基の測定

風乾細土試料5.00gを浸透カラムに秤量する。これをCEC測定用の土壤浸出装置に装着し、1N酢酸アンモニ

第4表 大友3次埋壟の土壤理化学分析結果

遺構名	試料	pH (H ₂ O)	EC (mS/g)	P205 (mg/g)	To-C (%)	To-N (%)	C/N	可給態N (mg/100g)	交換性塩基 (me/100g)			
									Ca	Mg	Na	K
S210-3	陶器片	-	-	-	1.43	0.12	12	-	-	-	-	-
	下層	6.1	7.6	4.78	1.16	0.07	18	2.0	24.9	0.8	0.3	0.6
	外側壟	6.2	7.2	3.90	0.78	0.06	13	2.2	23.3	0.7	0.2	0.5
	付着土	5.9	14.0	4.07	1.10	0.07	15	3.0	25.5	0.8	0.3	0.5
S210-7	陶器片	-	-	-	1.19	0.10	12	-	-	-	-	-
	下層	6.9	7.3	6.24	1.93	0.08	24	1.7	34.5	2.0	0.6	1.1
	最下層	6.8	7.1	5.71	1.74	0.09	20	2.1	33.7	2.0	0.6	1.1
	壟付着土	-	-	4.27	1.32	0.08	16	2.7	27.4	1.7	0.4	0.7
	①壟外側	7.0	9.5	3.93	0.67	0.05	13	1.5	22.9	1.0	0.2	0.5
S210-8	下層	6.4	7.2	4.62	2.61	0.08	33	1.9	47.9	0.8	0.2	0.6
	壟外側	6.5	9.1	4.09	0.73	0.05	14	1.9	28.2	0.7	0.2	0.5
	壟底土	6.5	8.4	3.82	1.98	0.07	29	2.0	39.7	0.8	0.2	0.5

EC：電気伝導度，P205：全リン酸含量，To-C：全炭素含量，To-N：全窒素含量，可給態N：可給態窒素含量，Ca：カルシウム，Mg：マグネシウム，Na：ナトリウム，K：カリウム

ウム溶液 (pH7.0) 100mlを加え、4～20時間で置換洗浄し、交換性塩基を浸出させる。交換浸出液全量を200mlメスフラスコに入れ、水で定容とする。定容液の一定量を採取し、適宜希釈し、干渉抑制剤を添加した後、原子吸光光度計によりカルシウム、マグネシウム、ナトリウム、カリウムを定量する。これら定量値と加熱減量法で求めた試料中の水分から乾土あたりの交換性塩基含量 (me/100g) を求める (me:mg当量)。

(3) 結果

分析結果を第4表に示す。

pH (H₂O) は埋壘ごとに若干の変化が認められるが、遺構内では微妙な差である。

電気伝導度はS210-3東側埋土付着土で14.0mS/mと高い値を示す他は、全体的に7.1～9.5と低く、安定した値を示す。

全リン酸含量は全体的に高い傾向にあり、特に各埋壘の下層土に顕著に認められる。

全炭素・全窒素含量は、0.67～2.61%と全体的に低い値である。全リン酸と類似した傾向を示すものの、S210-8壘底土でやや高い値を示す。

可給態窒素含量は全窒素が低いことから、1.5～3.0mg/100gと低い値である。S210-3東側埋土付着土でやや高い値を示す。

交換性塩基はそのほとんどがカルシウムによって構成されており、他の塩基は微量である。交換性塩基としては比較的高い値であり、全炭素と類似した傾向を示す。

(4) 考察

塩類濃度の指標であるpH (H₂O) は全体的に5.9～7.0と弱酸性～中性を示す。一般的には高塩類の土壌ではアルカリ性を示すことから、壘内外の塩類濃度は低いと考えられる。また、交換性塩基 (Ca、Mg、Na、K) は各遺構で壘外側が最も低い値を示し、下層において高い値を示す傾向にある。構成塩基としてはカルシウムがほとんどである。醤油・味噌などに含まれる塩はナトリウム、マグネシウムがほとんどであることから、醤油・味噌などの可能性は極めて低いものと推定される。

電気伝導度 (EC) に関してもS210-3東側埋土付着土を除いて全体的に低い値であり、塩類富化を指摘するには至らない。電気伝導度は土壌溶液中に陰イオン (硝酸イオン、硫酸イオンなど) や陽イオン (カルシウムイオン、マグネシウムイオンなど) の含有量の多いことを意味することから (三好ほか, 1983)、S210-3東側埋土付着土についてはイオンが多く存在するものと予想される。しかし、この原因については現時点では不明である。

有機化合物の指標である全炭素・全窒素含量、C/N、全リン酸含量は各遺構で壘外側が最も低い値を示し、下層で高い値を示す傾向にある。全リン酸含量は全体的に高い傾向にあるが、本地域のリン酸のバックグラウンドが比較的高いことを示唆するものと考えられ、富化量としては多くはないと推察される。可給態窒素については全体的に低いレベルであるが、S210-3東側埋土付着土で若干高い値を示す。可給態窒素は土壌中の微生物などによって容易に分解され、変動が大きいことから有意差があるとは判断しがたい。

以上より、各遺構とも醤油・味噌などの高塩類の内容物の可能性は低いと考えられ、リン酸・炭素・窒素を含む有機化合物が内容物として可能性が高いと推定される。ただし、これらの成分は土壌中の腐植物質にも含まれることから、植物体の供給量など覆土の由来と合わせて考察する必要がある。また、埋壘S210-8の底部に付着していた白色物質の材質なども考慮して内容物について検討する必要がある。

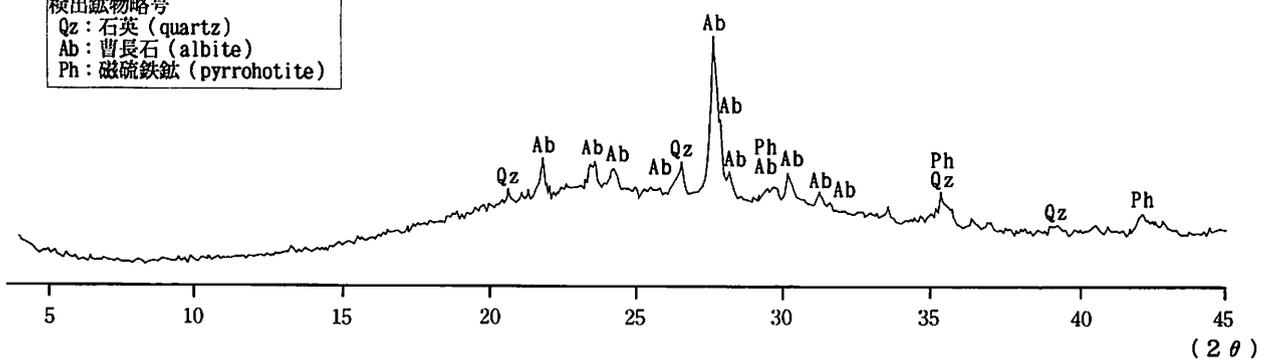
2. 埋壘底部付着物の材質

(1) 試料

調査対象は、埋壘S210-8の底部に付着していた白色物質1点である。

(2) 分析方法

検出鉱物略号
 Qz : 石英 (quartz)
 Ab : 曹長石 (albite)
 Ph : 磁硫鉄鉱 (pyrrhotite)



第97図 大友3次出土埋壺の底部付着白色物のX線回折チャート

陶器片に付着する白色物質をカッターナイフで削り、メノウ乳鉢で微粉碎(200メッシュ以下)した。これをスライドグラスに採取し、アセトンで薄く広げ、風乾した。

この試料について、以下に示す測定条件でX線回折分析を行った(足立, 1980; 日本粘土学会, 1987)。

同定および解析は、測定回折線の主要ピークと回折角度から原子面間隔および相対強度を計算し、それに該当する化合物または鉱物をX線粉末回折線総合解析プログラム(五十嵐, 未公表)により検索した。

装置 : 島津制作所製XD-3A Time Constant : 2.0sec
 Target : Cu (K α) Scanning Speed : 2° / min
 Filter : Ni Chart Speed : 2 cm/min
 Voltage : 30KVP Divergency : 1°
 Current : 30mA Recieving Slit : 0.3mm
 Count Full Scale : 5,000C/S Scanning Range : 3 ~ 45°

(3) 結果

X線回折結果を第97図に示す。検出された鉱物では曹長石(albite)が最も多く、その他に石英(quartz)や磁硫鉄鉱(pyrrhotite)も認められた。

(4) 考察

陶器片付着の白色物質は、分析試料を採取した段階で、表面から胎土内部に染み込んでいた。試料からは、造岩鉱物として自然界に普遍的に存在する鉱物である曹長石(albite)、石英(quartz)、磁硫鉄鉱(pyrrhotite)が認められ、曹長石を除いて通常は白色を呈す物質ではない。曹長石を含む長石類は、酸化・風化して表面が白濁することが知られている。しかし、陶器片に付着する白色物質は、ある程度の広がりを持っており、曹長石の風化粒子とは考えにくい。また、X線回折現象を起こしにくい物質として有機物があるが、これは酸化して分解しやすく、土器表面で安定して存在するとは考えにくい。そのため、現段階では白色物質の材質を特定することは困難である。

なお、白色物質が内部に染み込んでいる状態を観察するとともに鉱物学的検討を行うことで、材質に関する情報を得られることが期待されることから、薄片観察の実施が有効と思われる。

3. 大友1次・3次出土遺構の燃料材の種類

(1) 試料

調査対象は、大友1次出土遺構S-155の焼土1点および大友3次出土埋壺より出土した炭化材8点である。

(2) 分析方法

a. 植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壌化や攪乱などの影響によって分離し単体となるが、組織片の状態で残留する場合もある。組織片の出現は、その母植物の葉や茎などがその場所に存在したことを示すものであり、燃料材や住居構築材を検討する際に有効な情報を提供する（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。今回も、組織片の産状に着目して、燃料材について検討する。以下に分析方法を述べる。

湿重5g前後の試料について、過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理（70W, 250KHz, 1分間）、沈定法、重液分離法（ポリタングステン酸ナトリウム, 比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥する。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）や葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む組織片について、近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定・計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。

第5表 大友1次S-155の植物珪酸体分析結果

b. 炭化材同定

木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の割断面を作製し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡を用いて木材組織の特徴を観察し、種類を同定する。

(3) 結果

a. 植物珪酸体分析

結果を第5表に示す。試料からは、組織片が全く認められない。

また、単体の植物珪酸体が検出されるが、保存状態は悪く、検出個数も少ない。検出される種類は、栽培植物のイネ属、タケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などである。

b. 炭化材同定

樹種同定結果を第6表に示す。S210-1①は、木材組

種 類	試料番号S-155ベルト
イネ科葉部短細胞珪酸体	
イネ族イネ属	5
タケ亜科	1
ウシクサ族ススキ属	2
イチゴツナギ亜科	2
不明キビ型	4
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
イネ族イネ属	2
タケ亜科	1
ヨシ属	2
ウシクサ族	5
不明	3
合 計	
イネ科葉部短細胞珪酸体	14
イネ科葉身機動細胞珪酸体	13
総 計	27

第6表 大友3次遺構埋蔵出土の炭化材の樹種同定結果

出土位置	時 代	用 途	樹 種
S210-1	16世紀後半	燃料材	不明
S210-3	16世紀後半	燃料材	ヒノキ属
S210-3下層	16世紀後半	燃料材	ヒノキ属
S210-3取り上げ後	16世紀後半	燃料材	マツ属複維管束亜属
S210-6	16世紀後半	燃料材	クリ
S210-6東側	16世紀後半	燃料材	マツ属複維管束亜属
S210-7	16世紀後半	燃料材	コウヤマキ マツ属複維管束亜属
S210-8	16世紀後半	燃料材	コウヤマキ コウヤマキ

織を観察することができず、不明とした。その他の炭化材は、針葉樹3種類（マツ属複維管束亜属・ヒノキ属・コウヤマキ）、広葉樹1種類（クリ）に同定された。炭化材はあった。解剖学的特徴などを以下に記す。

・マツ属複維管束亜属（*pinus subgen. Diploxylon*） マツ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は急～やや緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。放射柔細胞の分野壁孔は窓状となる。放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1～15細胞高。

・ヒノキ属（*Chamaecyparis sp.*） ヒノキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。放射組織は単列、1～15細胞高。

・コウヤマキ（*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc） コウヤマキ科

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか、分野壁孔は窓状。放射組織は単列、1～10細胞高。

・クリ（*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.） ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列、孔圏外で急激～やや急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1～15細胞高。

(4) 考察

遺構S-155からは、植物珪酸体の組織片が全く認められなかった。そのため、燃料材としてイネ科などの草本類が利用されていたか否かは、現段階では明確にならない。しかし、燃烧後の灰が外部へ持ち出された場合には、遺構内に痕跡である灰（組織片）が残りにくかったと思われる。

単体で検出された種類のうち、タケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科は人里に普通に生育する種類であり、燃料材として混入したものと考えよりも、周辺に生育していた植物体由来と考える方が妥当であろう。なお、イネ属は住居構築材や農業資材にも利用されることがあり、集落内でも混入することは十分に考えられる。

一方、燃料材の可能性のある炭化材は、その多くが針葉樹材であった。針葉樹は、合計3種類認められた。このうち複維管束亜属は、成長が早く、各種用材に有用である。また、クリは材の耐朽性や強度が高く、土木材や建築材として有用であると同時に、食糧としても重要である。これらは、周囲で植林や栽培されていたものが利用された可能性がある。

また、ヒノキ属とコウヤマキは建築材などとして有用であり、古くから利用されていたことが知られている（伊東・島地, 1979; 島地ほか, 1980; 西岡・小原, 1978）。これらは、大分県西部の山地に現在でも天然分布が知られており、そうした場所から持ち込まれた木材を加工した際の余材や廃材等が利用されたと考えられる。

4. 大友1次遺構出土の土器附着物の材質

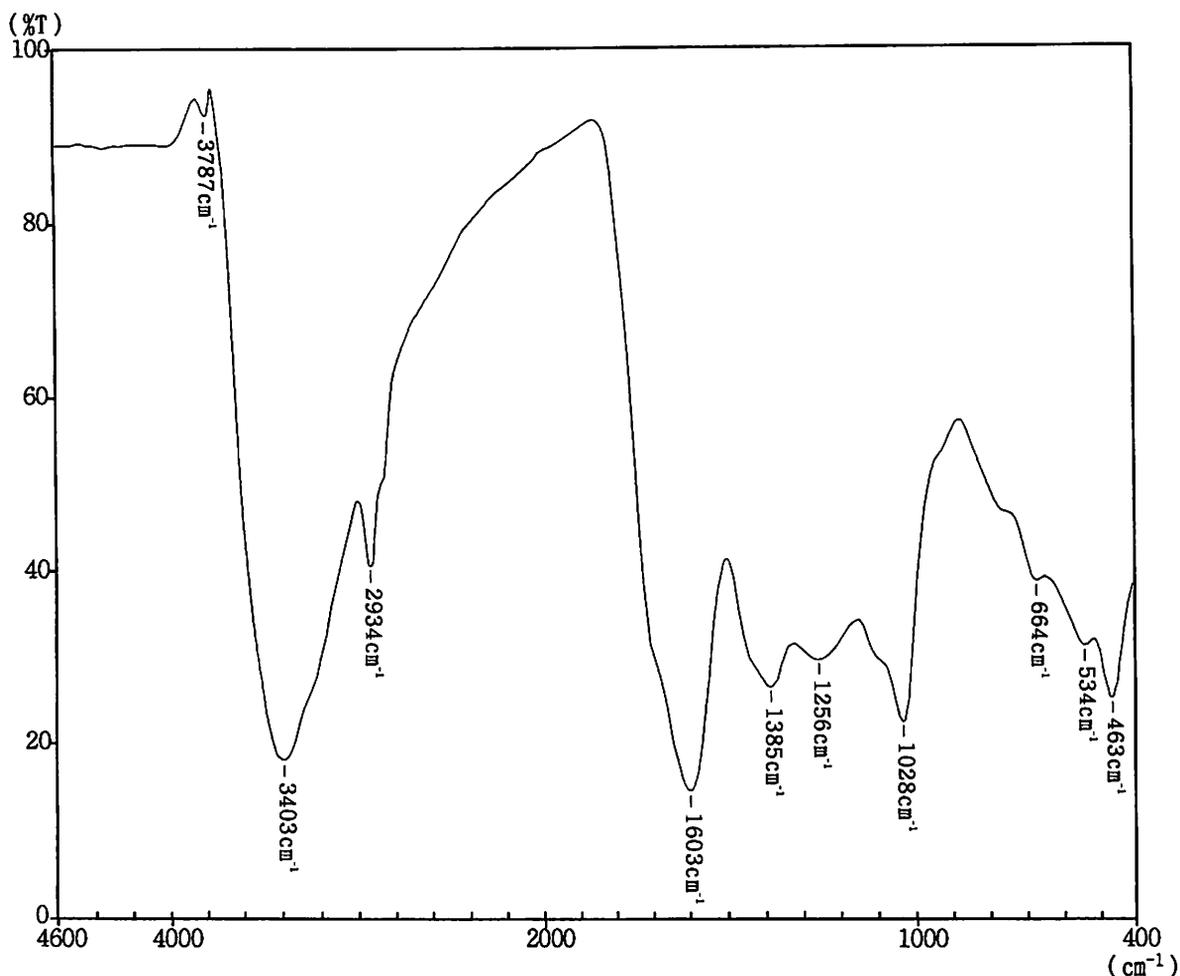
(1) 試料

調査対象は、大友1次遺構C区より出土した土器片に附着した黒色物質1点（試料名：C区S-104 No. 34）である。

(2) 分析方法

赤外分光分析は、物質の多重結合や官能基の構造がわかるため、有機化合物の大まかな性状を簡易的に調査できる最適な方法である。また、ある程度は試料物質が予想できるとき、標準試料など既知のスペクトルと比較して未知物質の同定および確認ができる（山田, 1986）。

陶器片に附着した黒色物質を剥離し、105℃で2時間乾燥させた後、メノウ乳鉢で微粉碎（200メッシュ以下）した。この微粉碎試料20～30mgを臭化カリウム（KBr）と1：100の割合で秤量し、メノウ乳鉢で粉碎・混合し



第98図 大友1次遺構出土の土器付着物の材質

た後、ミニハンドプレス（島津製作所製MHP-1）で加圧成形した。

加圧成形した試料を次の条件で測定した。

装置：島津製作所製FTIR-8100A ミラー速度 (Detector) : 2.8mm/sec

測光値 (Measuring mode) : %T アポダイズ関数 (Apodization) : Happ-genzel

分解能 (Resolution) : 4.0cm⁻¹ 測定範囲 : 4600~400cm⁻¹

積算回数 (No. of Scan) : 40回 測定方法 : KBr錠剤法

ゲイン (Gain) : 自動

(3) 結果

赤外線吸収スペクトルを第98図に示す。主な吸収帯は、3403、1603cm⁻¹の強い吸収帯および3787、2934、1385、1256、1028、664、534、463cm⁻¹の吸収帯である。

各吸収帯から推定される官能基は次のとおりである。3400cm⁻¹付近の強い吸収帯はO-H基の伸縮振動またはN-H基の伸縮振動、1600cm⁻¹付近の吸収帯はC=C基の骨格振動、C=O基とC=N基の伸縮振動またはN=N基の伸縮振動、3790cm⁻¹付近の吸収帯はN-H基の伸縮振動、2930cm⁻¹付近の吸収帯はC-H基の伸縮振動、1390cm⁻¹の吸収帯はCH₃基の変角振動、1260cm⁻¹の吸収帯はC-O基の伸縮振動、1030cm⁻¹の吸収帯はC-H基の変角振動、1000cm⁻¹以下の吸収帯はSi-O基またはAl-O基の伸縮振動によるものと考えられる。

この中でSi-O基あるいはAl-O基の吸収は、土器そのものの生地が黒色物質をはぎ取る際に混入したために出

現したものと思われる。

(4) 考察

当社では、既知の物質について同一測定条件で赤外線吸収スペクトルを測定した例がいくつかある(未公表)。遺跡で検出される黒色物質の代表として漆、天然アスファルト、松脂、動植物油、炭化物などが調査例としてあげられる。これらは、いずれも固有の赤外線吸収スペクトルの吸収帯があり、漆では3400、2900、1730、1620、1460、1060 cm^{-1} 、天然アスファルトでは2900、1600、1460、1380 cm^{-1} と脂肪族飽和炭化水素に帰属する吸収帯に特徴がある。また、松脂は1700 cm^{-1} 、動植物油は1740 cm^{-1} 、炭化物は1140～1160 cm^{-1} 、炭化材は3400、1590 cm^{-1} に特徴ある吸収帯がある。今回の黒色物質において測定例の中で今回の黒色物質と最も類似した吸収帯を示す物質は玄米、ヒエ、アワ、ムギなどの穀物の炭化物であった。ただし、2930、1030 cm^{-1} 付近の吸収帯が認められることから、炭化程度は低いものと推定される。

以上のことから、今回の黒色物質は既知の標準物質の中で炭化穀物に最も類似したスペクトルパターンを示した。しかし、これら有機化合物は保存状態や時間の経過とともに化合形態が絶えず変化することから、確実な判定を行うことは難しい。今後、時間や環境因子を含めた標準試料の整備が課題である。

〈引用文献〉

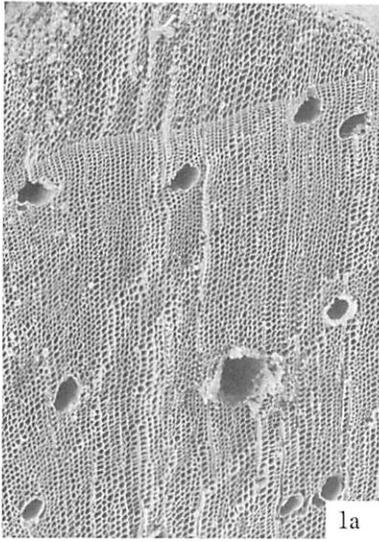
- 足立吟也(1980)粉末X線回折法. 機器分析のてびき3, p. 64-76, 化学同人.
- 土壤標準分析・測定法委員会編(1986)土壤標準分析・測定法. 354p., 博友社.
- 土壤環境分析法編集委員会編(1997)土壤環境分析法. 427p., 博友社.
- 土壤養分測定法委員会編(1981)土壤養分分析法. 440p., 養賢堂.
- 伊東隆夫・島地 謙(1979)古代における建造物柱材の使用樹種. 木材研究資料, 14, p. 49-76.
- 近藤鎌三・佐瀬 隆(1986)植物珪酸体分析, その特性と応用. 第四紀研究, 25, p. 31-64.
- 三好洋・嶋田永生・石川昌男・伊達昇(1983)土壤肥料用語事典. 259p., 農文協.
- 小川吉雄・加藤弘道・石川 実(1989)リン酸緩衝液抽出による可給態窒素の簡易測定法. 土壤肥料学会誌, 60, p160-163.
- 水野和雄(1989)戦国時代城下町の諸相. 季刊考古学第26号, p. 22-24.
- 日本粘土学会編(1987)粘土ハンドブック第二版. 1289p., 技報堂出版.
- 西岡常一・小原次郎(1978)法隆寺を支えた木. 226p., NHKブックス.
- 農林省農林水産技術会議事務局監修(1967)新版標準土色帖.
- バリノ・サーヴェイ株式会社(1993)自然科学分析からみた人々の生活(1). 慶應義塾藤沢校 地理蔵文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」, p347-370, 慶應義塾.
- ペドロジスト懇談会(1984)野外土性の判定. ペドロジスト懇談会編「土壤調査ハンドブック」, 156p., p. 39-40.
- 島地 謙・伊東隆夫・林 昭三(1980)古代における宮殿・官衙の使用樹種. 古文化財編集委員会編「考古学・美術史の自然科学的研究」, p. 249-260, 日本学術振興会.
- 竹迫 紘・加藤哲郎・坂上寛一・黒部 隆(1980)神谷原遺跡への土壌学的アプローチ. 神谷原 I, p. 412-416, 八王子市栲田遺跡調査会.
- 山田富貴子(1986)赤外線吸収スペクトル法. 機器分析のてびき. 第1集, p. 1-18, 化学同人.

編集者註

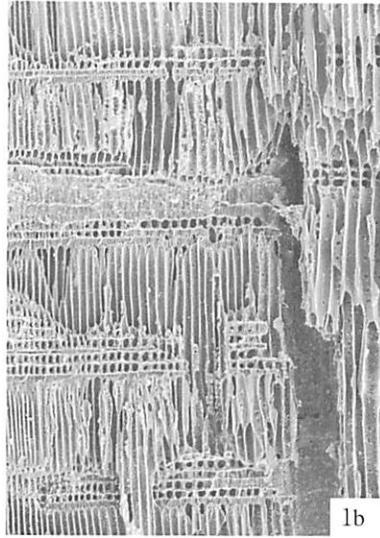
編註1 調査当時の呼称であり、中世大友府内町跡第1次・2次調査のことである。平成15年度に報告書刊行予定。

編註2 中世大友府内町跡第3次調査(本報告書により報告)

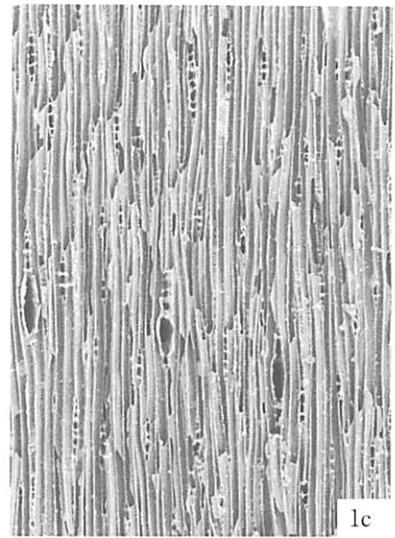
編註3 調査時の所見では、S210-1~4とS210-6~9が一連の埋甕であり、S210-5・S210-10を「作り替えのために甕が取り除かれた痕跡を残す土坑」ととらえていた。本報告においては、第2章に報告しているように10基の埋甕及び土坑をもって一連の遺構SX210ととらえている。



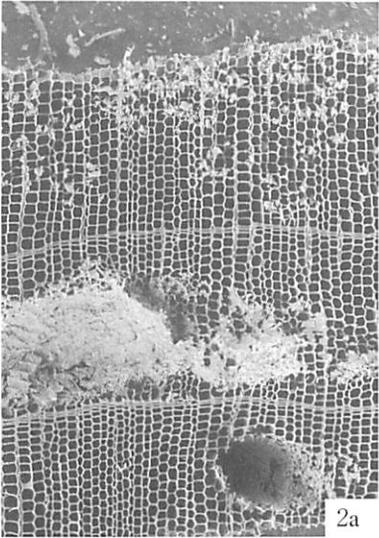
1a



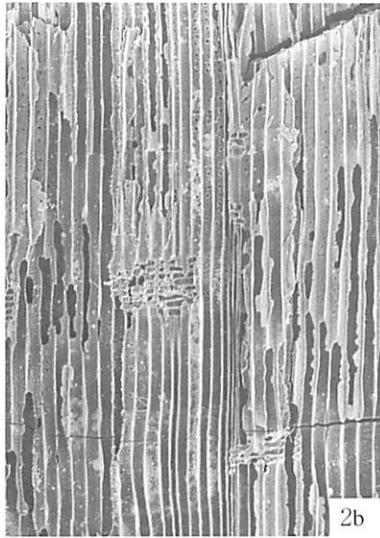
1b



1c



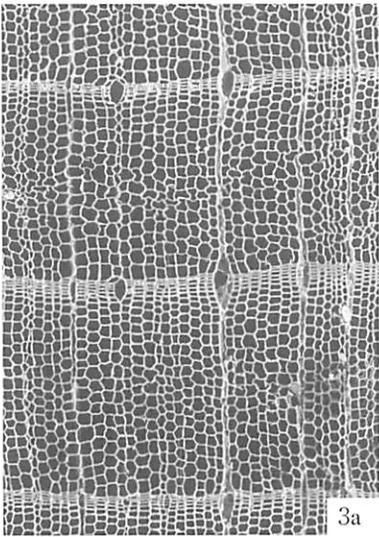
2a



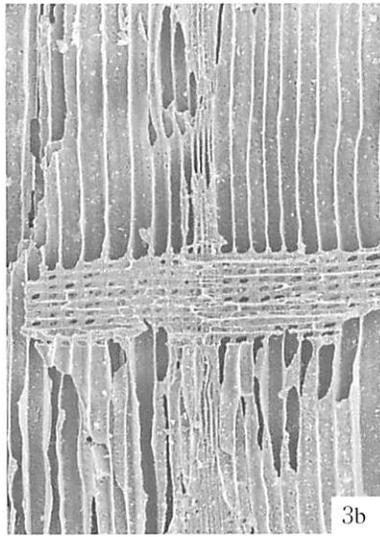
2b



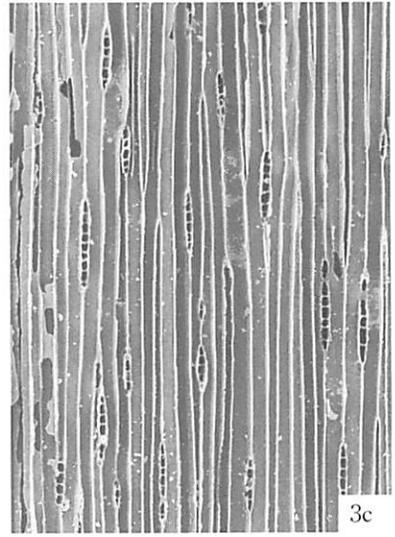
2c



3a



3b



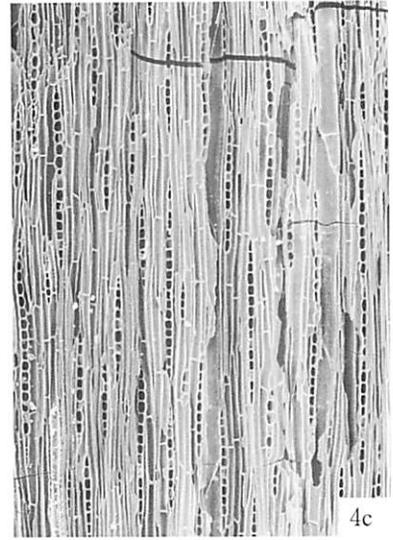
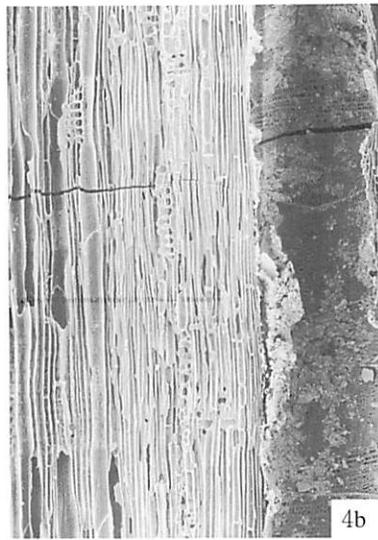
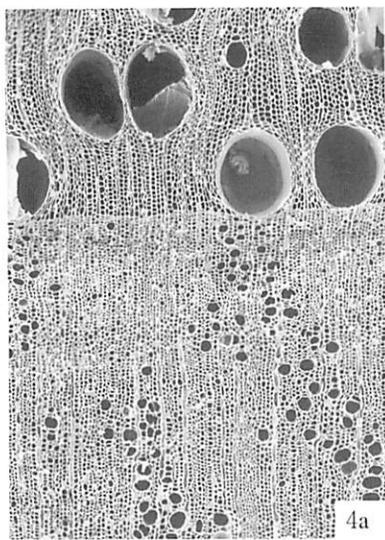
3c

1. マツ属複維管束亜属 (S-210-3取り上げ後)
2. ヒノキ属 (S-210-3下層)
3. コウヤマキ (S-210-7)

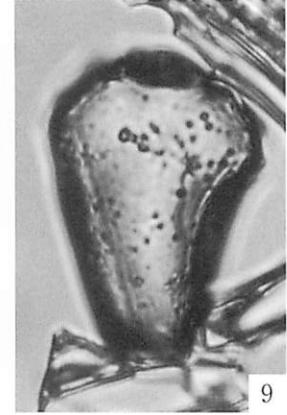
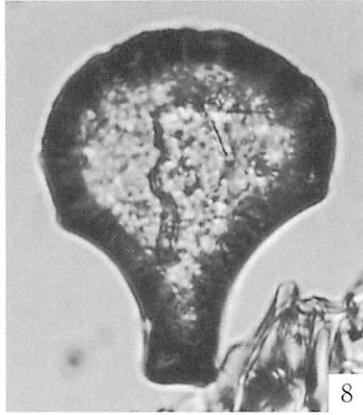
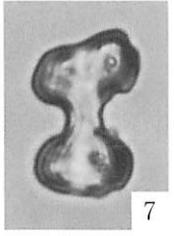
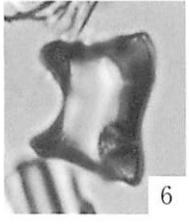
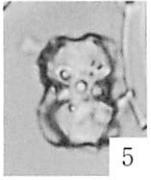
a: 木口, b: 柾目, c: 板目

200μm : a
200μm : b,c

第99図 炭化材顕微鏡写真①



200μm : a
200μm : b,c



50μm

- 4. クリ (S-210-7)
a: 木口, b: 柎目, c: 板目
- 5. イネ属短細胞珪酸体 (S-155ベルト)
- 6. タケ亜科短細胞珪酸体 (S-155ベルト)
- 7. ススキ属短細胞珪酸体 (S-155ベルト)
- 8. イネ属機動細胞珪酸体 (S-155ベルト)
- 9. ウシクサ族機動細胞珪酸体 (S-155ベルト)

第100図 炭化材顕微鏡写真②・植物珪酸体顕微鏡写真

遺物觀察表

※法量の数値に*があるものは、反転復元による数値である。

採掘番号	遺物番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	胎/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係	
										外面	内面	見込み	底部	石灰	金	赤	他		
第10図-1	SX210	青白磁	皿		中国 産地不明	5.6			淡青緑色 貫入	縞状へう 彫り									口縁部輪花
第10図-2	SX210	白磁	皿		中国 産地不明	*7.6			淡緑灰色 貫入	縞状へう 彫り		無胎	無胎						S210-6 口縁部輪花
第10図-3	SX210	白磁	皿		中国 産地不明	*8.2			淡緑灰色 貫入	縞状へう 彫り	縞状へう 彫り								S210-3 口縁部輪花
第10図-4	SX210	白磁	小坏		中国 景德鎮系	*6.0													S210-6
第10図-5	SX210	白磁	小坏		中国 景德鎮系	*7.1													S210-1
第10図-6	SX210	白磁	皿		中国 景德鎮系	*9.3													S210-5
第10図-7	SX210	白磁	皿		中国 景德鎮系														S210-6
第10図-8	SX240	白磁	皿		中国 景德鎮系														SX240
第10図-9	SX210	白磁	皿		中国 景德鎮系			10.0											
第10図-10	SX210	白磁	皿		中国 景德鎮系			*9.9					覆付無胎						S210-5
第10図-11	SX210	白磁	皿		中国 福建・広東	*12.0	2.3	*5.7					無胎	無胎					S210-6
第10図-12	SX210	白磁	皿		中国 福建・広東	*13.8	2.1	*7.0					無胎	無胎					S210-6
第10図-13	SX210	白磁	皿		中国 景德鎮系	*8.8	*2.9	*4.0	淡黄白色 不透明				覆付無胎						S210-6 口縁部輪花
第10図-14	SX210	灰色磁器	碗		中国 産地不明	*13.0	4.5	4.6	灰色 貫入				覆付無胎						S210-1/6 二次被熱により、 赤銅色の物質(胎)が付着
第10図-15	SX210	灰色磁器	菊皿		中国 産地不明	*12.4			灰色 貫入										S210-6
第10図-16	SX210	灰色磁器	碗		中国 産地不明			*5.3	灰色 貫入				覆付無胎						S210-6
第10図-17	SX210	白磁	皿		中国 景德鎮系	*12.0			灰色 貫入										S210-6
第10図-18	SX210	灰色磁器	碗		中国 産地不明			*4.6	灰色 貫入				覆付無胎						S210-6
第10図-19	SX210	灰色磁器	碗		中国 産地不明	*13.8	5.6	5.0	灰色 貫入				覆付無胎						S210-1 口縁部輪花
第10図-20	SX210	灰色磁器	碗		中国 産地不明		*5.6	*4.3	灰色 貫入				覆付無胎						S210-2
第10図-21	SX210	灰色磁器	碗		中国 産地不明			*6.1	灰色 貫入				覆付無胎						S210-2
第10図-22	SX210	色絵磁器	皿		中国 景德鎮系			*7.8	上絵付				覆付無胎						S210-6 二次被熱のため、文 様は赤銅色に変色
第10図-23	SA239	青磁	瓶		中国 龍泉窯系					へう描き									S239-2 25・27と同一個体か
第10図-24	SX210	青磁	瓶		中国 龍泉窯系					へう描き									S210-2
第10図-25	SX240	青磁	瓶		中国 龍泉窯系														SX240
第10図-26	SX210	青磁	瓶		中国 龍泉窯系					へう描き									S210-2
第10図-27	SA239	青磁	菊皿		中国 景德鎮系	*13.6													S239-2 SK221と接合
第10図-28	SX210	青磁	碗		中国 龍泉窯系?												陶胎		S210-2 焼成不良
第10図-29	SX210	青磁	菊皿		中国 景德鎮系			4.1											S210-6
第10図-30	SX210	青磁	菊皿		中国 景德鎮系			*5.8											S210-62 二次被熱のため、釉表 面が荒れている。
第10図-31	SX210	青花	小坏		中国 景德鎮系	*6.9													S210-7
第10図-32	SX210	青花	小坏		中国 景德鎮系	*7.6													S210-6
第10図-33	SX210	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系	*10.2													S210-3
第10図-34	SX237	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系	*12.3													
第10図-35	SX210	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系	*11.5	*6.0	4.0					覆付無胎						S210-6
第10図-36	SX210	青花	碗		中国 漳州窯系													陶胎	S210-2
第10図-37	SX210	青花	碗		中国 漳州窯系	*12.2												陶胎	S210-6
第10図-38	SX210	青花	碗		中国 漳州窯系	*12.4						無胎						陶胎	S210-7
第10図-39	SX210	青花	碗		中国 漳州窯系	*13.6						無胎						陶胎	S210-7
第10図-40	SX210	青花	碗		中国 漳州窯系	*15.0						無胎	無胎					陶胎	S210-6
第11図-41	SX210	青花	皿	皿C	中国 景德鎮系	*8.8													S210-1
第11図-42	SX240	青花	皿	皿C	中国 景德鎮系	*9.4													SX240
第11図-43	SX210	青花	皿	皿B 1	中国 景德鎮系														S210-2
第11図-44	SX210	青花	皿	皿B 1	中国 景德鎮系	*11.8	2.6	*6.9											S210-7
第11図-45	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系														S210-8
第11図-46	SX240	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*9.5													SX240
第11図-47	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*9.7	2.4	*5.1					覆付無胎						S210-7 二次被熱により、他 の胎が付着
第11図-48	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*10.4	2.5	*5.8					覆付無胎						S210-1/4

棟号番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係
										外面	内面	見込み	底部	石灰	金言母	西内台	小色粒	
第11図-49	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*10.4												S210-6
第11図-50	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*10.0	2.3	*5.6										S210-7
第11図-51	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*12.9												S210-6 二次被熱により、赤銅色の物質(釉)が付着
第11図-52	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*13.3												S210-6
第11図-53	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*11.4	2.7	*5.2										S210-7
第11図-54	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*12.6	3.7	*7.2										S210-6
第11図-55	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	13.6												S210-6
第11図-56	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*13.6												S210-6
第11図-57	SX240	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*15.0	3.5	*4.1										SX240
第11図-58	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*13.8	2.9	*8.2										S210-1
第11図-59	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系													S210-1
第11図-60	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系			*5.5										S210-5
第11図-61	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*10.8	2.7	*5.5										S210-1
第11図-62	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系			*7.0										S210-9/10
第11図-63	SX210	青花	皿	皿F	中国 漳州窯系													S210-1 二次被熱
第11図-64	SX210	青花	皿	皿F	中国 景德镇系	*23.3												S210-6 口縁部輪花
第11図-65	SX210	青花	皿	皿F	中国 景德镇系	*18.8	2.9	*10.9										S210-3
第11図-66	SX210	青花	皿	皿F	中国 景德镇系	*17.2												S210-7 口縁部輪花 二次被熱著しく、他の釉が融着
第12図-67	SX210	青花	皿		中国 漳州窯系	*23.7	*5.9	*9.0										陶胎
第12図-68	SX210	青花	皿		中国 漳州窯系			*13.4										S210-8
第12図-69	SX210	青花	皿	皿F	中国 景德镇系	*33.8												二次被熱により、他の釉が融着
第12図-70	SX210	青花	皿		中国 漳州窯系													陶胎 S210-6
第12図-71	SX210	青花	皿	皿E	中国 景德镇系	*32.0	6.0	*18.8										
第13図-72	SX210	青花	壺?		中国 景德镇系													S210-3 剛接ぎ
第13図-73	SX210	青花	壺		中国 景德镇系	*14.0		胴径*26.6										S210-3/10
第13図-74	SX210	陶器	壺?		朝鮮	*6.3												S210-6 二次被熱
第13図-75	SX210	陶器	船徳利		朝鮮	*5.8												S210-6 二次被熱
第13図-76	SX210	白磁	皿		朝鮮	*17.2												S210-6/7
第13図-77	SX210	白磁	皿		朝鮮			*6.6										S210-6
第13図-78	SX210	白磁	皿		朝鮮	*19.9	5.5	*6.4										S210-6
第13図-79	SX210	白磁	皿		朝鮮			5.7										S210-6/7
第13図-80	SX210	白磁	皿		朝鮮	*19.2	6.4	*6.5										S210-2/8
第13図-81	SX210	白磁	皿		朝鮮			*6.0										S210-6 SD177と接合
第13図-82	SX210	白磁	皿		朝鮮			*5.6										S210-6/7
第13図-83	SX210	白磁	皿		朝鮮			6.4										S210-6 二次被熱
第13図-84	SX210	褐釉陶器	壺		中国 福建・広東	9.6		*7.0										S210-6
第14図-85	SX210	褐釉陶器	六(五?) 耳壺		中国 福建・広東	*9.9		胴径*35.6										S210-5/8/9 二次被熱
第14図-86	SX210	褐釉陶器	四耳壺		中国 福建・広東	10.6												S210-6/9
第14図-87	SX210	焼締陶器	播鉢		中国 福建・広東?	*26.0	12.4	*13										S210-2/3/6/7/8間で接合
第14図-88	SX210	褐釉陶器	壺		中国 福建・広東			*49.8										S210-1/3/6/10 SK221 二次被熱
第15図-89	SX210	華南三彩陶器	蓋(壺)	貼花?	中国 福建・広東			最大径*14.0										S210-10 二次被熱
第15図-90	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東	*13.2												S210-3 二次被熱
第15図-91	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東													S210-6 二次被熱
第15図-92	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東													S210-1 二次被熱
第15図-93	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東													S210-8 二次被熱
第15図-94	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東													S210-5 二次被熱
第15図-95	SX210	華南三彩陶器	壺の耳	貼花	中国 福建・広東													S210-4 二次被熱
第15図-96	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東													S210-4 二次被熱

標図番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係
										外面	内面	見込み	底部	石灰	内灰	金層	赤鉄	
第15図-97	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									
第15図-98	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付	一部無釉								二次被熱
第15図-99	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-6 二次被熱
第15図-100	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-8 二次被熱
第15図-101	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-3 二次被熱
第15図-102	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-103	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-3 二次被熱
第15図-104	SD177	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-105	SD177	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-106	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-107	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-4 二次被熱
第15図-108	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-9 二次被熱
第15図-109	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-5/6 二次被熱
第15図-110	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-111	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-3
第15図-112	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-113	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東			*16.0	三彩 内面薄い肌付									S210-6 二次被熱
第15図-114	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									S210-6 二次被熱
第15図-115	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									S210-1 二次被熱
第15図-116	SK221	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-117	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									二次被熱
第15図-118	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									S210-4 二次被熱
第15図-119	SX210	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									S210-1 二次被熱
第15図-120	表採	華南三彩陶器	壺	貼花	中国 福建・広東				三彩? 内面薄い肌付									二次被熱
第18図-121	SX210	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東	*14.7			三彩	一部無釉								S210-6/SE120 二次被熱
第18図-122	表採	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩	一部無釉								二次被熱
第18図-123	表採	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩	無釉								二次被熱
第18図-124	SX210	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩	無釉								S210-7 二次被熱
第18図-125	竇地層	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩	無釉								二次被熱
第18図-126	SE120	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第18図-127	SX210	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東			*15.0	三彩 内面薄い肌付	一部無釉	無釉							S210-9 二次被熱
第18図-128	SX210	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-6 二次被熱
第18図-129	表採	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									表採 二次被熱
第18図-130	SX210	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩									S210-6 二次被熱
第18図-131	SK070	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩	無釉								二次被熱
第18図-132	表採	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									二次被熱
第18図-133	SX210	華南三彩陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-7 二次被熱
第18図-134	SX210	華南三彩陶器	不明		中国 福建・広東				三彩 内面薄い肌付									S210-2 二次被熱
第19図-135	SX210	陶器	四耳壺		タイ ノイ川窯	*16.4	*39.2	*17.8	緑褐色~ 黒褐色	下半無釉 ・ケズリ	一部無釉	無釉						S210-2/6/7/S239-2/SD177接 合断面最大径 *36.2
第19図-136	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯			*21.2	緑褐色~ 黒褐色	下半無釉 ・ケズリ	一部無釉	無釉						S210-4/6/7 断面最大径 *44.8
第19図-137	SX210	陶器	四耳壺		タイ ノイ川窯	*20.6	60.5	28.7	黄褐色不 透明		一部無釉	無釉						S210-3/7/8 断面最大径 *47.8
第19図-138	SX210	陶器	四耳壺		タイ ノイ川窯	19.8	*57.2	25.8	黄褐色不 透明		一部無釉	無釉						S210-8/9 断面最大径 44.7
第20図-139	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯	*16.6			黄褐色不 透明		無釉							S210-5
第20図-140	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯	*16.4			緑褐色		無釉							S210-10
第20図-141	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯				黄白色不 透明		無釉							S210-5
第20図-142	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯	16			緑褐色~ 褐色		無釉							S210-3/8 二次被熱
第20図-143	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯	*20.2			黄褐色不 透明		無釉							S210-7/8/9
第20図-144	SX210	陶器	壺		タイ ノイ川窯				緑褐色~ 黄灰色		無釉							S210-2/8 断面最大径 *37.8

種目番号	通標番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係
										外面	内面	見込み	底部	石英	陶石	金雲母	赤色粒	
第20図-145	SX210	陶器	壺の耳		タイノイ川窯				黄褐色不透明									S210-5
第20図-146	SX210	陶器	壺の耳		タイノイ川窯				黄褐色不透明									S210-5
第20図-147	SX210	陶器	壺の耳		タイノイ川窯				黄褐色不透明									S210-8
第20図-148	SX210	陶器	壺の耳		タイノイ川窯				黄褐色不透明									S210-8
第20図-149	SX210	陶器	壺の耳		タイノイ川窯				黄褐色不透明									S210-4
第20図-150	SX210	陶器	壺の耳		タイノイ川窯				褐色-黒褐色									S210-4
第20図-151	SX210	陶器	壺		タイノイ川窯				黄褐色不透明	無釉								S210-5/7/9 胴部最大径 *43.6
第20図-152	SX210	陶器	壺		タイノイ川窯				黄褐色不透明	無釉								S210-9
第21図-153	SX210	陶器	三耳壺		ミャンマー	16.6	*59.0	*18.0	黒緑褐色	貼付文 下半無釉	無釉		無釉					S210-6 胴部最大径 47.6
第21図-154	SX210	焼締陶器	長胴瓶		ベトナム													S210-10 口縁部は表漆品 二次被熱顯著
第22図-155	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-1/6/7 + SK221
第22図-156	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-1/7
第22図-157	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-8
第22図-158	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-3/7
第22図-159	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-8
第22図-160	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-5
第22図-161	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼			13.2										S210-1
第22図-162	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼													S210-1/2/7
第22図-163	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼			*37.0										S210-1/3/7
第22図-164	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼			*30.1	13.8	*11.8								S210-1/3/7
第22図-165	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼			*32.2										S210-1/2
第22図-166	SX210	焼締陶器	播鉢		備前焼					*14.0								S210-6 SK070
第23図-167	SX210	焼締陶器	徳利		備前焼	3.1	13.4	*6.0										
第23図-168	SX210	焼締陶器	壺		備前焼	8.4												S210-6 181-183と同一個体か
第23図-169	SX210	焼締陶器	壺		備前焼													S210-6
第23図-170	SX210	焼締陶器	壺?		備前焼													S210-1
第23図-171	SX210	焼締陶器	茶研		備前焼			8.1										S210-2 研面は摩滅している
第23図-172	SX210	焼締陶器	鉢?		備前焼?													S210-4
第23図-173	SX210	焼締陶器	壺?		備前焼													S210-5
第23図-174	SX210	焼締陶器	水屋甕		備前焼			*31.5										S210-1
第23図-175	SX210	焼締陶器	水屋甕		備前焼													S210-9
第23図-176	SX210	焼締陶器	水屋甕		備前焼													S210-3 胴部径 *31.0
第23図-177	SX210	焼締陶器	水屋甕		備前焼													S210-1
第23図-178	SX210	焼締陶器	水屋甕		備前焼			*35.5										S210-9
第23図-179	SX210	焼締陶器	水屋甕?		備前焼					*30.0								S210-9
第24図-180	SX210	焼締陶器	四耳壺		備前焼													S210-3/4/9
第24図-181	SX210	焼締陶器	水屋甕		備前焼					*22.0								S210-4
第25図-182	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-7
第25図-183	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-3/7
第25図-184	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-6/7
第25図-185	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-9
第25図-186	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-6/9
第25図-187	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													715
第25図-188	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-3/5
第25図-189	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼													S210-10
第25図-190	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼	54												706
第25図-191	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼			*55.3										S210-3/8 S210-8に埋没された 底唇と同一個体か
第25図-192	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼	59.4												705

採石番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉色	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /:接合関係
										外面	内面	見込み	底部	石灰	金屑	赤色	他	
第25図-193	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼	53.6												SX210-5/10 肩部に「二石」又は「二石入」の刻印を有する
第26図-194	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼	*58.0												SX210-3/5 SX210-3に埋置されていた底部と同一個体か
第26図-195	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼	57												707
第26図-196	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼	53.2	95	36.2										SX210-1 SX210-1に埋置されていたもの
第27図-197	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼		36.3	41										SX210-1/6 SX210-1に埋置されていたもの
第27図-198	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼		41.2	40.2										SX210-7/8/9 SX210-8に埋置されていたもの
第27図-199	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼		47.6	42										SX210-3/9/10 SX210-3に埋置されていた
第28図-200	SX210	焼締陶器	大甕		備前焼		74	38.8										SX210-7/SX210 SX210-7に埋置されていた
第28図-201	SX210	焼締陶器	鉢		信楽焼	*26.6	13.4	*13.8										SX210-1/6/7
第28図-202	SX210	焼締陶器	壺		信楽焼	13.3	*16.8	*16										SX210-2/5/6/7/8/9 接合
第29図-203	SX210	土師器	小皿		不明	*7.0			灰褐色	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ							SX210-9
第29図-204	SX210	土師器	小皿		不明	*7.2	2.2	3.2	明褐色～灰褐色	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	糸切り					SK241 二次被熱
第29図-205	SX210	土師器	小皿		不明	*7.8	2.1	3.4	明褐色～灰褐色	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	糸切り					SX210-9
第29図-206	SX210	土師器	小皿		不明	*7.8	2.2	3.2	灰褐色	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	糸切り					SX210-9
第29図-207	SX210	土師器	小皿		不明					同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	糸切り					SX210-5
第29図-208	SX210	土師器	小皿		不明				*3.8 暗灰色			同転ヨコナデ	糸切り					SX210-9
第29図-209	SX210	土師器	小皿		不明				*3.5 灰褐色～明褐色	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	同転ヨコナデ	糸切り					
第29図-210	SX210	京都系土師器	皿		在池	8.3	2.3		明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	1方向ナ					
第29図-211	SX210	京都系土師器	皿		在池	*10.4			淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ						SX210-5/9
第29図-212	SX210	京都系土師器	皿		畿内?				明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ						SX210-5
第29図-213	SX210	土師質土器	鍋		在池	*35.8				下平ケズリ	ヨコナデ	ヨコナデ						SX210-5
第29図-214	SX210	瓦質土器	鉢		畿内?	*25.7	*9.8											SX210-1/7/8 二次被熱により赤変している
第29図-215	SX210	瓦質土器	不明		畿内?					ミガキ								二次被熱 SX210-1
第29図-216	表探	瓦質土器	不明		畿内?					ミガキ								二次被熱
第29図-217	SX210	瓦質土器	不明		畿内?					ミガキ								二次被熱 SX210-6/7
第29図-218	SX210	瓦質土器	不明		畿内?					ミガキ								二次被熱 SX210-1/7
第29図-219	SX210	瓦質土器	不明		畿内?					ミガキ								二次被熱 SX210-6/7
第29図-220	SX210	瓦質土器	火鉢		畿内?	*25.0												胴部最大径 *28.5 二次被熱 SX210-1/6
第29図-221	表探	瓦質土器	火鉢		畿内?													228の胴部(三足)か二次被熱
第29図-222	SX210	竹	竹牌			長2.7	幅2.0	厚0.35										SX210-3 二次被熱
第29図-223	SX210	竹	竹牌			長1.55	幅1.9	厚0.35										SX210-10 二次被熱
第29図-224	SX210	竹	竹牌			長1.6	幅1.5	厚0.35										SX210-4 二次被熱
第29図-225	SX210	粘板岩	硯			長さ10.6	幅4.9	厚0.7										SX210-8
第29図-226	SX210	土壁片																二次被熱 スサの痕跡
第29図-227	SX210	土壁片																二次被熱 スサの痕跡
第31図	SX074	焼締陶器	大甕		備前焼			37.2										
第35図-1	SX194	京都系土師器	皿		在池	8.6			明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	指摺さえナデ					口縁部すす付者
第35図-2	SX194	焼締陶器	大甕		備前焼													
第35図-3	SX194	焼締陶器	大甕		備前焼			41.6										
第37図-1	SE120	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	10.7												
第37図-2	SE120	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*8.0										費付無精
第37図-3	SE120	焼締陶器	小甕		備前焼	4	6.4	5				底唇付近ケズリ	糸切り					
第37図-4	SE120	陶器	四耳壺		中国 福建・広東	*9.7						内外面黒褐色釉						
第37図-5	SE120	焼締陶器	水屋甕		備前焼	*22.7												胴部最大径 *21.9
第37図-6	SE120	焼締陶器	大甕		備前焼													
第37図-7	SE120	焼締陶器	大甕		備前焼													
第37図-8	SE120	焼締陶器	大甕		備前焼													
第37図-9	SE120	焼締陶器	大甕		備前焼													

挿入番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係		
										外面	内面	見込み	底面	石灰	赤四角	赤部	赤色粒		他	
第37図-10	SE120	焼締陶器	播鉢		備前焼	*36.8														
第37図-11	SE120	陶器	壺		タイノイ川窯	*20.6			緑褐色		無釉									
第37図-12	SE120	瓦質土器	風炉		畿内産か?	*30.0														
第37図-13	SE120	瓦質土器	井筒		不明	*56.4	46	56.0	2.5YR 6/4	ハケム	指おさえナデ									
第37図-14	SE120	瓦質土器	井筒		不明	58.1	47.2	57.5	7.5YR 7/4	ハケム	指おさえナデ									
第39図-1	SE206	緑釉陶器	碗		畿内産	*12.2														
第39図-2	SE206	白磁	皿		中国 景德鎮系	*15.1														
第39図-3	SE206	青磁	碗	I-1	中国 龍泉窯系			*5.0				無釉								
第39図-4	SE206	青花	皿	皿B 1	中国 景德鎮系			*4.6				乳付無釉								
第39図-5	SE206	陶器	蓋		中国 福建・広東?					外面 黒釉?										
第39図-6	SE206	青白磁	梅瓶		中国 景德鎮系						無釉									
第39図-7	SE206	京都系土師器			在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第39図-8	SE206	京都系土師器			在地				灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえナデ								
第39図-9	SE206	京都系土師器	小皿		在地		1.8~ 1.9		明灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえナデ							
第39図-10	SE206	土師器	小皿		在地	*7.8	1.3~ 1.4	*6.6	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り						長行 白色粒	
第41図-1	SE211	陶器?	碗		不明	長さ 7.6	幅 1.5	高さ 2.5												黒褐色物質付着
第41図-2	SE211	白磁	皿		中国 福建・広東	*10.7					下半無釉									陶胎
第41図-3	SE211	京都系土師器	皿		在地	*10.6	2.2	*4.2	明灰褐色 ~黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第43図-1	SK054	白磁	皿		中国 景德鎮系															
第43図-2	SK054	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系	*12.4														
第43図-3	SK054	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第43図-4	SK054	緑釉陶器	碗		畿内産?															
第43図-5	SK054	青花	皿		中国 漳州窯系	*11.2	*3.3	*4.0												陶胎
第43図-6	SK054	土師器	坏		在地			*5.0	橙褐色	ヨコナデ	不明	不明	糸切り							
第43図-7	SK054	京都系土師器	小皿		在地	*8.9	*5.0	2.4	明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方方向ナ [0.7]ナデ	指おさえ ナデ							口縁部すず付着
第43図-8	SK054	京都系土師器	皿		在地	*12.2			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								
第43図-9	SK054	京都系土師器	皿		在地	*20.8			灰褐色~ 黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								白色粒
第43図-10	SK054	焼締陶器	播鉢		備前焼	*28.3 5	13.35	*10.9				9本單位 の横り目								
第44図-1	SK056	青磁	肴皿		中国 産地不明	*8.6					縁状へら 彫り	縁状へら 彫り								
第44図-2	SK056	土師器	坏		在地	11.4	2.5	6.8	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り							
第45図-1	SK057	青花	皿		中国 漳州窯系															陶胎
第45図-2	SK057	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第45図-3	SK057	京都系土師器	皿		在地				暗灰色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第45図-4	SK057	青花	皿		中国 景德鎮系	*12.1														乳付無 釉
第45図-5	SK057	京都系土師器	皿		在地	*13.6		*6.0	灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方方向 ナデ	指おさえ ナデ							
第47図-1	SK025	青磁	盤		中国 龍泉窯系															
第47図-2	SK025	青磁	碗		中国 龍泉窯系?	*6.1			淡緑灰色 貫入				乳付に汚 損							陶胎
第47図-3	SK025	白磁	皿		中国 景德鎮系	*7.7							乳付無釉							
第47図-4	SK025	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*6.0					乳付無釉							
第47図-5	SK025	焼締陶器	壺?		備前焼?															
第47図-6	SK025	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								
第47図-7	SK025	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第47図-8	SK025	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								
第47図-9	SK025	京都系土師器	皿		在地	*11.6			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方方向 ナデ	指おさえ ナデ							
第47図-10	SK025	京都系土師器	皿		在地	*11.4			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								
第47図-11	SK025	京都系土師器	皿		在地	*12.4			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								
第47図-12	SK025	京都系土師器	皿		在地	*15.2			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								
第47図-13	SK025	京都系土師器	皿		在地	*10.6			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指おさえ ナデ								

採回番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係
										外面	内面	見込み	底部	石灰	角質	金屑	赤色粒	
第17回-14	SK025	京都系土師器	皿		在地	*12.6			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指摺さえナデ					
第17回-15	SK025	焼締陶器	播鉢		備前焼							8本単位 の振り目						
第17回-16	SK025	陶器	壺		中国 福建・広東			*12.4	内外面暗 褐色釉				無釉					底部外面に重ね焼きによる融着痕
第17回-17	SK025	陶器	壺		タイ ノイ川窯				褐色~青 灰白色		無釉							SK188と接合 胴部最大径39.8 cm以上 二次加熱
第49回-1	SK032	京都系土師器	坏		在地				灰褐色~ 淡赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ							
第49回-2	SK032	焼締陶器	坏		備前?	*10.0	2.5	*4.8					糸切り					
第49回-3	SK032	土師器	坏		在地	*12.2	2.5	*6.6	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○	○	
第51回-1	SK070	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*16.6												
第51回-2	SK070	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*10.5	2.4	*6.6					畳付無釉					
第51回-3	SK070	陶器	壺		タイ ノイ川窯			*26.4		無釉	無釉		無釉					
第55回-1	SK073	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系													
第55回-2	SK073	青花	皿	皿F	中国 景德鎮系													
第55回-3	SK073	陶器	蓋		中国 福建・広東			3.3		上面のみ 黒褐色釉								最大径 5.8cm
第55回-4	SK073	土師器	小皿		在地	*4.0	1.2	*2.6	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ 段成形	糸切り	○	○	○		
第55回-5	SK073	土師器	小皿		在地	*7.9	1.2	*6.4	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指摺一方 向ナデ	糸切り→ 板状位置	○	○	○	○	長石
第55回-6	SK073	土師器	小皿		在地	*6.9	1.4	*5.4	暗橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	糸切り	○	○	○		
第55回-7	SK073	土師器	小皿		在地		0.8		橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	指摺一方 向ナデ	糸切り→ 板状位置	○	○	○	○	
第55回-8	SK073	土師器	小皿		在地		1.0		橙褐色~ 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り	○	○	○		
第55回-9	SK073	土師器	小皿		在地		1.3		明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り	○	○	○		
第55回-10	SK073	土師器	坏		在地				橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○	○	白色粒
第55回-11	SK073	土師器	坏		在地			*4.8	橙褐色		ヨコナデ 段成形	指摺一方 向ナデ	糸切り	○	○	○		
第55回-12	SK073	土師器	坏		在地			*5.8	明灰黄褐色			不整な一 方向ナデ	糸切り	○	○	○		長石
第55回-13	SK073	土師質土器	碗		在地	*11.8				ヨコナデ	ヨコナデ			○	○	○		長石
第55回-14	SK073	京都系土師器	皿		在地	*8.8	*4.2		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	指摺さえ ナデ			○		
第55回-15	SK073	京都系土師器	小皿		在地	8.6	2.1		明黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	指摺さえ ナデ	○	○			口縁部すす付着
第55回-16	SK073	京都系土師器	小皿		在地	*8.0	2		灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	指摺さえ ナデ	○	○			
第55回-17	SK073	京都系土師器	皿		在地	*10.7	2.3		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方 向ナデ	指摺さえ ナデ	○	○			
第55回-18	SK073	京都系土師器	小皿		在地	8.6	2.2		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方 向ナデ	指摺さえ ナデ	○				
第55回-19	SK073	京都系土師器	小皿		在地	*8.5	2		明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ナデ	指摺さえ ナデ	○				
第55回-20	SK073	京都系土師器	皿		在地	10.3	2.4		明灰褐色~ 橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方 向ナデ	指摺さえ ナデ	○	○			
第55回-21	SK073	京都系土師器	皿		在地	*10.1	1.85		明褐色~ 暗灰褐色				指摺さえ ナデ	○	○	○		
第55回-22	SK073	京都系土師器	皿		在地	*11.4	2.1		橙褐色~ 灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方 向ナデ	指摺さえ ナデ	○	○			
第55回-23	SK073	京都系土師器	坏		在地	*12.2			暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指摺さえ ナデ	○	○	○		長石
第55回-24	SK073	京都系土師器	皿		在地	*13.8			灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指摺さえ ナデ					
第55回-25	SK073	京都系土師器	皿		在地	*16.8			灰橙褐色~ 灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方 向ナデ	指摺さえ ナデ			○		
第55回-26	SK073	土師質土器	火鉢		在地									○	○	○		白色粒 口縁部片
第55回-27	SK073	焼締陶器	播鉢		備前焼			*11.0				9本単位 の振り目						
第55回-28	SK073	焼締陶器	水屋甕		備前焼	*26.8		*23.5										
第56回	SK083	青磁	碗		中国 景德鎮系			*4.6					畳付無釉					高台内に呉須で二重圈線を施文
第57回-1	SK080	青磁	碗		中国 同安窯系					横指	へら彫り							
第57回-2	SK080	土師器	小皿		在地	8.7	2.7	4.3	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○		
第57回-3	SK080	土師器	坏		在地	*12.3	3.8	*5.2	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	糸切り	○	○	○		長石
第57回-4	SK080	土師器	小皿		在地	*10.2			灰褐色~ 明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	段成形			○	○		白色粒
第57回-5	SK080	土師器	坏		在地	*12.2	3.6	*5.9	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○		長石
第57回-6	SK080	土師器	坏		在地	*12.3	3.6		橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	糸切り	○	○	○		
第57回-7	SK080	土師器	坏		在地			*5.5	橙褐色	ヨコナデ	不明	不明	糸切り	○				
第57回-8	SK080	土師器	小皿		在地			*4.4	灰白褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		糸切り		○			
第57回-9	SK080	土師器	坏		在地			*6.0	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○		長石

挿入番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 / : 接合関係
										外面	内面	見込み	底部	石灰	金屑	水色粒	他	
第59図-1	SK189	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ							
第59図-2	SK189	京都系土師器	皿		在地				灰色-明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ							トリベに転用
第59図-3	SK189	京都系土師器	皿		在地				灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ							
第59図-4	SK189	土師器	小皿		在地		0.9		明褐色				糸切り					長石
第61図-1	SK192	青磁	皿		中国 龍泉窯系													
第61図-2	SK192	京都系土師器	皿		在地				橙褐色	ヨコナテ	ヨコナテ [1:100]	一方 向ナテ						
第61図-3	SK192	土師器	小皿		在地	*7.2	1.82	*4.3	橙褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	器い一方 向ナテ	糸切り 板状圧痕					
第61図-4	SK192	土師器	杯		在地	*12.6	2.7	*7.0	橙褐色	ヨコナテ	工具によ る段	器い一方 向ナテ	糸切り					
第61図-5	SK192	土師器	杯		在地			6.3	明褐色	ヨコナテ	工具によ る段	器い一方 向ナテ	糸切り 板状圧痕					
第61図-6	SK192	青銅	刀状具															
第61図-7	SK192	焼締陶器	大甕		備前焼	72												
第63図-1	SK188	磁器	皿	皿E	中国 景德鎮系													
第63図-2	SK188	白磁	皿		中国 景德鎮系	*11.2												
第63図-3	SK188	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*20.6												
第63図-4	SK188	焼締陶器	鉢		備前焼?	*10.4												
第63図-5	SK188	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ							
第63図-6	SK188	京都系土師器	小皿 (註目トリベ)		在地	*6.2												内面にガラス状物質(スラグ)付着
第63図-7	SK188	焼締陶器	大甕		備前焼													
第63図-8	SK188	焼締陶器	大甕		備前焼													
第63図-9	SK188	焼締陶器	大甕		備前焼			*40.0										
第64図-1	SX200	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系			4.4						高次 付無色				
第64図-2	SX200	白磁	皿		中国													
第64図-3	SX200	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*6.1						高次 付無色				
第64図-4	SX200	青花	皿		中国 漳州窯系			*11.6		ヘラ彫り				高台砂付 着				
第64図-5	SX200	焼締陶器	搦鉢		備前焼	*31.8						13本-9本 単位露目						
第64図-6	SX200	陶器	壺		タイノイ川窯				暗黄灰色									
第64図-7	SX200	焼締陶器	大甕		備前焼													ヘラ記号
第64図-8	SX200	焼締陶器	大甕		備前焼													ヘラ記号
第67図-1	SK216	白磁	皿		中国 景德鎮系			*7.2						高次 付無色				
第67図-2	SK221	陶器	舟徳利?		朝鮮			*13.0	緑褐色釉									
第67図-3	SK221	土塚																青花皿が混入 二次被熱
第67図-4	SK221	土塚																二次被熱
第67図-5	SK221	土塚																二次被熱
第69図-1	SK223	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系													
第69図-2	SK223	青花	碗		中国 景德鎮系			*4.6						高次 付無色				高台内「口幅口」銘
第69図-3	SK223	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系			4.4						高次 付無色				
第69図-4	SK223	青花	皿	皿F	中国 景德鎮系	*13.5												
第69図-5	SK223	白磁	皿		中国 景德鎮系	*12.0												
第69図-6	SK223	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系													
第69図-7	SK223	青磁	菊皿		中国 景德鎮系	10.3	2.8	4.8						高次 付無色				SD177と接合
第69図-8	SK223	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*8.0						高次 付無色				
第69図-9	SK223	青花	皿	皿F	中国 景德鎮系	*13.2	*2.2	*7.3						高次 付無色				二次被熱
第69図-10	SK223	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*10.5	*2.5	*5.6						高次 付無色				SD177と接合 高台内「口幅口 春」銘
第69図-11	SK223	陶器	舟徳利		朝鮮	*5.5			内外面 緑褐色釉									
第69図-12	SK223	焼締陶器	瓶		備前焼?			*6.45			下部ケス リ							焼成不良か 胴部最大径 9.0
第69図-13	SK223	陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 裏面褐釉									胴部最大径*28.2
第69図-14	SK223	陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 裏面褐釉									二次被熱
第69図-15	SK223	陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 裏面褐釉									

採掘番号	遺物番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SK210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係		
										外面	内面	見込み	底部	行夾	角閃石	金雲母	赤色粒		他	
第69図-16	SK223	陶器	壺	刻花	中国 福建・広東				三彩 裏面褐色											
第69図-17	SK223	京都系土師器	皿		在り	*12.2			明褐色~ 明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ			○						
第69図-18	SK223	京都系土師器	皿		在り	*12.2			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ			○						
第69図-19	SK223	京都系土師器	皿		在り	*15.3	3.6		灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方ナデ			○	○				
第69図-20	SK223	土師器	小皿		在り	7.95	2.3	4.3	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○			○	結晶片 岩	口縁部すす付着	
第69図-21	SK223	土師器	小皿		在り	*8.3	*5.35	2.1	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り							
第69図-22	SK223	土師器	小皿		在り	*8.6	2.6	*4.9	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	不整、一 方向ナデ	糸切り→ 板状圧痕		○	○		結晶片 岩粒		
第69図-23	SK223	土師器	坏		在り	11.6	28	78	灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 段形成		粗い、一 方向ナデ	糸切り	○	○	○		長石	内面すす付着
第69図-24	SK223	土師器	坏		在り	*8.5	1.6												内部にスサ入り土付着 二次被熱	
第69図-25	SK223	陶器	壺		タイ ノイ川窯	*18.6			無釉											
第69図-26	SK223	焼締陶器	壺		備前焼															
第70図-27	SK223	瓦質土器	播鉢			*25.1				指摺さえ ナズリ	4本単位 の播り目			○	○					
第70図-28	SK223	安山岩	石臼			*34.6	*10.4													
第73図-1	SK224	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系														量付無釉	
第73図-2	SK224	土師器	小皿		在り	6.5	4.6	2	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	不明	糸切り	○	○	○		結晶片 岩	口縁部すす付着	
第73図-3	SK224	土師器	坏		在り	*10.4	2.8	*4.8	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○		長石		
第73図-4	SK233	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*10.8														
第73図-5	SK233	白磁	皿		中国 福建・広東	*12.3	2.1	*5.85					無釉	無釉						
第73図-6	SK233	京都系土師器	皿		在り	*11.7	2.35		明褐色					糸切り→ 板状圧痕	○					
第73図-7	SK233	京都系土師器	皿		在り	*13.6	3.1		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	二方向ナ デ		○	○					
第75図-1	SK235	京都系土師器	皿		在り	*14.2	2.1	*7.8	灰褐色~ 橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	二方向ナ デ		○	○					
第75図-2	SK235	京都系土師器	皿		在り	*14.0			明灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ			○	○	○				
第75図-3	SK235	京都系土師器	皿		畿内?	*14.2	2.15	*8.2	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	二方向ナ デ	指摺さえ ナズリ			○			SK227出土破片と接合	
第75図-4	SK235	土師器	坏		在り			*4.4	橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○		黒色粒		
第77図	SF226	土師器	坏		在り	13.3	34	71.5	暗橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ 段形成	粗い、一 方向ナデ	糸切り 板状圧痕	○	○	○		長石		
第78図-1	SD177	青花	碗	碗C?	中国 景德鎮系	*10.8														
第78図-2	SD177	青花	皿		中国 漳州窯系														陶胎	
第78図-3	SD177	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系															
第78図-4	SD177	青花	皿	皿B 1	中国 景德鎮系															
第78図-5	SD177	青花	皿	皿B 1	中国 景德鎮系															
第78図-6	SD177	青花	皿		中国 漳州窯系	*10.8													陶胎	
第78図-7	SD177	青花	皿		中国 漳州窯系														陶胎	
第78図-8	SD177	青花	皿		中国 漳州窯系			*4.6						量付・高 台内無釉					陶胎	
第78図-9	SD177	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*10.0	2.8	*5.4						高台砂付 着					高台内「口端口通」銘	
第78図-10	SD177	青花	皿		中国 漳州窯系			*4.2											陶胎	
第78図-11	SD177	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*5.8												
第78図-12	SD177	青花	皿		中国 漳州窯系														陶胎	
第78図-13	SD177	灰色磁器	掛花人		中国 産地不明	*4.0			灰白色不 透明釉											
第78図-14	SD177	焼締陶器	徳利		備前焼															
第78図-15	SD177	焼締陶器	鉢?		不明			*10.6						○					白色粒 多数	
第78図-16	SD177	焼締陶器	鉢?		備前焼															
第78図-17	SD177	陶器	四耳壺		中国 福建・広東				内外面黒 褐色			一部無釉								
第78図-18	SD177	陶器	壺		タイ ノイ川窯				暗褐色釉											
第78図-19	SD177	焼締陶器	播鉢		備前焼															
第78図-20	SD177	焼締陶器	播鉢		備前焼			*11.6											15本単位 の播り目	
第78図-21	SD177	焼締陶器	播鉢		備前焼														10本単位 の播り目	
第78図-22	SD177	焼締陶器	大甕		備前焼															刻印「式」
第78図-23	SD177	京都系土師器	皿		在り					ヨコナデ	ヨコナデ						○			

標記番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土					備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係		
										外面	内面	見込み	底部	石灰	内四角	金層	水色粒	他			
第78図-24	SD177	京都系土師器	皿		在地				黒褐色	ヨコナテ	ヨコナテ										
第78図-25	SD177	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ										
第78図-26	SD177	京都系土師器	皿		在地				灰褐色~黒褐色	ヨコナテ	ヨコナテ				○		○				
第78図-27	SD177	京都系土師器	皿		在地				橙褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 2の字ナテ				○						
第78図-28	SD177	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ						○				
第78図-29	SD177	京都系土師器	皿		在地				灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 2の字ナテ						○	○			
第78図-30	SD177	京都系土師器	皿		在地				淡橙褐色	ヨコナテ	ヨコナテ						○	○			
第78図-31	SD177	京都系土師器	小皿		在地	*9.0			明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	ヨコナテ					○				
第78図-32	SD177	京都系土師器	坏		在地	*9.0	2.1		橙褐色~灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	一方向ナテ					○				
第78図-33	SD177	京都系土師器	小皿		在地	*10.8	1.9~2.1		淡橙褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 2の字ナテ	ナテ									
第78図-34	SD177	土師器	坏		在地	14	1.9	4.4		ヨコナテ	ヨコナテ 1の字ナテ	一方向ナテ				○	○	○			
第78図-35	SD177	京都系土師器	坏		在地	10.7	2.1~2.4		黒褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 1の字ナテ	ナテ									
第78図-36	SD177	京都系土師器	坏		在地	11.4	2.3		明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	一方向ナテ				○	○	○			口縁部すす付着 SK216と接合
第78図-37	SD177	京都系土師器	坏		在地	10.66	2.3	5	灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 1の字ナテ	ナテ									指おさえナテ
第78図-38	SD177	土師質土器	碗		在地	12			明褐色~橙褐色	ミガキ	ヨコナテ					○	○	○			外面下半はヘラ削り後ミガキ
第78図-39	SD177	土師器	小皿		在地	*8.6	*4.9	1.9~2.0	橙褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	糸切り				○	○	○			口縁部すす付着
第78図-40	SD177	土師器	小皿		在地	*8.4	*4.4	2	橙灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	不明	糸切り			○	○	○			長石・結晶片
第78図-41	SD177	土師器	小皿		在地	*8.1	2	*4.3	明褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	不明	糸切り			○	○	○			
第79図-42	SD177	石製品(砂岩)	茶臼			*37.1															
第81図-1	SX176	白磁	皿		中国 景德鎮系																
第81図-2	SX176	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系			*5.3													畳付無粘
第81図-3	SX176	青磁	碗		中国 同安窯系			*5.0													無粘
第81図-4	SX176	白磁	皿		中国 景德鎮系																
第81図-5	SX176	青花	皿	皿B1?	中国 景德鎮系						下半無粘砂付着										
第81図-6	SX176	白磁	皿		中国 福建・広東	15.45															陶胎
第81図-7	SX176	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*6.4													畳付無粘 漆紋?
第81図-8	SX176	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系			*5.9													畳付無粘
第81図-9	SX176	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*11.2															
第81図-10	SX176	白磁	皿		中国 景德鎮系			*8.3													畳付無粘
第81図-11	SX176	青花	皿	皿C	中国 景德鎮系																
第81図-12	SX176	青磁	碗	碗I-1	中国 龍泉窯系																ヘラ彫り
第81図-13	SX176	陶器	不明陶器																		暗紫色物質が付着 二次被熱?
第81図-14	SX176	陶器	盤	刻花	中国 福建・広東			*25.4	三彩												胎土軟質 二次被熱により釉剥落
第82図-15	SX176	焼締陶器	壺?		備前焼?																
第82図-16	SX176	焼締陶器	播鉢		備前焼																
第82図-17	SX176	陶器	壺		タイノイ川窯				無粘	印線3本											
第82図-18	SX176	瓦質土器	火鉢		在地			*33.6		青灰文ス タンブ											
第82図-19	SX176	焼締陶器	播鉢		備前焼																13本単位 の覆り目
第82図-20	SX176	陶器	壺		中国 福建・広東?			*10.0	茶褐色釉	一筋無粘											
第82図-21	SX176	陶器	鉢?		朝鮮			*15.4	緑褐色釉												二次被熱のため 釉は白っぽく 変色
第82図-22	SX176	陶器	壺		中国 福建・広東?				外面薄 い無粘		無粘										
第82図-23	SX176	京都系土師器	小皿		在地	*7.8	2		明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ						○				内側にナテ跡?
第82図-24	SX176	京都系土師器	皿		在地	*8.2	1.9		明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ						○				二次被熱
第82図-25	SX176	京都系土師器	皿		在地	9.3	1.9		明灰褐色~黒褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 10の字ナテ	不明									
第82図-26	SX176	京都系土師器	皿		在地	*11.7	2.8		明赤褐色	ヨコナテ	ヨコナテ	一方向ナテ					○	○			
第82図-27	SX176	京都系土師器	皿		在地	12.4	2.4		灰褐色~黒褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 12の字ナテ	一方向ナテ					○	○	○		
第82図-28	SX176	京都系土師器	皿		在地	*13.2			明灰褐色~黒褐色	ヨコナテ	ヨコナテ										
第82図-29	SX176	京都系土師器	皿		在地	12.9	2.5		明灰褐色	ヨコナテ	ヨコナテ 11の字ナテ	一方向ナテ									

棟目番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /:接合関係	
										外面	内面	見込み	底部	行	金	赤	他		
第82図-30	SX176	京都系土師器	皿		在地	*14.6			灰褐色~黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第82図-31	SX176	京都系土師器	皿		在地	16.3	9.7		灰黄褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方ナ デ	指おさえ ナデ						
第82図-32	SX176	京都系土師器	皿		在地				赤灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第82図-33	SX176	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色~灰色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第82図-34	SX176	京都系土師器	皿		在地				橙褐色~明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第82図-35	SX176	京都系土師器	皿		在地				暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								軽石粒
第82図-36	SX176	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								
第82図-37	SX176	土師器	小皿		在地	*8.3	*5.4	1.7~ 1.85	暗灰色				糸切り						トリベに転用
第82図-38	SX176	土師器	坏		在地		2.15		橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	悪い一 方向ナ デ	糸切り						
第82図-39	SX176	土師器	坏		在地			4.85	明褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り						
第82図-40	SX176	土師器	小皿		在地		2.2~ 2.25		橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	悪い一 方向ナ デ	糸切り						焼成前穿孔
第82図-41	SX176	土師器	坏		在地	*11.1 3	2.4~ 2.6	*6.3	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								板状圧痕
第82図-42	SX176	土師質土器	トリベ		在地	5.6	1.8												黒褐色付着物(スラグ)
第82図-43	SX176	京都系土師器	小皿(転 用トリベ)		在地	7.8	1.7												内面に黒色・暗赤色付着物
第82図-44	SX176	土師質土器	トリベ		在地	6.6	3.2												内面に黒色・暗赤色ガラス状物 質付着
第82図-45	SX176	京都系土師器	小皿(転 用トリベ)		在地														内面に黒色・暗赤色物質付着
第82図-46	SX176	土師質土器	トリベ		在地	*7.4													内面に黒色・暗赤色物質付着
第82図-47	SX176	土師質土器	羽口		在地							内径 1.0~1.5							
第82図-48	SX176	土師質土器	羽口		在地							内径 1.6							
第82図-49	SX176	土師質土器	羽口		在地							内径*2.2							
第82図-50	SX176	焼締陶器	壺		備前焼?			*11.2											外面に布目痕
第83図-1	SX176 上層	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*20.0													
第83図-2	SX176 上層	京都系土師器	小皿		在地	*7.3	1.9		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指押さえ ナデ						二次焼熱
第83図-3	SX176 上層	京都系土師器	小皿		在地				灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指押さえ ナデ						
第83図-4	SX176 上層	京都系土師器	皿		在地	*10.2			灰褐色~ 赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ		指押さえ ナデ						
第83図-5	SX176 上層	京都系土師器	皿		在地	*12.0			明灰褐色~ 橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方ナ デ	指押さえ ナデ						粘土板接合痕
第83図-6	SX176 拡張区	京都系土師器	皿		在地	*13.0	2.7		明灰褐色~ 橙褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方ナ デ	指押さえ ナデ						
第83図-7	SX176 上層	京都系土師器	小皿(転 用トリベ)		在地	*8.0	*2.1												
第83図-8	SX176 拡張区	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系														
第83図-9	SX176 拡張区	青磁	盤		中国 龍泉窯系														
第83図-10	SX176 拡張区	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系														
第83図-11	SX176 拡張区	青白磁	梅瓶		中国 景德鎮系														
第83図-12	SX176 拡張区	京都系土師器	皿		在地	*8.6	1.9		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ								口縁部に穿孔
第83図-13	SX176 拡張区	京都系土師器	皿		在地				明褐色~ 赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方ナ デ							二次焼熱著しい
第83図-14	SX176 拡張区	焼締陶器	播鉢		備前焼														
第83図-15	SX176 拡張区	焼締陶器	播鉢		備前焼														
第83図-16	SX176 拡張区	焼締陶器	播鉢		備前焼			*12.8											
第83図-17	SX176 拡張区	焼締陶器	壺		備前焼														
第83図-18	SX176 拡張区	焼締陶器	播鉢		備前焼	*31.0		*15.5				10本単位 の積り目							
第83図-19	SX176 拡張区	瓦質土器	火鉢			*37.1	*31.7	*31.8		菊文ス タンプ									三足付き
第85図-1	SX208	青花	皿		中国 漳州窯系														陶胎
第85図-2	SX208	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*16.8													
第85図-3	SX208	青磁	碗?		中国 龍泉窯系	*14.4						ヘラ彫り							
第85図-4	SX208	青磁	碗		中国 龍泉窯系	*10.0						ヘラ彫り							
第85図-5	SX208	白磁	皿		中国 福建・広東	*16.7													陶胎
第85図-6	SX208	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系			*5.6											畳付無粘
第85図-7	SX208	白磁	皿		中国 景德鎮系			*6.8											高台付砂付着
第85図-8	SX208	青花	皿	皿B 2	中国 景德鎮系														

種別番号	遺構番号	材質	器種	細別	産地/窯	口径	器高	底径	釉/色調	文様/調整				胎土				備考 SX210内および関連遺構内出土地点の細別 /: 接合関係		
										外面	内面	見込み	底部	石灰	内面	金雲母	赤色		他	
第85図-9	SX208	青磁	皿		中国 龍泉窯系					へり形	文様無し									
第85図-10	SX208	白磁	皿		中国 福建・広東							無釉							陶胎	
第85図-11	SX208	白磁	皿		中国 景德鎮系			*8.6						灰付無釉					高台内砂付着	
第85図-12	SX208	青花	皿	皿C	中国 景德鎮系	*9.7														
第85図-13	SX208	青花	皿	皿E	中国 景德鎮系	*12.5	*2.9	*7.2						灰付無釉						
第85図-14	SX208	焼締陶器	徳利		備前焼	*6.7														
第85図-15	SX208	焼締陶器	徳利		備前焼			*4.7											底部糸切り	
第85図-16	SX208	陶器	蓋?		中国 福建・広東			5.5	内外面黒褐色釉										三足?	
第85図-17	SX208	陶器	瓜形水注		中国 福建・広東			*8.5	三彩										二次被熱	
第85図-18	SX208	土師質土器	灯火具		在地			6.6	明灰褐色	ヨコナデ			糸切り後ナデ		○					
第85図-19	SX208	土師質土器	トリハ		在地	*3.5													赤褐色物質付着	
第85図-20	SX208	京都系土師器	小皿		在地	*8.4	*4.4		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ [1]0577			指押さえナデ			○		口縁部すず付着	
第85図-21	SX208	京都系土師器	皿		在地	*9.8			明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ [1]0577			指押さえナデ	○					
第85図-22	SX208	京都系土師器	皿		在地	*11.0	2.2		明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナデ		指押さえナデ		○	○			
第85図-23	SX208	京都系土師器	皿		在地	*13.8	2.5		灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナデ		指押さえナデ		○				
第85図-24	SX208	京都系土師器	皿		在地	*15.7			暗灰褐色～黒褐色	ヨコナデ	ヨコナデ			指押さえナデ	○					
第85図-25	SX208	焼締陶器	播鉢		備前焼	*31.5													10本単位 の埋り目	
第85図-26	SX208	焼締陶器	播鉢		備前焼															
第85図-27	SX208	焼締陶器	播鉢		備前焼			*15.6											11本単位 の埋り目	
第85図-28	SX208	焼締陶器	播鉢		備前焼	*27.2														
第85図-29	SX208	瓦質土器	鍋		在地	*45.5				ナデ 下 半ケスリ	ナデ									
第85図-30	SX208 上層	青花	碗	碗C	中国 景德鎮系	*13.2														
第85図-31	SX208 上層	青花	碗	碗E	中国 景德鎮系															
第85図-32	SX208 上層	白磁	碗		中国 産地不明	*13.8														
第85図-33	SX208 上層	磁器	碗	碗C	中国 景德鎮系															
第85図-34	SX208 上層	土師器	小皿		在地		1.4	6.0		ヨコナデ	ヨコナデ	ヨコナデ	糸切り	○	○	○				
第86図-35	SX208 上層	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ [1]0577				○	○				
第86図-36	SX208 上層	京都系土師器	皿		在地				明灰褐色～暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ [1]0577	一方向ナデ								
第86図-37	SX208 上層	京都系土師器	皿		在地				灰褐色～暗灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ									
第86図-38	SX208 上層	京都系土師器	皿		在地				灰褐色～暗褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	一方向ナデ			○					
第86図-39	SX208 上層	京都系土師器	皿		在地				淡褐色	ヨコナデ	ヨコナデ [1]0577				○	○				
第86図-40	SX208 上層	焼締陶器	播鉢		備前焼															
第86図-41	SX208 上層	焼締陶器	播鉢		備前焼															
第86図-42	SX208 上層	焼締陶器	播鉢		備前焼															
第87図-1	SK135	土師器	蓋		在地	11.4	1.8		明褐色						○	○	○			
第87図-2	SK053	瓦	平瓦		在地														2枚の瓦が融着	
第88図-1	SK025	瓦	平瓦		在地			厚さ 2.1							○	○			白色粒 結晶片苔	
第88図-2	SK073	瓦	平瓦		在地			厚さ 1.5							○	○			白色粒 結晶片苔	
第88図-3	SX176	瓦	平瓦		在地			厚さ 2.2							○	○			白色粒 結晶片苔	
第88図-4	SX176	瓦	平瓦		在地			厚さ 2.2							○	○			白色粒 結晶片苔	
第88図-5	SX176	瓦	平瓦		在地			厚さ 2.3								○	○			
第88図-6	SD177	瓦	平瓦		在地			厚さ 2.3												
第88図-7	SD177	瓦	平瓦		在地			厚さ 1.8											白色粒 結晶片苔	
第88図-8	SX176 控張区	瓦	平瓦		在地			厚さ 1.6							○				白色粒 結晶片苔	
第88図-9	SF226	瓦	平瓦		在地			厚さ 1.7												
第88図-10	SK073	瓦	九瓦		在地										○					
第88図-11	SE120	瓦	九瓦		在地										○				白色粒	
第88図-12	SF226	瓦	平瓦		在地			厚さ 1.8							○					黒色粒

写 真 图 版

※遺物写真のキャプションの表記例…本文中の第84図12ならば84-12と表記する



SX210検出状況（東から）



SX210遺物出土状況（東から）



SX210壺内完掘状況（東から）



SX210完掘状況（西から）

写真図版 2



SA239完掘状況（西から）



SX237完掘状況（西から）



調査区西側全景（北から）



S210-1 遺物出土状況



S210-2 遺物出土状況



S210-3 遺物出土状況



S210-4 遺物出土状況



S210-5 遺物出土状況



S210-6 遺物出土状況



S210-7 遺物出土状況



S210-8 遺物出土状況



S210-9 遺物出土状況



S210-10 遺物出土状況

写真図版 4



SX176上層 礫出土状況



SX176上層 トリベ出土状況



SX176 (S176a) 石列 (北から)



SX176 (S176a) 石列 (南から)



SX176 (S176a) 石列 (西から)



SX176・拡張区 (南から)



SX176・拡張区 (北から)



SX176・拡張区完掘状況 (南から)



SX074



SX194



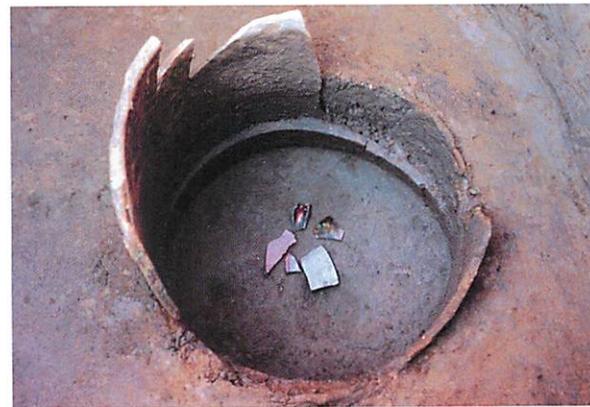
SE120完掘状況（北から）



SE120井筒検出状況（南から）



SE120井筒内遺物出土状況（井筒上段：北から）



SE120井筒内遺物出土状況（井筒下段：南から）



SE206完掘状況（北から）



SE206土層断面（南から）

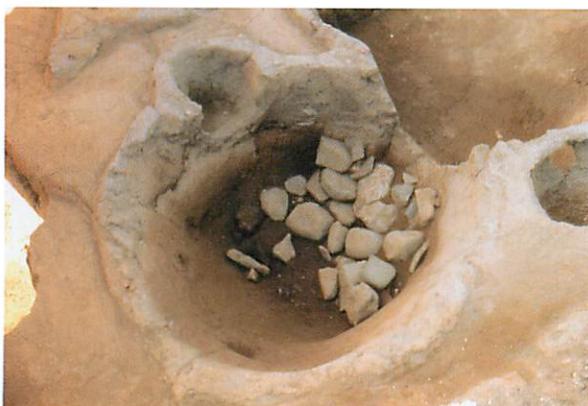
写真図版 6



SE211完掘状況（北から）



SE212・213土層断面（西から）



SK025礫出土状況（南から）



SK073（南から）



SK054土層断面（西から）



SK223土層断面（西から）



SX208（東から）



調査区南端部完掘状況（東から）



青白磁・白磁菊皿 (10-1~3)



白磁小坏・白磁皿 (10-4~10, 12)



粗製白磁皿・白磁菊皿 (10-10, 11, 13)



色絵皿 (10-22)



灰色磁器碗 (10-14)



灰色磁器碗 (10-19)



灰色磁器碗・皿 (10-15~20)



青磁瓶類 (10-23~26)



青磁皿・碗 (10-27~30)





青花小坏 (10-31, 32)



青花碗E群 (10-33, 34)



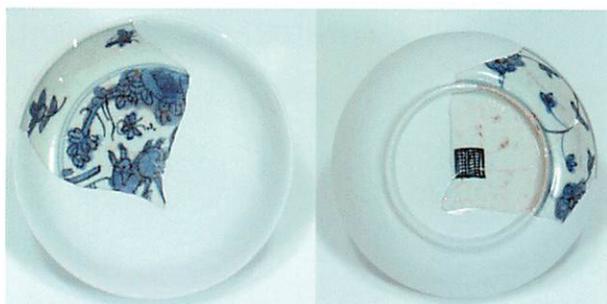
青花碗C群 (10-35)



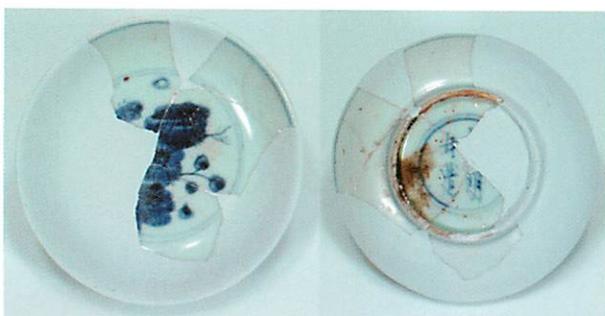
青花碗 (漳州窯系: 10-36~40)



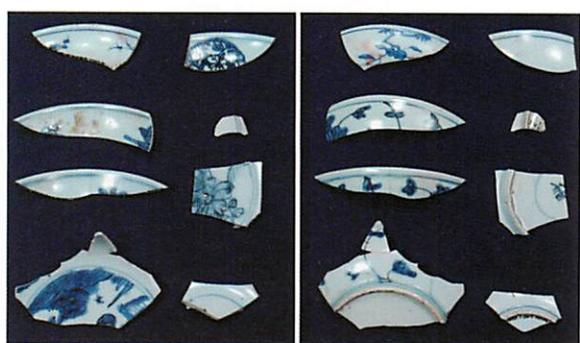
青花皿B/C群 (11-41~44)



青花皿E群 (11-58)



青花皿E群 (11-61)



青花皿E群 (11-51~57, 59, 60, 62)



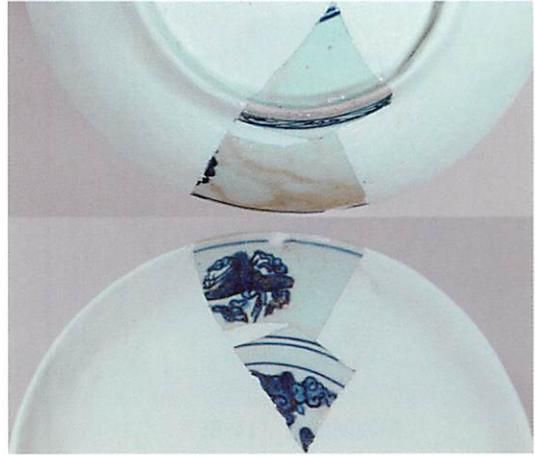
青花皿E群 (11-45~50)



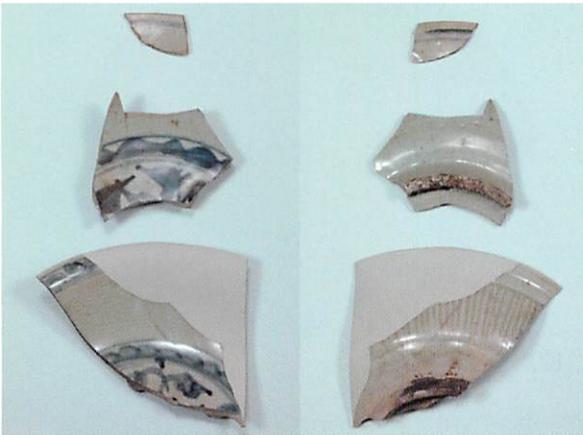
青花皿E群 (11-53, 54)



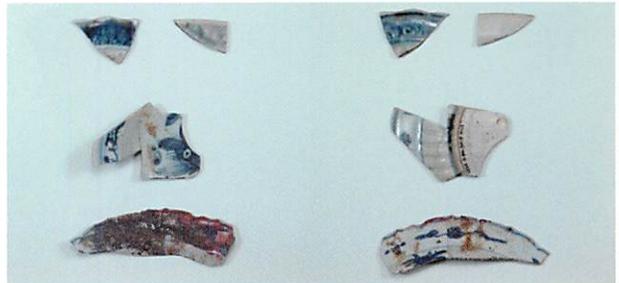
青花大皿 (12-69)



青花大皿 (12-71)



漳州窯系青花大皿 (12-67, 68, 70)



青花皿F群 (11-63~66)



青花壺? (13-72)



青花壺 (13-73)



褐釉陶器壺 (13-84)



褐釉陶器壺 (14-88)



褐釉陶器壺 (14-86)



褐釉陶器壺 (14-85)



刻印「五」



焼締陶器播鉢 (87)



華南三彩陶器 (15-90~103, 16-104~113)



華南三彩陶器 (16-114~120)



華南三彩陶器壺 (16-121~133)

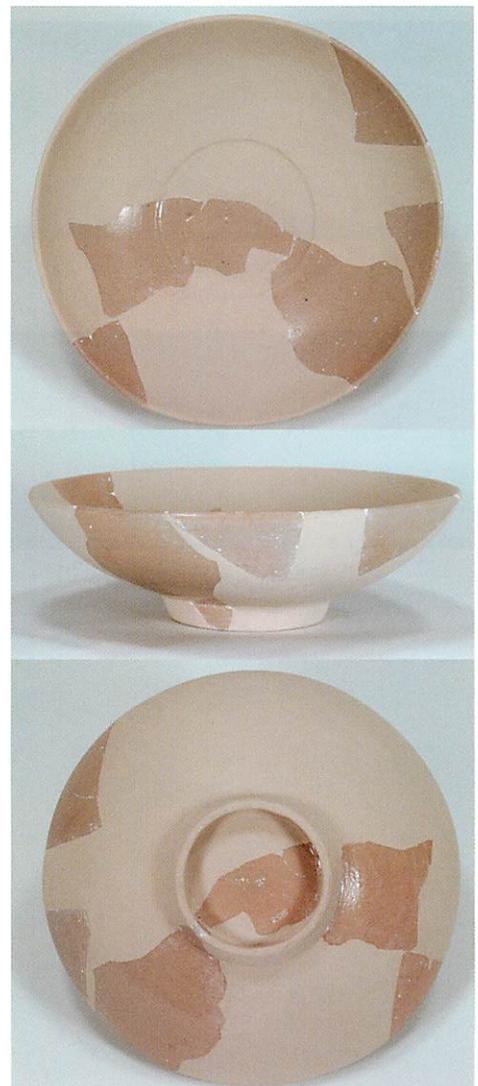


不明華南三彩陶器 (18-134)

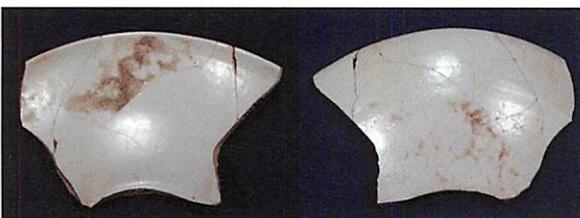
華南三彩陶器蓋 (15-89)



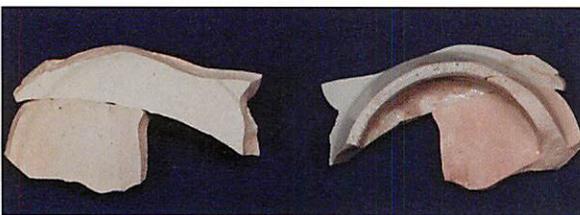
朝鮮王朝産陶器 (13-74, 75)



朝鮮王朝産白磁皿 (13-80)



朝鮮王朝産白磁皿 (13-76)



朝鮮王朝産白磁皿 (13-77)



朝鮮王朝産白磁皿 (13-78)



朝鮮王朝産白磁皿 (13-82)

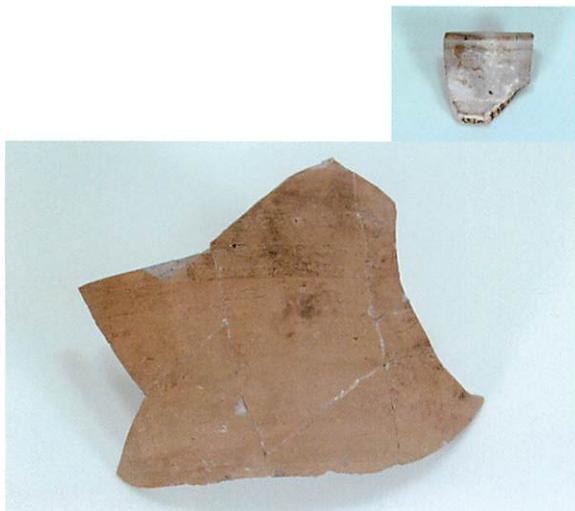


朝鮮王朝産白磁皿 (13-79)

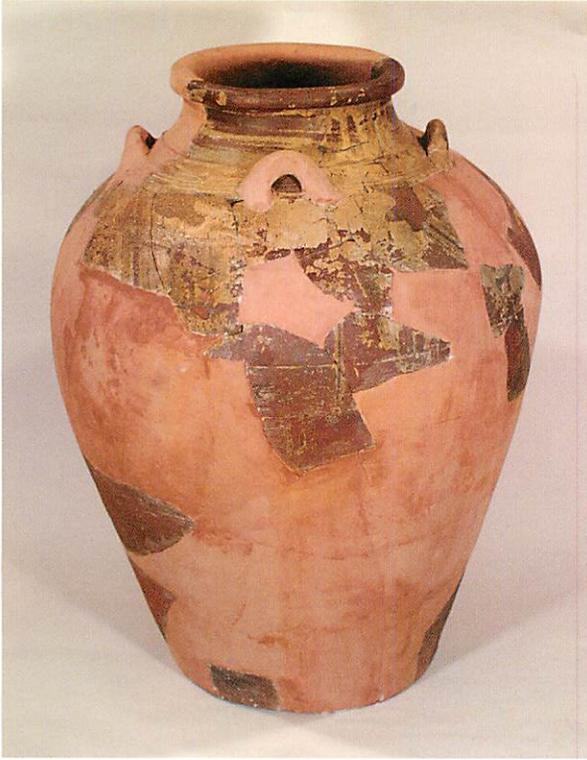


朝鮮王朝産白磁皿 (13-81)

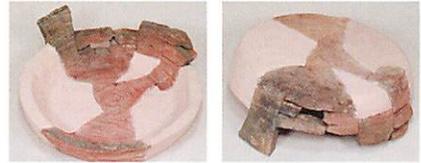
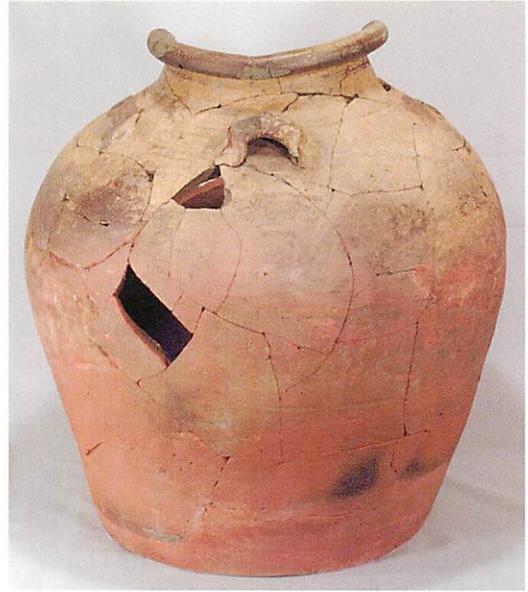
朝鮮王朝産白磁皿 (13-83)



ベトナム産焼締陶器長胴瓶 (21-154)



タイ産陶器四耳壺 (19-137)



タイ産陶器四耳壺 (19-138)



タイ産陶器四耳壺 (19-135)



タイ産陶器壺 (20-141)



タイ産陶器壺 (20-143)



タイ産陶器壺 (20-142)



タイ産陶器壺 (19-136)



タイ産陶器壺 (20-152)



タイ産陶器壺 (20-151)



タイ産陶器壺 (20-139)



タイ産陶器壺 (20-140)



タイ産陶器壺 (20-144)



タイ産陶器壺・耳 (20-145~150)



胴部



底部



ミャンマー産陶器三耳壺 (21-153)



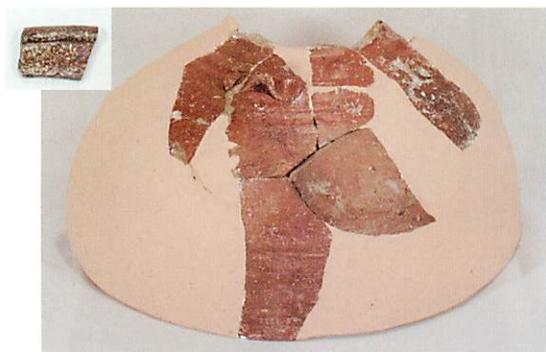
備前・壺, 瓶 (23-168~170, 172)



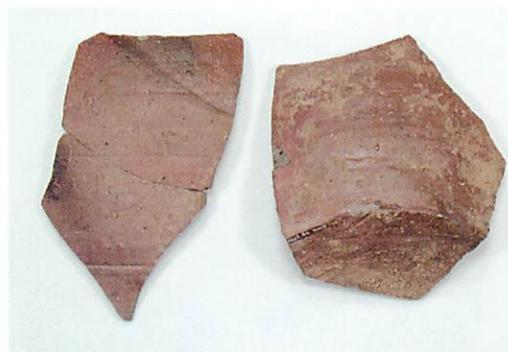
備前・搦鉢 (22-155~166)



備前・水屋甕 (23-174~179)



備前・壺 (23-173, 24-180)



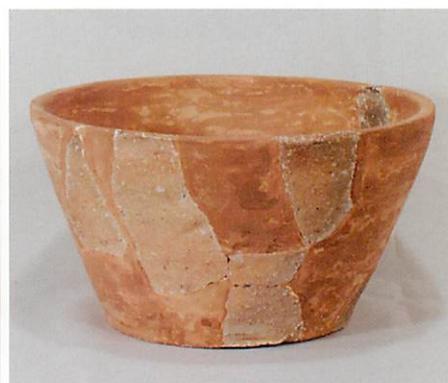
備前・壺? (24-181)



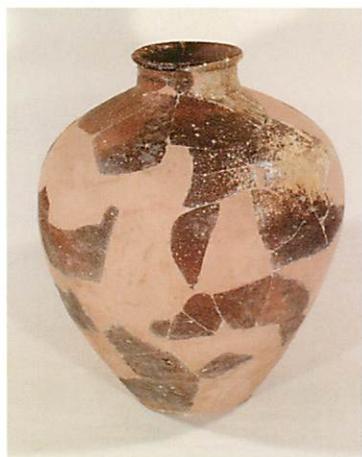
備前・薬研 (23-173, 180)



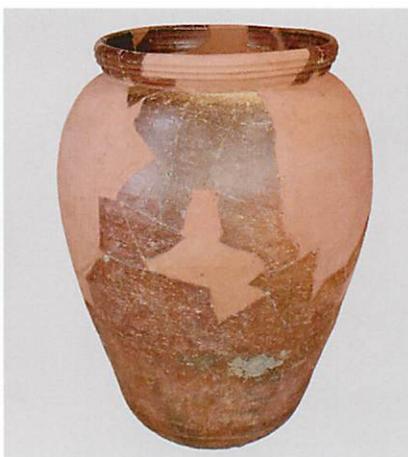
備前・德利 (23-167)



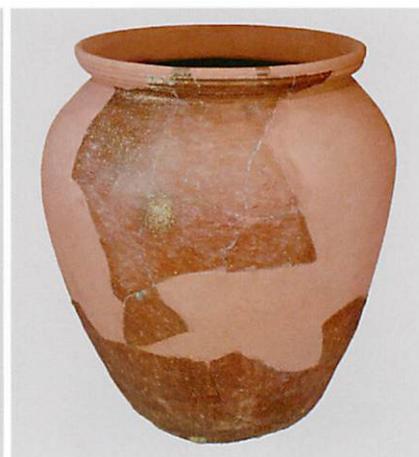
信楽・建水 (28-201)



信楽・壺 (28-202)



備前・大甕 (26-196)



備前・大甕 (27-197)



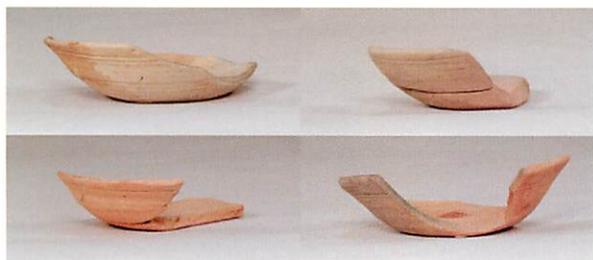
備前・大甕 (28-200)



備前・大甕 (27-199)



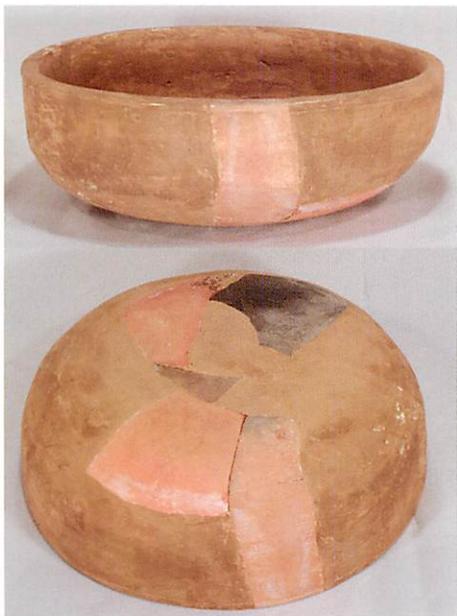
備前・大甕 (27-198)



口ク口成形土師器 (29-204~206, 209)



京都系土師器 (29-210~212)



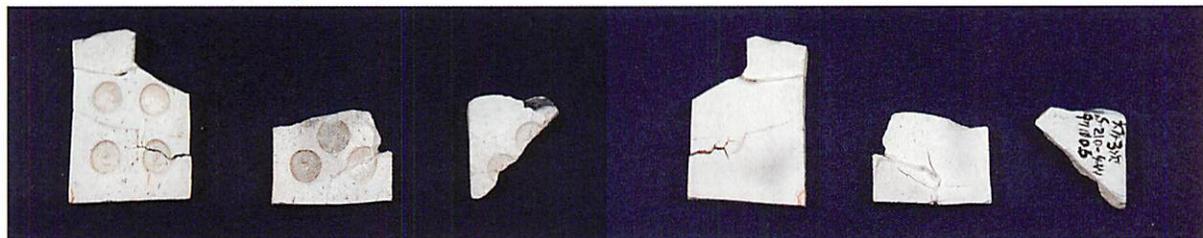
瓦質鉢 (29-214)



不明瓦質土器 (29-215~219)



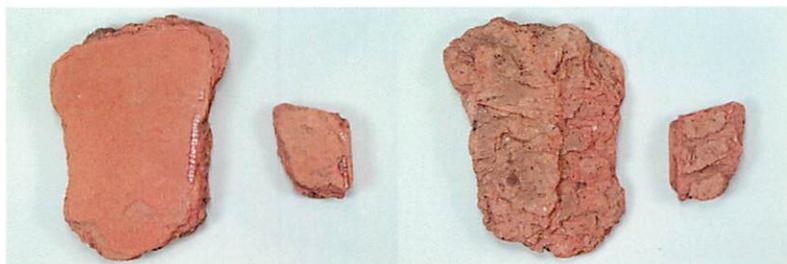
瓦質火鉢 (29-220, 221)



骨牌 (29-222~224)



硯 (29-225)



焼けた壁土 (30-226, 227)



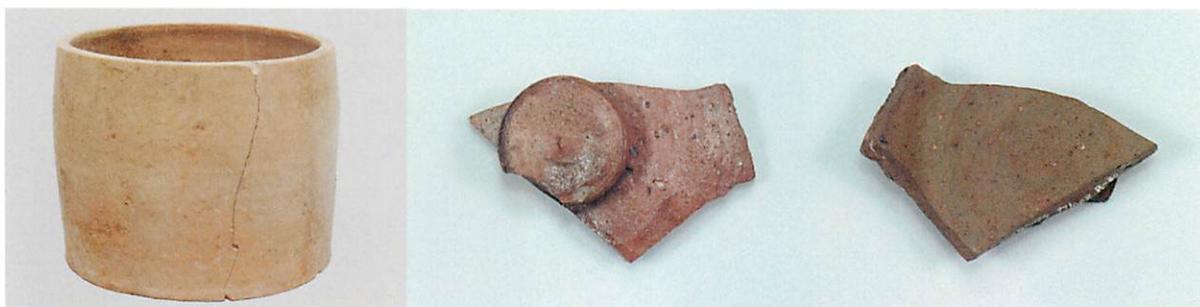
SE120タイ産陶器壺 (37-11)

SE120タイ産陶器壺 (37-4)



SE120瓦質風炉 (37-12)

SE120備前小壺 (37-3)

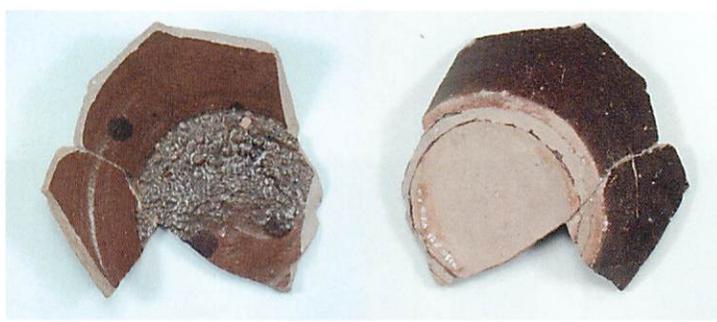


SE120瓦質井筒 (37-14)

SE206中国産陶器蓋 (39-5)



SE211不明陶器 (41-1)



SK025中国産陶器壺 (47-16)



SK025タイ産陶器壺 (47-16)



SK025備前壺(47-5)



SK032備前坏 (49-2)

SK073中国産陶器(55-3)

SK025タイ産陶器壺底部 (51-3)

SK083青磁(56-1)



SK200漳州窯系青花大皿 (64-4)



SK216朝鮮王朝陶器 (67-2)



SK216焼けた壁土 (67-3~5)

67-3の拡大



SK223備前徳利(69-12)



SK223華南三彩陶器壺 (69-13~16)



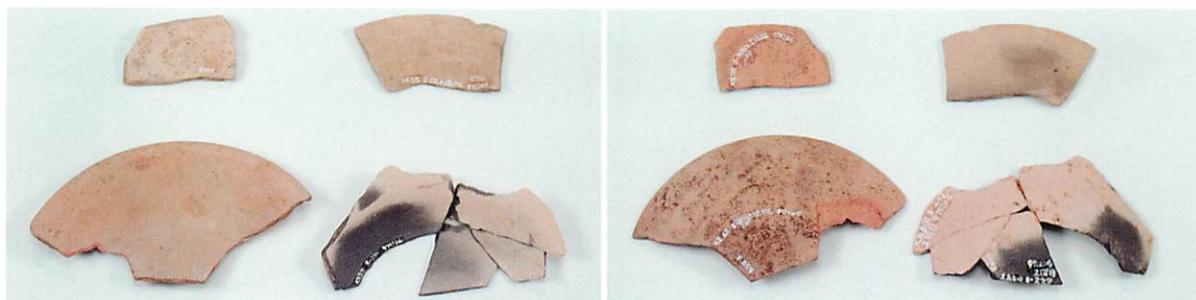
SK223タイ産陶器壺 (69-25)



SK223朝鮮王朝陶器 (69-11)



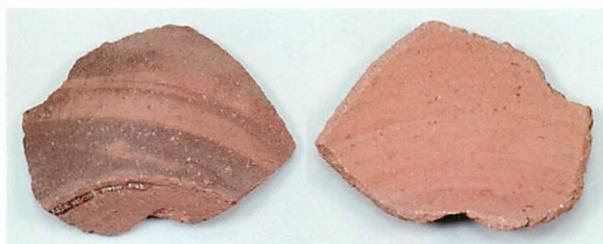
SK223青花碗 (69-2)



SK235土師器 (75-1 ~ 4)



SD177青花皿「嘉靖年造」銘 (78-9)



SD177産地不明陶器鉢 (78-15)



SD177タイ産陶器壺 (78-18)



SD177中国産陶器壺 (78-17)



SD177灰色磁器掛花入 (78-13)



SX176タイ産陶器壺 (82-17)



SX176華南三彩陶器盤 (81-14)



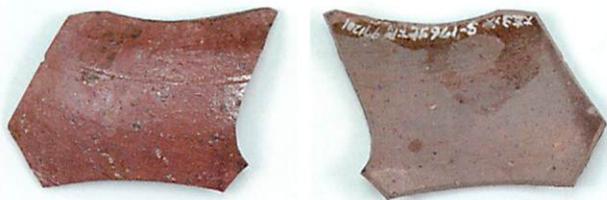
SX176瓦質火鉢 (82-18)



SX176中国産陶器壺 (82-20)



SX176朝鮮王朝陶器 (82-21)



SX176中国産陶器壺 (82-22)



SX176金属生産関係遺物 (82-42~49)



SX176拡張区 瓦質火鉢 (83-19)



SX208華南三彩果実形水注(85-17)



SX208中国産陶器 (85-16)



SX053融着瓦 (87-2)



表土／表採 青磁鉢 (85-14)



表土／表採 灰色磁器皿 (85-9)



表土／表採 灰色磁器掛花入 (85-18)



タイ産陶器壺 (91-22, 23)



中国産陶器壺 (91-16)



タイ産陶器壺 (91-24)



タイ産陶器壺耳 (91-25~28)



青花 (91-1, 2, 4~6, 8, 12, 13)



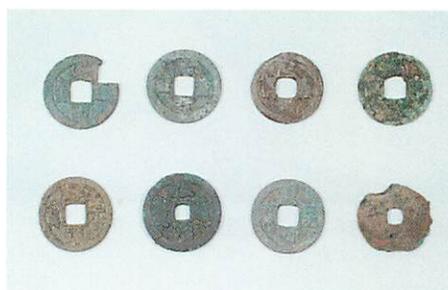
青花碗 (91-3)



青磁 (91-11, 15, 17)



白磁 (91-7, 10)



各遺構出土銭貨 (91-1 ~ 8)

報 告 書 抄 録

ふりがな	おおともふない		
書名	大友府内5		
副書名	中世大友府内町跡第3次調査報告 大分駅周辺総合整備事業に伴う発掘調査報告書1		
巻次			
シリーズ名			
シリーズ番号			
編著者名	高島 豊 井口あけみ		
編集機関	大分市教育委員会		
所在地	大分市荷揚町2番31号		
発行年月日	西暦2003年3月31日		

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
ちゅうせいおおともふないまちあと	おおいたしにしきまち	44201	330051	33 13 45	131 37 22	970819~ 971205	160	区画整理 事業代替地
中世大友府内町跡	大分市錦町2丁目							

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中世大友府内町跡	集落	中世	大甕埋設遺構 井戸跡 道路状遺構 土坑	京都系土師器 青花 華南三彩陶器壺 (トラディスカント壺) タイ陶器四耳壺 ミャンマー陶器三耳壺 備前焼 信楽焼	1586~1587年に火災により廃絶したと推定される大甕埋設遺構から、東南アジア産を含む貿易陶磁器が一括出土

大友府内5

大分駅周辺総合整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1

平成15年3月31日

発行 大分市教育委員会
大分市荷揚町2番31号

印刷 佐伯印刷株式会社
大分市古国府1155-1